塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書

——昭和58年度——

糠塚古墳
柿沢東遺跡
大原遺跡
中島遺跡

1984

塩尻市教育委員会

比較文化論研究室

塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書

——昭和58年度——

糠塚古墳
柿沢東遺跡
大原遺跡
中島遺跡

1984

塩尻市教育委員会

序

塩尻東地区は中山道塩尻宿を中心として栄えた地域であり、塩尻峠あるいは善知鳥峠によって岡谷・伊那と松本平を結ぶ交通の要所として、また歴史的意義の深い地域として古来より注目されてきました。この度、塩尻東地区の県営圃場整備事業が実施されるにあたり、初年度の昭和58年度には2地区4遺跡が工事区域内にあり、遺跡全体あるいはその一部が破壊されることになりました。長野県中信土地改良事務所では工事施工に先立ち発掘調査を行い、記録保存をはかるために、塩尻市に調査の委託をされ、市教育委員会では花村格先生を団長に、調査員・補助員には長野県考古学会員、信州大学考古学研究会の諸氏にお願いし、調査団を編成いたしました。

調査は7月末より12月はじめにかけて行われ、その結果数多くの成果をあげることができました。特に柿沢の柿沢東遺跡は縄文中期後半の大集落址であることが確認され、出土した多量の土器、石器類は松本平はもとよりのこと、県下における該期研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供したといえましょう。また同じく柿沢の中島遺跡においては中世の館跡が確認され、同地域で今まで空白とされていた中世以前の歴史の解明に大きな前進をもたらしたものといえましょう。

終りにあたり本調査にご理解、ご協力下さいました調査団の先生方をはじめ、地元土地改良区の方々、また作業に献身的にご協力いただいた地元の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和59年3月

塩尻市教育委員会

教育長　小　松　優　一

例　　言

1、本書は、昭和58年度県営圃場整備事業塩尻東地区に伴なう、中信土地改良事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて発掘調査した塩尻市内2地区4遺跡の調査報告書である。

2、調査経費については、中信土地改良区からの委託金および国庫・県費補助による。

3、発掘調査は、遺跡発掘調査団（団長　花村　格氏）に委託し、現場での調査は昭和58年7月20日から12月8日まで行った。

4、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和58年12月から昭和59年3月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。

遺構…整理、トレース：小林、鳥羽、前田、三村、中野、小嶋。

土器…実測：鳥羽、前田、三村。拓本…小林。トレース…小林、鳥羽。

石器…実測、トレース：小林。

図版組み…小林、鳥羽、前田、三村、深井。

写真…鳥羽。

5、本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。

6、本書の編集は小林、鳥羽が行った。

7、調査にあたり、塩尻東土地改良区の平林袈裟男理事長ならびに笠原和晃副理事、岩垂一男理事および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

8、本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査状況
第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　調査体制…… 2
第３節　調査日誌…… 3
第４節　遺跡の状況と面積…… 7
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境
第１節　自然環境…… 8
第２節　周辺遺跡…… 9
第Ⅲ章　調査遺跡
第１節　調査の概要……11
第２節　糠塚古墳……14
第３節　柿沢東遺跡……21
第４節　大原遺跡……135
第５節　中島遺跡…… 140
第Ⅳ章　結　語 ……153

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

(1)　調査経過

1月10日　昭和58年度文化財関係補助事業計画について（提出）
5月12日　中信土地改良区、塩尻東地区圃場整備役員、市耕地課、市教育委員会により、今年度予定されている遺跡発掘の調査期間および調査箇所についての協議
7月23日　埋蔵文化財発掘調査事業塩尻東地区東山委託契約について
7月26日　埋蔵文化財糠塚古墳の発掘調査について（通知）
7月26日　糠塚古墳発掘調査団との委託契約について
9月20日　昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
9月22日　埋蔵文化財発掘調査事業塩尻東地区東山変更委託契約について
9月30日　塩尻東地区柿沢地区役員、市耕地課、市教育委員会により柿沢地区3遺跡について調査期間および調査箇所についての協議
10月3日　埋蔵文化財発掘調査事業塩尻東地区柿沢委託契約について
10月12日　昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
10月13日　柿沢東遺跡発掘調査団との委託契約について
10月17日　埋蔵文化財包蔵地柿沢東遺跡の発掘調査について（通知）
11月17日　大原遺跡発掘調査団との委託契約について
11月17日　埋蔵文化財包蔵地大原遺跡の発掘調査について（通知）
11月28日　中島遺跡発掘調査団との委託契約について
11月28日　埋蔵文化財包蔵地中島遺跡の発掘調査について（通知）
12月3日　昭和58年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
12月3日　柿沢東遺跡・大原遺跡埋蔵文化財の収得について（届）
12月10日　昭和58年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（提出）
12月15日　中島遺跡埋蔵文化財の収得について（届）
12月21日　昭和58年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）
12月27日　柿沢東遺跡・大原遺跡・中島遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）
1月9日　埋蔵文化財発掘調査事業塩尻東地区柿沢変更委託契約について
1月21日　昭和58年度文化財関係補助事業にかかる状況報告について（提出）
3月1日　昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）

第２節　調査体制

市教育委員会では中信土地改良事務所から調査委託を受けたが、市教委独自の調査体制が難しいため、元平出遺跡考古博物館長で、現在市文化財調査委員の花村格氏を団長とする次の各遺跡発掘調査団を編成し、再委託をした。

糠塚古墳発掘調査団

団長　　花村　格

調査員　　小林康男、鳥羽嘉彦

調査補助員　前田清彦、小嶋秀典、深井幸人、出河裕典、古岩井久仁、宮沢富美恵、三村　洋

参加者　　古谷広樹、岩垂一男、坂井久之、小口ゆかり、上條由美、伊東直登、尾和朝雄

柿沢東遺跡発掘調査団

団長　　花村　格

調査員　　小林康男、鳥羽嘉彦、山本紀之、竹内　稔、石上周蔵、島田哲男

調査補助員　前田清彦、三村　洋、片山洋一、中込さと子、山本淳子、高橋啓三、出河裕典、古岩井久仁、小嶋秀典、橋詰文彦

参加者　　池田和子、上條絢子、笠原善子、増田由子、一ノ瀬邦子、笠原静子、小沢千代子、小沢しず、小沢とき子、増田千佐子、市川二三夫、石川秀雄、中野実佐雄、米窪千加代、山田小百合、青木豊子、笠原たけ、小沢マサ子、笠原松枝、根橋ぬ里子、関川静子、一ノ瀬静代、一ノ瀬豊子、中野善市、中村千とせ、志水末造、浜宣子、永井文章、宮下　聡、斉藤澄人、足助利子、川上ますゑ、川上仁二郎、大沼田一枝

大原遺跡発掘調査団

団長　　花村　格

調査員　　小林康男、鳥羽嘉彦、平林　彰

調査補助員　小嶋秀典、前田清彦、三村　洋、深井幸人、出河裕典、高橋啓三、

参加者　　小沢しず、増田千佐子、笠原たけ、笠原松枝、一ノ瀬豊子、浜　宣子、根橋ぬ里子、増田由子、笠原静子、市川二三夫、上條絢子、中村千とせ、小沢とき子、中野善市、小沢千代子、池田和子、中野実佐雄、

中島遺跡発掘調査団

団長　　花村　格

調査員　　小林康男、鳥羽嘉彦、平林　彰

調査補助員　前田清彦、三村　洋、出河裕典、高橋啓三、古岩井久仁、山本淳子、小嶋秀典、深井幸人

参加者　　増田千佐子、一ノ瀬豊子、笠原たけ、笠原松枝、小沢しず、浜　宣子

事務局

市教委教育長	小松優一
〃　総合文化センター所長	石原久男
〃　文化教養担当課長	一ノ瀬政和
〃　文化教養担当副主幹	中野　栄

協力者

塩尻東地区理事長	平林袈裟男
塩尻東地区副理事長（柿沢地区工事委員長）	笠原和晃
塩尻東地区理事（柿沢地区地区長）	笠原　進
〃　（東山地区地区長）	岩垂一男
〃　（東山地区工事委員長）	古畑淑博
地主（糠塚古墳）	米山永生
〃	竹林貞子
〃　（柿沢東遺跡）	山本正夫
〃	一ノ瀬輝茂
〃	安藤　至
〃	一ノ瀬芳人
〃　（大原遺跡）	大月　勇
〃　（中島遺跡）	上条善昭

第３節　調査日誌

(1)　糠塚古墳

昭和58年７月29日（金）快晴　資材搬入。花村調査団長挨拶後、作業の概要説明を行ない、直ちに調査に入る。２×２ｍのグリッドを設定し、グリッド掘り開始。表土は松の根が張っているため作業が難行する。

７月30日（土）快晴　前日に引き続き掘り下げ。排土の場所が狭いため土捨てに苦心する。

７月31日（日）晴　定休日

８月１日（月）雨　雨天休日

８月２日（火）快晴　掘り下げ継続。グリッドが深くなり掘り下げが困難になったため中間壁を取りはずしトレンチ掘りにかえる。遺構、遺物出土せず。

８月３日（水）快晴　掘り下げ。遺構・遺物出土しないため古墳説に疑いが生じてくる。古墳

の可能性について、見学に来られた（財）埋蔵文化財センター神村調査部長に御教示をいただく。

8月4日（木）快晴　AトレンチおよびBトレンチの図化。埋め戻しを行い、資材搬出。

9月9日（金）晴　糠塚古墳を中心とした付近の全体測量を開始する。

9月10日（土）晴　全体測量および付近の写真撮影。

9月11日（日）小雨　全体測量完了。

(2) 柿沢東遺跡

昭和58年10月20日（木）曇　発掘調査開始。朝、小雨が降っていたため作業員の集まりが悪い。花村調査団長の挨拶の後、調査方法説明が行なわれる。ブルドーザーにより表土剝ぎ開始。農道南側の3枚の畑を東からA～C地区と仮称。表土は各畑とも北東隅が浅く、南西方向へ行くほど深くなる。B地区中央より焼土検出。ブルドーザーによる除土が終ったA地区北側から作業員が入り、助簾による削平をする。

10月21日（金）晴　A地区およびB地区のそれぞれ北側から掘り下げ。B地区から住居址の落ち込みを確認。第1号住居址とする。C地区は昨日に引き続きブルドーザーによる表土剝ぎ。

10月22日（土）晴　前日の継続。A地区北側に多数の小竪穴状の落ち込みを確認。

10月23日（日）曇　風が強く寒い一日だった。グリッド設定。北東隅を基点とし東西にA～E、南北に10m間隔にクイを打つ。また補助的にその間にA′～D′のクイを5m間隔に打つ。削平は前日の継続。A地区は南へ行くほど表土が厚くなるため作業捗らず。B地区はB′～C－1～2を掘る。広範囲に黒色落ち込みが追え、大型住居址の可能性がある。第2号住居址とする。C－2で黒曜石貯蔵と多量の炭が出土。

10月24日（月）晴　小人数のためA地区のみ。A～B－3～4掘り下げ。

10月25日（火）晴　A地区A～B－5～6、B地区B′～C′－3～5掘り下げ。C－3～5付近で5軒の重複。C－3～5で炭と焼土の散乱が著しい。

10月26日（水）晴　B地区B′C－3～5掘り下げ。焼土の周囲に厚い炭の散乱があり焼失家屋の可能性がある。C地区削平作業開始。C′～D′－1・2掘る。ローム面まで20年前の構造改善時の重機跡が入っており期待薄い。

10月27日（木）雨　雨天休日。

10月28日（金）晴　A地区A′・B－5・6、B地区B′・C－5、C地区D－3～5掘る。A′～B－5で4軒の重複を確認。B地区ローム面が深く作業難行。

10月29日（土）晴　昨日に引き続き暖かい一日だった。A地区B－2～5、B地区B′・C－3～5、C地区C・D′－3～5掘る。A′・B－5・6の深い黒色の落ち込みを第3号住居址とする。B地区、黒曜石原石、石鏃の出土が非常に多い。

10月30日（日）晴　第3号住居址のプラン確認のため2本のトレンチを住居址覆土へ入れる。小竪穴、第1号住居址掘る。

10月31日（月）晴　第3号住居址のトレンチ中より完形土器が横倒しで出土。その他多量の土

器片が出土する。B－2・3付近の黒色落ち込みを掘る。第1号住居址掘り下げ。

11月1日（火）快晴　B－3を中心に敷石住居址検出。第4号住居址とする。第1・2号住居址掘り下げ。B地区南側の住居址群を第5～8号住居址とする。

11月2日（水）晴　第1～8号住居址掘り下げ。第1号住居址セクション図化。第2号住居址は床面に多量の炭の散布が見られ焼失家屋の可能性がある。

11月3日（木）快晴　第1号住居址ベルトをはずし床面精査。第2～8号住居址掘り下げ。

11月4日（金）曇　第1～8号住居址掘り下げ。第2号住居址掘り下げ中、釣手土器出土。床面に多数の柱穴を確認。第3号住居址から多量の完形土器出土。北壁付近と南壁付近の床面の高さが異なるため2住居の可能性がある。

11月5日（土）曇　第1号住居址柱穴、周溝掘り下げ。南壁付近から埋甕出土。第3号住居址床面精査、周溝の発見。第4号敷石住居址実測。その他、第2・5～8号住居址掘り下げ。B－2を中心とした落ち込みを第9号住居址とする。土手築造時に削平され西側半分を欠除している。

11月6日（日）曇　第1～3・7～9号住居址掘り下げ。第3号住居址セクション図化。第4号住居址実測。B′－4およびB－3・4に確認された落ち込みを第10・11号住居址とする。

11月7日（月）曇　第1～11号住居址床面精査。

11月8日（火）晴　第11号住居址掘り下げ。第3号住居址中央ベルトの除去。南側に別の周溝を確認する。A地区北側の小竪穴群を半割で掘り下げ。

11月9日（水）晴　第3号住居址の切り合い状況をつかむために更に掘り下げ。B地区中央の南北ベルトのセクション図化。小竪穴群のセクション図化。

11月10日（木）晴　C－5、A′－6の落ち込みを掘り下げ。第12・13号住居址とする。B地区南北ベルトの取りはずし。多量の土器片が出土する。小竪穴群のセクション図化を昨日に引き続き行う。

11月11日（金）晴　第1、2号住居址測図。第13号住居址掘り下げ。更にもう1軒切り合っている可能性がある。第12号住居址掘り下げ。小竪穴群のセクション図化が終ったものから完掘を行う。

11月12日（土）曇　第6号住居址精査中、第14、15号住居址を確認。第15号住居址の掘り下げを行う。第7号住居址付近に周溝の切り合いから第16号住居址を確認する。プランを出すため直上の土手の切り崩しを行う。昼頃雨が激しくなったため、午後現場作業を中止し博物館にて土器洗いを行う。

11月13日（日）曇　第9号住居址の土手はずしを行い床面精査。引き続き測図を行う。第3号住居址および第13号住居址の床面精査により第17、18号住居址を確認。小竪穴群の掘り下げ。

11月14日（月）晴　第11号住居址南北土手のセクション図化を行い、その後土手をはずし測図。第5、6、14号住居址の測図完了。小竪穴群の掘り下げ。完掘したものから測図を行う。

11月15日（火）晴　第16～18号住居址完掘。第7、8、10、12、15、16号住居址測図。小竪穴

群の掘り下げと図化。

11月16日（水）晴　集落の性格を把握するため北側の畑の地主の了解を得、調査区を拡張する。G、G′、F－0～15のクイを打ちグリッドを設定し掘り下げを行う。第3、13、17、18号住居址測図。

11月17日（木）曇　北側の畑から第19～23号住居址および小竪穴を検出。第21号住居址炉付近の直上から土偶頭部が出土。南側調査区の全体測量を開始する。

11月18日（金）曇　朝方雪が舞う。第19～23号住居址および小竪穴の掘り下げと図化。全体測量。

11月19日（土）晴　全体測量完了。資材片付け。

(3)　大原遺跡

昭和58年11月21日（月）晴　調査方法説明後、直ちに調査に入る。ブルトーザーによる表土除去を行い、終った南西隅から助簾による掘り下げを始める。ロームまでは浅く作業捗る。出土遺物僅少。

11月22日（火）曇　北側へ行く程、黒色表土が厚くなるため、南北方向に2本のトレンチを入れる。東西方向の溝状遺構と多量の礫が出土する。

11月23日（水）快晴　溝の性格が不明のため東側の畑に作業を移す。遺構なし。

11月24日（木）晴　東側の畑を南側から中央部まで掘り下げ。ローム表面付近に角礫を多く含む。

11月25日（金）雨のち晴　午前中雨のため、午後だけ作業を行う。東側の畑の北側に浅谷状の落ち込みを確認。ただし西側の畑の溝状遺構とは別のものと思われる。

11月26日（土）晴　西側の畑の溝状遺構と礫群を更に掘り下げ精査する。溝中からは遺物の出土なし。

11月27日（日）晴　朝、雪が降り5cm程積もる。遺構および礫群の実測と全体測量を行う。資材片付け。

(4)　中島遺跡

昭和58年11月29日（火）晴　ブルドーザーによる表土除去の後、資材を現場へ搬入する。概要説明後、直ちに調査に入る。角礫が非常に多い。

11月30日（水）小雨　南側で黒色土の落ち込みを確認。内耳土器の出土が多く中世の遺構と思われる。また中央付近に疎石様の礫を検出する。昼頃雨が強く降り出したため、午前中で作業中止。

12月1日（木）晴　風が強く寒い一日だった。西側落ち込み直上より6枚の中世完形皿が出土する。4ヶ所確認された南側の落ち込みを掘り下げる。

12月2日（金）晴　落ち込み斜面に角礫が多く、石積みの可能性がある。完形皿の出土状態を実測し取り上げる。

12月３日（土）晴　南側落ち込み部掘り下げ。床面を検出する。２基の小竪穴を半割掘りし、セクション図化する。その後完掘し測図。

12月４日（日）晴　定休日

12月５日（月）晴　雨が強い一日だった。落ち込み部の精査と礫群実測。

12月６日（火）晴　落ち込み部の精査と礫群実測。

12月７日（水）雨　雨天休日

12月８日（木）　礫群実測と全体測量。

12月９日（金）　全体測量。テント撤収と資材搬出。

(1)～(4)の各遺跡の整理作業は12月～２月、平出遺跡考古博物館において、実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図判作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

第４節　遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	種　類	遺跡番号	全体面積	事業対象面　積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
糠　塚	松林	円　墳	—	径20ｍ	１基	１基	１基	400,000円
柿沢東	畑	包蔵地	23-149	9,000㎡	9,000㎡	200㎡	1,500㎡	2,200,000
大　原	畑	包蔵地	13-150	27,000	5,000	200	550	800,000
中　島	畑	包蔵地	23-147	4,000	200	150	160	1,000,000

（事務局）

第II章　遺跡周辺の環境

第1節　自然環境(第1図)

長野県のほぼ中央部を南北に走る筑摩山地は、比較的新しい時代に形成された幼年期のなだらかな山嶺を呈し、美ケ原（2034m）、鉢伏山（1929m）、高ボッチ山（1665m）、東山（1430m）などの山々から成り立っている。

この筑摩山地の南端に位置する塩尻峠と勝弦峠を結ぶ緩やかな山稜線は、塩嶺山地とも呼ばれており、松本盆地と諏訪盆地を分けるとともに日本海と太平洋の分水嶺を構成している。即ち西斜面へは田川の流れが下り、松本盆地で奈良井川と合流し犀川となり、遠く信濃川の末流となって日本海へと運ばれていく。また東斜面へは横河川および小野川が下り、天竜川となって伊那谷を南下し太平洋へ運ばれている。

塩尻峠（1015m）は、周囲の鳥居峠（1197m）や和田峠（1531m）とともに中山道中の主要峠であり、かつ交通の分岐点ともなっていた。ここからは松本平が一望に望まれ、前方には穂高の雪峰を中心とした北アルプスの雄姿が立ち並び、まさに一幅の絵となっている。

また歴史的にも武田、小笠原両家の運命を決する一大峠であり、ここの勝利が武田氏の信州攻略を確定的なものとしたこと、さらには明治維新まで諏訪の高島藩と塩尻の幕布天領の境界争いの場になったことなど歴史の運命の鍵を常に握っていたともいえる。

こうしたことから、この塩尻峠は地理的にも、さらには歴史的な観点からみても極めて意義の深い峠であるといえよう。

また地質学的にもこの付近は、東北日本と西南日本を両分する糸魚川—静岡構造線と、西南日本を南北に両分する中央構造線という日本列島の2大構造線が交差する地点にあたり、複雑な様相を呈している。即ち諏訪盆地から勝弦峠を通り塩尻へ抜け、さらに松本平に沿って北上する糸魚川—静岡構造線は、断層運動による2000mにも及ぶ比高差を生じているため、西側の大芝山、善知鳥峠の硬砂岩、粘板岩、石灰岩に代表される古生層と、東山山麓の基盤を構成するグリーンタフ第三系を隣接させている。また岡谷市側へ流下する横河川は中央構造線によるリニア線に起因しており、河川に沿って三波川帯の種々の変成岩体をみることが可能である。東山山塊は第四紀になって活動した美ケ原の安山岩質熔岩が第三紀層の上に被覆しており、さらに乗鞍、御岳の噴火活動による信州ロームが最上位に厚く堆積している。

塩尻峠から塩尻市街地までの西向斜面を概観すると、高ボッチ山塊に展開する広大な台地と、木曽山脈北東末端部の山塊（大芝山、善知鳥山等）との間に発達した田川の扇状地およびその中を開析する田川、四沢川など数本の小河川に代表される。扇状地は長さ約4.5km、幅約2kmの広さ

を持ち、その扇端は田川下流に沿った狭長な低窪地によって奈良井川の扇状地、即ち桔梗ケ原台地とその境を接している。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度約3度である。田川の本流を始め、その支流四沢川および権現沢の諸河川によって開析され、一種の開析扇状地を形成しているが、これは河川の浸食量に増してこの地方一帯に著しい地盤の隆起運動による。その移動量は過去30年間に、峠の東側頂上付近で83.4㎜、柿沢部落下で48.9㎜を測っている。

田川は塩尻峠に源を発しており、支流権現沢などを集めながら東山の山間渓谷を下り、みどり湖へ流入する。そしてここからはやはり扇状地の西端を流下してくる四沢川とともに塩尻東地区の大扇状地形を潤しながら開曲流下し、両者はやがて合流する。下方の大門市街地手前で流れの向きを北へかえ松本方面へ運ばれていくのであるが、これは糸魚川一静岡構造線の局部運動によって生じた南北方向のリニア線に規定されている。後背地に大芝山、善知鳥山などの石灰山を持つため比較的硬度の低い松本平の河川のなかでは最も硬度が高い河川ではあるが、安定した勾配と流量により古くから生活用水として利用されており、縄文時代から現代に至るまで数多くの歴史を築いてきた。とりわけ大門市街地付近では段丘面上の弥生遺跡が多く、松本平でも有数の弥生密集地帯となっている。

塩尻東地区はその大部分がこの西向きの緩傾斜地によって成り立ち、その標高差は大きい。この土地の気候は概して寒冷で、冬期の気温は零下10数度に下ることも決して珍しくなく、加えて東山降しの寒風が強いため、古代においても何らかの耐寒への配慮を考えるべきであろう。

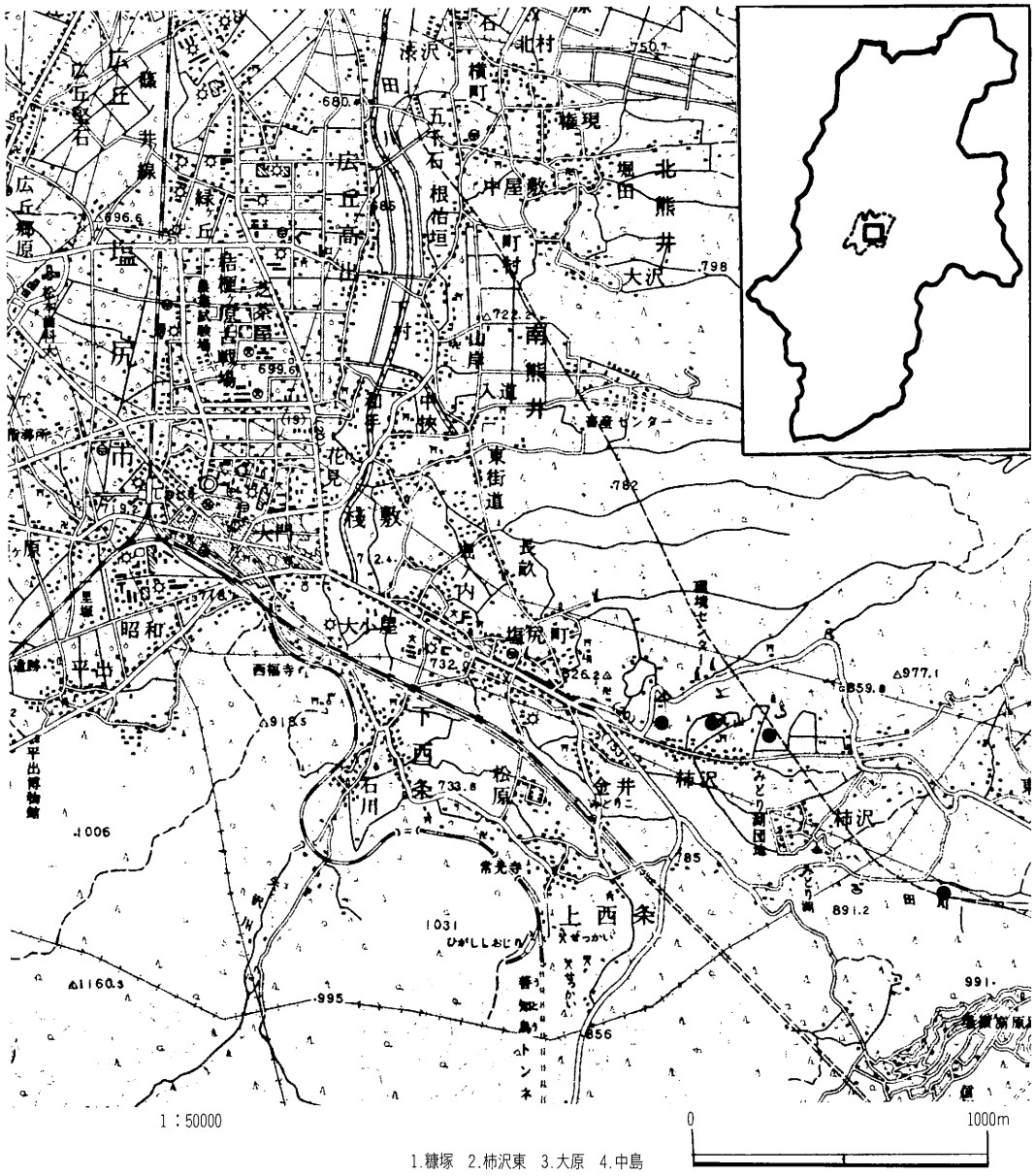
（鳥羽嘉彦）

第2節　周辺遺跡

昭和56年に刊行された長野県史考古資料編の遺跡地名表に記載されている東山、柿沢地区の遺跡は16遺跡ある。（第2図）

この地区で最も古い遺物を出土する遺跡は、青木沢で、有舌尖頭器が得られている。縄文時代早期になると、下松井沢で絡縄体圧痕文を出土し、前期には社宮寺で土器が出土している。これら中期以前はほとんど痕跡的な出土状態であるが、中期になると遺跡数は急増する。小坂田、社宮寺、中島、御堂垣外、柿沢東、大原、小丸山北、針窪、犬飼原、青木沢、下松井沢などの遺跡で土器、石器類が得られている。このうち、柿沢東遺跡は今回の調査によって中期の集落址であることが判明し、また御堂垣外は中央道長野線関連の発掘調査によって中期末～後期初頭の土器とともに敷石住居が発見されている。この中期は、遺跡が最も稠密になる時期といえる。後期には代官山で土器片が若干採集される程度で殆んど遺跡はなくなる。次の晩期は、今のところ遺跡の発見はない。

弥生時代に入ると、御堂垣外、代官山で磨製石鏃が採集された程度で遺跡はほとんど存在しない。おそらく、農耕を実施するには不向きな地域であったためと思われる。古墳時代に入っても



第１図　遺跡位置図

遺跡は全く残されていない。古墳は、塩尻地区では上西条記常塚、狐塚、下西条銭宮１・２号、堀ノ内大塚、小塚などより下方の田川流域に所在し、田川上流域には存在しない。古墳築造の経済基盤がしっかりしていなかったためであろう。

平安時代では、入山、代官山で土師器が得られている。平安時代になると爆発的に遺跡は増加するが、当地区においてはそのような傾向は全く認められない。

（小林康男）

第Ⅲ章　調査遺跡

第１節　調査の概要(第１表)

(1)　糠塚古墳

糠塚古墳は、田川上流域の山間谷あい（東山地籍）に立地する独立円墳である。調査は墳丘頂部にＬ字形にトレンチを設け行われた。

約３ｍの深さまで掘り下げが行われ、基底のローム層まで到達したが、古墳に関連すると思われる遺構・遺物の出土は皆無であった。この結果、従来形こそ円墳に類似するが、その立地条件から疑いがもたれていた本墳が古墳ではなかったことが明確にされた。

しかし人為的に築造された形跡が見られるところから、本墳が何らかの意図をもって形成されたことは明らかであろう。

(2)　柿沢東遺跡

柿沢東遺跡は、柿沢の集落の北側に展開しており、扇状地中央の舌状台地上に立地している。調査はこの舌状台地の先端にある４枚の畑について全面調査が行われ、発掘総面積は1500㎡である。

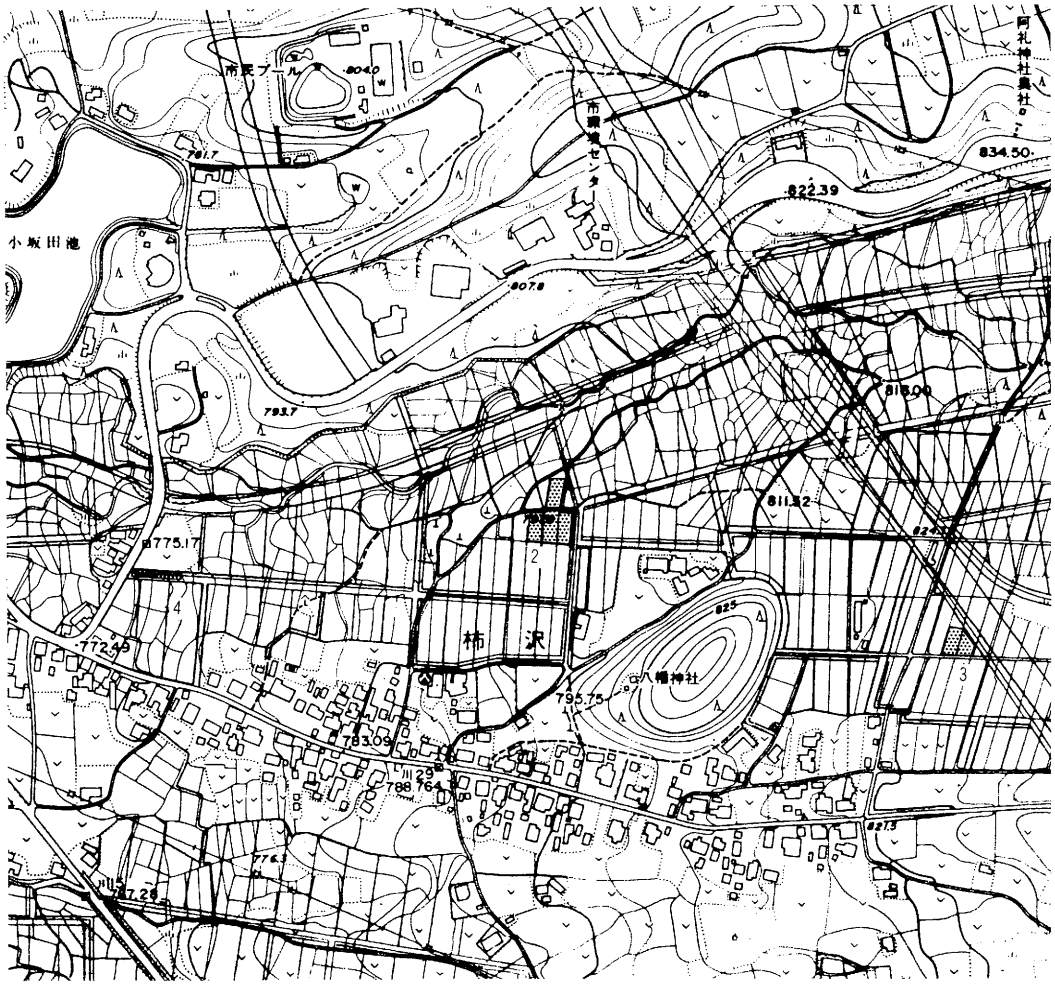
この結果、遺構としては縄文時代中期後半の竪穴住居址23軒、小竪穴130基が検出された。出土遺物はこれらに伴う大量の土器、土製品、石器、およびその原石が出土した。

遺構の検出状態から、集落は尾根中央の小竪穴群を取り囲むようにして、台地縁辺部の等高線上に住居址を設けており、ほぼ１つの集落の形態を表わすことができた。住居址はすべて円形の竪穴住居址であるが、新旧住居址および小竪穴との切り合いが激しく、全容を表わすものは数軒にとどまる。また、松本平でもこれまで数軒の出土例しかない敷石住居址が１軒出土している。土器は縄文中期後半に限られ曽利Ⅰ～曽利Ⅴの各時期にわたっている。器種としては深鉢、浅鉢、甕、釣手等がみとめられ、４住居に計５個体の埋甕が出土した。石器は石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧、凹石、石棒、石匙、スクレイパー、異形石器および多量の黒曜石原石があり、土製品では土偶、土鈴が得られた。その他、小竪穴の１つからヒスイの大珠が出土し、小竪穴群のなかに墓穴の性格をもつものが存在していることが判明した。

(3)　大原遺跡

大原遺跡は、柿沢の集落の東方に位置し、西向きの広大な緩傾斜地に展開している。調査は遺跡の北西隅にあたる２枚の牧草地について全面発掘調査が行われ、発掘総面積は550㎡である。

この結果、遺構としては溝状遺構と集石址が検出されたが、住居址は皆無であった。出土遺物は表土から数片の土器が採集されたのみであった。



第2図　調査地区位置図(柿沢地区)

遺構の性格は不明であるが、その形状より推して人為的に構築されたものであることはほぼ間違いないだろう。土器片はすべて磨耗しており時代は不明である。

(4) 中島遺跡

中島遺跡は、柿沢地区の入口に位置し、国道20号線沿いにある微高地を中心として展開している。調査はこの微高地の南端をかすめて取り付けられる農道用地内について全面発掘調査が行われ、発掘総面積は160m²である。

この結果、中世の館跡と推察される遺構と、土壙2基が検出された。出土遺物としては、それらに伴う土器、陶器、石器、古銭が出土した。

館跡は東西に延びる調査区のほぼ全域にわたって検出されたが、館の中心があったと考えられる微高地のはずれに位置することと、南側が田んぼによって削られていることから、調査区内の

調査だけでは館の性格を解明することはできなかった。土壙は独立した産状を示し、また出土遺物も皆無であったところから館址との関係は不明である。土器は中世の内耳土器および土製円盤が多量に出土し、中世陶器も得られた。特に陶器皿は完形あるいはほぼ完形のものが6枚、それぞれ2枚ずつ重なり合って三角形状に置かれてあったという独得の産状を示し注目すべきものである。他に打製石斧と古銭が出土した。

（鳥羽嘉彦）

第Ⅰ表　発　堀　調　査　経　過　表

遺跡名＼月	7	8	9	10	11	12	1・2	主な遺構	主な遺物
縅塚古墳	29		11				遺物整理・図面作成・原稿執筆	なし	なし
柿沢東				20	19			縄文中期住居址 23 小竪穴 130	縄文中期土器 土製品 石　器
大　原					21 27			溝　址 2 集石址 1	時代不祥土器片
中　島					29	9		中世館址 1 土　壙 2	中世中耳土器 中世陶器 古　銭 石　器

第2節　糠塚古墳

(1) 位　置

糠塚古墳は東山地区の南方にあたり、田川によって開析された谷あいに営なまれた円墳である(第3図)。国道20号線から分岐する国道153号線を伊那路方面へ約1km程行くと左手にみどり湖入口の看板が見えてくる。この湖は田川の流れの途中に造られた灌漑用のため池で、夏期のボート、釣場、冬のスケート場と塩尻市民の憩いの場となっている。この湖の奥手にある田川浦鉱泉の脇を抜け、田川の流れに沿って谷あいを上っていくとやがて右手の水田のなかに椀を伏せたような半球状の単独墳がみえてくる。墳丘頂部には数本のマツおよびケヤキの木立があり、遠方からでもひときわ目立つ存在である。

標高は墳丘頂部で856.6m、田川河床面との比高差6mで、距離はわずか8mしか離れていない。即ち田川の脇に築造されたといっても過言ではなく、後述するように墳丘自体かなり水の影響も受けており古墳の性格上、不明確な立地条件を有している。

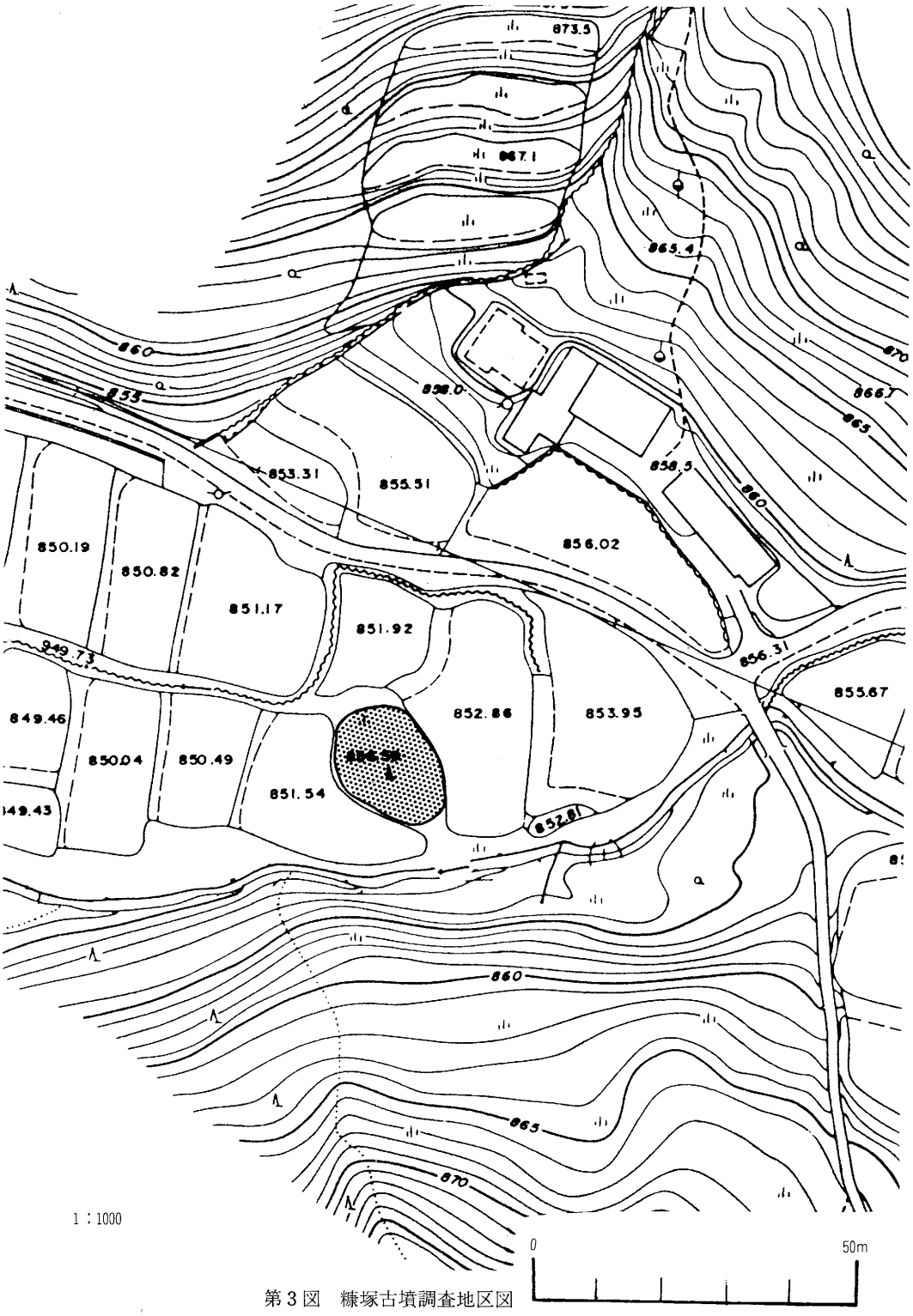
この付近は中央道塩嶺トンネルの塩尻側出口にあたり、トンネルを抜けた中央道はちょうど現在の田川の流れの上を、この狭長の谷あいに沿って松本平へと降りていくのである。

糠塚古墳については、かなり以前から「古墳」と称せられていたが、それを認める者は少なかった。塩尻町誌(1937)にある記載を次に抜粋する。「…又田川浦の糠塚の如きは高さ5m、周囲75mもある大塚で有るが、諸種の条件より見て古墳外のものと断ぜざるを得ない。…」。また同誌折り込みの地図は大正7年調査のものであるが、そこにおいても糠塚の地名ははっきりと提示されている。(第4図)

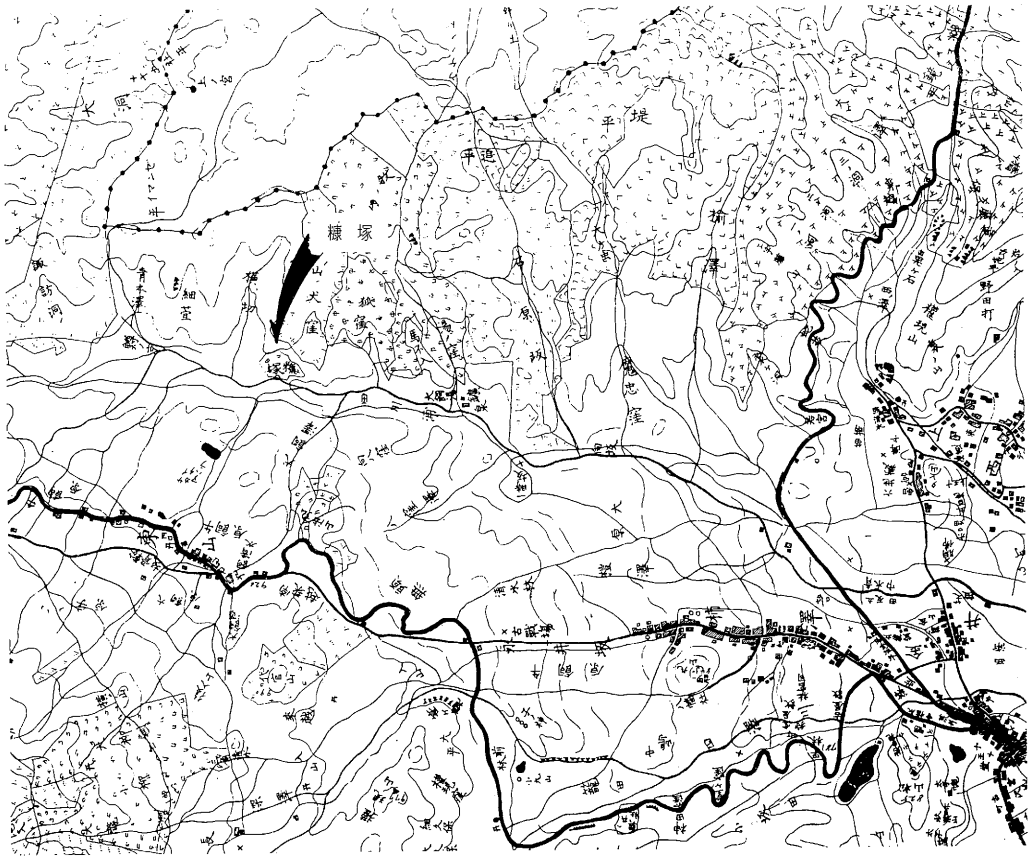
(2) 古墳の築造

本墳は単独の円墳であるが、形状は若干歪を呈する(第5図)。即ち相対的に古墳東側の斜面が西側の斜面に比して勾配が急になっており、特に東側は崖に近い勾配で登り降りに難儀を要するほどである。これはおそらく田川の流れが現在は8m程脇を流れているが、築造後現在までの間に流路が変化した時期があり、墳丘に直接流れが突きあたり墳丘の緩らかな斜面を浸食削平し、現在のように崖にえぐりとってしまったことが明瞭に推察される。しかし現在、墳丘の周囲は段々地形が構築されており、墳丘底部でその東側と西側で約1mの高低差があるため外見上は歪があまり気にならない。高さは東側で3.7m、西側で5.0mを測る。墳丘の大きさは南北18m、東西22mで底部周囲64mを測るが、築造時はそれよりはるかに大規模なものであったと推察される。

調査は墳丘頂部の最も高いと思われる位置(中心よりやや東寄り)に南北に2×6mのAトレンチを設け、またそれに直交して東西方向に2×4mのBトレンチを設けた。AトレンチおよびBトレンチのそれぞれの層序断面を第6図に示す。



第3図　糠塚古墳調査地区図



第4図　東山・柿沢地区図(塩尻町誌付図より)

第IV層…黒褐色埴壌土。墳丘表面を覆う軟かい森林土壌。

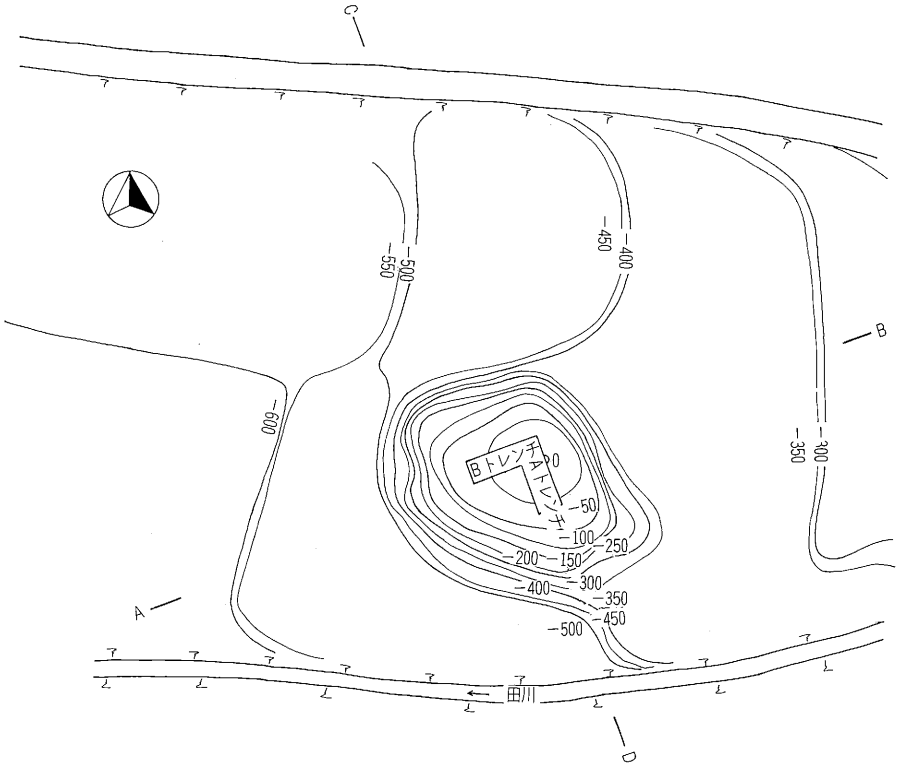
第III層…漸移層。ロームブロックが若干含まれる黒褐色土。地下茎が少なくなる。

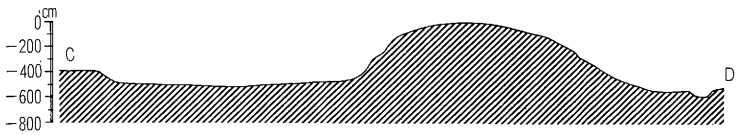
第II層…黒色ブロック混入黄褐色土。ローム質黄褐色土が塊状に剝げ落ちる。黒色ブロックおよび塊状黄褐色土の間に空隙が著しく、2次堆積の感が強い。

第Ⅰ層…ローム質黄褐色土。ち密で混入物がほとんどない。第II層との関係は連続的であるが、本層は明らかに自然堆積層である。

第Ⅰ層の表面を追っていくと墳丘中央を頂部にして南および西へ緩傾斜を有しており、このことは付近の地形、とりわけ最も接近する南側の尾根の傾斜方向と一致しない。即ち第Ⅰ層表面の形状は自然条件では造られないということになる。また第II層についても人為的な盛り土、しかも土の締りがあまり強くなく盛り土に用いられた土のブロックがはっきりとわかる程である。このように第Ⅰ層および第II層は明らかに墳丘築造を意識して造られた層であることがわかる。

次に遺構および遺物であるが、調査の結果、古墳に関係すると思われる遺構は確認されず、また出土遺物もなかった。





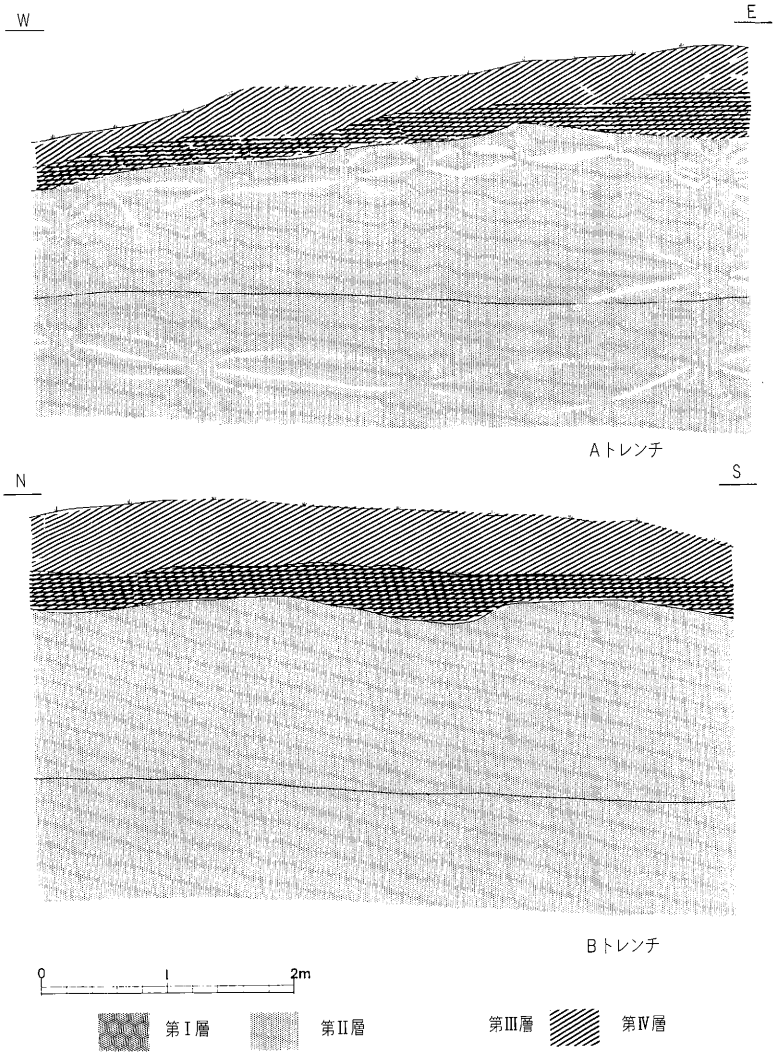
第5図　糠塚古墳全体図　0　10　20m

(3)　まとめ

糠塚古墳はその名称に反して、おおかたの関係者が古墳であることに疑問を持ってきた。その主な理由としては、まず墳丘の立地条件が掲げられる。古墳の築造は一般に高位置に据え、生前の居住地を眼下に見降ろす位置に設けるのが常であり、このことは時代が下って集落の墓域に至っても洪水等、天災の危険性の少ない微高地、即ち独立丘陵や山の尾根、あるいは自然堤防上に

設けるなど継続されている概念である。しかるに本墳の立地は先述したように谷底のほぼ中央部であり、しかも田川の流れが時には墳丘を削っていたと推測される位置なのである。こうした理由から「古墳」を疑問視するようになったことも当然であろう。

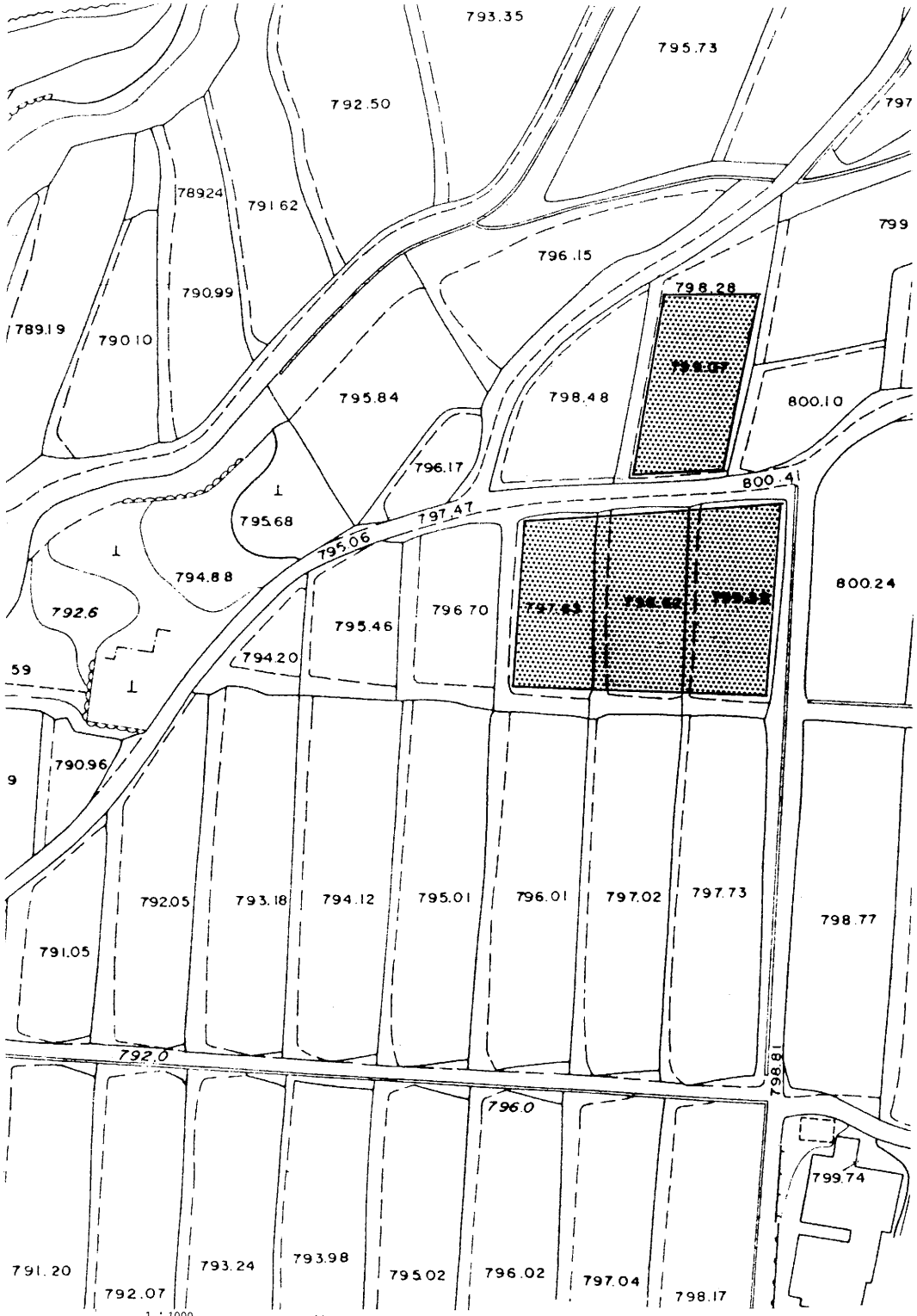
調査結果は最初の予想通り遺構も遺物も発見されなかった。このことから本墳丘の「古墳」の可能性はうすいとみてよいだろう。しかし層序観察により築造はほぼ人為的であることに間違いなく、またその形状も「円墳」そのものといってよいことから何らかの塚であることは想定される。



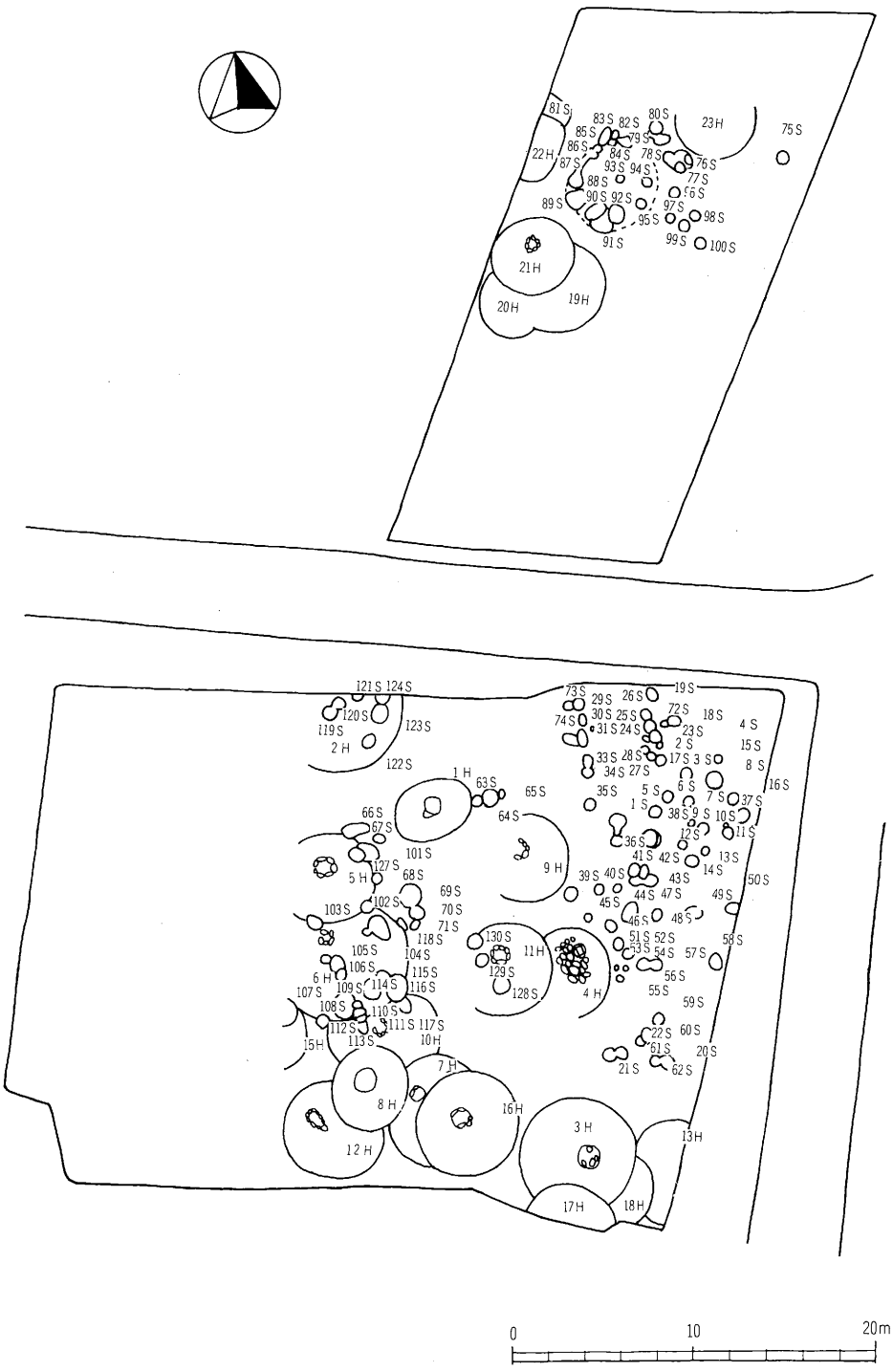
第6図　層序断面図

そこで塚の性格が問題となるが、現段階でそれを断定できる資料は何もない。ただ強いて掲げれば位置的な観点から境塚の可能性が最も強いといえよう。この付近は岡谷市との市境に近く、谷あいをわずかに登ったところに位置する現在の市境は、現にこの墳丘の位置からはっきりと捉えることができる。江戸時代、峠をはさんで岡谷側は諏訪高島藩の領下にあり、また塩尻側は幕府直轄の天領であった。従ってこの付近は常に境界争いの場となり、境界の移動が頻繁に行われていたのである。争いは明治維新の頃まで及んだと伝えられている。この境界争いの一つの地形的な目安として塚を築いたと考えられるのである。

しかしいずれにしても古文献等にはっきりした記載が見当たらず、また地元関係者の言い伝え



第7図　柿沢東遺跡調査地区図



第８図　柿沢東遺跡遺構全体図

にもまちまちなところがあることから断定はできかねよう。

（鳥羽嘉彦）

第３節　柿沢東遺跡

(1)　位　置

柿沢東遺跡は、田川とその支流である四沢川によって形成された扇状地のほぼ中央に位置し、西向きの緩斜面上に広く展開している（第７図）。

付近は東方から降りてくる舌状台地の先端部に位置し、その延長上には柿沢区の墓地が設けられている。北側は四沢川の谷あいに続き、川を越えると急峻な崖をもって国道20号線にあたる。南側には柿沢の集落が台地と平行して立ち並んでいるが、その間に浅谷状の小地形があり、以前は上方で湧出した清水がここを流下していたと言われている。

遺跡付近は現在畑に利用されており、標高は約800mである。

ここは昭和35年頃一度、重機による構造改善が行なわれており、その際には多量の土器や礫（おそらく炉石と思われる）が出土し、赤土まで削平が及んでいるということであった。従って過去においてはかなり遺物も採集可能であったらしいが、現在では遺構が果して保存されているかどうか疑しいという意見が関係者の間にあった。

調査はまずブルドーザーによる表土除去を行なったのち、遺構検出作業を実施した。本遺跡の層序は、上位から黒褐色土層、暗褐色土層、ローム層の３層に大別される。このうち遺物包含層は暗褐色土層下位にあたり、ロームブロックがかなり混入した相を呈している。またこの第II層は箇所により層厚の増減が著しく、遺構および遺物の保存に大きく関与している。各畑とも元々の傾斜地が以前の構造改善により整地されているため、概して台地中央部寄りがローム面まで削平されているのに対し、台地縁辺部寄りは自然堆積の第II層が厚く残されている。しかし南区の最も西寄りの畑に関しては削平が全域に及んでおり、遺構は全て消滅している状態であった。（第８図）

（鳥羽嘉彦）

(2)　住居址

１）　第１号住居址（第９図）

調査経過　本址はＢ地区北側、第２号住居址の約３ｍ南東に位置する。標高は他の住居址と比べると中間的な高さである。検出の極めて初期の段階で、楕円形の暗褐色土の落ち込みが認められたため、住居址の存在が予想された。その後、東西方向にベルトをとり、掘り進むが、覆土は総じて固く締っており、炭化物、ローム粒が散在し、人頭大の礫が10個ほど存在した。炉は中央やや北寄りに構築されていた。また床面検出の際、南側周溝付近に埋甕が確認された。

遺構　遺存状態は良く、原形を保っている。プランは、東西方向に4.0m、南北方向に3.2m程の径をもった楕円形を呈し、ロームを掘り込んでいる。開田の際削られたためか、壁は掘り込みが浅く、壁高は10～15cm程度である。東側と西側のP_2～P_3の部分で掘り込みが鋭く。床は堅緻でほぼ水平である。ただし、埋甕の周辺は、凸凹が多少認められ、床面も低い。周溝が住居をほぼ一周して存在した。幅約15cm、深さ5～10cm程で、形状は、P_1から埋甕にわたる部分で複雑になっている。炉は（100×80—35）の規模で存在した。炉は隣接して、南側部分に平らな落ち込みが見られるが、これはたき口であった可能性がある。炉石は東側と南西隅にしか残存していなかったが、炉の壁の大部分が焼成をうけていた南側を除き、炉石があったであろうと推定できる。炉の壁はほぼ垂直であり、床面は深さ7cmにわたり焼土が堆積していた。ピットはP_1～P_5が確認された。P_1、P_2、P_4、P_5が主柱穴であると考えられ、典型的な四本柱の住居との可能性が高い。P_3の性格については判然としない。それぞれの規模はP_1（40×40—35）、P_2（45×35—50）、P_3（50×40—70）、P_4（45×40—65）、P_5（50×45—50）である。ピットの壁はすべて垂直に近く、しっかりしている。それぞれのピットからわずかな土器片と黒曜石チップが出土し、P_5には、10×50cmの礫がピット中に立つように存在していたが、この石の性格については判然としない。遺物は全体的に少ないが、南側周溝付近に、埋甕が口縁部を床面と同レベルに保ち検出された。このことから、本址の入口が南側であったことが推定できる。

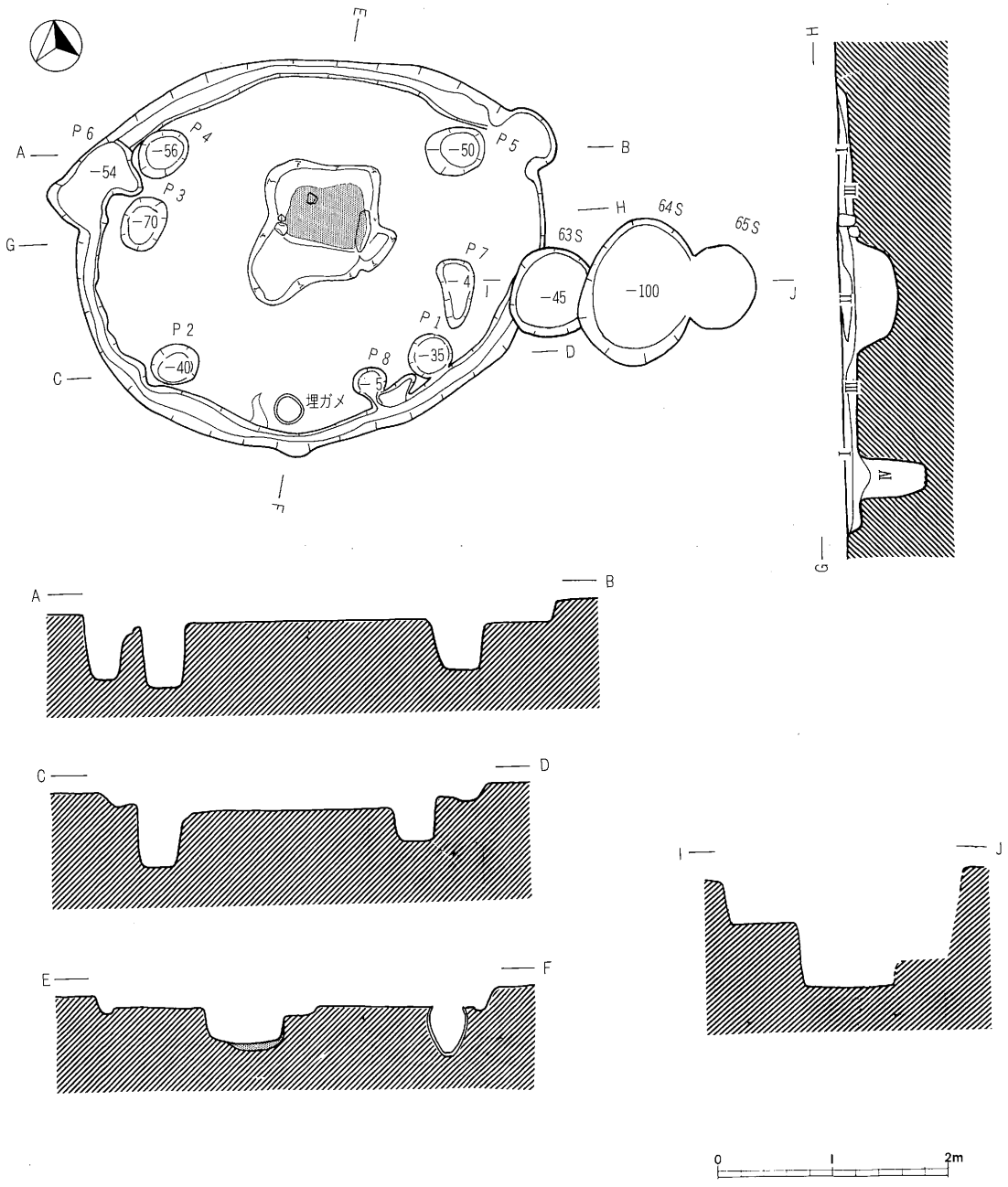
なお、埋甕などから判断して、本址は曽利II～III期に比定される。

（出河裕典）

2）　第2号住居址（第10図）

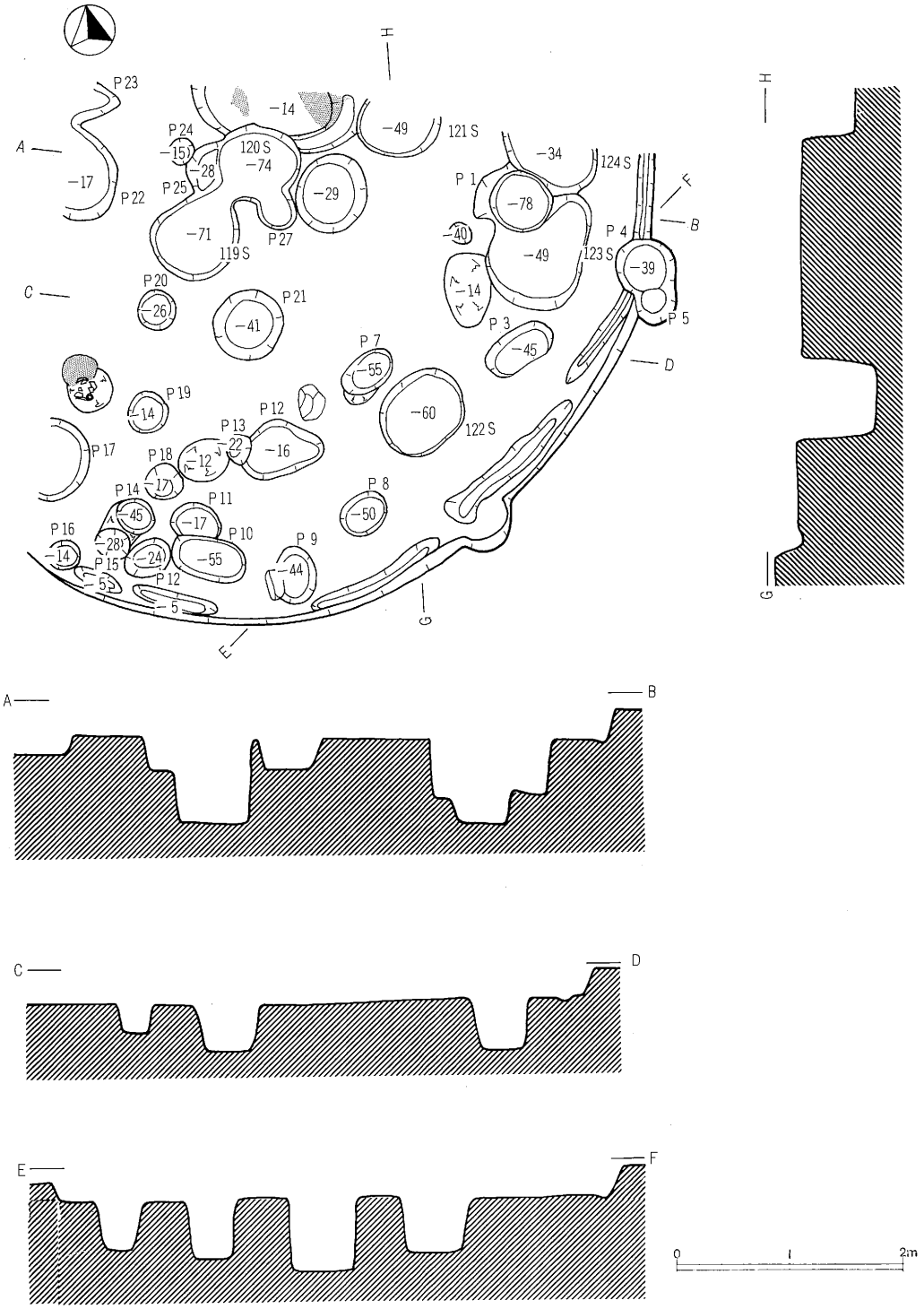
調査経過　本址は、A地区からB地区に連らなる住居址群の北西端に位置する。北側は調査地区から外れ、西側は過去の開田により攪乱を受けたため、全体のおよそ2分の1しか検出できず、全容は定かでない。遺構検出時より黒褐色の落ち込みがあり、土器片、石鏃などが出土した。覆土中には、炭化物が非常に多く含まれ、5×20cm程の炭化材も確認された。炭化物は床面の高さまで充満しており、焼失家屋との判断がなされた。

遺構　プランは、未掘の部分を含め、径6～7m程の円形を呈すると考えられる。壁は南側から東側にかけて残存し、ロームをほぼ垂直に掘り込んでいる。壁高は南壁で10～15cm、東壁は20～30cm程である。床面は若干の凸凹がみられるものの、ほぼ平坦で堅緻である。周溝と思われるものが幅5～10cm、深さ5～10cmの規模で、途切れ途切れであるものの壁に沿って存在した。この住居の特徴として、多数のピットと小竪穴の確認があげられる。30個近くピットが検出された中で柱穴については、P_1、P_3、P_8、P_9、P_{10}、P_{17}等が位置、深さなどから主柱穴であるとする見方もできるが、確認は難しい。さらにその他のピット、小竪穴の性格、役割についても判然としない。炉は北側の農道によって切られている部分が、焼土の多量の残存、炉石らしい石の存在などから炉の可能性が高いが、調査区から外れるため、確認できない。なお、遺物からみて、本址は北側で、曽利V期の住居址と重覆する可能性が強いが、調査地区外となるため、その存在



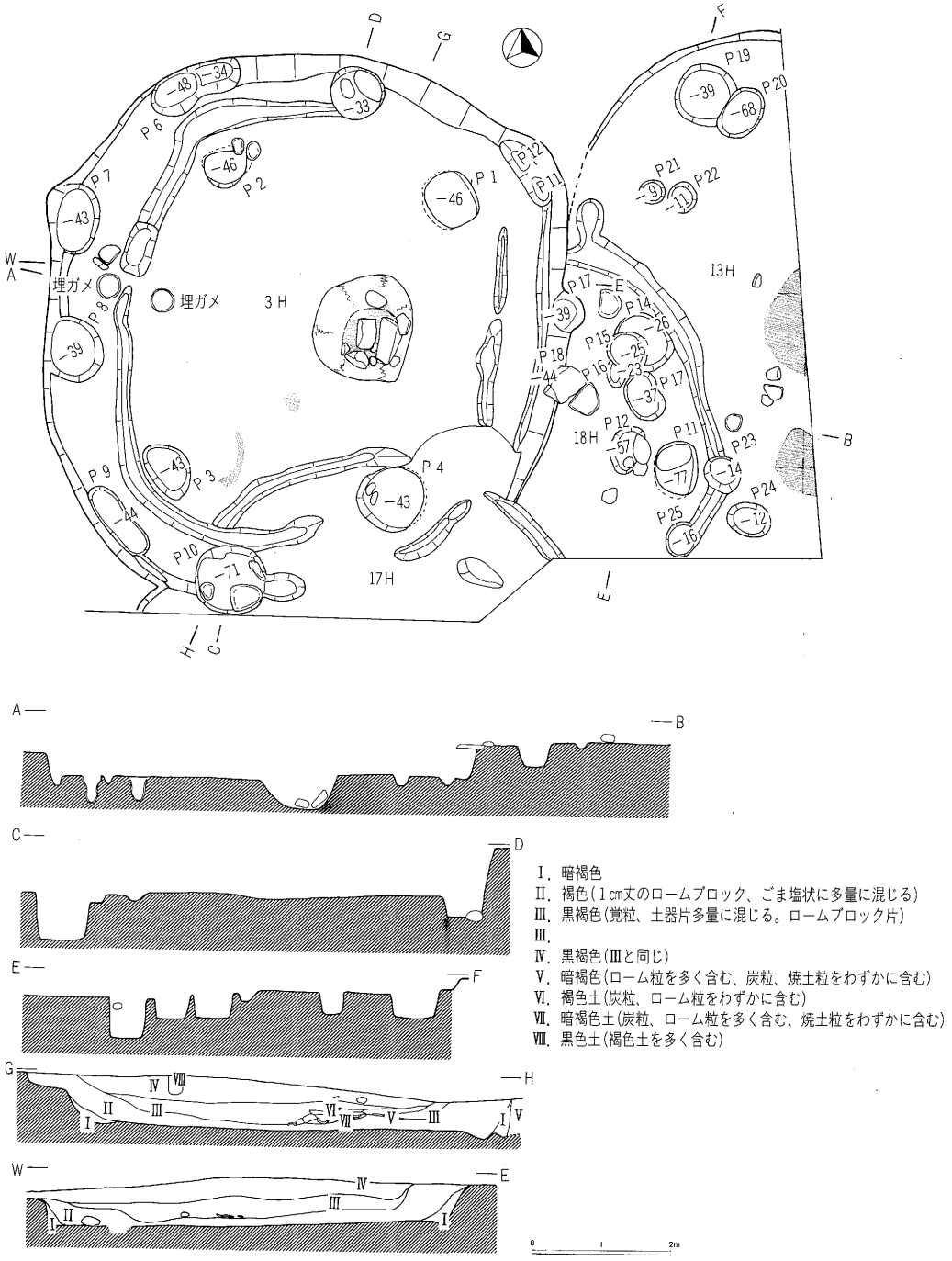
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
−54
−56
−50
−70
−4
−45
−100
−40
−35
−5
63 S
64 S
65 S
埋ガメ
0
1
2m

第９図　第１号住居址

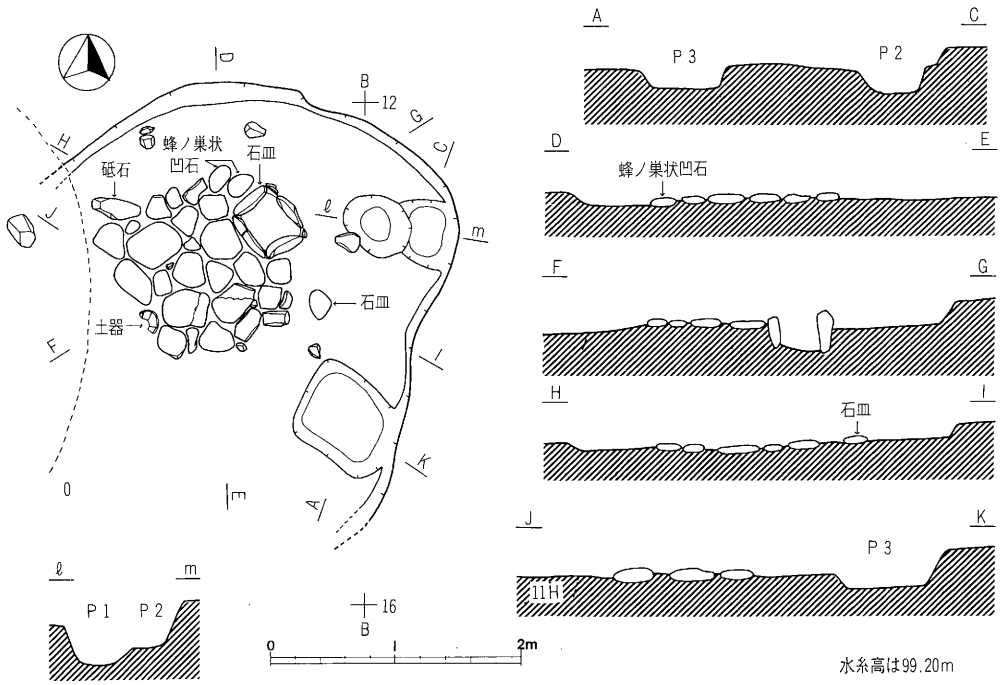


H
P 23
A
P 24
-15
-28
120 S
-74
-14
-49
121 S
-34
124 S
F
-17
P 22
P 25
-29
P 1
-78
B
-71
P 27
119 S
-40
P 4
-49
123 S
-39
C
P 20
-26
P 21
-41
-14
P 5
P 3
-45
P 7
-55
D
P 19
-14
P 12
-60
122 S
P 13
-22
-16
P 17
P 18
-12
-17
P 14
-45
P 11
-17
P 8
-50
P 16
-14
-28
P 10
-55
P 9
-44
P 15
-24
P 12
-5
-5
G
E
A
B
C
D
E
F
0
1
2m

第10図　第２号住居址



第11図　第3号・13号・17号・18号住居址



第12図　第4号住居址

を明らかにすることは出来なかった。

本址は、釣手土器などからみて、曽利Ⅰ期に属する住居と推定される。

（出河裕典）

3）　第3号住居址（第11図）

本址は、A地区南端の17号住と南側で切り合い、また13号住、18号住と東側で切り合って存在している。ローム層の掘り込みに暗褐色土が堆積していたため、住居址存在の確認は容易であったが、表土はロームを多く含む暗褐色土であり、プランを明確に捉えることはできなかった。そこで、サブトレンチを設定し、掘り下げたところ深さ60～70cmでローム面を確認できた。覆土は7層に分かれた。土質は、全体的に軟弱であったが、南側3分の1程は、かなり堅緻で砂礫を多く含んでいた。床面検出の際、壁下の周溝以外に、その内側に壁から30～50cm離れて新たな周溝が確認されたため、本址は、拡張の行われた住居址と考えられる。

床面は、ほぼ水平だが炉周辺は、やや低くなっている。全体的によく踏み固められているが、拡張部や壁近くは、やや軟弱であった。本址は、今回発掘の住居址の中で最も掘り込みが深く、壁高は、北壁で最高68cmを測り、東壁は約45cm、西壁は約25cmを測る。壁は、17号住との切り合い部以外全周しており、垂直に立ち上がり、やや堅緻であった。拡張部の周溝は、東と西と南の一部に見られ、幅5～15cm、深さ10～15cmであり、内側の周溝は、北東、南東部を欠き、ほぼ

全周し、幅10～20cm、深さ10～15cmである。炉は、中央東寄りに位置する石囲い炉で、炉石の大きさは、ふぞろいで、石組みは崩れていた。径120cmの円状の範囲であり、床面からゆるやかに内部に傾斜し、さらに、径80cmの円状に垂直に掘り込まれていた。炉の深さは、38cmで、炉石の頭部は、床高下20cm程に位置する。炉の内部には、焼土が見られ、厚さ5cmを計った。炉内覆土は、茶褐色土で、東側床面近くの覆土には黒色土に炭が混じっていた。炉の南西50cm離れた床面上に口径25cm程の土器口縁部が床に5cm程くい込んで、伏せた状態で出土し、内部には薄い焼土が見られた。ピットは、全部で14個検出されたが、P_{11}、P_{12}は、単なる凹みに近く、またP_{17}、P_{18}については、東壁中央に位置し、本址と18号住のどちらに付属するかは不明である。P_{17}、P_{18}ともに覆土は暗褐色土で、P_{18}の上部には、40×30cmの平石がふたをするように置かれていたが、出土遺物は無かった。また、等寸大の石が東側に隣接しており、対をなしているようで、これは、西隣の16号住にも見られる。主柱穴は、拡張前の住居がP_1～P_4の4本柱で構成されると考えられ、また、拡張後の柱穴についてはP_5～P_{12}が壁に沿って存在し、P_5とP_{10}、P_9とP_{11}、P_{12}が対照的に位置し、類似した形状をなしていることから、これが拡張時の主柱穴と考えられる。P_7、P_8は、近くに埋甕が出土しており、入口部施設を構成するピットと考えられる。P_5は不明。

埋甕は、西壁下より40cm内側に一ケ所、さらにその40cm内側に一ヶ所の合計2ケ所より検出されている。内側の埋甕は、内溝の内側に存在し、拡張以前のものと考えられ、厚さ10cmを計る貼り床下面から、口縁部を欠損した状態で出土した。覆土は、ロームをかなり多く含む褐色土であり、遺物は存在しなかった。外側の埋甕は、床高に出土し、覆土は2層に分かれ、I層は、細かいローム粒混じりの暗褐色土、II層は、ロームをかなり多く含む褐色土で、粘性の強い土質であった。

本址の特徴は、今回の調査で確認された住居址の中では最も大きな住居址であり、掘り込みが非常に深いことである。さらに土器の出土状態に特徴があり、覆土第II層の直上からは、多量の完形、半完形土器、または大形破片が中央部に集中して出土している。また、第III層には、焼土が広範囲に見られたが、焼土内からの出土遺物はなかった。このような状態で土器が一括投棄される例は、今回の調査では本址だけに見られ、このことは、住居廃棄後に人為的に投げ込まれたと考えられ、いわゆる吹上パターンを形成していると考えられる。

（三村　洋）

4） 第4号住居址（第12図）

本址は、調査区中央部のやや東寄り、ちょうど住居址群と小竪穴群との境にあり、今回の調査で調査された住居址の中で床面上に敷石を持つ唯一の住居址である。西側で第11号住居址(時期は本址の方が新しい)と重複しており、又床面が比較的浅く、遺構確認面との比高差が10cm前後と低くかったため、南側から西側にかけての壁は確認できなかった。

住居址推定規模は長軸4m、短軸3m前後で、実測図上では楕円形に近い長円形を呈しているものの、変則的な隅丸方形といってよいかも知れない。主軸方向はN—18°—E。

住居址中央やや北寄りローム直上(床面直上)に、大小30数個の平板な川原石(平板な角石4個を含む)による敷石遺構があり、この敷石内の北東隅には57×50cm、深さ25cm前後の炉址が附属している。炉は平板な石を縦にして組み合わせた深型のもので、長期間の使用もしくは強度な火力によったものか、よくしまったきれいな火焼面が存在していた。炉址西面の石はよく焼けており、ヒビ割れが生じている。床面はローム直上に形成され、ほぼ平坦であったが、あまり硬くはなく、敷石の存在や覆土の黒褐色土と床面のローム土との差が仮りになかったとしたならば、床面を検出できなかったのではないかと思わせる程であった。

ピットはP_1～P_3の3個が検出された。P_1は深さ31cmの柱穴形、P_2は深さ17cmの柱穴形、P_3は深さ11cmの断面タライ状のものであった。これらのうち、P_2は平面形から2個のピットの複合ではないかと考えられ、P_1を除いて他のものは、はたして本址に附属するものかどうか不明である。

出土遺物としては、敷石北西隅に砥石が置かれ、敷石内転用石器として凹石2点と、炉址北面の石が石皿であった。また、敷石の東側やや離れた所にも石皿が1点裏面を上にして置かれており、敷石南西隅には深鉢形土器1個体が埋設されていた。敷石部主軸方向N—40°—E。敷石上面平均レベルは調査時に便宜上設定した原点に対し98.83～98.85mを示し、ほぼ2～3cm前後の高低差で平坦に敷かれていた。曽利Ⅴ期に属する。

（山本紀之）

5） 第5号住居址（第13図）

調査経過 本址はB地区の中央やや北よりに存在し、6～8号、10号、12号、14～16号にわたる重複した住居址群の最北端に位置している。重機による表土削平の際、P_2上面より2個体の深鉢形土器の胴下半が検出され、住居の存在が予想された。なお掘り進めると、炉を中心とした覆土内各所に炭火物・炭火材の塊りが充満していたので、焼失家屋との推察がなされた。また、中央やや北よりには炉が構築されていた。南側は6号住居址と重複関係を成しており、西側は過去における開田の際に撹乱を受け、三分の一程が削られている。北壁は東側ではっきり遺存しているが、西側に向かうに従い漸減し、西端では明瞭な掘り込みを確認することができなかった。

遺構 西壁は撹乱を受けたため確認できないが、プラン直径5m程の楕円形を呈すると推察される。壁はほぼ垂直で東壁のみ良好に遺存しており、壁高は20cm程である。また、東壁下には幅

15～20cm、深さ8cmの周溝が、約1.5mにわたり存在した。南側は、6号住との切り合い部分に貼り床が施され、6号住の床面との比高差20cmを測る。床面は平坦で、炉を中心として全体的に堅緻である。しかし、壁際および貼り床付近の床面においては、やや軟質な部分も存在した。ピットは、主柱穴と考えられるものが三ケ所検出された。四本柱の住居と仮定するならば、もう一ケ所ピットが存在するのだが、過去における攪乱のため確認することができなかった。P_1(50×33－50)は東北わきに、P_2(67×40－57)は東南わきに、P_3(55×50－45)は西南わきにそれぞれ存在している。また、P_3の覆土内からはくぼみ石が検出された。炉は、今回の調査で検出された炉の中では、最も大型で堅固な造りを成し、(東西130×南北100－50)の規模をもつ楕円形を呈した石囲い炉である。大型の石7個を斜めに埋め込んで炉を形成し、南側の一辺は石を水平に使用して焚き口としている。炉の底面(ローム層)は、深さ12cmにわたり変色しており、よく焼成を受けた赤褐色の焼土となっている。また焚き口の対角線上の炉石は焼成をうけ赤く変色していた。なお、本址の南端からは、床面上に口縁部をわずかに突出した状態で埋甕が検出された。口縁部をやや欠損しており、埋土内からは、ほぼ中央から凹石と黒曜石チップ及び土器片が、それぞれ一点ずつ出土している。

ところで、本址北壁外の検出面からは、黒曜石の集積址が1ケ所確認された。壁からわずかに離れて存在するこの集積址は、掘込み等は認められず、ローム面上に、4～8cm大の黒曜石が6個、無造作に存在していた。これが5号址に不随するか否かは判然としないが、本遺跡ではかなり大形の黒曜石塊が多数出土しており、当時は数多くの黒曜石貯蔵址が存在したと推察される。

本址は、埋甕などから判断して、曽利II期に属する住居と推察される。

(片山洋一)

6) 第6号住居址(第13図)

調査経過 本址はB地区の重複した住居址群の北寄りに位置し、南側では10号址に切られ、北側では貼り床の施される5号址によって切られて存在する。重機による表土削平の際、本址覆土上面からは黒褐色の落ち込みとともに、焼土I、IIが確認され、また土器片の存在も顕著に認められたことから、当初より住居址の存在が予想された。しかし、遺構検出段階では西壁の落ち込みしか確認することが出来ず、本址以南のB地区内には、連続する暗褐色土層下に数軒の住居址が重複すると予想されたので、5～12号址にわたる南北に長いベルトを残し、西側に追う形で掘り進めることにした。覆土掘り下げを開始すると、上面に露出していた焼土は予想外に厚く、焼土Iの下面にも、多数焼土の堆積が認められ、一部では床面上にまで焼土の堆積をみた。このように焼土が大量に認められたため、本址は当初焼失住居と予想されたが、炭化物、炭化材の出土は顕著には認められず、遺物もほとんどが床面より10～20cm浮いて出土したため、その可能性は薄い。なお、焼土内から出土した遺物は少量であったが、焼土周辺からは、床面より10～20cm程浮いた位置で、多数の完形、半完形土器の出土をみた。

ところで、本址東側では二重の掘り込みが確認されたので、当初これを2軒の住居址と捉え、

東壁下の床面及び東壁部分を第14号住居址として設定した。しかし、遺物整理を続けるうちに、土器の出土状態などからこれを2軒の重複する住居と考える根拠が薄れたので、今回は、この部分を6号址のベッド状遺構として扱い、第4号住居址は欠番とした。

遺構　本址は、他の住居址、小竪穴との切り合いが激しく、また西側の畔下部分では、一部開田の際に破壊を受けているため、プランの全容を把握することは出来なかったが、直径6.5m前後の円形プランを呈すると推察される。壁は、東壁から南壁にわたり一部途切れながらも遺存している。東壁はロームを鋭く掘り込んであり、立ち上がりは垂直に近く壁高40cmを測る。そして南壁は不鮮明ながらも、なだらかな浅い掘り込みが確認され、壁高は約15cmと浅い。また、5号址、10号址の床面との比高差は、それぞれ20cm、10cmを測り、床面レベルは本址の方が低い。床は水平で堅緻であり、特に炉の東側、南側部分は、タタキ状の非常に堅緻な床面を有する。そして炉南側では、焼土Ⅰ下面の床面上に焼土が堆積し、床面は焼成を受け3cm程の厚さで赤化している。なお、本址の東壁下には、最大幅70cmの三ケ月形を呈した、一段高まりを見せる平坦面が存在する。平坦部は幾分軟弱な面を有し、床面との比高は最高で11cmを測る。また、このベッド状遺構とも言える高まり部分では、壁下に周溝が存在し、幅20cm深さ5～20cmを測った。炉は北寄りに構築され、80×70—8の規模を有する。炉石はやや移動を受けており、人頭大の礫が5個存在したが、半数は住居廃棄時に持ち去られたと推察される。炉内には最高8cmの厚さを測る焼土が存在し、焼土内からは直径5cm程の球形を呈する焼けた礫が2点発見された。ピットについては、本址が多数の小竪穴と切り合うため、その判定に困難を極めた。一応、本址に不随するピットとして、P_1～P_4を想定したが、このうちP_4、P_5については、形態、規模からみて、主柱穴であると予想される。なお、本址と切り合う小竪穴のうちではS114、S115、S116が、特に巨大であり、S115、S116からは、ピット内覆土に一部ロームが充満する箇所が観察され、10号址の貼り床である可能性が強い。

本址は、出土遺物の様相から、曽利Ⅰ期に属する住居と推定される。

（前田清彦）

7）　第7号住居址（第13図）

調査経過　本址はB地区の南東寄りに存在し、西側では10号、8号址、また東側では16号址と切り合う。遺構検出段階において北壁が確認されたため、南に向かって黒褐色の覆土を掘り下げてゆくと、覆土内からは、若干の土器片とともに、人頭大の礫が10数個検出され、特に北側に集中傾向がみられた。さらに掘り下げを進めると、当初把握することのできなかった切り合い関係が徐々に判明してゆき、まず西側では、本址を切るように8号址が確認され、北西側では床面の微妙な差異から本址が10号址を切ることが判明し、さらに床面精査の段階では本址に伴わない周溝が確認され、東側に16号址が重複することが明らかとなった。最後に南壁の確認については、2次ローム層での壁の確認であるため困難を極めたが、暗黄褐色土の微妙な色調の差異から壁を把えることとなった。

遺構　本址は遺存する北壁及び南壁から推定して、直径6.5m程度の円形プランを呈する住居址と予想される。北壁はロームを垂直に近く掘り込んであり、壁高は23～32cmと深いが、南壁はやや緩やかな掘り込みで、壁高も9cmを測るのみであり、北に深く、南に浅い掘り込みの住居址と言える。床は、全体的に水平で、北側ではやや堅緻な面を持つが、南に向かうにつれ軟質を呈している。周溝は住居内に合計3本確認されたが、そのうち2本は住居址中央に存在しているため、本址に付随するものとは考え難い。炉は住居址内北西寄りに構築され、2個の炉石を残すのみであった。(80×50—28) の規模を有し、遺存する炉石の南側のものは焼成を受け赤変していたが、炉内覆土の焼土は稀薄であり、黒褐色土中に、焼土粒として、炭粒とともに検出された程度である。本址においては、重複が激しい為、主柱穴の判定は難しく、P_{37}、P_{28}、P_{44}、P_{45}、P_{46}などが本址の主柱穴として想定されるが判然としない。

本址は、曽利II期に属する。

（前田清彦）

8）　第8号住居址（第13図）

調査経過　本址はB地区の重複した住居址群の南寄りに位置し、北側では10号址、東側では7号址、さらに南西側では12号址と切り合って存在する。このように本址付近は重複が激しく、当初から住居址の存在は予想されたものの、プランを把えることは出来なかった。よって、南北にベルトを残し、すでに掘り込み面の確認されている10号、及び7号址側から掘り進めることとした。暗褐色を呈する覆土を掘り下げると、覆土内には流れ込みによると考えられる礫が、他住居址に比して多量に検出された。掌大～人頭大の礫50個ほどで、すべて床面からやや浮いた状態で出土し、特に北西側の炉を中心に集中傾向を見せている。そして、さらに掘り下げを進めると、10号、及び7号址より一段低いレベルで床面が検出され、また周溝、炉などの存在も明らかとなり住居址と断定するに至った。

遺構　プランは東西4.1mを計り、南北は推定約5mで、南北に長い楕円形を呈する住居と予想される。壁は、切り合いが激しいため純粋に遺存するのは西壁と南壁の一部のみである。西壁ではロームを垂直に掘り込んであり壁高30cm、南壁ではややゆるやかな掘り込みで壁高20cmを測る。また、北壁から東壁にかけては、10号及び7号址と切り合い、床面の比高差は10号址で約15cm、7号址で10cmを測り、本址の方が、竪穴が深く掘り込まれている。床は平坦で良好に遺存し、幾分堅緻なきれいな面を有していた。南側については、12号址の床面に連続しているが、両住居の床面はレベル、状態ともに大差はなく、明確な境界を把握することはできなかった。炉はやや西壁寄りに存在し、東西1.4m、南北1.4m、深さ0.4mの不整方形を呈した大型の炉である。炉石の存在は認められなかったが、規模から判断して単なる掘り込み炉とは考えられず、5号住のように大型の礫を使用した石囲い炉であったと推察される。おそらく、炉石は住居廃絶時に他の住居に移され、再利用されたのであろう。また、炉の底面では、ロームが焼成をうけ、厚さ10cmにわたって赤化し、鮮やかな焼土層をなしていた。周溝は、西壁から北壁にわたって顕著に存在し、

幅20～35cm、深さ平均20cm、最高34cmを測る非常に掘り込みの深い周溝である。ところで、東壁下では一部周溝が途切れる部分が存在し、左右の周溝が内湾してP_{18}及びP_{25}に連結する形で検出された。両ピットともに掘り込みは深く約50cmを測り、また75cmの間隔を保つことなどからあるいはこれが入口施設であった可能性も窺える。主柱穴はP_{18}～P_{21}の4本柱によって構成され、またP_{25}、$_{26}$についても柱穴としての性格が考えられるが、重複が激しいため、他住居址のピットである可能性もあり判然としない。P_{24}はやや袋状を呈し、規模から判断すれば貯蔵穴のような性格が予想されよう。

ところで、住居内南側、P_{21}付近では、浅い凹みを有し、長さ45cmを計る2等辺三角形の平石が、床直上に据え置かれるように出土したが、これは作業台に使用されたものだと推定される。本址においては炉が北西寄りに構築されているため、この石の配置される周辺は、竪穴内で最も広い空間を有しており、当時は作業場として利用されていた可能性も窺える。

なお、本址と重複する10号、7号、12号の各住居址との新旧関係は、10号→7号→8号、12号→8号だと考えられる。また、時期については、出土遺物の様相からみて、曽利II期に属する住居であると推察される。

（前田清彦）

9） 第9号住居址（第14図）

調査経過　本址はA地区の北西寄りに位置し、南側では11号址と4号址が隣接している。調査区全体から見れば、本址の標高はやや高く、環状を呈する住居址群の内奥に位置する。遺構検出段階において北壁の落ち込みが確認されたので掘り進めると、住居址内東側の床面が検出された。

また、住居址中央以西は畔下に存在するため、遺構の遺存が危ぶまれたが、畔下に東西のサブトレを入れると住居址中央部に炉が確認され、炉のわきには小型の石皿が存在した。畔下部を漸掘すると、住居内西側半分は西に向かって緩い落ちこみとなっており、開田時の破壊を受けていることが判明した。

遺構　本址の掘り込み面はローム層であり、プランは直経約5mの円形プランと予想される。壁は東側半分のみ存在し、直に近い立ち上がりを有する。壁高は東壁で最高32cmを計り、北壁と南壁においては、西に向かうにつれ漸減している。床面は全体的にやや堅めであるが、炉の南面に蜂の巣状の凹凸があり、一つ一つの穴の深さは5cm～10cm程で、この部分は軟弱である。

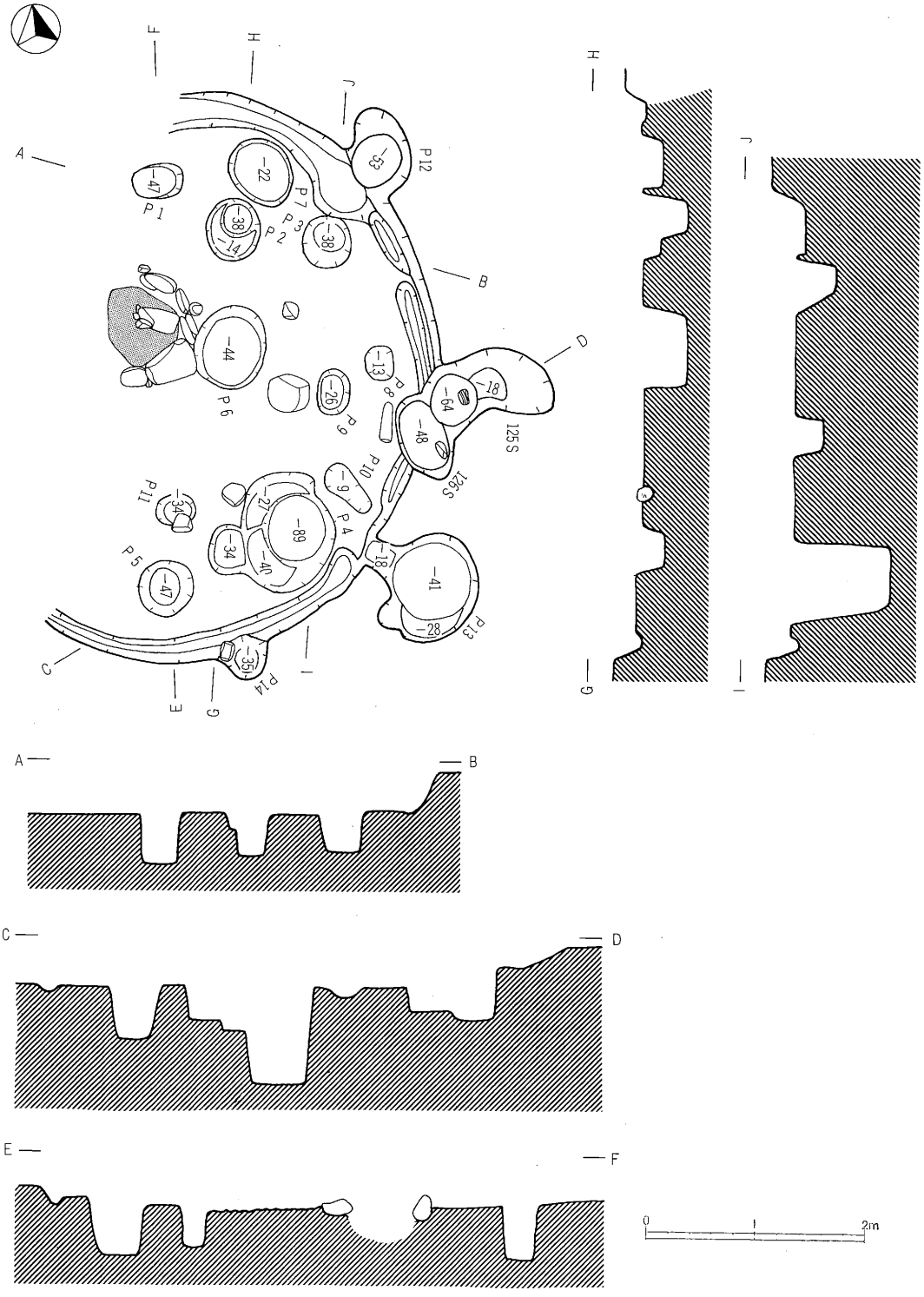
周溝は全周にわたって遺存し、深さ—12cm～—4cm、幅10～15cmをはかる。

炉は円形石囲い炉で、中央北寄りに位置し、西側半分の炉石は存在しなかったものの、南北100cm深さ22cmの規模を有する。炉石は平石を斜めに埋め込んで形成され、南東側では石を水平に使って焚口としている。炉内には焼土が確認され、ロームが厚さ最高7cmにわたって焼成を受けていた。さらに、炉の中心の上面には完形の深鉢形土器が横倒しで、つぶれるようにして出土しその上には長さ35cmをはかる長方形の礫が、土器を押しつぶすように存在していた。

また、東側の炉石のわきの床面上から、小型の石皿が据え置かれた状態で出土した。

I　ローム
II　暗褐色土　ロームブロック(多)混入
III　暗褐色土　ロームブロック混入
IV　暗褐色土　炭粒(多)，ロームブロック混入
V　暗褐色土　炭粒，ロームブロック混入
VI　暗褐色土　炭粒(多)混入
VII　暗褐色土　炭粒，ロームブロック(多)混入
VIII　ローム(貼床)
IX　褐色土
X　褐色土，焼土混入
XI　褐色土，ローム粒混入
XII　暗褐色土，焼土混入
XIII　暗褐色土，炭粒混入
XIV　暗褐色土
XV　焼土
XVI　黒褐色土
XVII　黒褐色土，ローム粒混入
XVIII　黒色土

第13図　第５～８，10，12，15，16号住居址


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P10
P11
P12
P13
P14
125S
126S
0
1
2m

第14図　第9号住居址

ピットは数多く発見されたが、小竪穴との識別が難しかった。主柱穴と考えられるものは、P_1～P_5の五ケ所に遺存し、このうちの何本かが主柱穴に使用されたと思われる。P_6については小竪穴の可能性もあるが、貯蔵庫等に使用されたとも考えられる。

本址は、出土遺物の様相から、曽利II期に属する住居と推察される。　　（橋詰文彦）

10)　第10号住居址（第13図）

調査経過　本址はB地区の重複した住居址群のほぼ中央に位置し、北側では6号、南側では7、8号址にそれぞれ切られる状態で存在している。遺構検出段階では、6号住東壁に続く本址の東壁部分が暗褐色の落ち込みとなって検出されたものの、西側及び南側については重複が激しいため明瞭な掘り込み面を確認することは出来ず、結局、東西、南北方向に十字のベルトを残して、東壁から西側に追う形で掘り下げを開始した。覆土を掘り進めると、まず、炉東側部分では広範囲にわたる薄い焼土層が確認され、また礫の存在も顕著に見うけられた。さらに、炉のすぐ北側では、新たに焼土IVが検出され、それはあたかも破壊を受けた半完形土器を包むように存在していた。さらに掘り下げを進めると、まず東側の床面及び炉が検出され、住居址であることが判明した。そして最後に西壁の確認を残すのみとなったが、西壁付近では検出面が2次ローム層であるため明瞭な掘り込みが確認されず、結局、暗黄褐色を呈するロームの、色調の微妙な差異をもって西壁を把えることとなった。なお、この炉西側部分からは、遺物、礫ともに出土量は少なく、床面の状態は東側に比べやや軟質を示した。

遺構　本址は東西6.4mを測り、残存部分から推定すれば、北東側のやや入り込んだ不整円形プランを呈するものと推察される。壁は、東壁ではロームをややなだらかに掘り込まれており、壁高20cmを測る。また、西壁については先述の如く不明瞭な点も多いが、壁高は10cm前後で確認された。なお、6号址との重複部分では、6号址の床面上10cm程の高さに本址床面が存在すると考えられるが、ロームによる貼り床は施されておらず、明確な床面を把えることは出来なかった。北壁は、遺物の状態、セクション図などから、焼土IIの中央部付近を掘り込む形で存在したと考えられる。床は、炉周辺及び住居址内東側部分で良好に遺存しており、水平で堅緻な面を有していた。しかし、壁際及び西側の床面では軟質を示している。なお、重複する住居址と本址の床面との比高差は、6号址が約10cm、8号址が約15cm本址より低く、7号址とは、ほとんどレベルに差異は認められなかった。炉はやや西寄りに構築されており、(80×80－5)の規模を有する。北西側に開いたコの字型を呈する石組み炉であるが、かつては北西側の一辺にも炉石が存在したと予想される。南東側の一辺は石を水平に使用しており、レベルもやや低く焚き口とみられる。また炉内には焼土と黒色土が混在し、焼土の厚さは最高6cmを計った。ピットは東側で数多く検出されたが、西側では一ケ所も確認することは出来なかった。主柱穴と規定されるのはP_{12}～P_{14}で、また8号址内に存在するP_{15}、P_{16}についても、本址の柱穴である可能性が強い。P_{17}は他ピットに比し、若干大きめの規模を有しているが、深さは床面より20cmと浅く、あるいは小竪穴の可能性もある。なお、このP_{17}の上面の覆土からは、半完形土器と土鈴（3）が出土している。

本址と、重複する他住居址との新旧関係は、6号→10号→7号→8号→であると推察される。また土器の様相からみて、本址は曽利II期に属しよう。　（前田清彦）

11)　第11号住居址（第15図）

本址は、A地区の中央西寄りに、敷石住居の4号住と切り合って位置する。遺構検出の段階であぜ東に全体の半分を確認し、あぜの下に、西半分が続いていると思われた。東半分を掘り下げ、床面を確認したが、炉は現れなかった。あぜを撤廃したところ、石囲い炉が現われた。覆土は、厚さ10cmほどの黒褐色の表土と、その下に暗褐色土が堆積していた。

住居址の西壁は、欠損しているが、残存部分から円形プランとわかる。直径6m50cm程の規模である。床面は、よく踏み固められており、南に非常にゆるやかに傾斜し、起伏はなく、ほぼ平らである。壁は、すべて垂直に掘り込まれている。壁高は、東壁39cm、南壁38cm、北壁34cmだが、南、北壁とも西へ行くほど、低くなり、床面まで傾斜している。周溝は、壁に沿って見られ、幅5～10cm、深さ5～15cmである。溝内から、石鏃と打斧が1点ずつ出土している。炉は、南北51cm、東西53cmの楕円形で、深さ29cmであり、平たい石で囲まれているが、南側の石が1つだけ、水平に置かれており、焚き口であったと考えられる。全石とも、床面より5～10cm頭を出しており、炉内には焼土が見られる。炉の南西に1m50cm程離れて、1m×45cmの範囲で焼土があり、厚さ10cm程で、焼土の下は、ローム混じりの黒褐色土であった。小竪穴は、炉の西側に、南北に3ヶ所並んでおり、南から上径1m、下径90cm、深94cm、上径80cm、下径60cm、深47cm、上径90cm、下径80cm、深さ1m4cmだが、この北端の小竪穴は、さらに上径40cm、深66cmの、底に30cm大の石が置かれた小竪穴を伴う。ピットは、東壁の北側から南壁にかけて9つ、炉の南に1つ見られる。本址の遺物は、少なく、完形品、または、それに近い土器は出土しなかった。

本地は、曽利IV期に属する。

12)　第12号住居址（第13図）

調査経過　本址はB地区南西端に存在し、標高はやや低く、15号址とともに環状を呈する住居址群の外縁に竪穴が構築されている。台地突端の南西に面する緩斜面上に立地する為、検出面は1号址付近に比べ20～30cm低く、また本址付近は重複も激しく遺構検出に伴い手間取り、結局、B地区内では、プランの確認に最も遅れをとった。6号から10、8号址を通り本址に至る南北のベルトを残して暗褐色を呈する覆土を掘り進めると、まず8号址床面に連続する床面が検出され、さらに炉、周溝が確認された。南側と西側の畔下部分については開田時の破壊を受けたとも考えられ、当初遺構の存在は危ぶまれていたが、南西隅に周溝が確認され、プランのほぼ全形が遺存することが判明した。

遺構　本址は、北側で8号址と切り合い、また南西側では周溝の存在は認められたものの、壁は検出されず、プランについては不明確な点も多いが、およそ5m強の円形プランを呈すると推定される。壁は北壁と東壁の一部が遺存し、ロームをややなだらかに掘り込んでいるが、遺存状態は良好とは言えず、処々に凸凹が見られる。壁高は北壁で最高24cm、東壁で25cmを測り、北壁

では西に向かうにつれ漸減する。床はほぼ平坦で、幾分堅緻な床面を示すが、南西側では各所に攪乱の痕が見受けられ、蜂の巣状の浅い凹みが多数存在する。炉は北西寄りに構築され、(140×70—5)の規模を有する。細長い8個の礫と、一板の平石によって構成される長方形石組炉であり、南東側の平石部分が焚き口とみられる。炉内には焼土が最高4cmの厚さで広範囲に存在し、その中心には、小型の深鉢形土器の胴下半が、やや焚き口側に傾斜し、半ば埋まる状態で埋設されていた。なお、この土器(第49図3)は、かなり焼成をうけたとみえ赤褐色に変色しており、非常に脆い土器であった。周溝は北壁下に幅15cm深さ10cmを測る周溝が2.5mにわたって存在し、また南西隅では幅30cm深さ20cm程度の周溝が長さ約2mにわたって2本並列して存在する。この並列する周溝については、床面が外側の周溝のあたりまで確認できたため、外側の周溝は住居拡張時に新しく掘り込まれた周溝である可能性が濃い。ピットは多数確認されたが、主柱穴と考えられるものはP_{30}とP_{35}であり、あるいはP_{31}～P_{34}の四本柱を想定することも出来るが、掘り込みは浅く可能性は薄い。P_{29}は−70cmを計るやや大型の袋状ピットであり、貯蔵穴などに利用されたと推察される。

なお、本址と8号住との新旧関係は、周溝の切り合いなどから12号→8号と言えよう。本址は出土土器の様相から曽利Ⅰ期に属する。(前田清彦)

13) 第13号住居址(第11図)

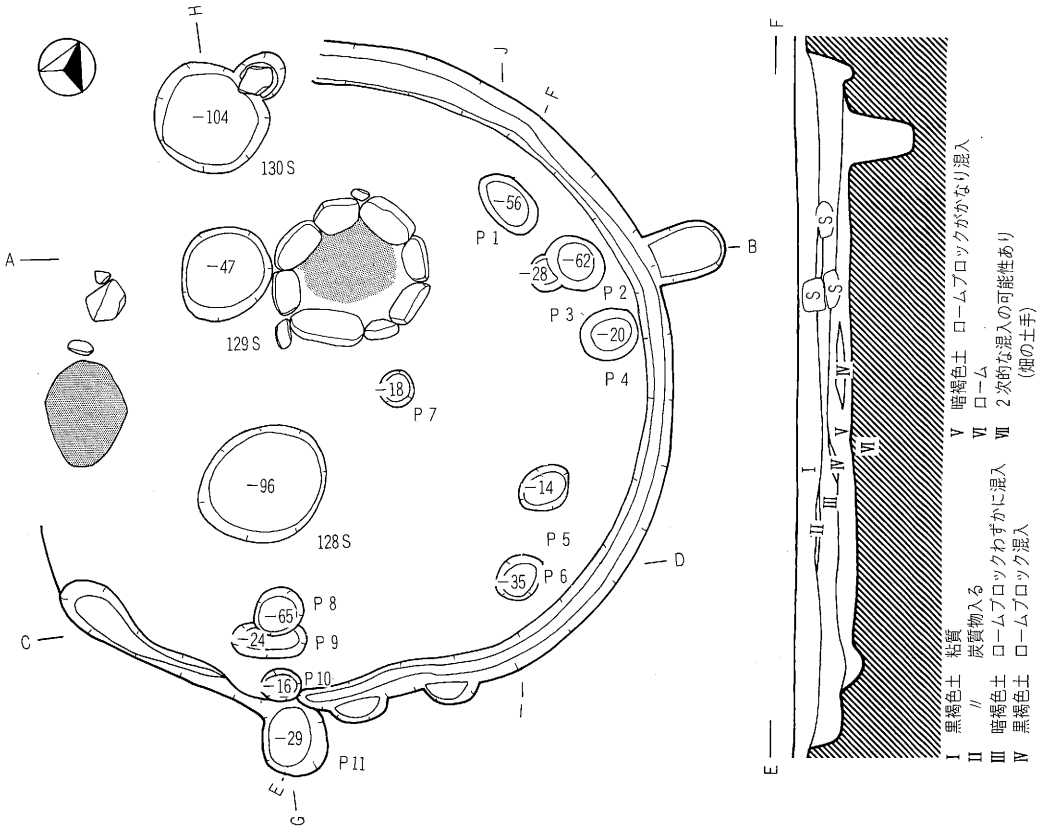
本址は、A地区の南東に位置し、18号住、3号住と切り合っている。ローム層を掘り込んでおり、覆土は、黒褐色土であったため、住居址の確認は容易であった。東側半分は、土手のため、発掘していない。

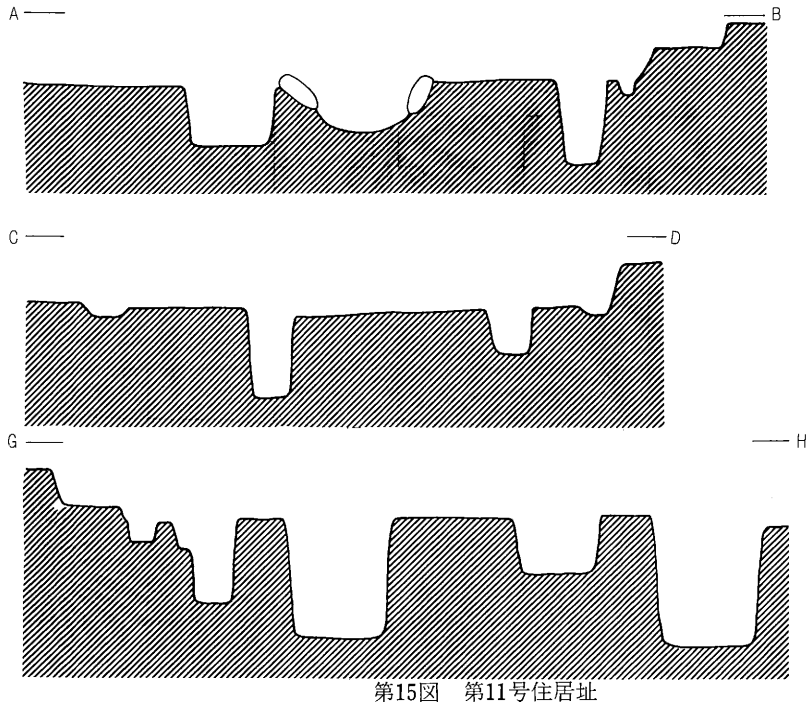
プランは、西半分しかないが、径6m弱の円形と考えられる。壁は、北壁だけが確認され、南壁は、削られたらしい。壁高は16cm、柔いロームがほぼ垂直に掘り込まれている。床面は硬さが一様でなく、検出困難であり、堅緻な部分、軟弱な部分が、中央より南側の土手沿いに見られたが、全体的には、軟弱であった。ピットは、P_{19}、P_{2}が重複して存在し、深さは、各々、33cm、64cmであった。本址は、明確に炉と断定できるものが出土していないが、焼土が中央と50cm離れてその南側に出土した。北側の焼土は、南北に長い楕円形状に、長軸70cm、短軸50cm、深さ10cmの範囲見られた。南側の焼土は、半分が土手下にあったが、南北に70cmであった。位置的に見て、北側の焼土は、本址中央寄りであり、地床炉と考えることはできるが、断定はできない。なお、焼土には、何も混じっていなかった。周溝は、存在しなかった。18号住との床高差は、3～18cmあり、18号住より低い。出土遺物は、割合に少なく、土器片、凹石、打製石斧が出土した。

(三村洋)

15) 第15号住居址(第13図)

調査経過 本址はB地区の重複した住居址群の南西寄りに位置し、北東側にはわずかに切り合う形で6号住が隣接する。西側の大部分は、C地区の畑を過去に開田した際に破壊を受けているため存在しないが、調査地区全体から見れば、12号址とともに環状を呈する住居址群の最も外縁





第15図　第11号住居址

に位置する住居址と言えよう。本址付近は台地突端の緩斜面に位置することもあって、検出面は二次ローム層であり、遺構検出には難渋を極めたが、東壁のわずかな掘り込みが確認され、さらに周溝が発見されるに及んで、住居址と断定するに至った。

遺構　先述の如く、開田の際に住居址の大半を破壊されているため、プランは判然としないが、残存部分から推定して、直径4～5mの円形プランを呈する住居址と推察される。壁はロームをなだらかに掘り込んであり、壁高は、最高18cm、平均10cmと低い。また、東壁下には周溝が存在し、幅10～15cm、深さ2～5cmを測る。床は幾分軟弱なローム面であり、やや起伏を示す。ピットは床面から一ケ所（P_{48}）、東壁から張り出すように一ケ所（P_{47}）検出され、さらに6号住と接する部分には小竪穴が存在したが、調査の都合上完掘することは出来ず性格については不明である。

なお、本址と6号址との新旧関係であるが、両住居の床面レベルがほぼ等しく、また両住居が接する部分に小竪穴が存在したため、切り合いの新旧関係は明確にし得なかった。本址は出土土器の様相から、曽利II期に属する住居と推察される。　（前田清彦）

16)　第16号住居址（第13図）

調査経過　本址は調査区の南側中央に位置し、A・B両地区にまたがり、東で第3号住居址と隣接している。また北側から西側にかけては第7号住居址と重複している。なお7号との重複部分では、7号の上に貼床が施されているため、新旧関係は、7号→16号であると推定される。ところで、本住居址の存在が明らかになったのは、3号検出中における西側の落ち込みと、7号の床面精査時に、7号址に伴わない新たな周溝が確認されたことによる。本址の東側、調査区域内、A、B両地区間の畔下の黒褐色の覆土を掘り進めてゆくと、土器片・石器が出土し、次いで炉、柱穴、周溝が検出された。

遺構　プランは、直径5.7mの円形を呈する。壁はローム層を垂直に堀り込んであり、特に南壁と北壁がよく遺存している。壁高は北壁29cm、東壁24cm、南壁16cmを計り、南に面した斜面に住居が構築されているため、北に深く、南に浅い掘り込みとなっている。床は、堅緻で全体的に水平で平坦であるが、南側の床面ではやや起伏が見られる。ピットは、P_{38}～P_{46}まで検出された。このうちP_{43}は、第7号住居址のピットである可能性も考えられる。主柱穴はP_{43}を含めてP_{38}～P_{42}と考えられ、6本柱の住居址であると推察される。

本址に付随する施設として、まず炉があげられる。炉は、やや北西寄りに位置し、円形石囲い炉が設けられている。規模は直径1.1mの円形で、40cmほど掘り込まれ、炉の中心から東南方向には平石が2個存在し焚口と考えられる。炉内には深鉢形土器(54図)の上半部が正位で埋設されており、土器の周囲は、厚さ10cmにわたってロームが焼成を受け鮮朱色を呈している。また、埋設土器内にも焼土が充満しており、火種に使用されていたと推察される。なお、東側の炉石わきの床面上からも若干の焼土が検出された。周溝は、若干の途切れがあるもののほぼ全周にわたって確認でき、幅は10～20cm、深さは5～14cmを測った。また東壁には2個の平石が掘り込み面に存

在しており、このような平石は隣接する3号址東壁にも確認された。

本址は、出土土器の様相から、曽利II期に属する住居と推定される。　（小岩井久仁）

17)　第17号住居址（第11図）

本址は、A地区南端に位置するが、3号住掘り下げの際、その南壁が確認されなかったため、3号住と切り合う住居址の存在が予想された。3号住の東壁に沿って南へ発掘した際に本址の壁が確認され、さらに3号住床面の検出で周溝が確認された。

プランは、3分の2以上が削られており、判然としないが、周溝の様子から円形プランと思われる。床は、ロームを掘り込んでおり、ほぼ水平だが、南に若干傾斜している。全体的にやや軟弱だが、3号住との切り合い部分は、多少堅緻である。壁は、3号住の壁と交わる付近に見られるだけだが、垂直に掘り込まれ、やや堅い。周溝は、3号住床面上に見られ、深さ10～13cm、幅15～20cmである。本址に付属するピットは見られず、P_4、P_{10}は、いづれも3号住付属の柱穴と考えられる。主な遺物は、床面上に完形土器の3分の1ほどがつぶれた状態で出土しており、その他は、打製石斧、土器片が少数出土したのみであった。

（三村　洋）

18)　第18号住居址（第11図）

調査経過　本址は調査地域内南東隅に位置する。当初本址はその存在が認められなかったが、第13号址の床面精査の段階で、一段下がった床面と周溝が新たに認められたので、新たな住居として認定するに至った。本址は高度的に南に向かってやや傾斜を見せている。住居址は東側で第13号址と、また西側では第3号址と重複しており、床面が遺存していたのは東側の⅓ほどである。

遺構　住居址は⅓弱しか遺存していなかったため、プランについては推測し難いが、直径4～5mの円形を呈すると考えられる。周溝は深さが8～15cmを計り、南にいくほど浅くなっている。幅は広い所で20cm、狭い所で4cmを計り、全体的にみると東側の周溝が狭い。床面はやや軟弱であり、第13号址との比高差は大きい所で北側の8cm、小さい所で東側の3cmであった。ピットは6箇所存在した。それぞれ規模は、P_{11}が上面径60×50cm、下面径60×41cm、－75cm（ピット内に42×20cmの石が存在）、P_{12}が上面径54×38cm、下面径46×30cm、－53cm（ピット内床面下約10cmの所に遺物が存在）以下、P_{13}上面径57×40cm、下面径48×30cm、－36cm、P_{14}はP_{15}と重複している。P_{15}上面径42×45cm、下面径42×37cm、P_{16}もP_{15}と重複、なおP_{16}はP_{14}、P_{15}に比べてやや小穴である。P_{17}上面径40×39cm、下面径29×31cm、－31cm、P_{18}に関しては、その上に30×40cmの平らな石が、ピットにふたをするような感じで存在した。その石とほぼ同じ大きさの石が、東側に対をなすようにある。それら2つの石は床面上にあった。　（高橋啓三）

19)　第19号住居址（第16図）

本址は、調査区の北側、すなわち遺跡の広がる台地の北縁側に位置する。住居址の西側には第20号住居址が床面同レベルで重複しており、また北西隅を第21号住居址が掘り込みで重複してい

る。この3住居址については削平時にローム層上面に暗褐色土の落ち込みが明瞭に認められたため、存在は容易に把握されていたが、個々の住居址のプランの確認は壁の遺存状態が少ないため遅れた。新旧関係は、本址と第20号住居址を第21号住居址が掘り込んでいるところから第21号住居址が最も新しいことになるが、本址と第20号址の新旧関係は不明である。

住居址は西側半分が欠除しているが、残存壁と主柱穴の配列状態から推して径5.2mの円形プランを呈していると思われる。主軸方向はE—Wである。壁高は南壁が21cm、東壁が17cmを測る。ほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。床はローム面上に構築され、中央がやや窪んだ緩やかな擂鉢状を呈している。炉は中央の浅い窪みが該当すると推定されるが、炉石・焼土・炭化物の検出ができず確認はされなかった。。柱穴は隣接する住居址のものとの重複があるため把握は難しいが、主柱穴はP_2、P_4、P_{11}、P_{23}の4本柱と思われる。

本址は、出土土器により曽利Ⅰ期に属する。（鳥羽嘉彦）

20）　第20号住居址（第16図）

本址は第19号住居址と東側を重複し、また第21号住居址が北側を掘り込んで重複しているため、南西隅のみの壁と床面が辛うじて残存している。覆土は暗褐色土の自然堆積で、隣接する第19号住居址および第21号住居址の覆土と均質であり、層位的な区別はできなかった。

プランは主柱穴の配列状態から推して径4.6mと小型の円形プランを呈し、主軸方向はN45°Wである。壁はローム層をほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は西側で15cm、南側で12cmを測る。

残存している床面にはピットが多数散在しているために起伏が著しい。この中には明らかに本址に伴うものも見受けられるが、隣接する住居址に伴うピットや、後に構築された小竪穴も含まれるであろう。床面自体はよく踏み固められており、南側へ緩やかに傾斜している。

ピットは、P_7、P_9、P_{13}、P_{20}が主柱穴であるが、このうちP_{20}は後に第21号住居址の掘り込みがあったためかなり削平されており、深さは第21号住居址からのものである。

炉は検出されなかったが、南西隅のP_{10}直上に若干の焼土の散布がみられた。

本址は、曽利Ⅰ期に属する。（鳥羽嘉彦）

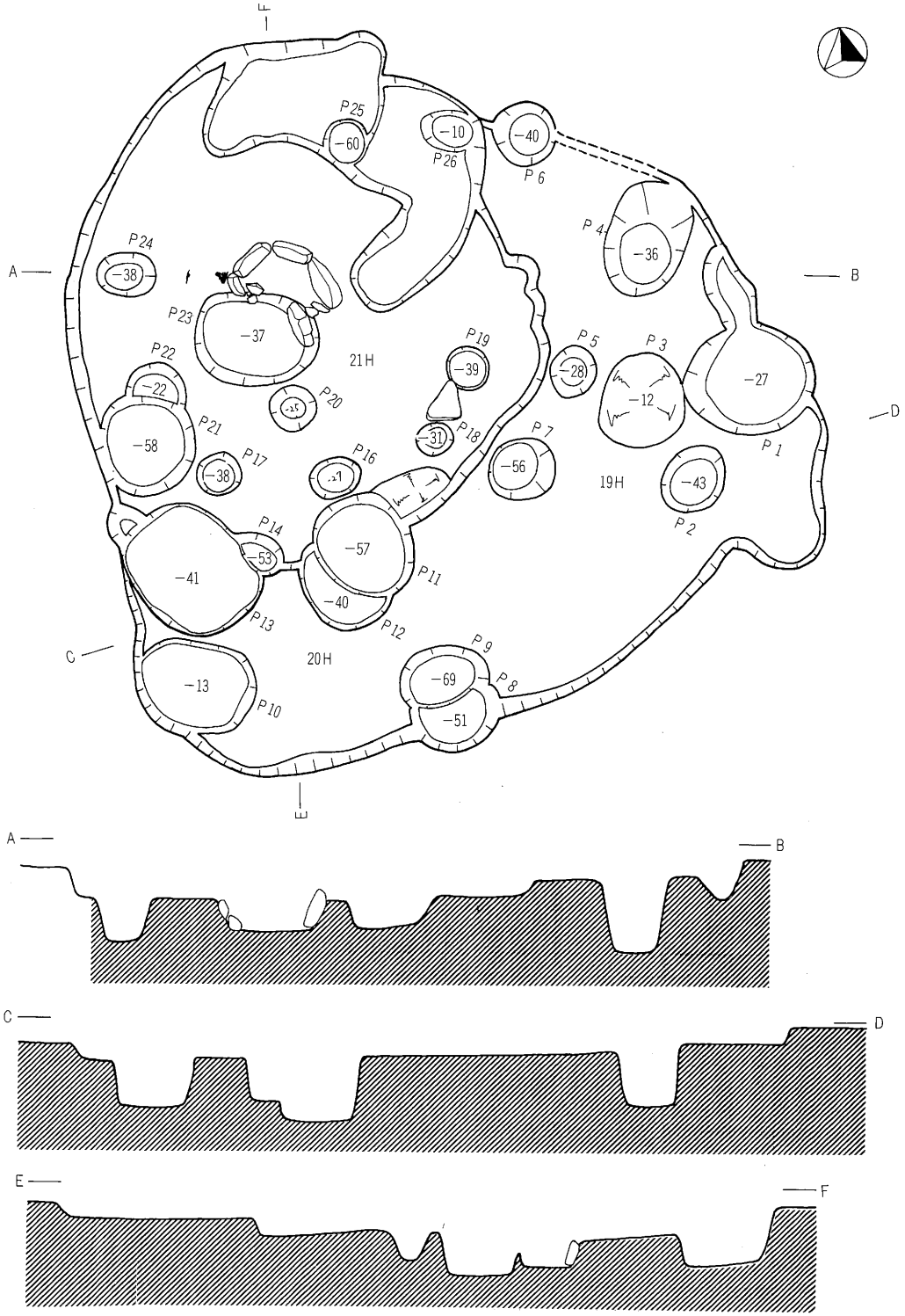
21）　第21号住居址（第16図）

本址は第19号住居址と第20号住居址を切る形で重複し検出された住居址である。プランは南北4.4m、東西4.2mを測るやや楕円のプランで、主軸方向はN60°Eである。

壁は西側と北側が垂直に立ち上がる明瞭な壁であるのに対し、隣接する住居址を掘り込む東側から南側にかけては、ダラダラと不明瞭な輪郭をつくっている。壁高は西壁と北壁が15cm、東壁の第19号住居址とが8cm、南壁の第20号住居址とが10cmを測る。

床面はローム面で堅緻な平坦面である。北隅から東側にかけて緩やかな溝状の落ち込みが認められるが、主柱穴のピットを含んでいるところから周溝的なものと考えるよりむしろ後に掘り込まれた何らかの遺構と考えることが妥当であろう。

炉は住居址中央にN45°Wの方向に石囲い炉が構築されている。炉石は北側がきれいに遺存し



第16図　第19号，20号，21号住居址

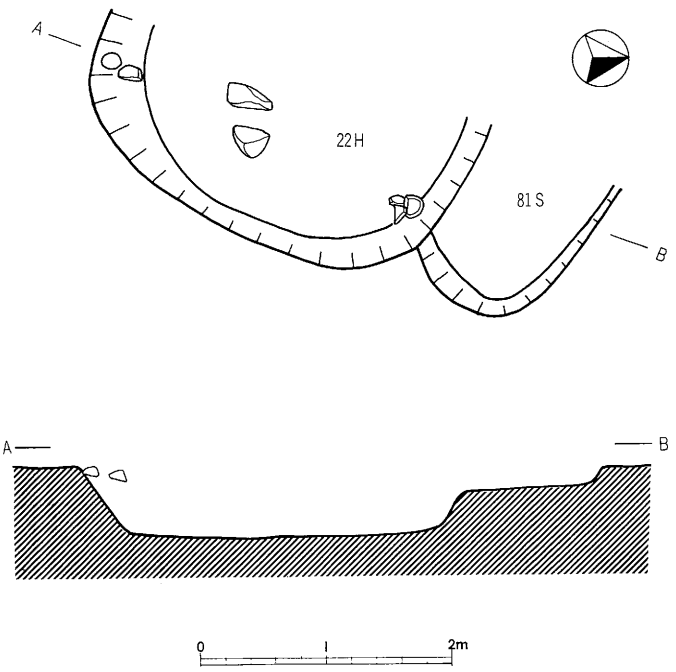
ているのに対し、南側は原形を留めていない。炉内部にはわずかに焼土と炭化物を含む黒色土が詰まっており、焼土は約1cmの厚さである。

ピットはP_{17}、P_{19}、P_{24}、P_{25}が主柱穴の4本柱と思われ、またカマド脇のP_{23}、P_{20}はそれぞれ第19号住居址、第20号住居址の主柱穴の残存であろう。P_{23}直上からは土偶の顔部と腕部が出土している。

本址は、曽利I期に比定される。（鳥羽嘉彦）

22) 第22号住居址（第17図）

本址は調査区の北縁隅に位置する。プランの西側半分は畑の土手にかかっていたため、時間の都合上掘り下げが出来ず、東側半分が検出されたのみであった。覆土は黒褐色土で、ほぼ自然堆積状態であったが、西側でやや攪乱が認められた。北側に小竪穴が重複しており、本址が掘り込んでいる



第17図　第22号住居址

プランは約3.0mの隅丸方形を呈する。壁は緩やかに南へ傾斜しており、壁高は北壁29cm、東壁48cm、南壁53cmを測る。

床面は軟弱の黒褐色土で、中央がやや高くなっている。ピット、周溝等の遺構は検出されなかった。北壁と南壁際、および住居址中央に礫の存在が認められたが、性格は不明である。

本址は、曽利II期に属する。（鳥羽嘉彦）

23) 第23号住居址（第18図）

本址は調査区の最北端、すなわち遺跡の立地する舌状台地の北側縁辺部に位置する。調査区の関係上、北側が完掘できず南側の⅔が検出されたのみであった。覆土は暗褐色土でローム面を掘り込んでいる。

プランは径4.0mの小型円形プランを呈する。壁の掘り込みは小さく、ほぼ垂直の立ち上がりを示している。壁高は東壁が13cm、南壁が7cmを測る。

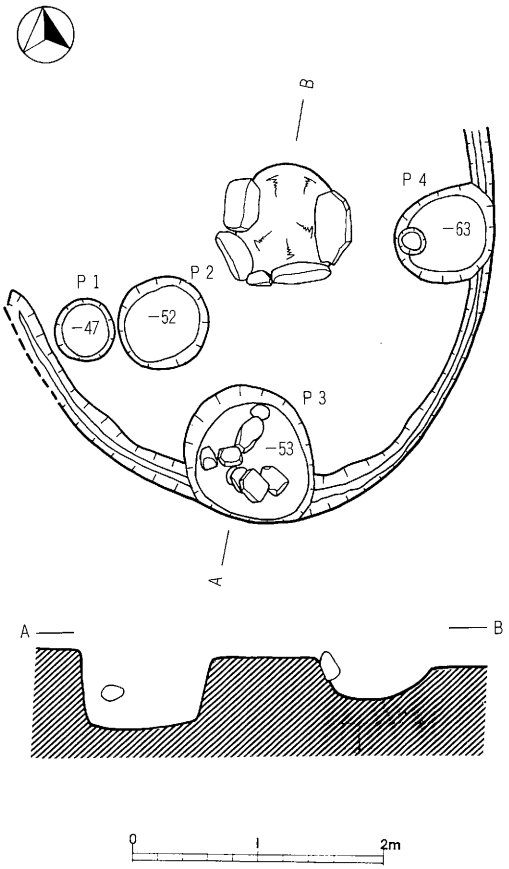
床面は緩やかに南へ傾斜しており、ピットおよび地下茎による窪みによりかなり凹凸が著しい。周溝は全周しているものと看取され、幅12cm、東壁下で5cm、南壁下で14cmの深さを測る。

ピットはP_1（−47）、P_2（−52）、P_3（−49）、P_4（−59）の4個があり、このうちP_3は礫群の投入が認められた。

炉は住居址中央に方形の石囲い炉が検出された。偏平な巨礫を用いたもので残念ながら北辺の礫は確認できなかった。内部に焼土が若干確認された。（鳥羽嘉彦）

(3) 小竪穴（第19～24図）

今回の調査で小竪穴は全部で130個検出された。この内、住居址と重複して検出されたものは32個あり、2号住居址、5号住居址及び6号住居址に集中している。これらの小竪穴は、規模が100cm前後、深さが50～100前後で、今回検出された小竪穴の内では規模の大きなものが多い。その他の小竪穴は地区の北東に集中して存在する。また地区の南部からは小竪穴は検出されていない。調査区内での在り方を見る限りでは、住居址群に取り囲まれた中央部に集中的に群存するようである。



第18図　第23号住居址

これらの小竪穴を大別すると、S3に代表される確認規模が100cm前後で、深さ50～100cmの円形もしくは楕円形を呈し、従来土廣とされているものと、S5に代表される確認規模が50cm前後で、比較的底が浅い柱穴状ピットの形態を示すものの2形態に大別することができる。

この2形態の内、前者で特記すべきものはS3（95×90）で、中央部よりヒスイの大珠が出土している事から、何らかの特殊遺構である事が想像される。また、S45（100×95）、S69（130×125）からは多数の人頭大の礫が、遺構中央から検出されている事からもS3と同じく特殊遺構であると考えられる。これらと同形態、同規模の小竪穴は、9号住居址の東、敷石住居址である4号住居址の北東に位置する一群と、前述の5号住居址、6号住居址と重複する一群との2つがある。前者は後者にくらべ全体的に浅いが、以前に構造改善で、検出面が削られている事を考慮に入れれば、ほぼ同じ形状を持った一群だと言える。また、前者について、9号住居址、4号住居址との関係は不明である。

これらの特殊遺構と考えられる小竪穴を含むこれらの一群は、この遺跡の中である特別な意味

を持つ位置にある事が想像できる。

柱穴状ピットを呈するものについては、9号住居址の東に不規則に散在し、また、22号住居址の東側に円形状に配列している。壁、炉址などが削平されてしまった住居址の柱穴とも考えられるが、断定的なことは分からない。

以上、今回の調査での概略を記したが、個々については第2表を参考にされたい。表内の数値で他の遺構と重複している等により確定できないものについては推定規模により示した。

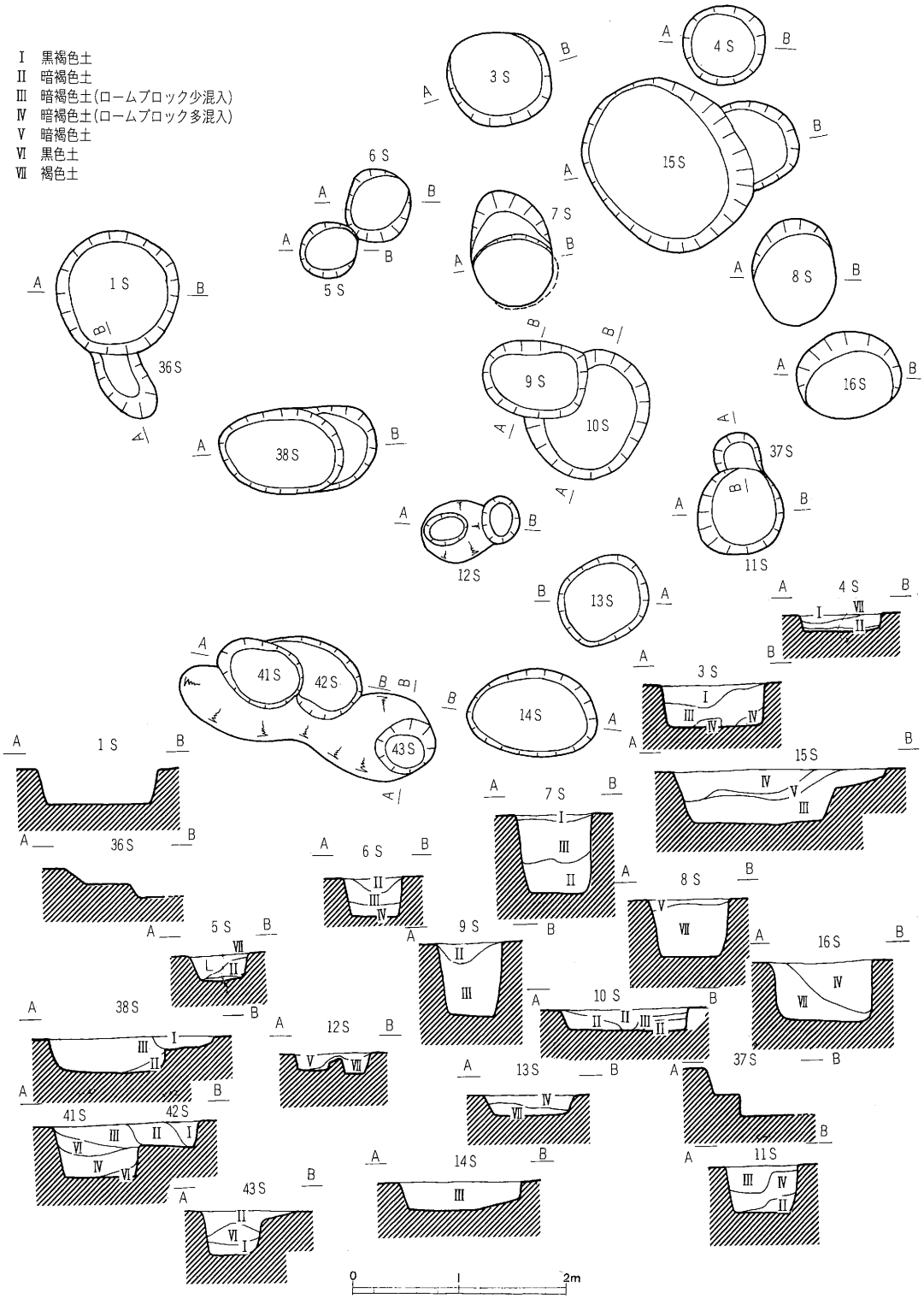
（中野実佐雄）

第2表　小竪穴一覧表

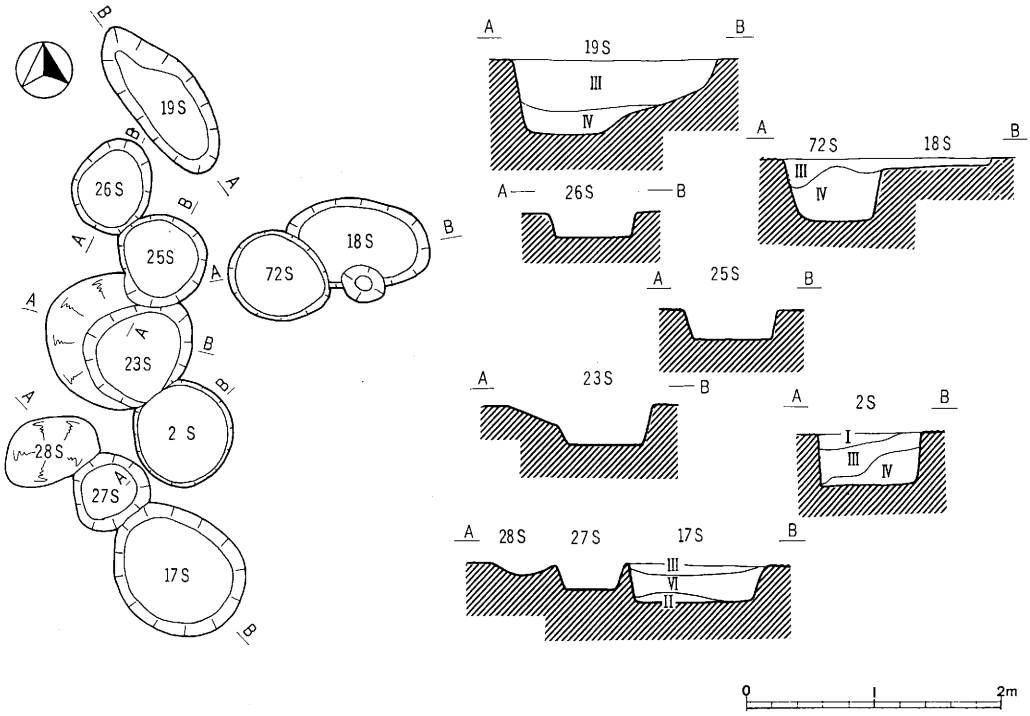
No.	確認規模	主軸方向	平面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	115×115	—	円形	90×95	平坦	30	S－36と重複
2	80×85	N－21°－W	〃	75×75	〃	40	S－23と重複
3	90×95	N－78°－E	〃	80×80	〃	40	ヒスイの小珠が中央部より出土
4	80×75	N－70°－E	〃	60×60	〃	15	
5	55×55	N－75°－E	〃	50×35	〃	25	
6	70×65	N－15－W	〃	50×60	〃	35	
7	110×75	N－11－W	楕円形	90×75	平坦2段	76	
8	100×80	N－10－E	〃	90×75	平坦	55	
9	95×70	N－80°－W	〃	80×50	〃	70	S－10と重複
10	120×120	N－5－E	円形	90×95	〃	20	S－9と重複
11	80×75	—	〃	60×70	〃	45	S－37と重複
12	90×50	N－80－W	不整形	40×20	平面2ヶ所	15	
13	90×85	N－20－E	円形	75×70	ボール状	20	
14	120×80	N－81－W	楕円形	105×70	平坦	25	
15	165×140	N－43－W	〃	145×110	〃	50	
16	95×80	N－85－W	〃	80×60	〃	55	
17	110×95	N－45－W	〃	95×70	〃	35	S－27と重複
18	115×65	N－82－W	〃	95×55	〃	50	C－72と重複
19	140×55	N－33－W	〃	110×40	平坦一部斜面		
20	60×55	N－15－E	円形	55×45	平坦	26	
21	65×45	N－5－E	楕円形	45×35	〃	40	人頭大の礫が1つ
22	60×50	N－70°－W	不整形	—	ボール状	37	
23	90×80	N－35－E	不整円形	70×60	平坦	29	S－2中，S－25，S－2と重複
24	115×105	N－60－W	〃		斜面	15	土器が西側より出土・S－23，S－25と重複
25	75×75	N－25－W	〃	60×60	平坦	24	S－23，S－24，S－25と重複
26	75×60	N－20－E	楕円形	60×50	〃	19	S－25と重複
27	65×55	N－30－E	円形	45×40	〃	23	S－17，S－28と重複
28	80×50	N－60－E	楕円形	—	ボール状	10	S－27と重複
29	75×65	N－15－W	円形	65×55	平坦	53	
30	140×90	N－25－W	楕円形	135×85	〃	60	
31	50×45	N－60－E	不整形	40×30	〃	14	
32	135×100	N－30－W	円形	115×75	〃	29	
33	145×110	N－35－W	不整形	115×85	〃	23	
34	80×80	—	不整楕円形	60×65	〃	16	
35	130×75	N－50－E	円形	—	ボール状	14	
36	60×45	N－25－W	楕円形	45×25	平坦	15	S－1と重複
37	40×40	—	円形	25×20	〃	25	S－11と重複
38	150×80	N－85－E	長円形	130×60	二段平坦	35	
39	95×85	N－60－W	タマゴ形	80×65	平坦		
40	120×45	N－85－E	〃	100×25	〃	14	
41	80×60	N－60－W	不整形	70×50	〃	48	S－42と重複
42	100×65	N－60－W	円形	85×50	〃	20	S－41と重複
43	250×80	N－70－W	〃	35×30	ボール状	6	
44	45×45	—	〃	30×30	平坦	11	中央N－65－Wの方向に巾10のミゾ
45	100×90	N－87－W	不整形	85×75	〃	80	人頭大の礫が9ヶと土器出土
46	100×90	N－20－E	楕円形	80×70	〃	19	
47	230×110	N－30－E	不整楕円形	200×85	二段平坦	49	

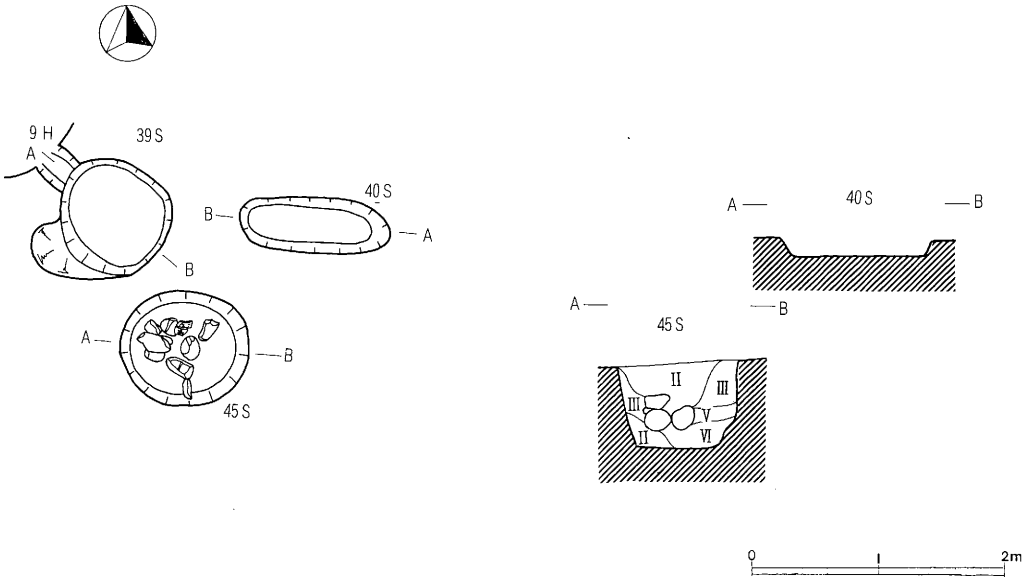
No.	確認規模	主軸方向	平面形	底面規模	底面	深さ	備考
48	80×70	N－90°	〃	45×50	平坦	49	
49	110×55	N－85－W	円形	90×50	二段平坦	50	
50	110×90	N－35－W	楕円形	80×70	平坦	16	
51	80×80	N－45°－E	円形	60×40	〃	40	
52	120×85	N－80－E	〃	45×50	一部斜面平坦	51	S－56と重複
53	55×55	－	不整形	35×35	平坦	23	S－55と重複
54	55×55	－	楕円形	15×15	周囲斜面 中央平坦	26	
55	70×70	N－45－W	不整形	40×25	二部斜面 二段平坦	27	S－53と重複
56	120×75	N－75－W	楕円形	95×65	平坦	50	S－52，S－57と重複
57	70×65	N－75°－W	円形	50×45	〃	20	S－56と重複
58	100×60	N－75°－W	楕円形	70×55	〃	19	
59	50×40	N－50°－E	〃	30×30	〃		
60	55×40	N－15°－W	〃	45×30	〃	41(11)	
61	95×65	N－30°－W	〃	70×50	斜面	36～53 (13～40)	
62	75×40	N－20°－E	不整楕円形	50×20	平坦		
63	75×60	N－15－W	円形	65×50	〃	45	1号住と重複
64	130×95	－	楕円形	110×80	〃	100	打斧出土
65	73×65	N－10－E	円形	－	－	－	
66	215×75	N－85－E	楕円形	195×65	平坦	11	5号住と重複
67	75×70	N－80－W	円形	55×60	〃	35	
68	80×75	N－5－W	〃	70×65	二段平坦	46	
69	130×125	N－30－W	〃	105×105	〃	41	コブシ→人頭大レキ9ヶ
70	90×85	N－5－W	〃	70×65	〃	79	
71	65×35	N－25－E	楕円形	45×20	〃	17	
72	80×70	N－47－W	〃 〃	70×60	平坦	45	S－18と重複
73	80×65	N－60－E	〃 〃	70×50	〃	31	S－29と重複
74	125×75	N－90－E	〃 〃	－	ボール状	16	
75	110×95	N－55－E	〃 〃	90×75	平坦		
76	55×50	N－80－W	円形	45×40	〃	81	
77	50×45	N－5－W	〃	35×30	〃	52	
78	190×130	N－70－W	不整形	130×65	二段平坦	39	S76，S77を含む
79	120×95	N－50－E	楕円形	95×65	平坦	52	
80	110×80	N－25－E	〃	55×45	二段平坦	63	
81	120×120以上	N－70－W	〃	100×90以上	〃	15	
82	80×70	N－65－W	〃	50×50	平坦	40	
83	40×40	－	〃	25×20	〃	31	
84	45×40	N－70－E	円形	25×20	〃	44	
85	115×60	N－40－E	〃	95×40	〃	10	
86	60×35	N－60－E	楕円形	45×20	〃	35	
87	80×45	N－35－E	〃	40×30	〃	28	
88	100×65	N－20－W	不整形	50×70	〃	34	
89	125×70	N－65－E	〃	90×50	〃	32	
90	125×65	N－55－E	〃	105×50	三段平坦 一部ボール状	44	
91	150×85	N－75－E	〃	125×70	二段平坦	41	
92	145×120	N－70－E	〃	130×110	〃	42	
93	40×40	－	楕円形				
94	75×50	N－65－W	円形	35×30	平坦	43	
95	95×90	N－75－W	楕円形	80×70	〃	50	
96	65×65	－	円形				
97	65×60	N－5－W	〃				
98	90－65	N－10－W	〃				
99	70×60	N－60－E	楕円形				
100	90×65	N－5－W	〃				
101	230×130	N－85－W	〃	195×105	平坦	23	5号住とS－127と重複
102	80×65	N－75－W	〃	45×40	〃	87	
103	120×65	N－60－W	〃	115×60	〃	32	5，6号住と重複
104	150×95	N－30－W	〃	130×80	〃	70	
105	140×90	N－85－W	〃	110×70	一部斜平坦	20	
106	70×60	N－70－E	不整形	55×50	平坦	－	
107	130×100	－	楕円形	－	－	18	15号住の中
108	65×65	－	〃	45×45	平坦	75	
109	160×130	N－30－W	円形	150×120	〃	32	
110	50×50	－	楕円形	45×45	〃	57	10号住と6号住に重複
111	70×45	N－85－E	円形	65×40	〃	52	〃
112	70×70	－	楕円形	60×60	〃	40	〃

No.	確認規模	主軸方向	平面形	底面規模	底面	深さ	備考
113	90×70	N—30—W	円形	80×60	〃	24	〃
114	110×100	N—5—E	〃	100×95	〃	45	6号住と重複，ロームブロック多量に含む
115	100×80	N—15—W	〃	90×70	〃	105	〃 コブシ→人頭大のレキ10ヶ 重なり出土，ロームブロック
116	140×110	—	〃	130×100	〃	30	〃
117	80×60	N—30—W	楕円形	70×50	〃	39	
118	85×35	N—40—W	〃	65×25	〃	71	
119	80×70	N—45—E	〃	70×60	〃	76	2号住と重複
120	75×70	N—85—W	〃	65×60	〃	46	〃
121	75×70	N—75—W	円形	60×55	〃	59	〃
122	80×70	N—45—E	〃	75×65	〃	51	〃
123	110×85	N—25—E	楕円形	95×80	〃	61	〃
124	100×80	N—25—W	〃	90×70	〃	71	〃
125	120×50	N—40—W	不整形	70×35	一部斜面 底平坦	48	播把手，出土
126	130×115	N—80—E	楕円形	65×50	平坦		〃
127	130×115	N—70—E	〃	不明	不明	95	人頭大のレキが5ヶ
128	105×90	N—30—E	〃	95×80	平坦	53	
129	80×70	N—30—E	〃	70×60	〃	53	
130	90×80	N—75—W	円形	75×70		104	

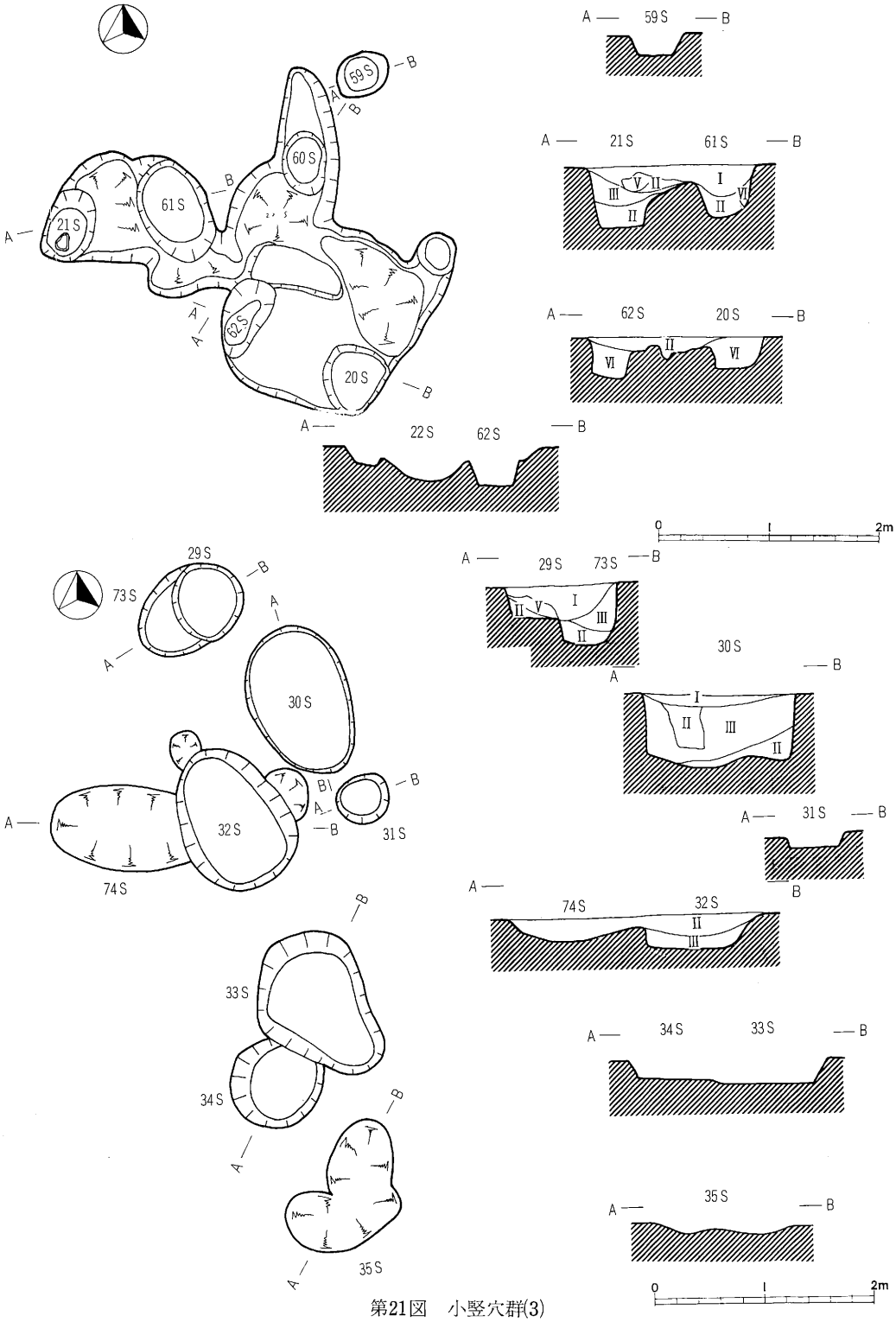

Ⅰ 黒褐色土
Ⅱ 暗褐色土
Ⅲ 暗褐色土(ロームブロック少混入)
Ⅳ 暗褐色土(ロームブロック多混入)
Ⅴ 暗褐色土
Ⅵ 黒色土
Ⅶ 褐色土
1S
2S
3S
4S
5S
6S
7S
8S
9S
10S
11S
12S
13S
14S
15S
16S
36S
37S
38S
41S
42S
43S
0
1
2m

第19図　小竪穴群(1)

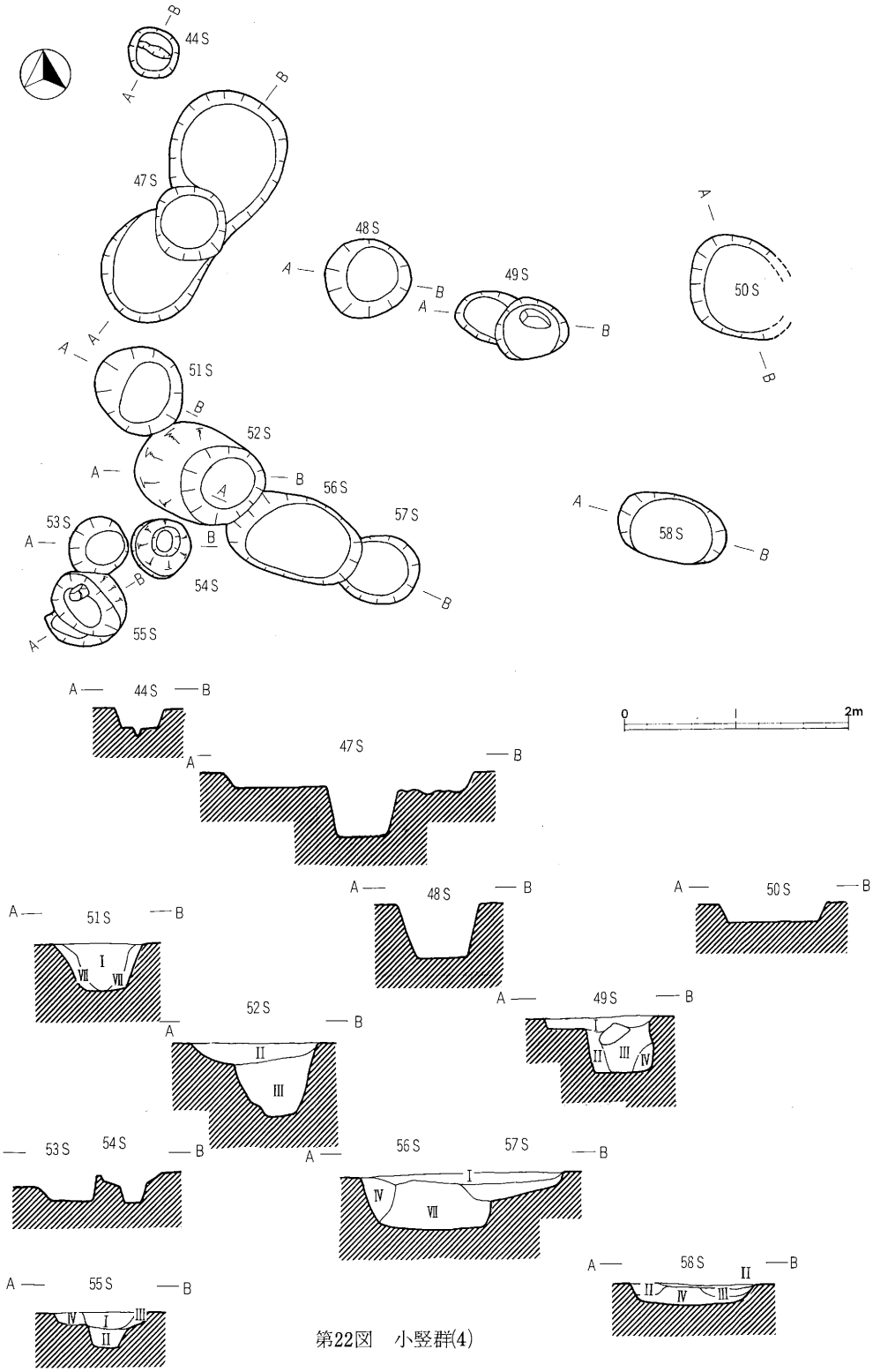

19S
26S
25S
72S
18S
23S
2S
28S
27S
17S
A
B
III
IV
I
II
VI
0
1
2m


9H
39S
40S
45S
A
B
II
III
IV
V
VI
0
1
2m

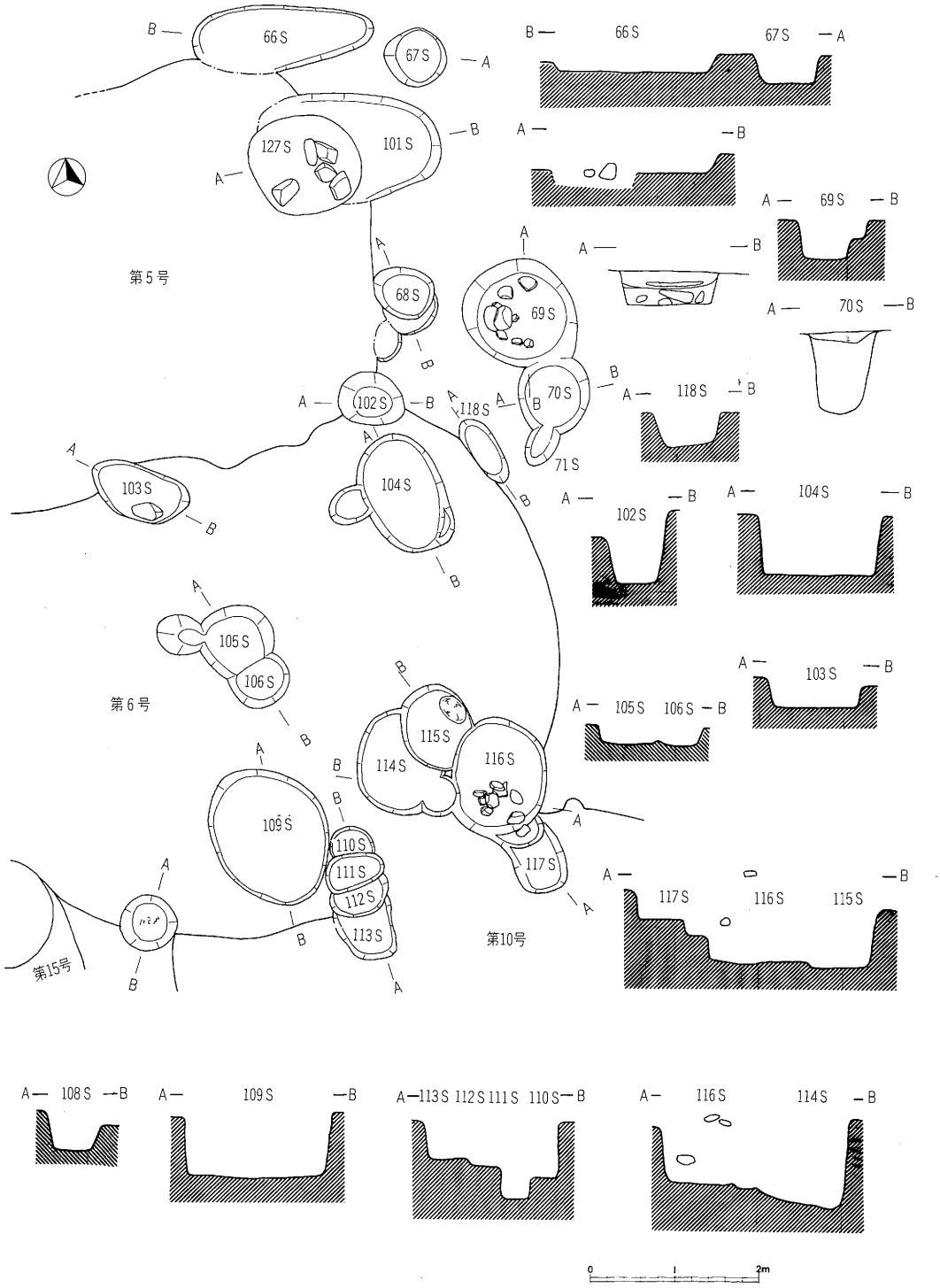
第20図　小竪穴群(2)


59S
60S
61S
21S
62S
20S
22S
29S
73S
30S
32S
31S
74S
33S
34S
35S
A
B
I
II
III
V
VI
0
1
2m

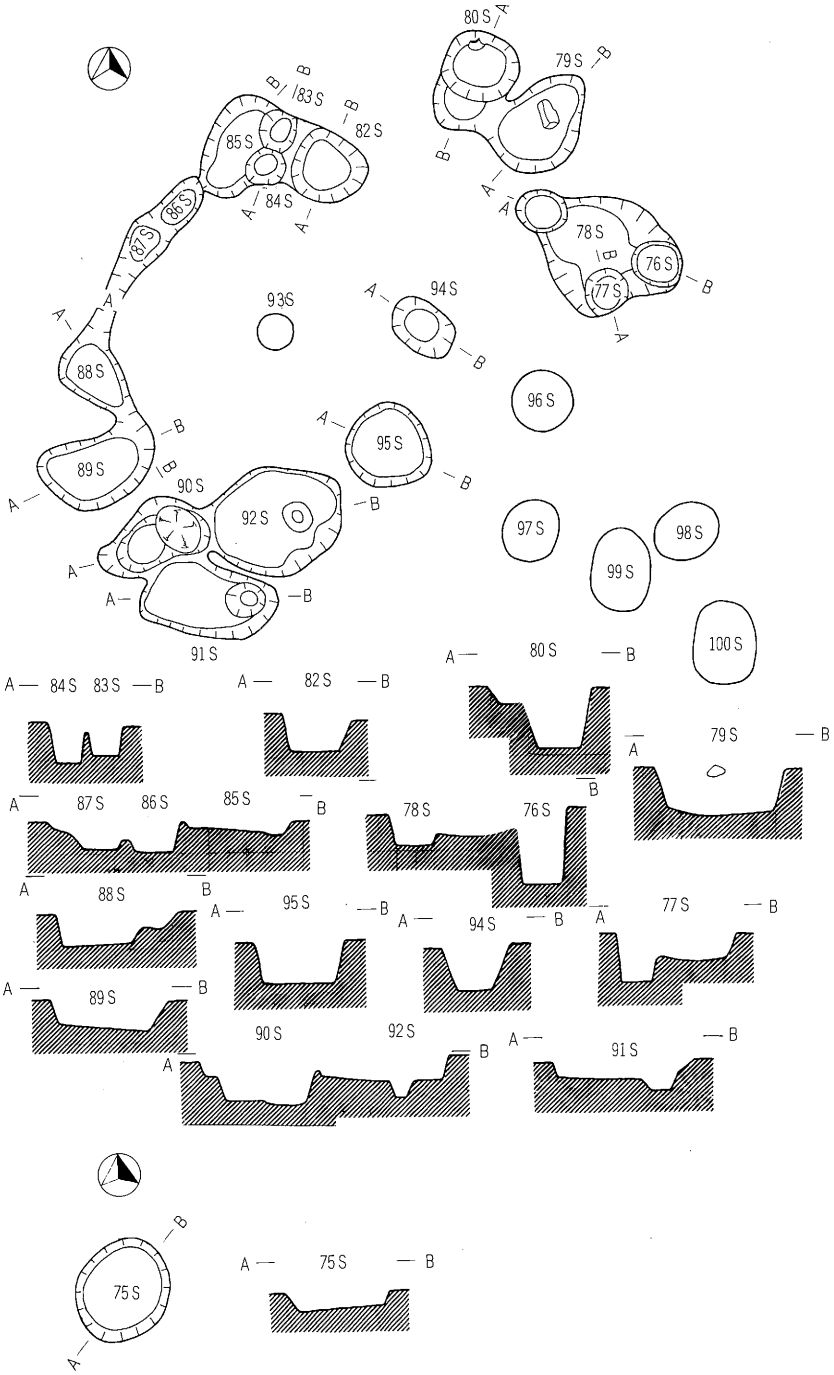
第21図　小竪穴群(3)


44S
47S
48S
49S
50S
51S
52S
53S
54S
55S
56S
57S
58S
A
B
0
2m
I
II
III
IV
VII

第22図　小竪群(4)


66S
67S
127S
101S
68S
69S
70S
71S
102S
118S
103S
104S
105S
106S
115S
114S
116S
109S
110S
111S
112S
113S
117S
第5号
第6号
第10号
第15号
108S
0
1
2m

第23図　小竪穴群(5)


80S
79S
83S
82S
85S
84S
86S
87S
78S
76S
77S
93S
94S
88S
96S
95S
89S
90S
92S
97S
98S
99S
100S
91S
A— 84S 83S —B
A— 82S —B
A— 80S —B
A— 79S —B
A— 87S 86S 85S —B
78S
76S
A— 88S —B
A— 95S —B
A— 94S —B
A— 77S —B
A— 89S —B
90S
92S
A— 91S —B
75S
A— 75S —B

第24図　小竪穴群(6)

(4) 遺　物

1) 土　器

本遺跡からは、曽利期全般にわたる多量の土器の出土をみている。主体をなすのは曽利Ⅰ、Ⅱ期の深鉢形土器で、埋甕5個体を始め、多数の完形土器も存在した。特殊な形態としては、2号址より出土の釣手土器、6号址の浅鉢形土器、7号址の小形鉢などが挙げられる。なお、3号、6号、10号址では大量の土器が覆土内に一括投棄されるという出土状態を示し、特に3号址では典型的な吹上パターンで覆土が形成されていることが確認されている。以下、各遺構ごとにその概要を記す。

(1)　第1号住居址（第25図）

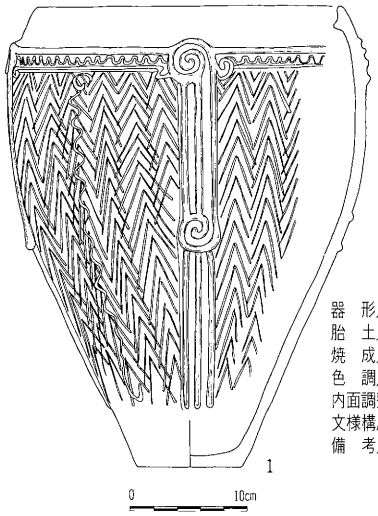
本址では、他住居に比し、土器の出土量は非常に少ない。唯一器形を窺えるのは、南壁下の床面に埋設されていた埋甕1と、覆土内より出土した小形の深鉢形土器2つのみである。埋甕1は床面レベルに口縁が頭を出す状態で正位に埋設されており、埋土からは黒曜石チップが一点出土しているが、蓋石などの存在は認められなかった。器高39cmを計り、胴部は隆帯による4単位の懸垂文が配され、その間を沈線による綾杉文と垂下する波状沈線によって文様が構成される。小形の浅鉢形土器2には推定器高10cmを計り、底部からは縁部に向かって直線的に外開する器面全体に縄文が施されている。他に拓本で図示した土器片などから推察して、本址は曽利Ⅱ～Ⅲ式にわたる時期の土器群であると考えられる。

(2)　第2号住居址（第26～27図）

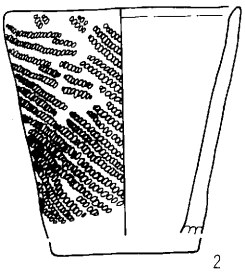
本址では、多量の炭化材、炭粒の出土をみており、焼失住居と推定されたが、出土遺物は意外と少なく、器形を窺える土器としては、床面上から一個体の釣手土器を出土したのみであった。第26図の釣手土器は、床面上の浅い凹みから、西北西方向に倒れる状態で出土し、土器の北側では、床面上に、焼土と炭粒の堆積が、わずかに観察されている。また、土器の内面及び文様部は黒褐色を呈し、一部黒色炭化物の付着も認められるが、床面上の焼土、炭化物との関連については判然としない。この釣手は頂部をわずかに欠損するが、おおよその器形を窺うことができ、宮城孝之の分類（『中部高地の考古学Ⅱ』、1980）によれば第3類にあたる。本址からはこの他、若干の土器片の出土をみており、曽利Ⅰ式の終わり頃の遺物（第27図1～10）と曽利Ⅴ式の遺物(17～19)の2時期の土器が混在した。おそらく、釣手土器を出土し、焼失住居である曽利Ⅰ式期の本址は、一部で曽利Ⅴ式の住居と重複するが、遺構全体を完掘出来なかったため重複する住居の確認が出来なかったのであろう。　（前田清彦）

(3)　第3号住居址（第29～32図）

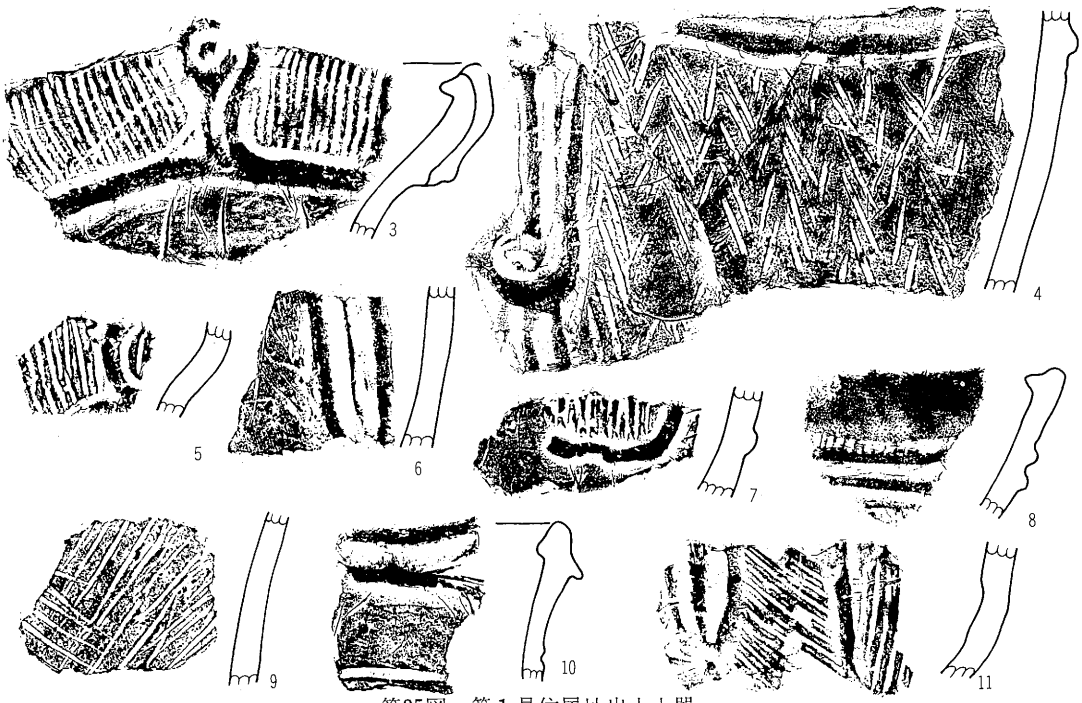
本址の出土状態は、検出段階では、土器片や石鏃が少数出土した。完形、半完形品の出土層は20cm程掘り下げたあたりであった(第28図)。遺物は、深鉢が大半を占め、中でも、頸部から胴部にかけてくびれ、胴部が膨らんだ器形が多い。時期は、曽利Ⅱ～Ⅲに渡ると思われる。



器　形／甕
胎　土／粗，長石を多く含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／



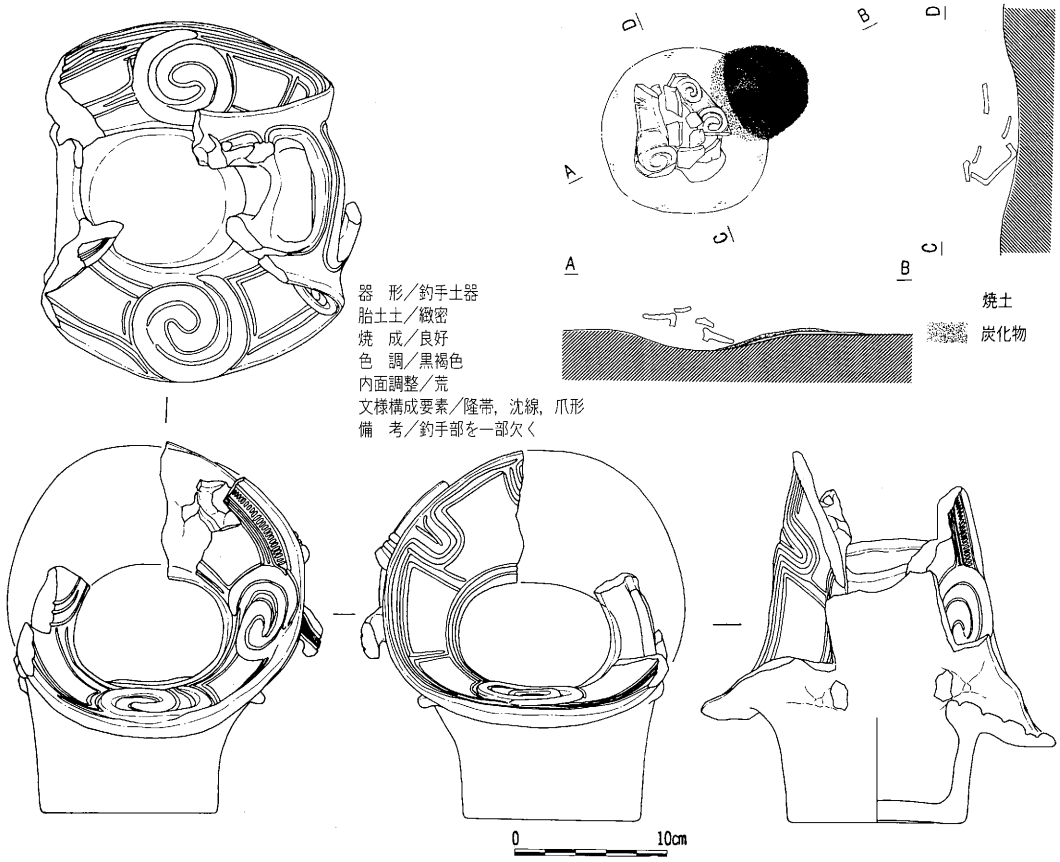
器形／深鉢
胎　土／細
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／表面に炭化物付着



第25図　第１号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
3	１号住居	深　鉢	口　縁	隆帯・沈線・小突起	ナ　デ	細粒	
4	〃	甕	胴上半	隆帯・沈線	粗	〃	
5	〃	深　鉢	口　縁	〃　〃	ナ　デ	〃	
6	〃	〃	胴	〃　〃	研　磨	〃	
7	〃	〃	胴下半	〃　〃	粗	〃	
8	〃	〃	口　縁	〃　刺突	〃	砂粒	外面スス付着
9	〃	〃	胴	沈線	ナ　デ	細粒	
10	〃	〃	口　縁	隆帯・沈線	研　磨	砂粒	
11	〃	〃	胴	〃　〃	〃	細粒	



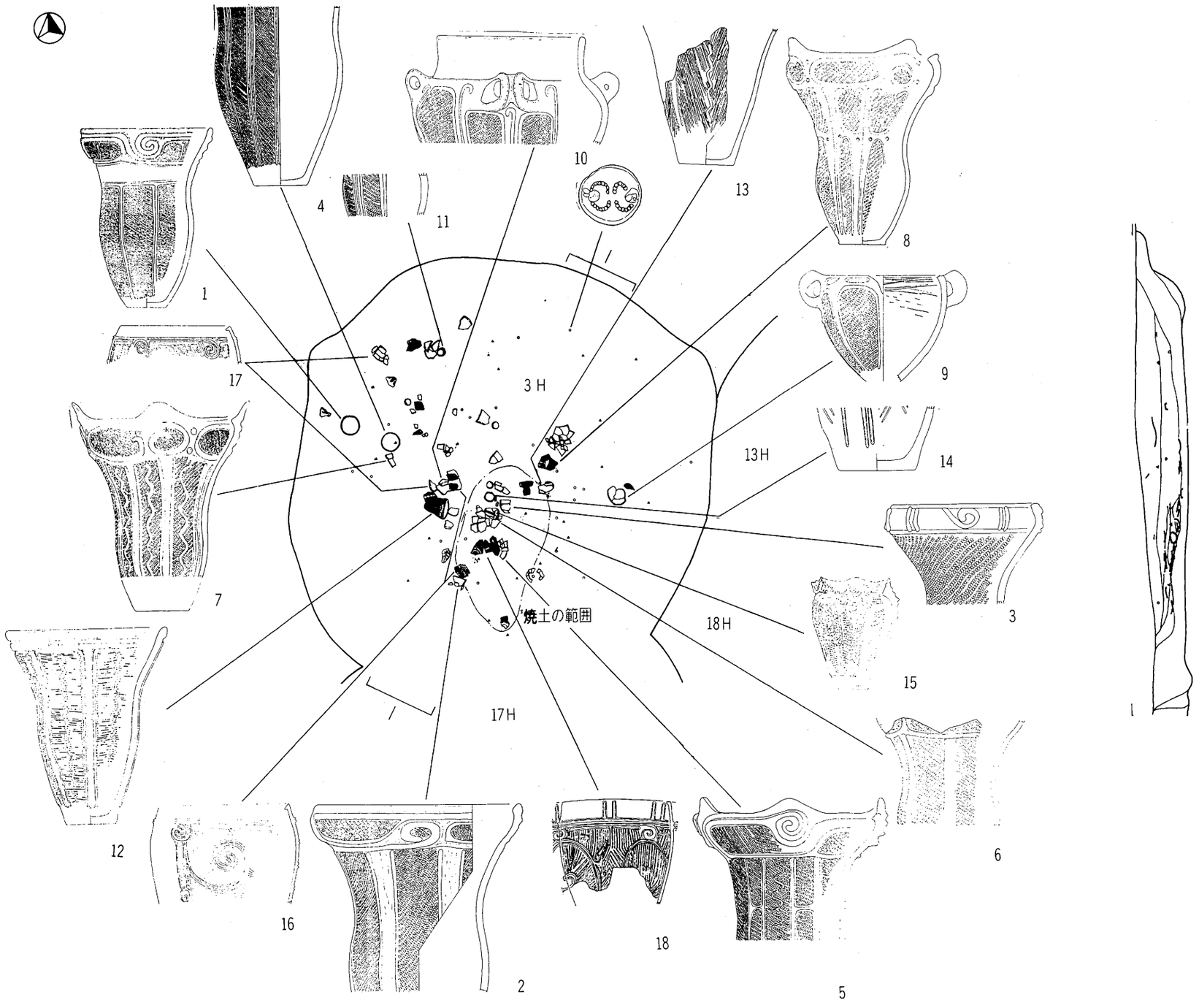
第26図　第２号住居址出土釣手土器

８は、本址土器の典型的な器形の深鉢で、全体の３分の１程が出土した。沈線と縄文を主体とし、刺突文が特徴的な文様構成である。９は、縄文主体の把手付きの鉢である。内面上部には、研磨痕がある。床面上10cm程から全体の３分の１程が垂直ぎみに出土した。４は、底部だけが出土し、器形は判定しにくい。隆帯と綾杉状の沈線が施されている。暗褐色で、胎土は、粗粒な粒が多く、最大径８㎜の礫を含んでいる。焼成悪い。３は、胴部全体に縄文が施され、口縁には、隆帯が施されている。器形は、深鉢で、器厚は、0.5cm～1.0cmを示す。15は、床面上９cm程から水平位に焼土直下から、完形状態で出土。器高は、21cmで、本址遺物の中ではやや小さい。縄文と沈線による渦巻き文が全体に施されている。６は、床面上13～15cmから胴部の３分の１程が出土した。縄文と沈線、そして、頸部に隆帯が施されている。５は、横につぶれた状態で、焼土の上７～20cmから口縁と胴部の一部が出土。18は、口縁部が伏せた状態で、炉の南西に床面に５cmほどくい込んで出土。その内部の床面上には、焼土が見られた。また、胴部の一部分は、床面上15～16cmから出土した。唐草文様が全体に施され、口径34cmであり、本址では、大きめの土器である。２は、焼土の下３cmから重なって出土。16は、土器片が散在しており、床面上20～30cmに、１m程離れて出土。口縁部は、欠損し、胴部の一部が残存している。12は、床面上10cmから

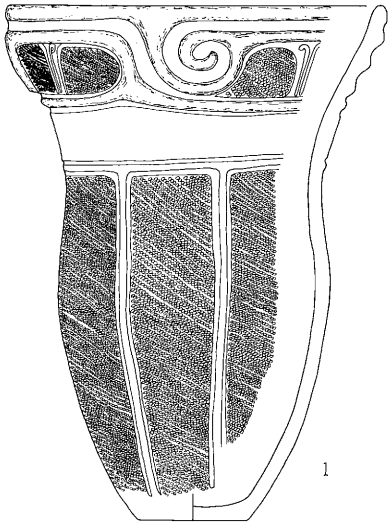
第27図　第２号住居址出土土器

縄文土器観察表

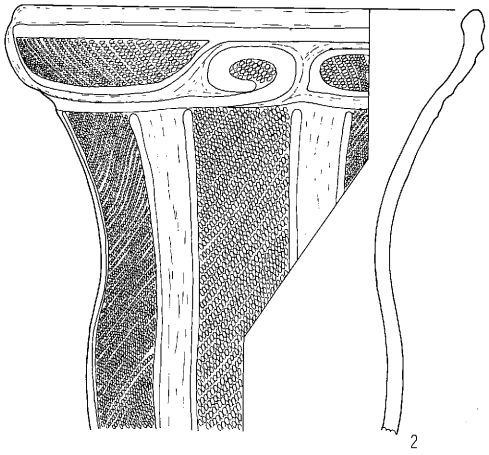
番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	２号住居	深鉢	口縁	隆帯・沈線	研磨	細粒	
2	〃	〃	胴	〃　〃　刺突	粗	砂粒	
3	〃	〃	胴上半	〃　〃　〃	ナデ	細粒	
4	〃	〃	胴	〃　〃　〃	〃	〃	３と同一個体
5	〃	〃	胴上半	〃　〃　〃	粗	砂粒	
6	〃	〃	胴	〃　〃　〃	ナデ	細粒	
7	〃	〃	〃	〃　〃　〃	粗	〃	
8	〃	〃	口縁	隆帯	研磨	〃	
9	〃	〃	〃	沈線	ナデ	砂粒	
10	〃	〃	〃	〃	粗	〃	
11	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線	ナデ	細粒	
12	〃	〃	口頸	隆帯	〃	砂粒	
13	〃	〃	胴	洗線	研磨	細粒	
14	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線	〃	〃	
15	〃	〃	胴下半	〃　〃	ナデ	〃	
16	〃	〃	胴	沈線・縄文	〃	砂粒	外面焼付着
17	〃	〃	口縁	〃　〃	〃	〃	〃
18	〃	〃	胴	〃　〃	研磨	〃	
19	〃	〃	口縁	〃　〃	ナデ	細粒	
20	〃	浅鉢	口縁	無文	研磨	〃	



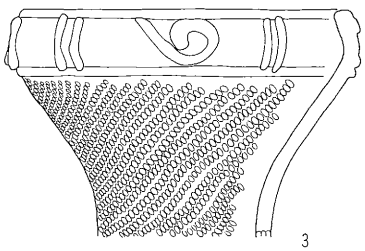
第28図　第３号住居址土器出土状態図



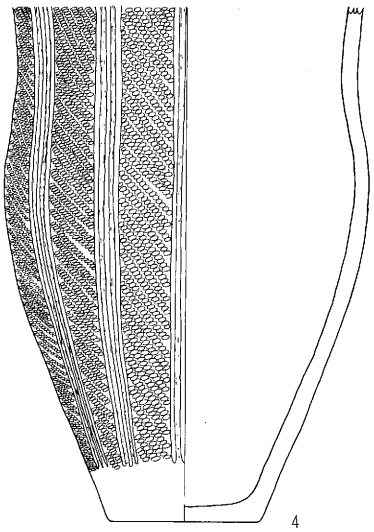
器　形／深鉢
胎　土／粗，礫を含む
焼　成／良好，堅固
色　調／褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／４単位



器　形／深鉢
胎　土／粒，長石多く含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／底部なし



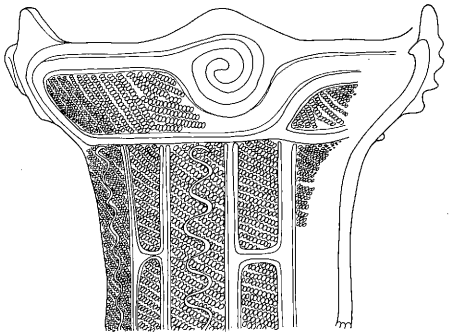
器形形／深鉢
胎土土／粗，長石を含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，縄文
備　考／底部なし



器　形／深鉢
胎　土／緻密
炎　成／良好　焼
色　調／暗褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／沈線，縄文
備　考／口縁部なし

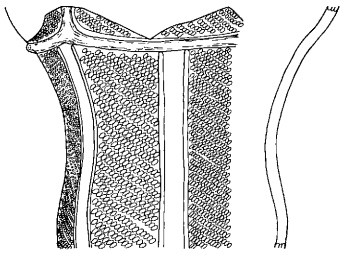
0　10cm

第29図　第３号住居址出土土器(1)



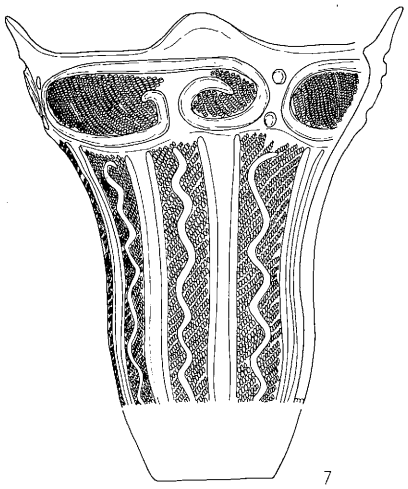
5

器　形／深鉢
胎　土／粗，長石を含む
色　調／やや良好
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／底部なし，４単位の波状口縁



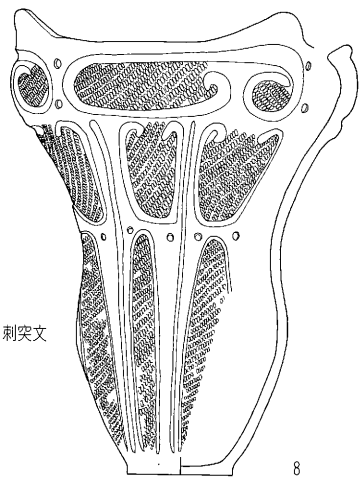
6

器　形／深鉢
胎　土／緻密，砂を僅かに含む
焼　成／やや良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／陰帯，沈線，縄文
備　考／



7

器　形／深鉢
胎　土／
焼　成／良好
色　調／暗褐色 緑
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，単縄文
備　考／底部なし，４単位の波状口縁

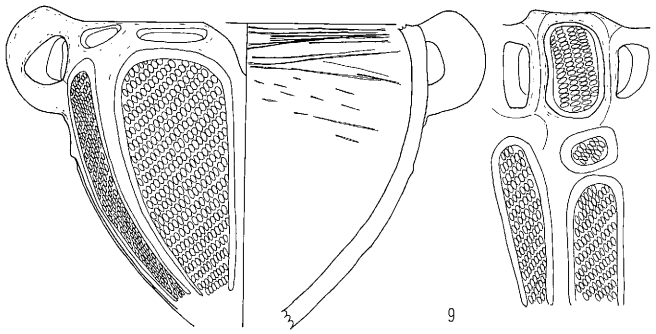


8

器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／黒褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文，刺突文
備　考／４単位の波状口縁

0　10cm

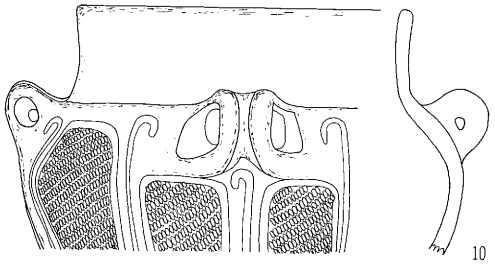
第30図　第３号住居址出土土器(2)



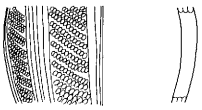
9

器　形／甕
胎　土／粗，長石を含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／沈線，縄文
備　考／2単位の耳

器　形／甕
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／黒褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／底部なし，2単位の耳

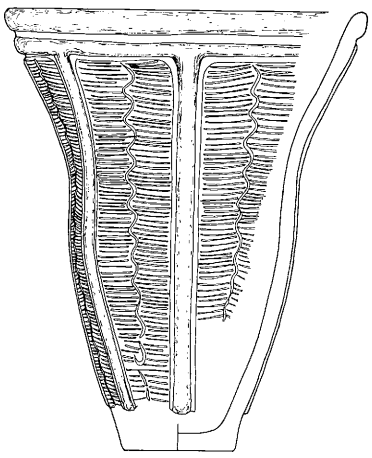


10



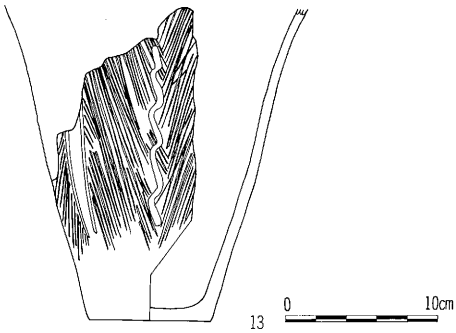
11

器形形／深鉢
胎　土／粗
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／荒
文様構成要素／沈線，縄文
備　考／胴部のみ



12

器形形／深鉢
胎　土／粗，砂を含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／沈線
備　考／口縁部欠除，内面底部にスス付着

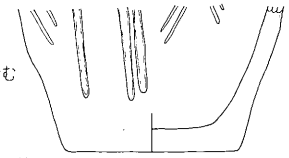


13

0　10cm

器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好堅固
色　調／黒褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／8単位

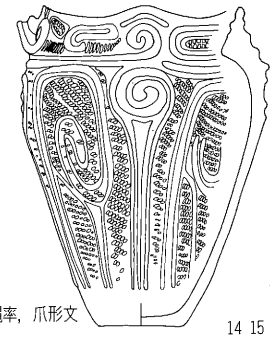
第31図　第3号住居址出土土器(3)



器　形／深鉢
胎　土／粗，小礫を含む
焼　成／不良
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし

14

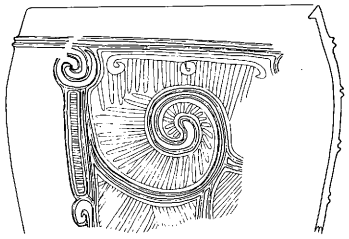
0　10cm



器　形／甕
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，縄率，爪形文
備　考／2単位

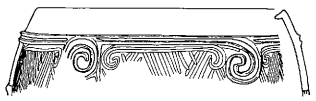
14 15

器形形／甕
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし

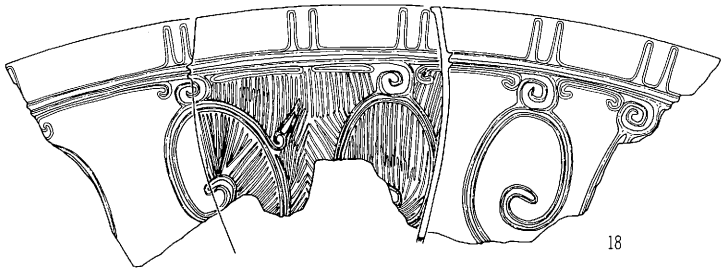


16

器　形／甕
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／やや不良
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／口縁部のみ



17

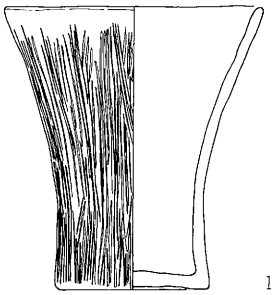


18

器　形／甕
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／やや良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし

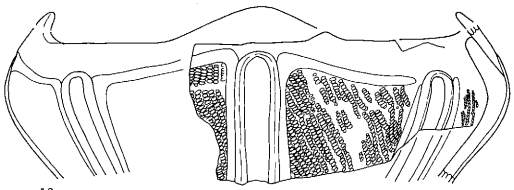
0　20cm

第32図　第3号住居址出土土器(4)



器　形／深鉢
胎　土／粗，小礫を含む
焼　成／やや良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／竹管状工具による条線
備　考／

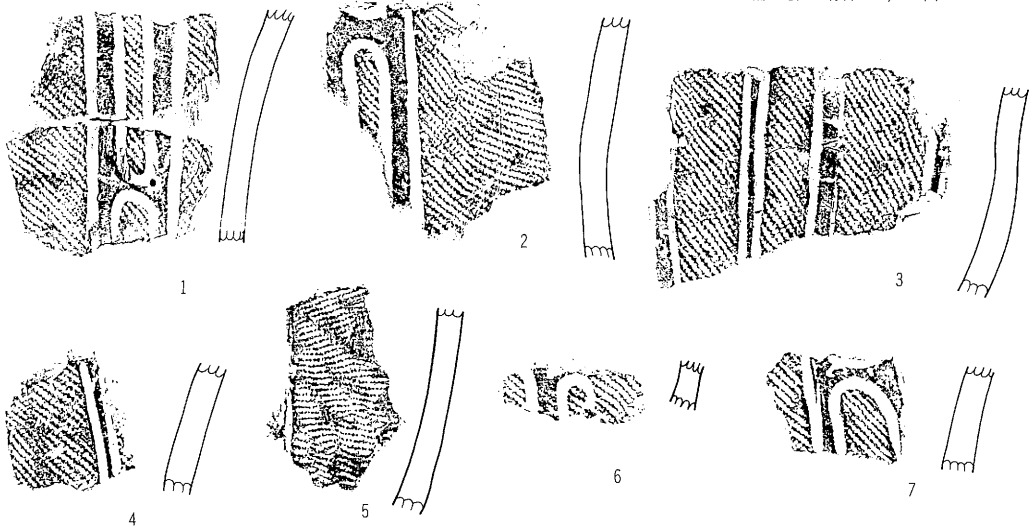
1



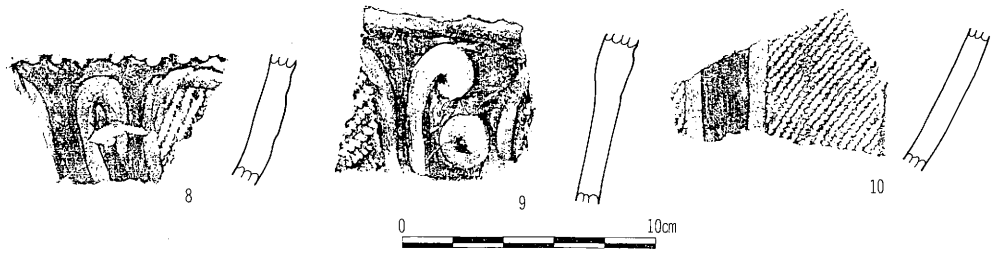
0　10cm

器　形／甕
胎　土／粗
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／口縁弁のみ，４単位

2



1　2　3　4　5　6　7



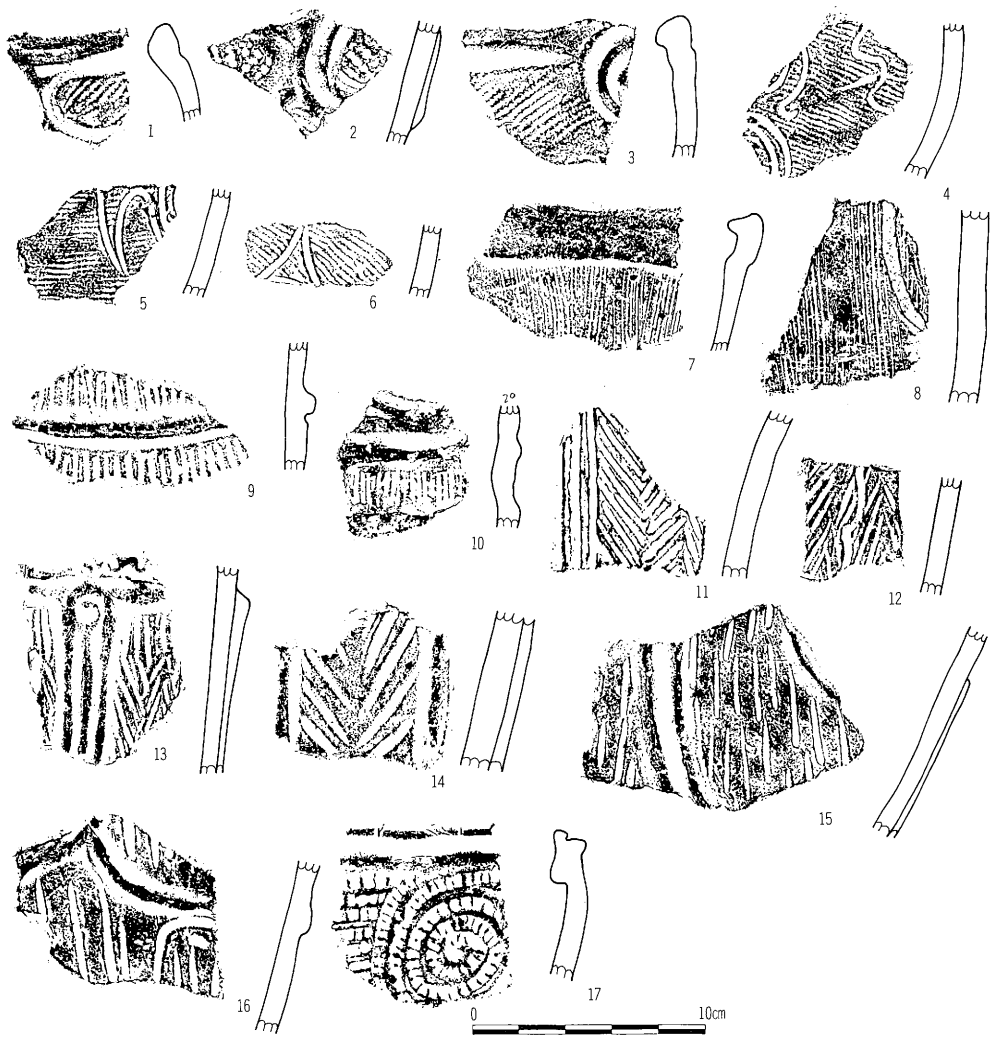
8　9　10

0　10cm

第33図　第４号住居址出土土器(1)

縄文土器観察表

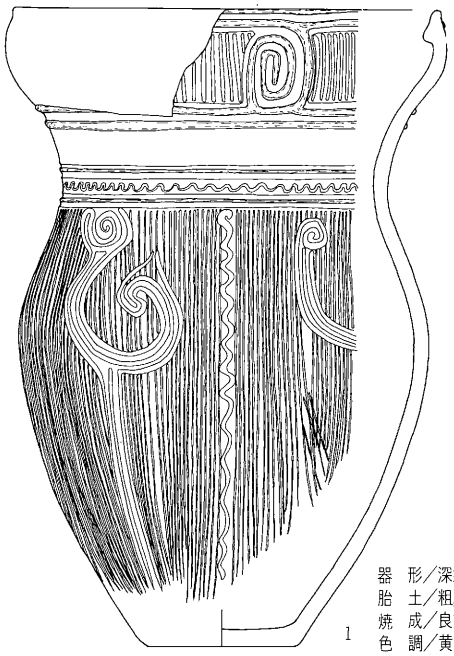
番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	４号住居	深　鉢	胴	沈線・縄文	研　磨	砂　粒	１～７まで同一個体
2	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
4	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
5	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
7	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
8	〃	〃	胴上半	〃　〃	〃	細　粒	
9	〃	〃	口縁下	〃　〃	〃	〃	
10	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	



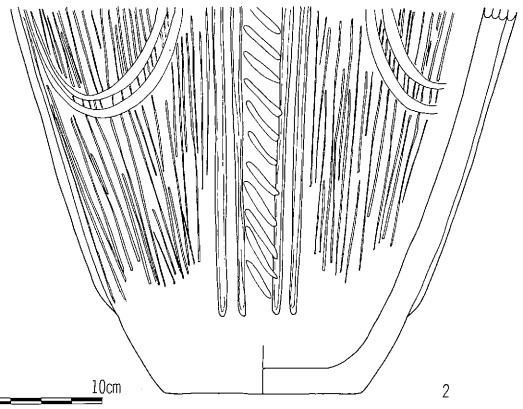
第34図　第４号住居址出土土器(2)

縄 文 土 器 観 察 表

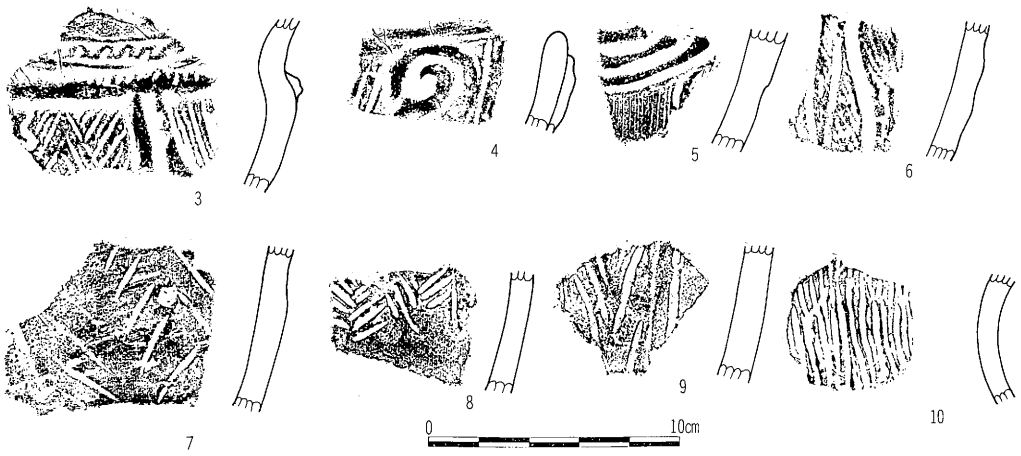
番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	４号住居	深　鉢	口　縁	沈線・縄文	研　磨	砂　粒	
2	〃	〃	〃	隆帯・縄文	ナ　デ	細　粒	
3	〃	〃	〃	〃　〃	〃	砂　粒	外面炭化物付着
4	〃	〃	胴	沈線・縄文	粗	〃	
5	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	５と同一個体
7	〃	〃	口　縁	沈線	ナ　デ	細　粒	
8	〃	〃	胴	〃	粗	砂　粒	
9	〃	〃	口　縁	隆帯・沈線・刺突	研　磨	細　粒	
10	〃	〃	口縁下	隆帯・沈線	〃	〃	
11	〃	〃	胴	沈線	ナ　デ	砂　粒	
12	〃	〃	〃	〃		細　粒	内面炭化物付着
13	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線・刺突	ナ　デ	砂　粒	
14	〃	〃	胴	隆帯・沈線	〃	〃	
15	〃	〃	〃	〃　〃	粗	〃	
16	〃	〃	口縁下	〃　〃	研　磨	〃	
17	〃	〃	口　縁	〃　刺突	〃	細　粒	



器　形／深鉢
胎　土／粗，長石を多く含む
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，半載竹管文
備　考／



器　形／深鉢
胎　土／粗，長石を多く含む
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，条線
備　考／口縁なし



第35図　第5号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
3	5号住居	甕	胴上半	隆帯・沈線・刺突	ナ　デ	細　粒	
4	〃	深　鉢	口　縁	〃　〃	粗	〃	
5	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	沈線	〃	砂　粒	内面炭化物付着
7	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	〃	
8	〃	〃	胴下半	〃	粗	〃	内面炭化物付着
9	〃	〃	胴	〃	研　磨	〃	
10	〃	〃	胴上半	〃	〃	細　粒	

横たわって、完形品のまま出土した。7は、床面上10cm程から、口縁と胴部が出土。表面は、内外とも光沢をもつ。17は、口縁部が出土したが、土器片が2mほど離れて出土、いずれも床面上12cm程から出土している。埋甕は、2個体出土しており、内側の埋甕4は、床高下3～4cmから、貼り床直下より、口縁部が欠けて出土した。内部覆土は、3層に分かれた。外側1は、口縁が、床に接して出土した。内部覆土は、ローム粒を含む褐色土であった。時期的には、内側は、曽利IV、外側は曽利IIIである。11は床面上15～17cmから、一周した胴部の一部が出土。10は、床面上20cm程から、口縁の一部が出土。13は、床面上6～8cmから、底部と胴部が全体の3分の1程が横たわって出土した。

本址の土器は、埋甕以外は、その大半が第2層直上より出土しており、また、本址中央南寄りに集中して出土している。（三村　洋）

(4)　第4号住居址（第33～34図）

本址では、埋甕以外全形をうかがうことのできる土器は出土しておらず、土器の出土は少なかった。埋甕に使用されていた1は、小形の深鉢形土器で、屈折もせず単純に開く器形を呈する。文様は口縁部を除き、全面にわたって条線で充填されている。2は、深鉢形土器の胴上半部の破片で、波状口縁を有し、ゆるく内弯する口辺部を呈する。文様は4単位で、微隆帯によって区画された内を、縄文を充填している。このほか拓本によって示した1～10は沈線によって区画された内部に縄文を有するもので、いわゆる磨消縄文となっている。これらの土器は、曽利V式に比定されるものである。

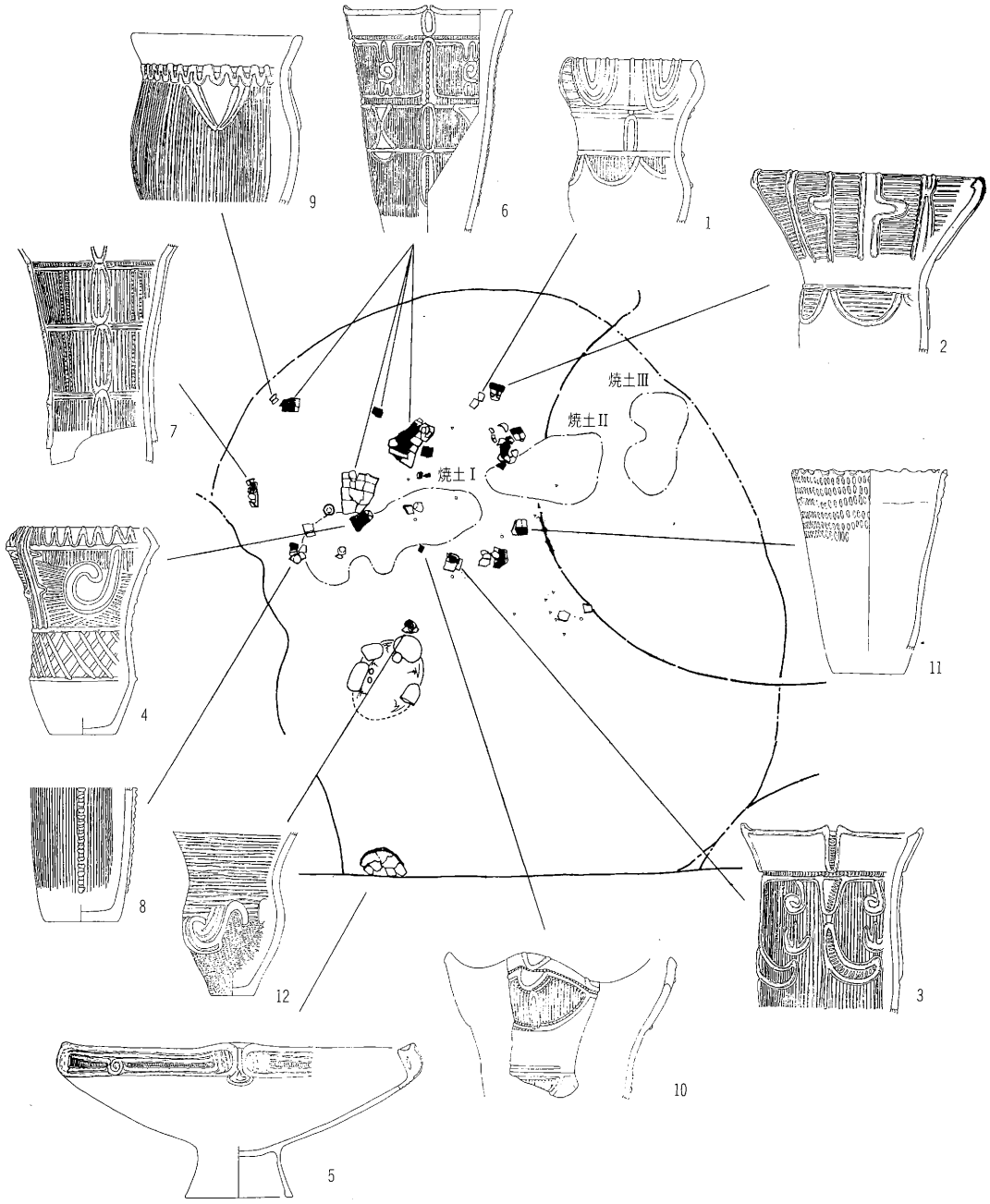
(5)　第5号住居址（第35図）

本址からは、すでに表土削平の際に、2個体の深鉢形土器の胴下半が、覆土内に、正位で浮く状態で出土した。1個体については図示し得なかったが、片方の2は、器面を垂下する隆帯と、沈線、条線によって飾られる大形の深鉢である。本址では多量の炭化材の出土をみており、焼失住居と予想されるが、2号址と同様に土器の出土は少量であり、覆土内出土の土器は、2固体の深鉢形土器胴下半を除いて拓本で図示した土器片などが少量存在したのみであった。

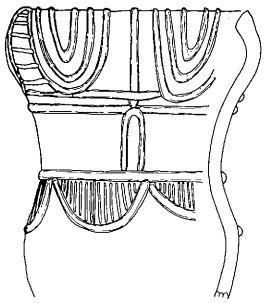
ところで、本址南側の貼床部分からは、埋甕が検出されている。口縁部をわずかに欠損し、正位で埋設されるこの埋甕1は、埋土に凹石、黒曜石チップの存在が認められた。この深鉢形土器は、天竜川流域の影響がみられ、体部文様は平行沈線が主体をなす。埋甕からは、本址は曽利II器の住居址だと推察される。

(6)　第6号住居址（第36～39図）

本址では、3号址、10号址とともに多量の完形、半完形土器の出土をみている。遺物はほとんどが床面より10～20cm程浮いて存在しており、3号址のような明瞭な土層堆積は認められなかったものの、住居址埋没過程のある時期に一括投棄されたものと推察される。また遺物は竪穴内東側より集中して出土し、西端で浅鉢形土器の出土をみる他は、いずれも焼土I、IIの周辺及び下面から出土している。（第36図）

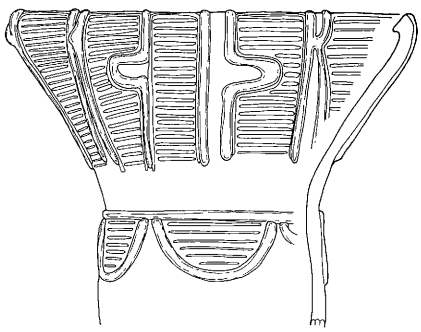


第36図　第６号住居址土器状態図



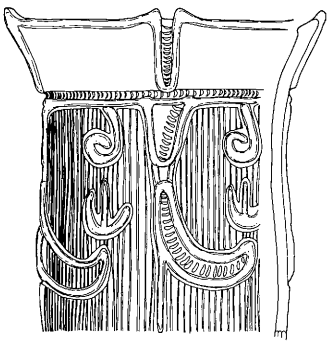
1

器　形／深鉢
胎　土／粗，小礫を含む
焼　成／不良
色　調／赤褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし



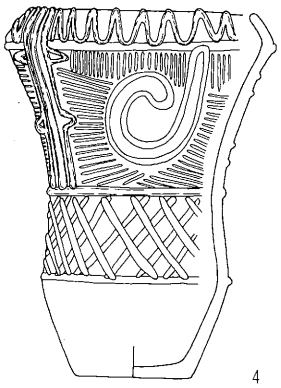
2

器　形／深鉢
胎　土／粗，小礫を含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし



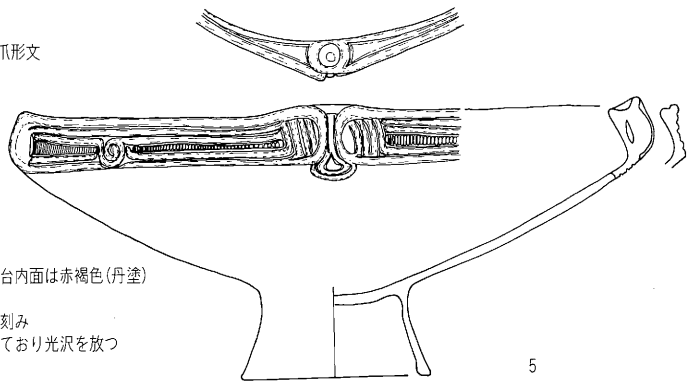
3

器　形／深鉢
胎　土／粗，砂を含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線，爪形文
備　考／底部なし，4単位



4

器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／

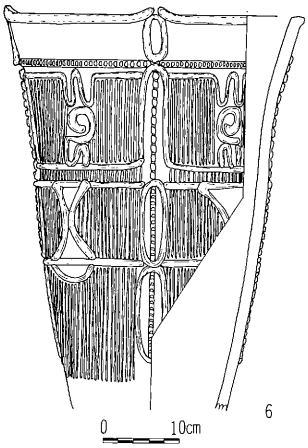


5

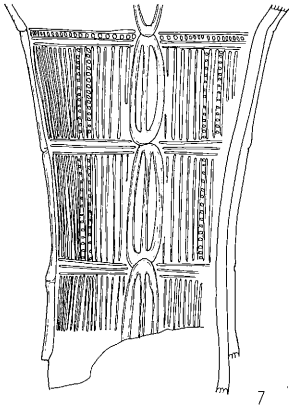
器　形／浅鉢
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色，一部黒褐色，高台内面は赤褐色(丹塗)
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線，沈線刻み
備　考／表面には化粧土が塗られており光沢を放つ

0　10cm

第37図　第6号住居址出土土器(1)

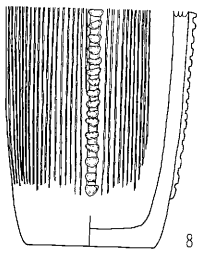


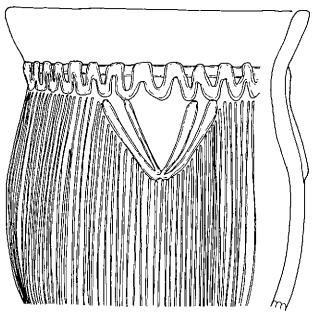
器　形／深鉢
胎　土／粗，黒・金雲母を多く含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，半蔵竹管文
備　考／底部なし，４単位

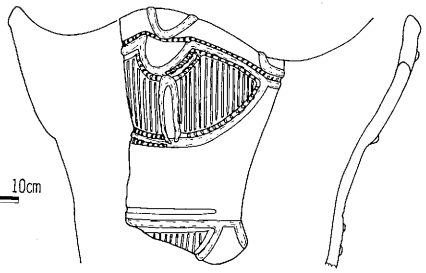


器　形／深鉢
胎　土／粗
焼　成／不良
色　調／暗褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線，半蔵竹管文
備　考／胴部のみ

器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／半蔵竹管文，隆帯
備　考／口縁部なし



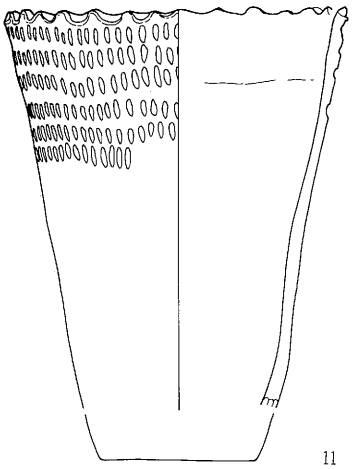




器　形／深鉢
胎　土／砂を含むが緻密
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし，口縁部表面にスス付着

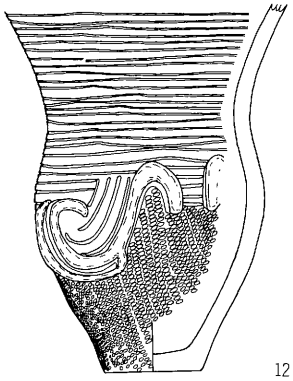
器　形／深鉢
胎　土／粗，長石を多く含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，半蔵竹管文
備　考／底部なし，４単位

第38図　第６号住居址出土土器(2)



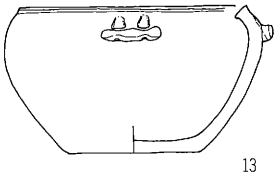
器　形／深鉢
胎　土／粗，長石，石英，雲母を含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／荒
文様構成要素／棒状工具による刺突
備　考／底部なし，口縁部表面に炭化物付着

11



12

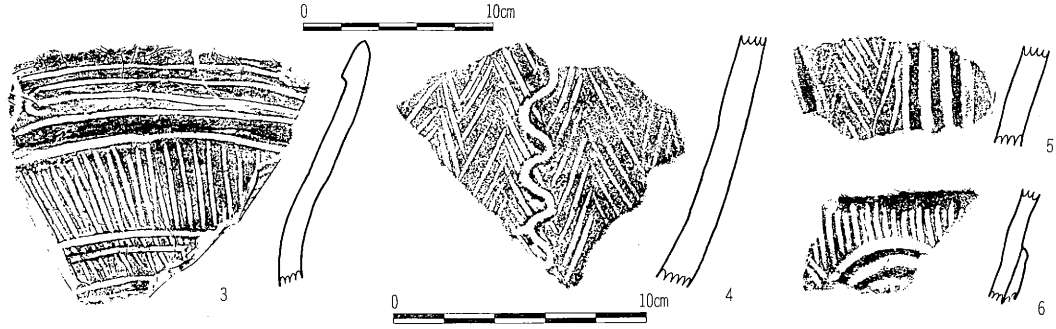
器　形／深鉢
胎　土／粗，砂，金雲母を多く含む
焼　成／不良
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／口縁部なし，表面風化



13

遺　構／第７号住居
器　形／小型鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／暗褐色，部分的に黒色
内面構整／研磨
交様構成要素／無文

第39図　第６号，７号住居址出土土器



第40図　第６号，７号住居址出土土器

縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
3	５号住居	深鉢	口縁	沈線	ナデ	細粒	
4	〃	〃	胴	〃	〃	砂粒	
5	〃	〃	胴下半	隆帯・沈線	研磨	細粒	
6	〃	〃	胴	〃　〃	ナデ	〃	

縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	７号住居	深鉢	胴	隆帯・沈線	ナデ	砂粒	２・３と同一個体
2	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
4	〃	〃	胴下半	〃　〃	粗	〃	
5	〃	壺	口縁	〃　〃	ナデ	細粒	
6	〃	深鉢	〃	隆帯	〃	〃	

4は器高24cmを計る。深鉢形土器の完形品であり、焼土Ⅰ直下から横倒しの状態で出土した。器面は口縁部と胴上半、胴下半、底部の4つの文様帯に分かれ、底部に無文帯を残す他は、すべて隆帯と沈線で飾られる。6はわずかに底部を欠くが、残存器高53cmを計る深鉢形土器の優品であり、今回の調査で出土した土器の中では最大である。なお、この大形深鉢は焼土Ⅰ東側において、大きく二面に分割された状態で出土したが、底部の存在は認められなかった。文様は、竹管文による縦の平口沈線と隆帯によって装飾され、一部口縁下の隆帯には刻目が施される。文様構成は一応4単位を基本とするが、胴上半部の屈曲する隆帯の方向には注意されたい。また、11は、底部から口縁にかけ直線的に外開する深鉢形土器であり、口縁部は押圧によって細かな波状を呈する。胴上半は、斜め上方向への刺突によって列点文が施されており、平面的な器面にアクセントを持たせている。なおこの土器の胴上半部外面及び胴下半部内面には、黒色炭化物の付着がみられた。本址より出土をみた特徴的な土器としては、他に浅鉢形土器5が挙げられよう。最大径41cmを計るこの浅鉢は、高台との接合部から直線的に外開し、口縁部で内側に、くの字型に屈曲する。また文様としては、四方に把手が付けられ、口縁部は、竹管による沈線及び隆帯で渦巻文、直線文などが施文される。なお器面は、黒褐色または赤褐色を呈し黒色塗料、赤色顔料の塗付が認められ、内外面とも一面に研磨が施されている。

本址から出土した土器を概観すれば、平行沈線と隆帯による文様構成を示す土器が主体をなしていることがわかる。2にみられる櫛形文のように、一部井戸尻的な要素を残す土器も存在するがほとんどが、曽利Ⅰ式に比定される土器であると言えよう。

(7) 第7号住居址（第39～41図）

本址は、東側で16号址、西側で8号址に大きく切られて存在する為、完形の小形鉢3の出土をみた他は、少量の土器片の存在が認められた程度である。小形鉢1は、北壁下の覆土内に、床面からやや浮く状態で出土した。器高7.6cm、最大径16.0cmを計り、器面は無文で、全面に丁寧な研磨が施される。また口縁下には一ケ所貼り付けの小突起が存在し、2孔が穿たれている。本遺跡出土の土器が深鉢を主体とする中で、このように小形鉢という特殊な器形の土器が、完形で出土したことは、7号址を考える上で重要であろう。

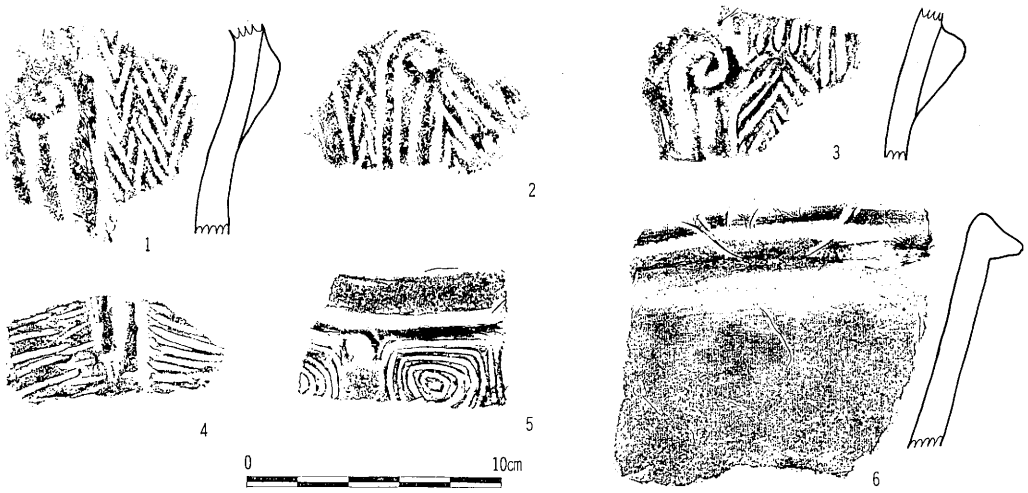
なお、本址は曽利Ⅱ期に属する住居址であると考えられる。

(8) 第8号住居址（第41～43図）

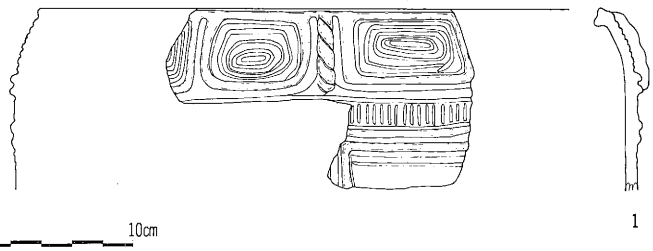
本址から出土した土器は比較的少なく、ほぼ完形の深鉢形土器3の他は、いずれも土器片として存在する。深鉢3はやや小型で器高23cmを計り、胴部施文は沈線と隆帯が主体となって構成され、口縁部は無文帯となって大きく外開する。他土器片も、沈線、隆帯を基本とする文様構成が大半を占めるが、拓本1には浅い刺文が施されており、類似する土器が、隣接する15号址からも出土している。これらの出土土器は、曽利Ⅱ式を主体とすると言える。

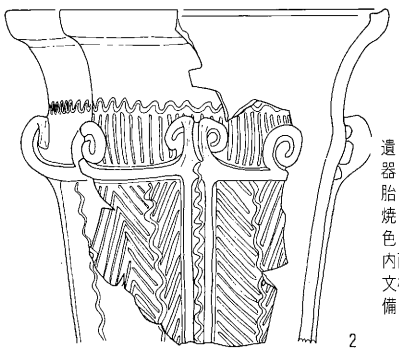
(9) 第9号住居址（第45図）

本址からは、炉内より底部をわずかに欠く深鉢形土器1が出土したのみで、他は図化に耐えな

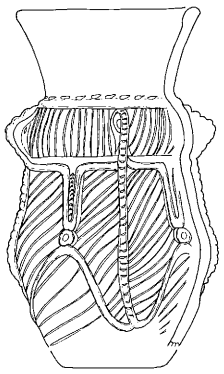


遺　構／第８号住居
器　形／深鉢
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線





遺　構／第８号住居
器　形／深鉢
胎　土／粗，長石，雲母を含む
焼　成／やや良好
色　調／暗褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし，
　　内面胴部にスス付着

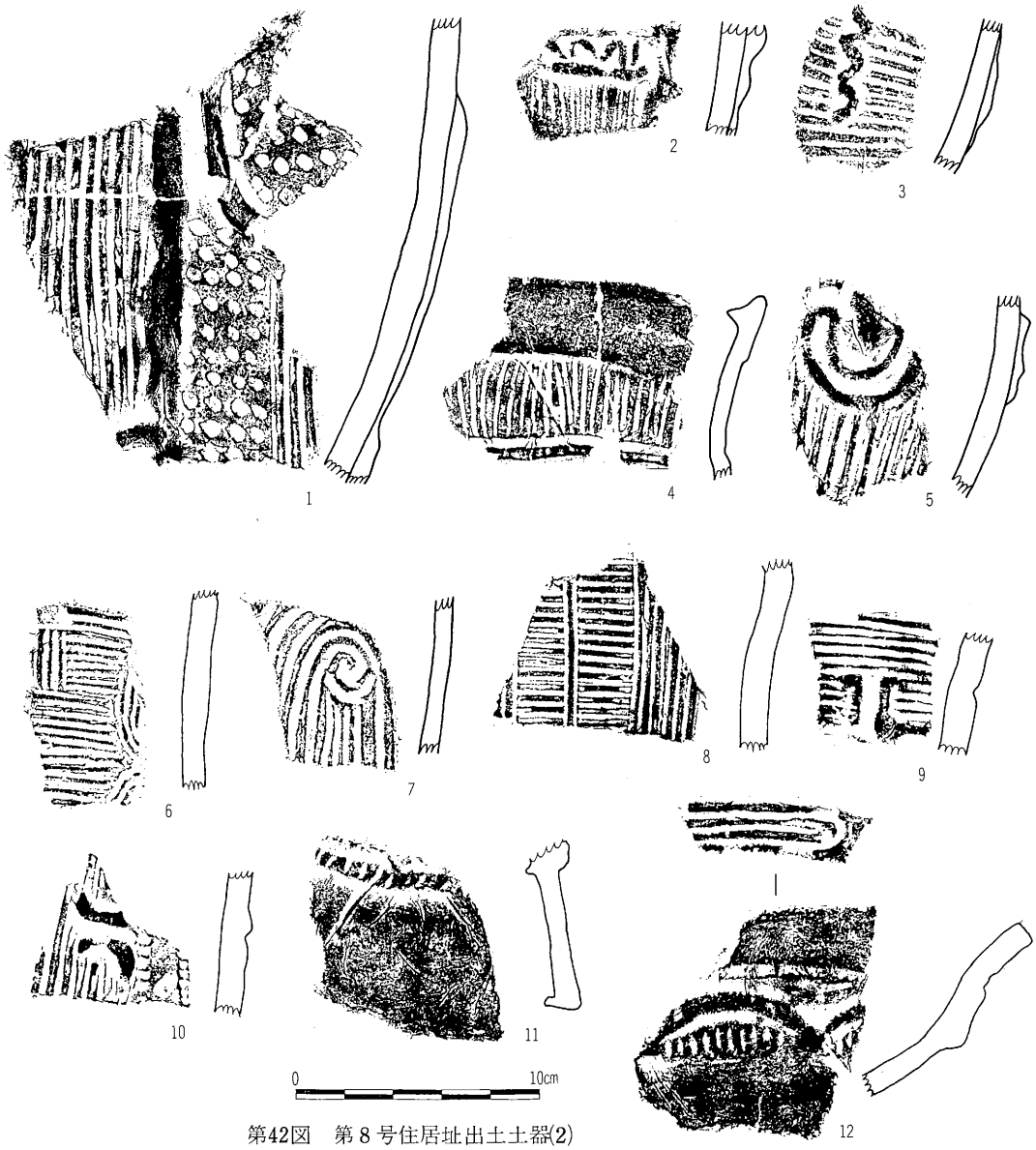


遺構／第８号住居
器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，
　　爪形文

第41図　第７号，８号住居址出土土器

縄文土器観察表

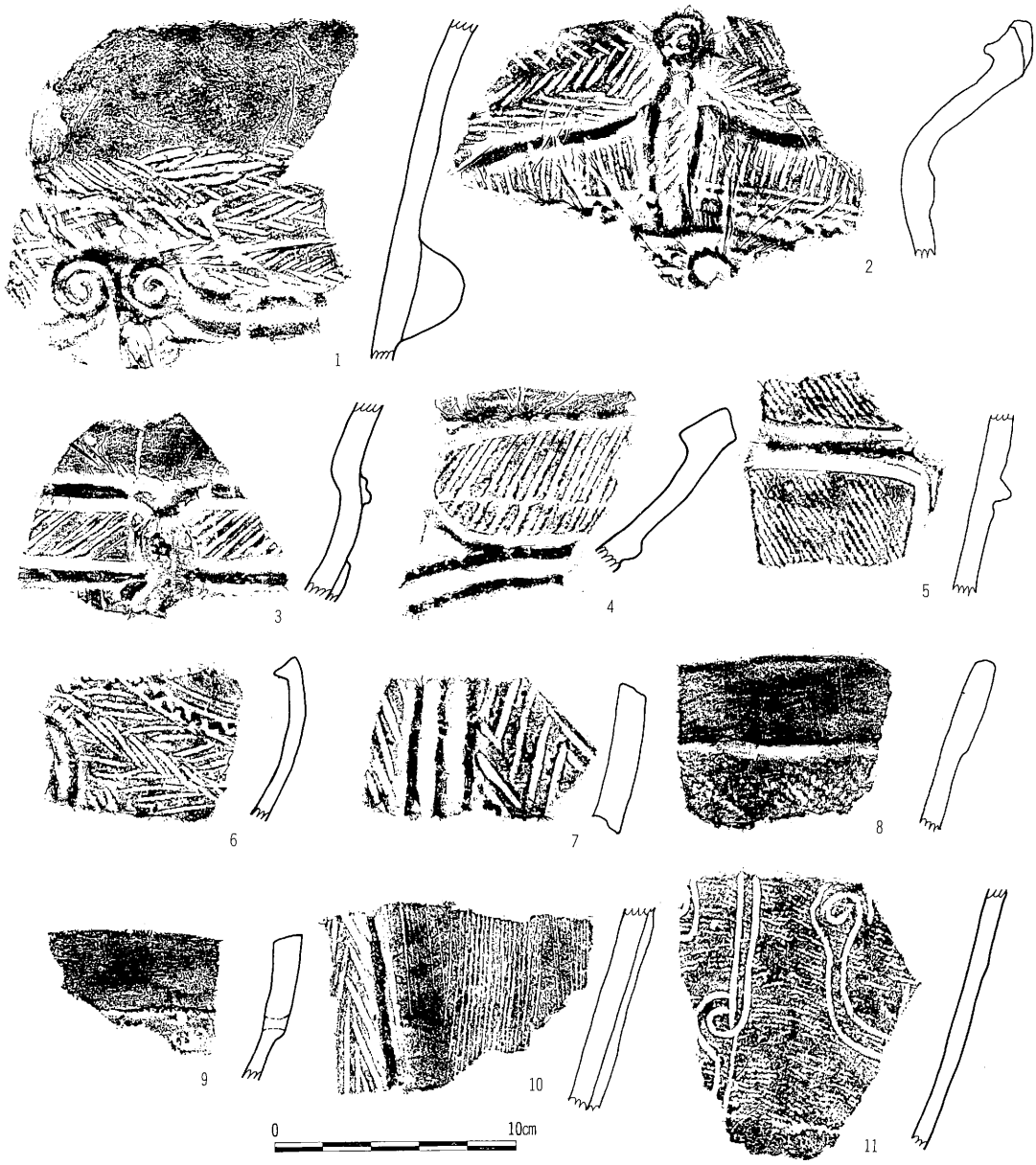
番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	８号住居	深　鉢	胴	隆帯・沈線・刺突	ナ　デ	砂　粒	
2	〃	〃	口　頸	〃　〃	粗	〃	
3	〃	〃	胴	〃　〃	〃	細　粒	
4	〃	〃	口　縁	沈線	ナ　デ	〃	
5	〃	〃	胴	隆帯・沈線	粗	砂　粒	
6	〃	〃	〃	沈線	ナ　デ	細　粒	
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	６と同一個体
9	〃	〃	〃	隆帯・沈線	粗	〃	10と同一個体
10	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
11	〃	台　付	台	〃　刺突	ナ　デ	〃	
12	〃	浅　鉢	口　縁	〃　沈線・刺突	研　磨	砂　粒	



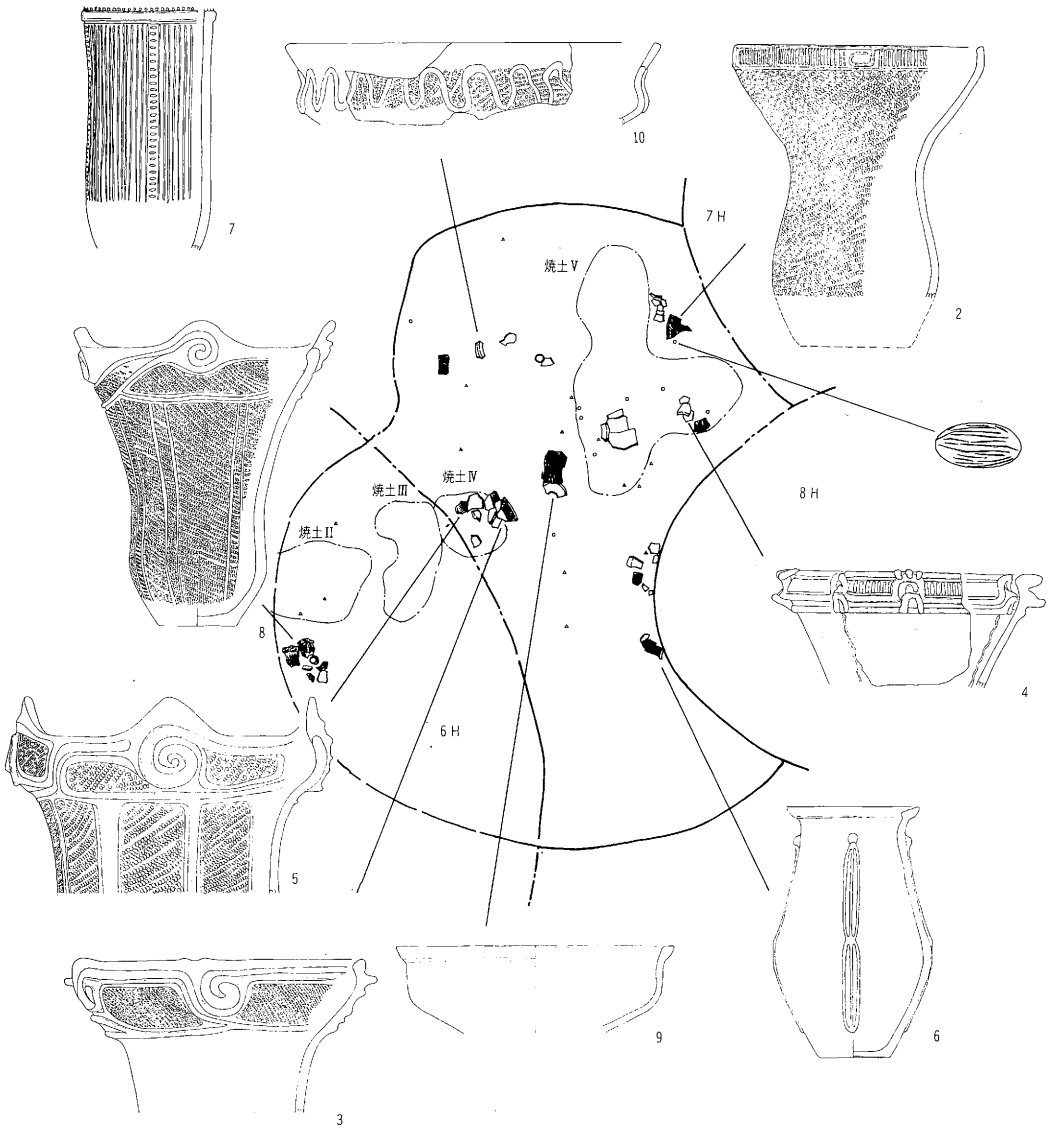
第42図　第８号住居址出土土器(2)

縄文土器観察表

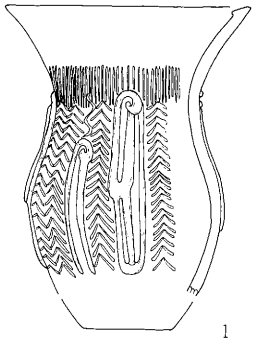
番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	８号住居	深　鉢	口　頸	隆帯・沈線・小突起	粗	細　粒	
2	〃	〃	口　縁	〃　〃　刺突	研　磨	〃	
3	〃	〃	胴上半	〃　〃　〃	粗	砂　粒	
4	〃	浅　鉢	口　縁	〃　〃	ナ　デ	〃	口縁内沈線
5	〃	深　鉢	〃	〃　〃　縄文	研　磨	細　粒	
6	〃	甕	〃	沈線・刺突	ナ　デ	〃	
7	〃	深　鉢	胴	隆帯・沈線	〃	〃	
8	〃	〃	口　縁	縄文	〃	〃	
9	〃	〃	〃	無文	研　磨	〃	有孔鍔付(?)
10	〃	〃	胴下半	隆帯・沈線・条線	粗	砂　粒	
11	〃	〃	〃	沈線・縄文	ナ　デ	細　粒	内面炭化物付着



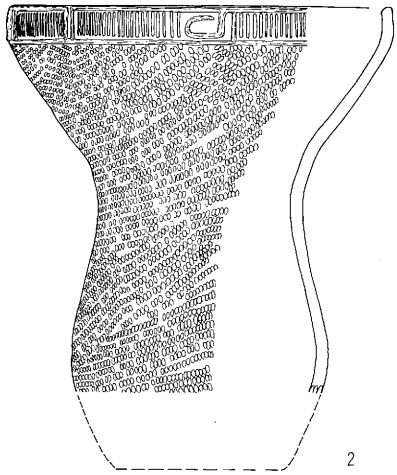
第43図　第８号住居址出土土器



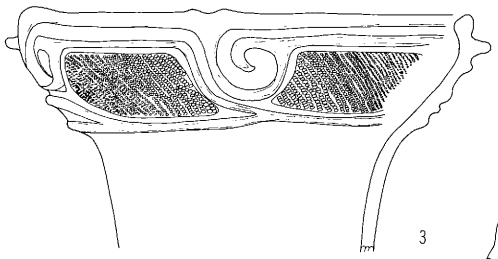
第44図　第10号住居址土器出土状態図



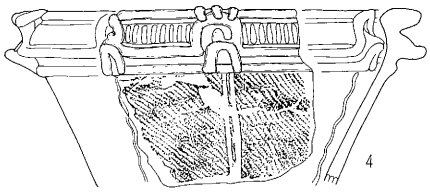
遺　構／第９号住居
器　形／深鉢
胎　土／粗，小礫を多量に含む
焼　成／不良
色　調／褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／底部なし



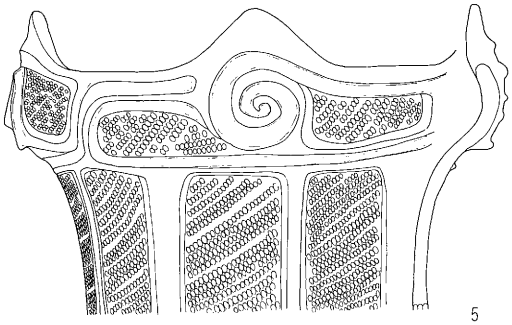
遺　構／第10号住居
器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／底部なし，４単位



遺　構／第10号住居
器　形／深鉢
胎　土／緻密
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／４単位 底部なし



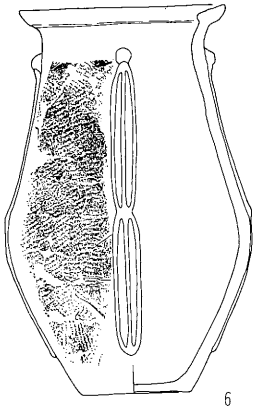
器　形／浅鉢
胎　土／緻密，白色砂，雲母を含む
焼　成／良好
色　調／茶褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／無文
備　考／底部なし



器　形／深鉢
胎　土／緻密，長石を含む
焼　成／良好
色　調／黒褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／底部なし，４単位の波状口縁

0　10cm

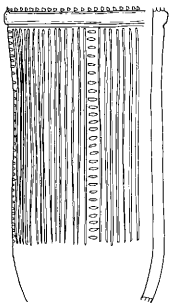
第45図　第９号，10号住居址出土土器



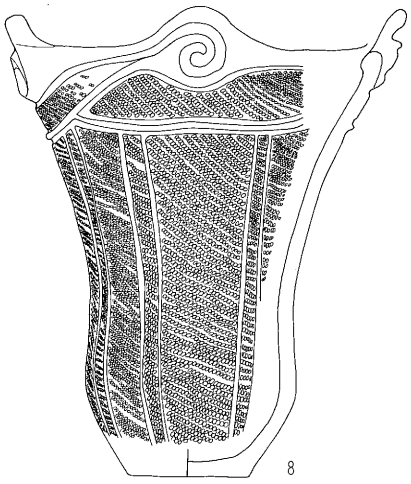
6

器　形／深鉢
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／黒褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，縄文
備　考／４単位，口縁部ス ス付着

器　形／深鉢
胎　土／粗，長石を含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，爪形文
備　考／４単位，底部なし

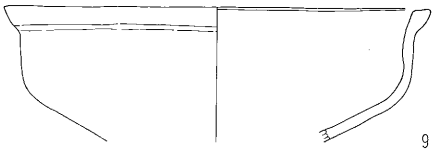


7



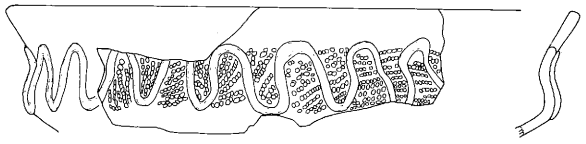
8

器　形／深鉢
胎　土／砂を多く含むが緻密
焼　成／良好
色　調／灰褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，縄文
備　考／４単位の波状口縁



9

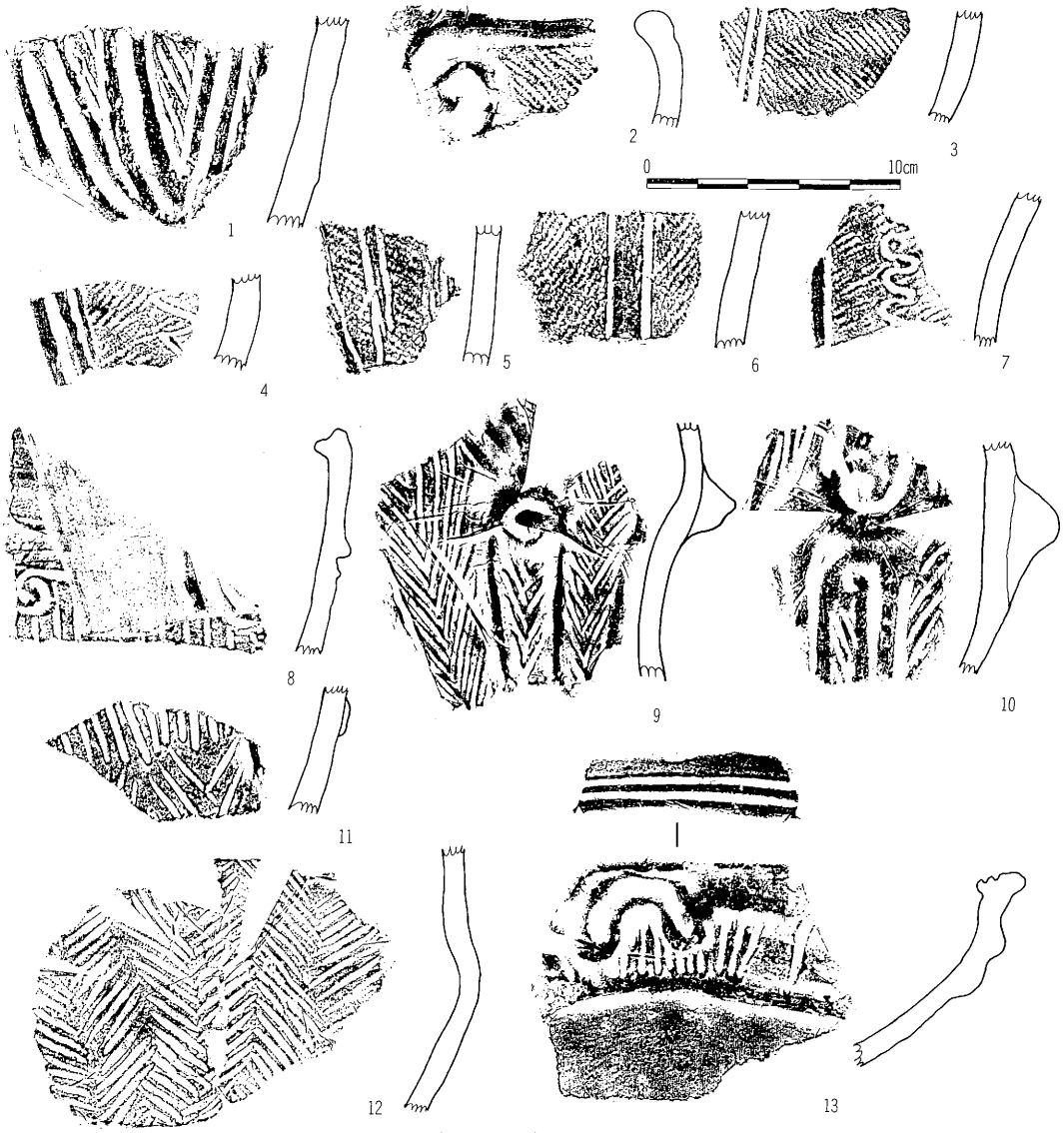
器　形／浅鉢
胎　土／粗
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／無文



10

器形／深鉢
胎　土／砂を多く含むが緻密
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，刺突文
備　考／口縁部のみ

第46図　第10号住居址出土土器



第47図　第10号住居址出土土器

縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	10号住居	深鉢	胴	隆帯・沈線	粗	砂粒	
2	〃	〃	口縁	〃　縄文	ナデ	〃	
3	〃	〃	胴下半	〃　〃	粗	細粒	
4	〃	〃	胴	〃　沈線・縄文	研磨	〃	
5	〃	〃	〃	沈線・縄文	ナデ	砂粒	
6	〃	〃	〃	〃　〃	粗	〃	
7	〃	〃	〃	隆帯・沈線・縄文	研磨	〃	
8	〃	甕	口縁	〃　〃	ナデ	〃	
9	〃	〃	胴	〃　〃	研磨	細粒	
10	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
11	〃	〃	〃	沈線	ナデ	砂粒	
12	〃	〃	〃	〃	ナデ	砂粒	輪積み痕
13	〃	浅鉢	口縁	隆帯・沈線	研磨	細粒	

い小破片のみであった。1は口縁が直線的に大きく開口する深鉢で、口縁下のくびれ部には、縦位の平行沈線が施される。また胴部は4単位でわらび手文が配されその間を綾杉文が埋めつくす。この深鉢から、本址は曽利II期に属する住居と推定される。

(10) 第10号住居址（第44～47図）

北に6号址と重複する本址では、6号址と同様、多量の完形、半完形土器の出土をみている。しかし、覆土がほぼ単一の層をなす本址では、6号址のように、遺物が床面から浮いて出土するという傾向は見られず、床直上から覆土上面まで遺物が散在するという状況を示した。なお、竪穴内西側で遺物の出土量が少ないことは、6号址と共通する現象である。

完形土器としては8が挙げられる。器高31cmを計るキャリパー型の退化した深鉢形土器であり、口縁部には隆帯による渦巻文が4単位配されている。渦巻文の単位間には隆帯によって横位の区画がなされており、また、胴部では2条の浅い縦位平行沈線が地文となって、器面全体に縄文が施される。なお、これと同系統の土器3、5が、焼土IVの内部からも出土している。2は頸部の中くびれから口縁に向かって大きく外開する深鉢形土器であり、口縁部文様帯は口縁と平行に区画され、隆帯と沈線によって4単位に文様が配される。そして胴部には一面に縄文が施される。おそらく4もこの深鉢と同様な器形が想定されよう。他に深鉢形土器としては6が典型例として挙げられる。⅓程を破損する此の深鉢形土器は、内外に膨らむ厚い口縁部を特徴として持つ。文様は4単位の縦位隆帯と縄文によって施されており、外面胴上半には、煤の付着が見られた。また、本址からは、2点の浅鉢形土器の出土をみている。10は口縁下を、波状の隆帯と刺突列点文によって施文してある。また9は無文であり器面には丁寧に研磨が施されているが、あるいは鉢形土器とも考えられよう。

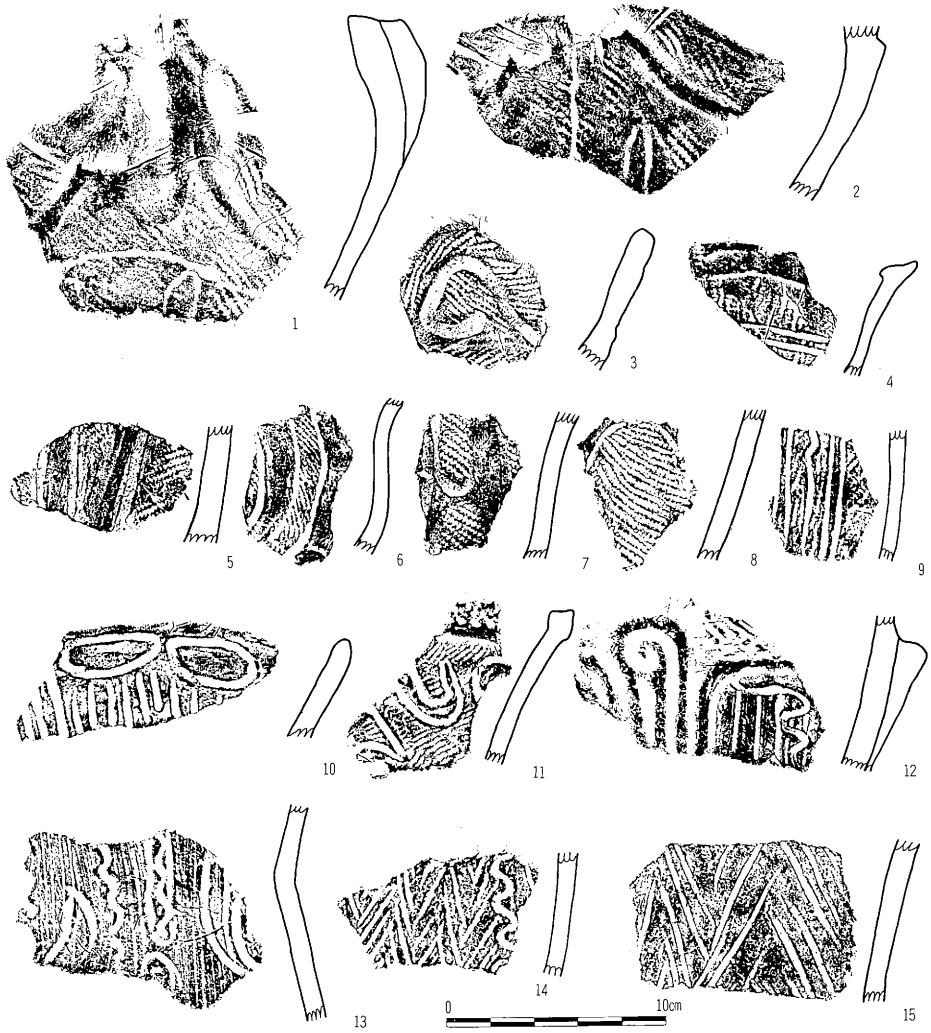
本址出土の遺物は縄文を施されるものが多く、時期としては曽利II式に比定されよう。

(11) 第11号住居址（第48、49図）

本址は西半分が破壊を受けており、土器の出土は少ない。主体をなすのは曽利V式の深鉢である。1、2は同一固体の波状口縁であり、微隆帯、沈線、縄文によって文様構成がなされる。3、4、5は沈線と縄文によって文様が施される。また5、6、7は磨消縄文が施されている。他にも若干土器片は存在したが、曽利I期のものが多く、流れ込みによるものと考えられる。

(12) 第12号住居址（第49、50図）

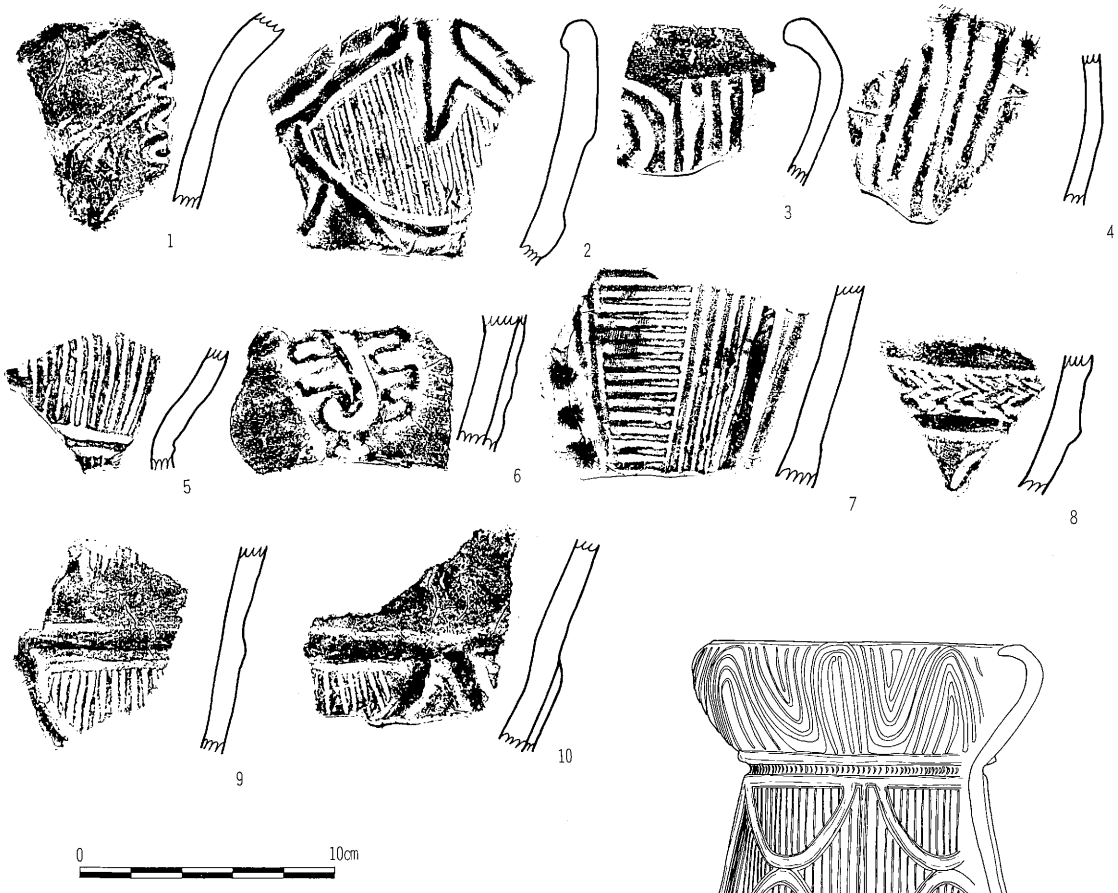
本址では炉北側、及び住居址内南東側に集中して遺物が出土した。完形及び半完形土器は3個体存在し、いずれも床より浮いて出土している。また、炉の中心には、深鉢形土器の胴下半が埋設されており、焼成を受け赤褐色を呈していた。11は強く内屈するキャリパー型土器で、底部を欠損する他は完存し、床面よりわずかに浮いて出土した。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれ、口縁部では4単位の沈線による連弧文が施され、胴部では隆帯による区画内を縦位の平行沈線が埋め尽くす。1は無文の深鉢形土器で口縁は平縁の二重口縁を呈する。2は炉北側から、床面よりかなり浮いて出土した。胴部には一面に撚糸文が施され、口縁下のくびれ部には2本の



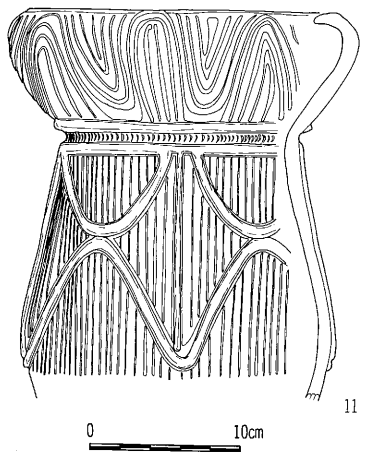
第48図　第11号住居址出土土器(1)

縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	11号住居	深鉢	口縁	沈線・縄文	粗	細粒	把手付
2	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	1と同一個体
3	〃	〃	〃	〃　〃	ナデ	砂粒	山形口縁
4	〃	〃	〃	〃　〃	〃	細粒	
5	〃	〃	胴下半	〃　〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃　〃	〃	砂粒粒	一部炭化物付着
7	〃	〃	〃	〃　〃	〃	細粒	
8	〃	〃	胴	〃　〃	研磨	砂粒	
9	〃	〃	〃	〃　〃	ナデ	細粒	内面に炭化物付着
10	〃	〃	口縁	〃	〃	砂粒	
11	〃	〃	〃	〃　縄文・刺突	粗	細粒	
12	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線・刺突	〃	〃	
13	〃	〃	胴	沈線・条痕	〃	〃	
14	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	
15	〃	〃	〃	〃	〃	砂粒	



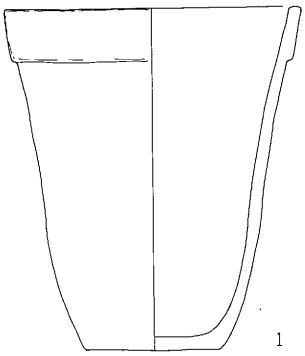
器　形／深鉢
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／荒
文様構成要素／隆帯，沈線，半蔵竹管文
備　考／底部なし



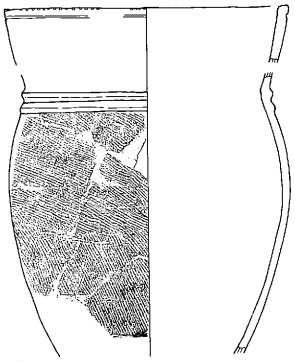
第49図　第11号，12号住居址出土土器

縄文土器観察表

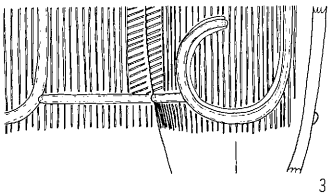
番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	11号住居	深鉢	胴	沈線・縄文	ナデ	砂粒	
2	〃	〃	口縁	隆帯・沈線	〃	細粒	
3	〃	〃	〃	〃	粗	〃	
4	〃	〃	胴	沈線・縄文	ナデ	〃	内面に炭化物付着
5	〃	〃	口縁	沈線	〃	〃	
6	〃	〃	〃	隆帯	研磨	〃	
7	〃	〃	胴下半	沈線・突起	粗	〃	
8	〃	〃	口縁	隆帯・沈線・刺突	〃	〃	
9	〃	〃	胴下半	〃　〃	〃	砂粒	内面に炭化物付着
10	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	



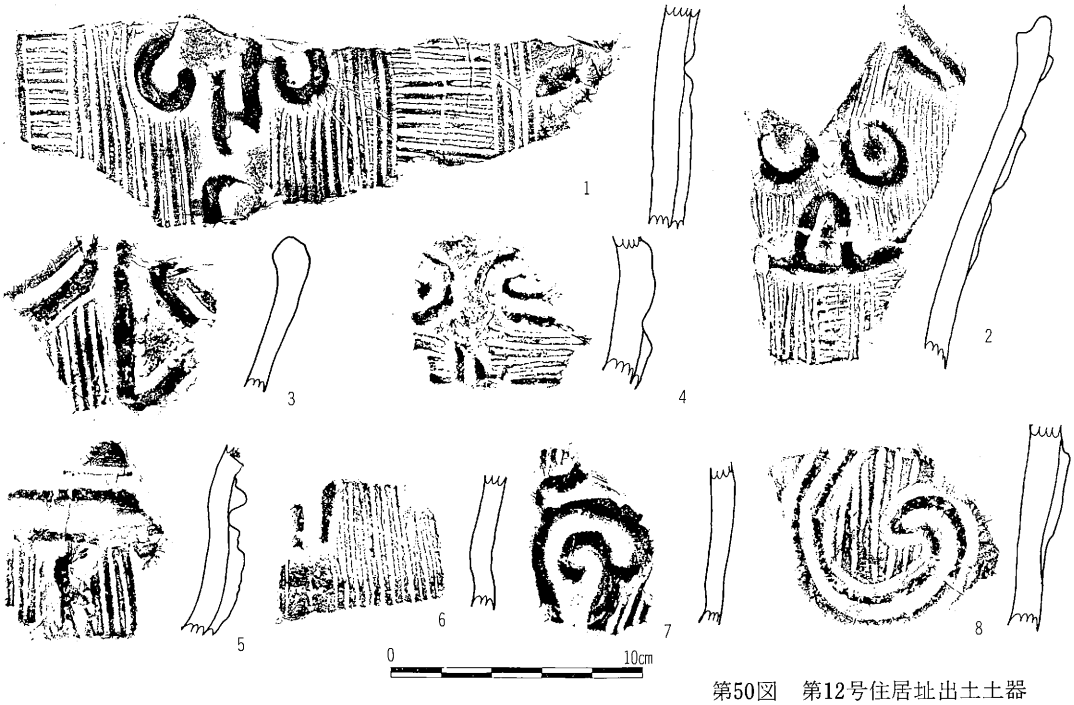
器　形／深鉢
胎　土／緻密，若干長石を含む
焼　成／良好
色　調／上半部暗褐色，下半部褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／無文



器　形／深鉢
胎　土／粗，砂を多く含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，撚糸文
備　考／底部欠除



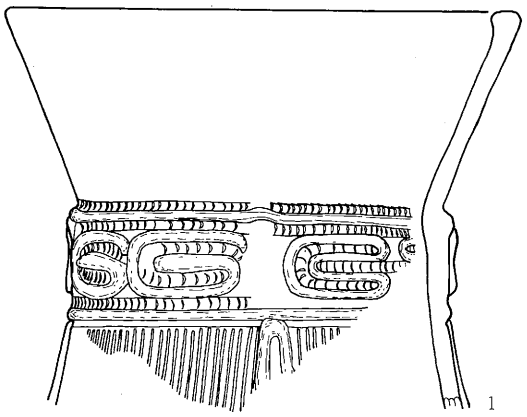
器　形／深鉢
胎　土／粗・長石を含む
焼　成／良好
色　調／褐色
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／胴部なし，2単位



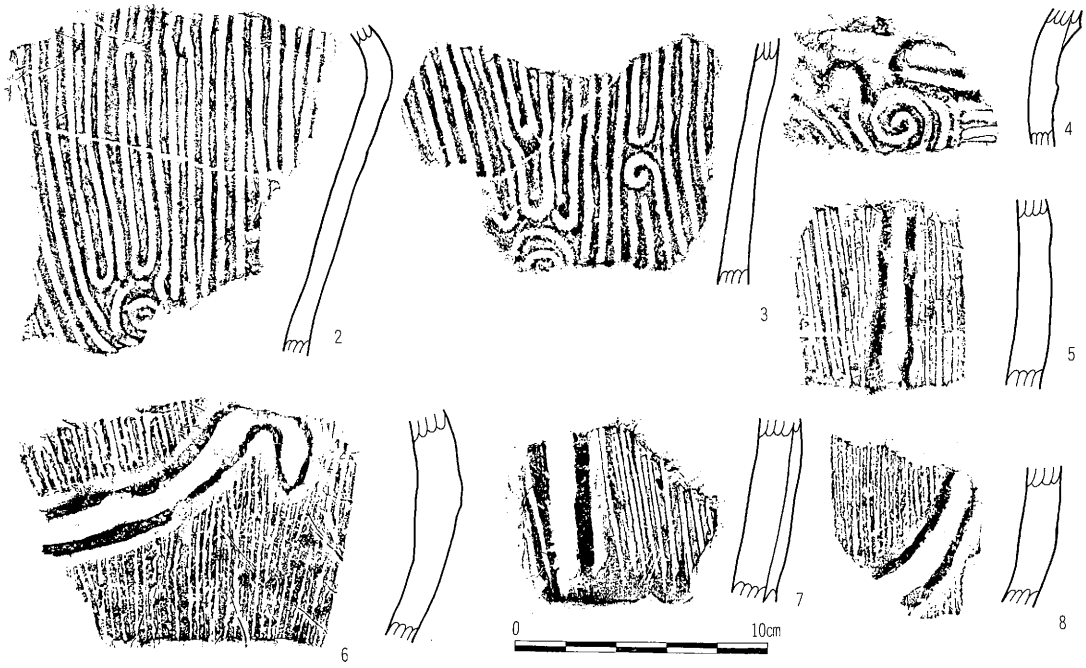
第50図　第12号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　考
1	12号住居	深　鉢	胴	隆帯・沈線	研　磨	細　粒	
2	〃	〃	口　縁	〃　〃	ナ　デ	〃	山形口縁
3	〃	〃	〃	〃　〃　刺突	〃	〃	
4	〃	〃	胴	沈線	〃	砂　粒	
5	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線	粗	細　粒	
6	〃	〃	胴下半	〃　〃	ナ　デ	〃	
7	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	〃　〃	〃	砂　粒	



器　形／深鉢
胎　土／緻密，長石を多く含む
焼　成／良好
色　調／暗褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線
備　考／口縁部および内面にスス付着



第51図　第13号住居址出土土器

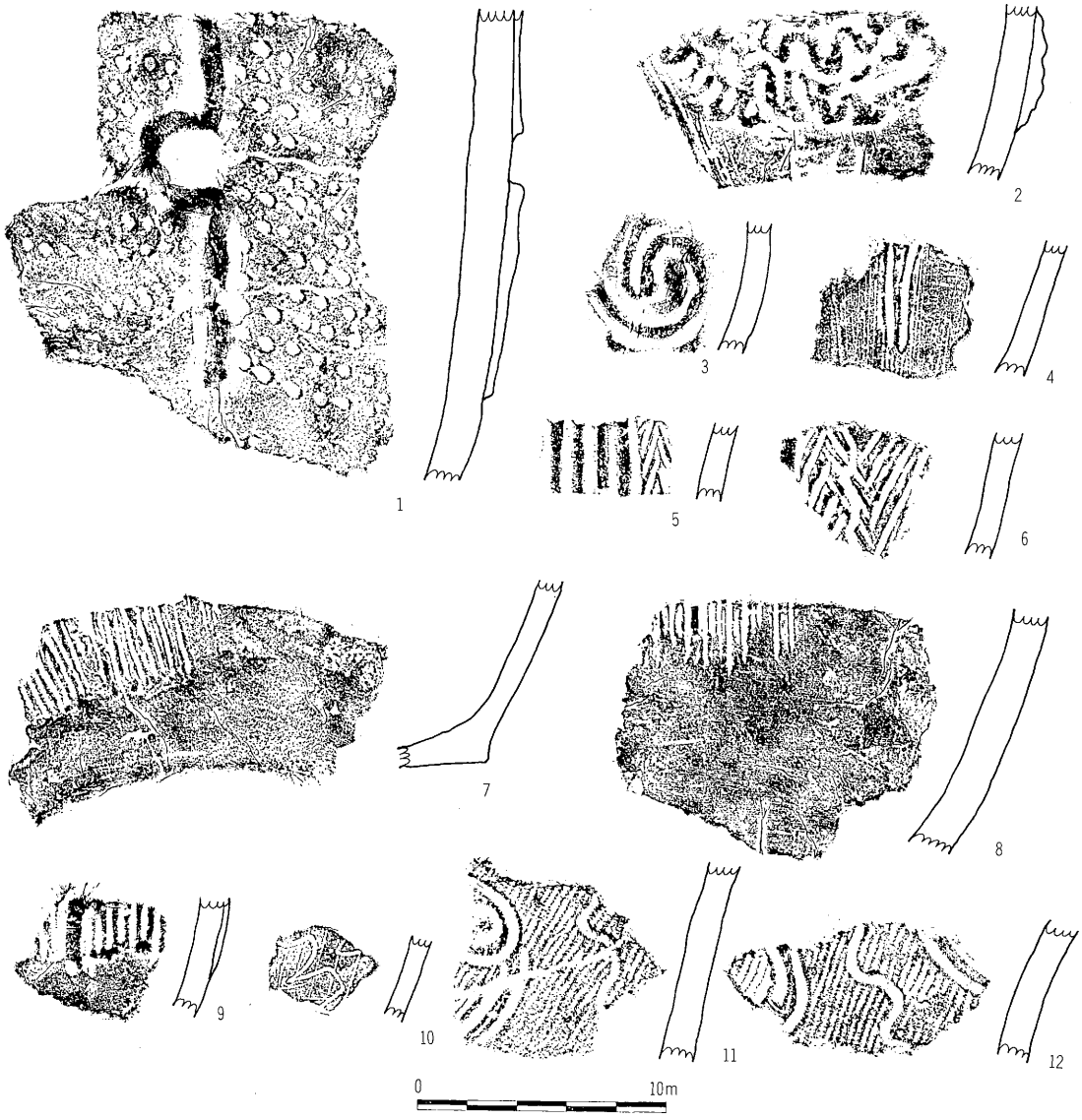
縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
2	13号住居	深鉢	口縁	沈線	ナデ	砂粒	
3	〃	〃	胴	〃	〃	〃	2と同一個体
4	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線・刺突	粗	〃	
5	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	
6	〃	〃	胴下半	〃　〃	研磨	細粒	内面炭化物付着
7	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	
8	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	6と同一個体

第52図　第13号，15号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	13号住居	深　鉢	口　縁	陸帯・沈線	研　磨	細　粗	
2	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	1と同一個体
3	〃	〃	〃	隆帯	ナ　デ	〃	
4	〃	〃	胴	〃	〃	〃	
5	〃	〃	口　縁	沈線	粗	砂　粗	
6	〃	〃	〃	刺突	ナ　デ	〃	
7	〃	〃	〃	隆帯・沈線	研　磨	細　粒	
8	〃	〃	胴	〃　〃	粗	砂　粒	
9	〃	〃	胴上半	〃　〃　刺突	〃	〃	
10	〃	〃	口　縁	〃　刺突	研　磨	〃	
11	〃	〃	口　縁	〃　縄文	〃	細　隆	
12	〃	〃	胴	沈線	粗	〃	
13	〃	〃	胴上半	〃	〃	〃	
14	〃	〃	胴	〃　縄文	〃	砂　粒	



第53図　第15号住居址出土土器

縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	15号住居	深鉢	胴下半	隆帯・刺突	研磨	砂粒	
2	〃	〃	胴上半	〃	粗	細粒	
3	〃	〃	胴	〃	〃	砂粒	
4	〃	〃	〃	沈線・条線	ナデ	細粒	
5	〃	〃	〃	隆帯・沈線	研磨	砂粒	
6	〃	〃	〃	〃　〃	粗	〃	内面に炭化物付着
7	〃	〃	底部	沈線	ナデ	〃	
8	〃	〃	〃	〃	粗	〃	
9	〃	〃	胴下半	隆帯・沈線	〃	〃	
10	〃	〃	胴	沈線	〃	〃	
11	〃	〃	〃	〃 縄文	〃	〃	
12	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	11と同一個体

平行する隆帯が貼り付けられる。なお、口唇には刻み目が施される。3は炉内土器であり、焚き口側にやや傾斜して、半ば埋設される状態で出土している。上半分及び底部を欠損し、胴部文様は、隆帯と、縦位及び斜行する沈線によって構成される。これら土器から判断して、本址は第Ⅰ期に属するものと推定できる。

(13) 第13号住居址（第51、52図）

本址は、3号住と切り合い、東半分は、土手下にあり、調査地域外である。覆土内からの土器の出土は少なく、遺物は、少数片が大半を占め、時期的には、曽利Ⅰである。1は、床面上から出土。頸部の一部が残存するが、器形は、深鉢と推測される。褐色で、胎土は、砂を多く含む。文様構成要素は、隆帯、沈線、沈線押引である。

(14) 第15号住居址（第52、53図）

本址は、住居の大半が破壊をうけていることもあって、土器の出土量は非常に少ない。拓本1は、隆帯と浅い刺突文によって文様が構成され、同類の土器が隣接する8号址からも出土している。その他は、大半が隆帯と沈線によって施文されるが、11、12については縄文が施されている。以上、土器の様相から、本址では曽利Ⅱ式の土器が主体をなすと言える。

(15) 第16号住居址（第54、55図）

本址では、土器の出土は比較的少なかったが、炉内覆土よりX字状把手を有する大形の鉢3が、また、炉内埋設土器として、深鉢形土器の胴上半1が出土している。鉢3は、底部を欠損するが、口縁及び胴部は、全周の3分の2程が遺存する。直線的に開口する口縁下のくびれ部には一本の隆帯が貼り付けられ、以下は全面に縄文が施される。また、貼り付けによるX字状把手が一対存在し、ここにも縄文が施される。炉内埋設土器1は、胴下半を意識的に欠いて、埋設土器として利用してある。焼土内に埋もれるように出土したこの土器は、かなりの加熱を受けており、器面にはやや剝落箇所が観察され色調は明褐色を呈する。口縁部は隆帯による渦巻文によって8単位の区画文を構成し、中を縦位の沈線が埋め占くす。また、胴部は、沈線による懸垂文と縦位の条線によって構成される。他には、沈線と縄文によって施文の行われる深鉢2が出土したが、上半部については明らかでない。これらは、曽利Ⅱ式に比定される土器だと推定される。

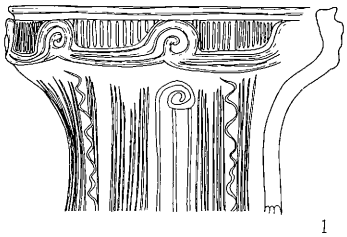
（前田清彦）

(16) 第17号住居址（第56図）

本址は、全体の4分の1程が残存するのみで、出土遺物は少なく、完形品はなかった。覆土内からは、土器片がごくわずかに出土した。Ⅰは、曽利Ⅰ式であり、口縁部から胴部にかけて、全体の3分の1程が、床面上につぶれた状態で出土した。焼成は、もろく、胎土の粒は、粗い。深鉢である。

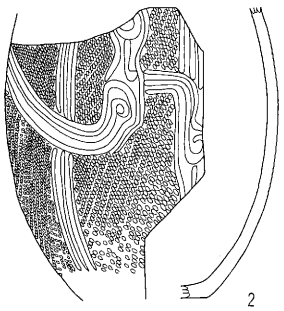
(17) 第18号住居址（第56図）

本址は、3号住と13号住と切り合っており、床面積は小さい。出土遺物は、少なく、覆土内には、土器片がごくわずかに見られた。主な土器は、床面直上に出土しており、底部や胴部の一部



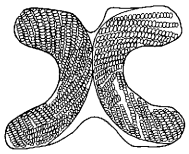
1

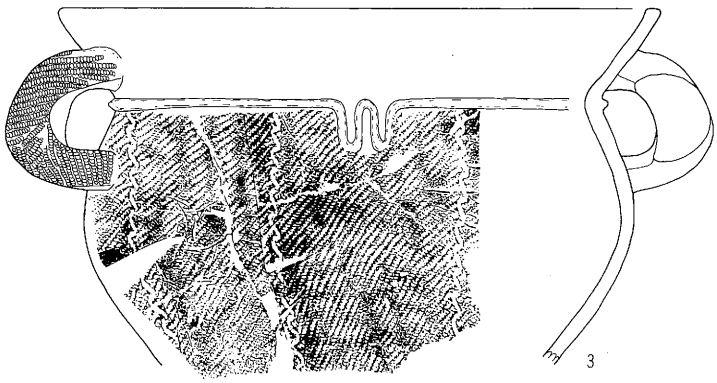
器　形／深鉢
胎　土／粗，小石含む
焼　成／良好
色　調／黄褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／隆帯，沈線，半蔵竹管文



2

器　形／深鉢
胎　土／粗，長石粒含む
焼　成／良好
色　調／淡褐色
内面調整／ナデ
文様構成要素／沈線、縄文



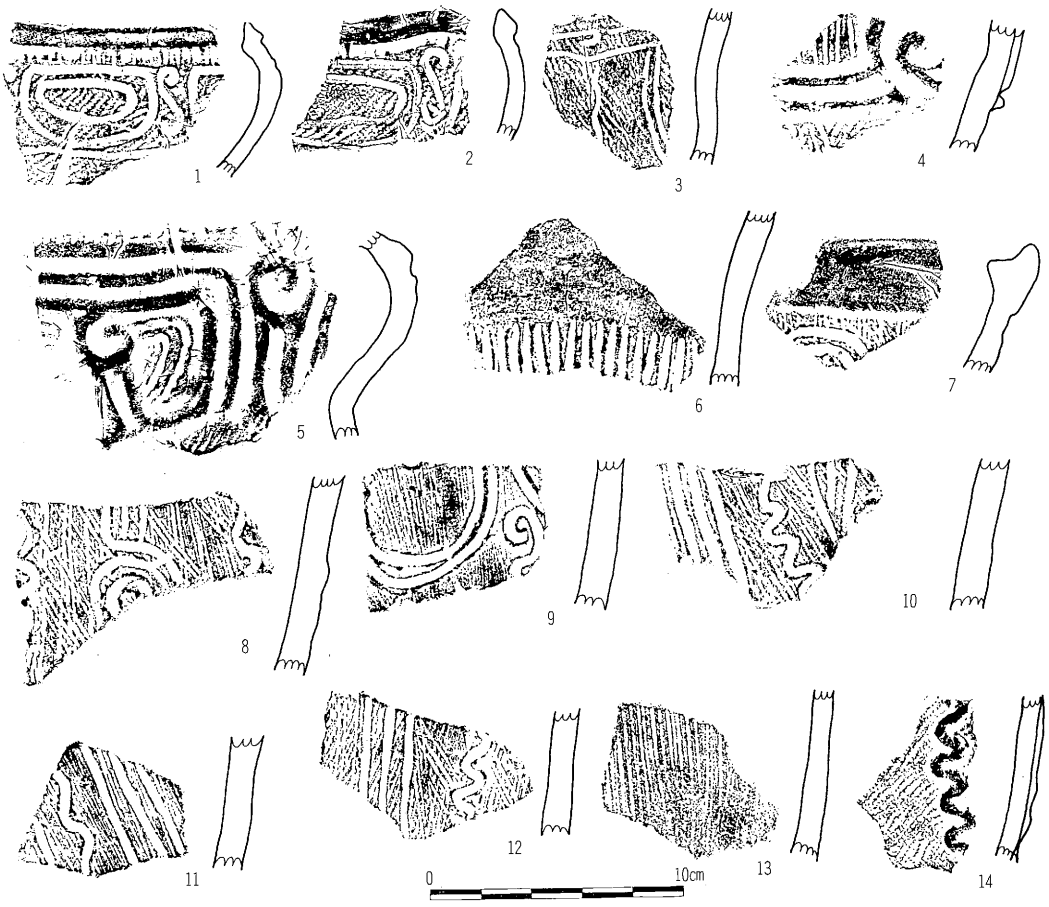


3

器　形／甕
胎　土／粒，小礫を多く含む
焼　成／良好
内面調整／研磨
文様構成要素／隆帯，縄文X字状把手
備　考／底部なし　2単位

0　10cm

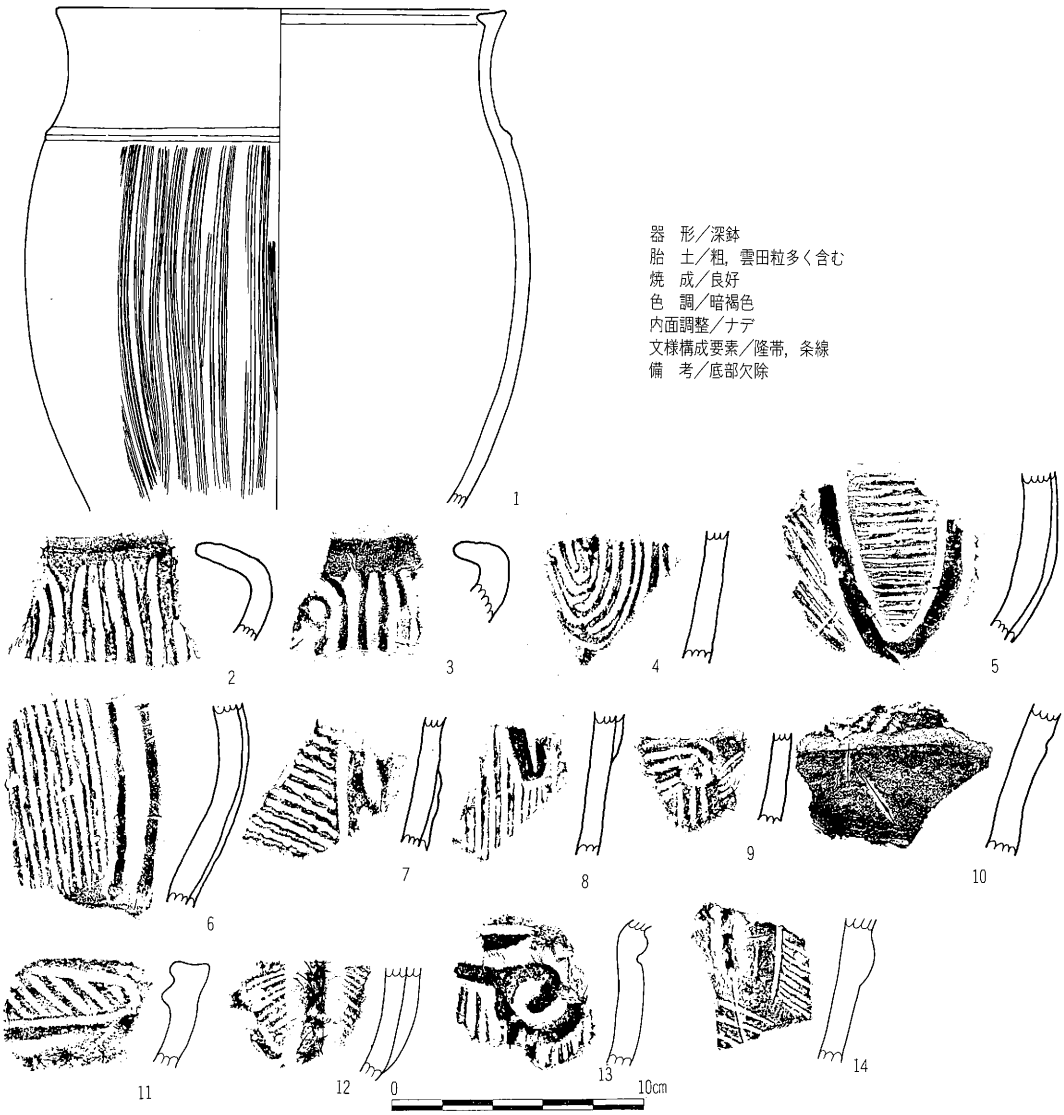
第54図　第16号住居址出土土器(1)



第55図　第16号住居址出土土器(2)

縄文土器観察表

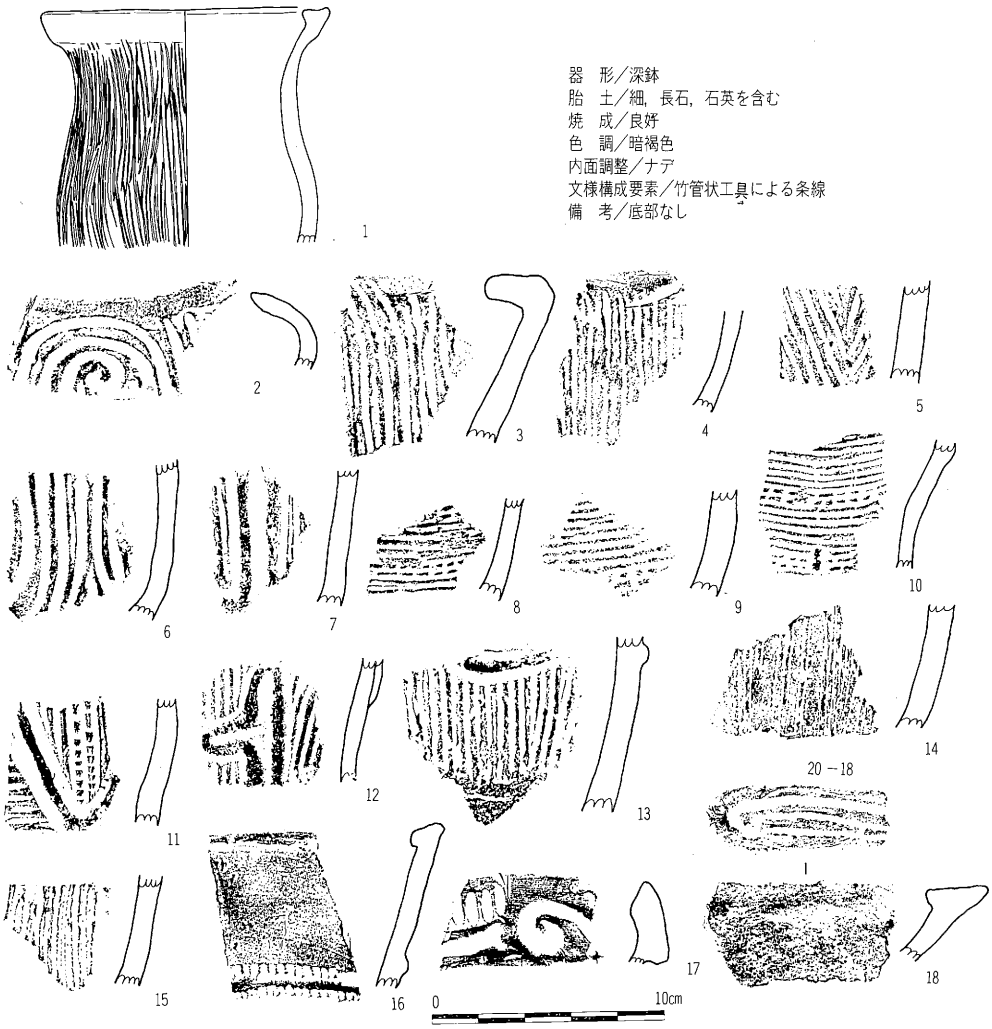
番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	16号住居	深鉢	口縁	沈線・縄文・刺突	研磨	細粒	
2	〃	〃	〃	〃　〃　〃	〃	〃	1と同一個体
3	〃	〃	胴上半	〃　〃	粗	砂粒	
4	〃	〃	口縁下	隆帯・沈線	ナデ	〃	
5	〃	〃	口縁	〃　縄文・刺突	〃	細粒	
6	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
7	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	
8	〃	〃	胴	〃	研磨	〃	9～12と同一個体
9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
13	〃	〃	〃	条線	粗	〃	
14	〃	〃	〃	隆帯・縄文	ナデ	〃	



第56図　第17号，18号，19号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
2	18号住居	深　鉢	口　縁	沈線	研　磨	細　粒	
3	〃	〃	〃	隆帯	ナ　デ	〃	
4	〃	〃	胴上半	沈線	粗	〃	
5	〃	〃	胴	隆帯・沈線	ナ　デ	〃	内面炭化物付着
6	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	5と同一個体
7	〃	〃	〃	〃　〃 刺突	粗	〃	
8	〃	〃	〃	〃　〃	研　磨	〃	
9	〃	〃	〃	沈線	ナ　デ	〃	
10	〃	〃	〃	縄文	研　磨	砂　粒	
11	19号住居	〃	口　縁	沈線	粗	〃	
12	〃	〃	胴下半	隆帯・沈線	〃	細　粒	内面炭化物付着
13	〃	〃	胴下半	〃　〃	〃	〃	
14	〃	〃	胴	〃　〃	〃	〃	



第57図　第20号住居址出土土器

縄文土器観察表

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　考
2	20号住居	深　鉢	口　縁	沈線	ナ　デ	細　粒	
3	〃	〃	〃	〃	研　磨	〃	
4	〃	〃	〃	〃	粗	〃	外面煤付着
5	〃	〃	胴	〃	ナ　デ	〃	
6	〃	〃	〃	隆帯	研　磨	〃	
7	〃	〃	〃	〃	粗	〃	内面炭化物付着
8	〃	〃	胴	沈線・刺突	ナ　デ	〃	8・9と同一個体
9	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
11	〃	〃	〃	隆帯・沈線・刺突	〃	〃	
12	〃	〃	〃	〃　〃　〃	粗	〃	
13	〃	〃	〃	〃　〃	ナ　デ	砂　粒	
14	〃	〃	〃	沈線	研　磨	細　粒	
15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
16	〃	〃	口　縁	隆帯・刺突	ナ　デ	〃	
17	〃	〃	〃	〃 沈線	研　磨	〃	
18	〃	浅　鉢	〃	沈線・刺突	ナ　デ	砂　粒	

など、全体の3分の1にも満たないものばかりである。　（三村　洋）

⑱　第19号住居址（第56図）

本址の出土状態は、床面から5～10cmほど浮いた層位に密集する。1は底部を欠損した深鉢である。口縁は無文で胴部に縦の条線が施されている。土器は縦・横の沈線文を主体とし、隆帯による区画をもつものもある。

⑲　第20号住居址（第57図）

本址から出土した遺物は、当初隣接住居との切り合い関係が不明であったため一括として取り上げたものもあり、特に第19号住居址とは床面も同レベルであったため、かなりの混入があると思われる。1は底部を欠損した深鉢で、口縁部を無文とし、胴部に竹管状工具による条線が施されている。大きさは異なるが、形態・文様構成ともに第19号住居址のものと類似点が多い。土器片はやはり棒状工具による縦・横の沈線文を主体とし、半截竹管による押引・爪形を施している。

㉑　第21号住居址（第58図）

本址の出土状態は、床面から10～30cm程直上の層位に多く、中央炉の付近に密集する。炉の南西肩直上付近からは土偶の頭部、またそれより50cm程東側から同じく土偶の腕部が出土しているが、土製品の項において一括詳細を記すことにする。土器片はやはり縦・横の沈線を主体とし、わらび手の隆帯を用いている。

㉒　第22号住居址（第58図）

本址はかなり深い掘り込みであったが、遺物の出土は床面付近に多くみられた。土器片は大型のものが少なく、すべて小破片でなりまた数量も僅少であった。文様は綾杉文、竹管状工具による沈線文、押引文を主体としている。

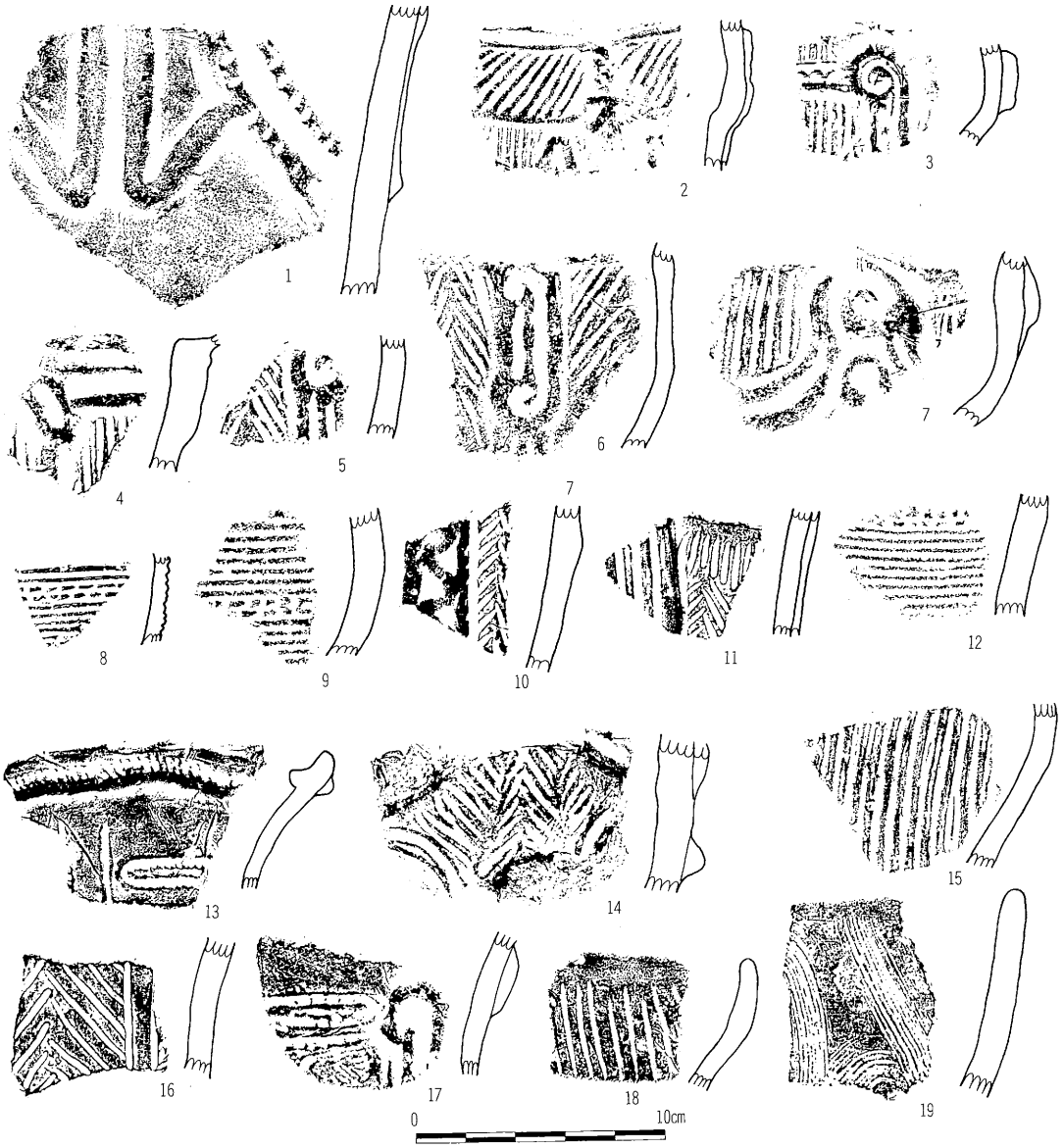
㉓　第23号住居址（第59図）

本址から出土した遺物はそのほとんどが床面上にあり、特に集中した箇所はみられない。遺物はすべて土器の小破片からなる。文様は口縁を無文帯とし、胴部に棒状工具による縦および横沈線を施したものが主流を占める。また2は縄文を地主とし縦位の懸垂文を走らせている。

（鳥羽嘉彦）

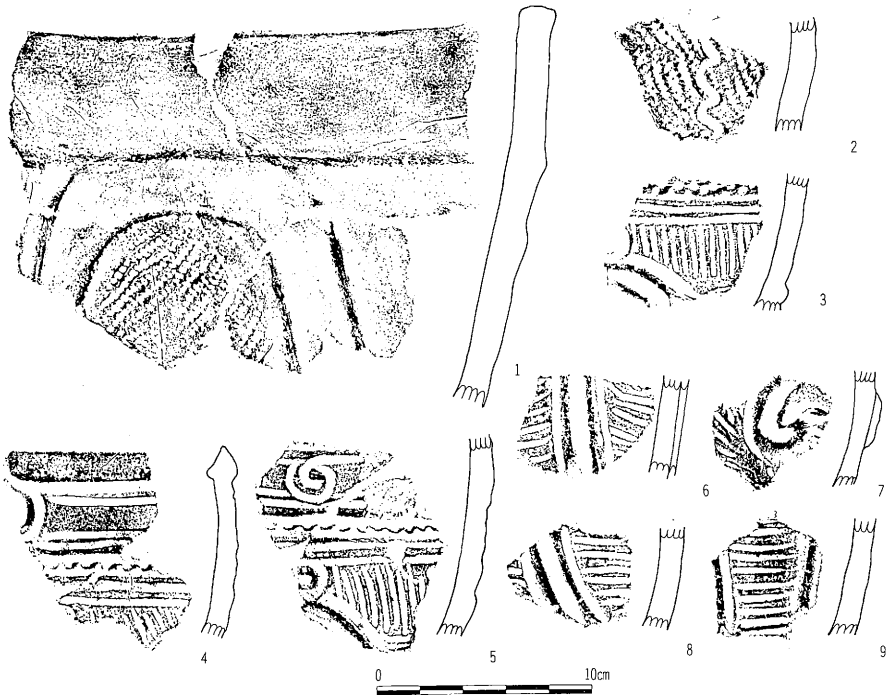
縄文土器観察表

番号	遺構名	器形	部位	文様構成要素	内面調整	胎土	備考
1	21号住居	深鉢	胴	隆帯	粗	細粒	
2	〃	〃	口縁	〃 小突起	研磨	〃	
3	〃	〃	〃	沈線・刺突・小突起	粗	砂粒	
4	〃	〃	〃	隆帯・沈線	ナデ	細粒	
5	〃	〃	胴	〃　〃	〃	砂粒	
6	〃	〃	〃	〃　〃	粗	〃	
7	〃	〃	口縁	〃　〃	〃	細粒	
8	〃	〃	胴	沈線	研磨	〃	
9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	隆帯・沈線	ナデ	〃	

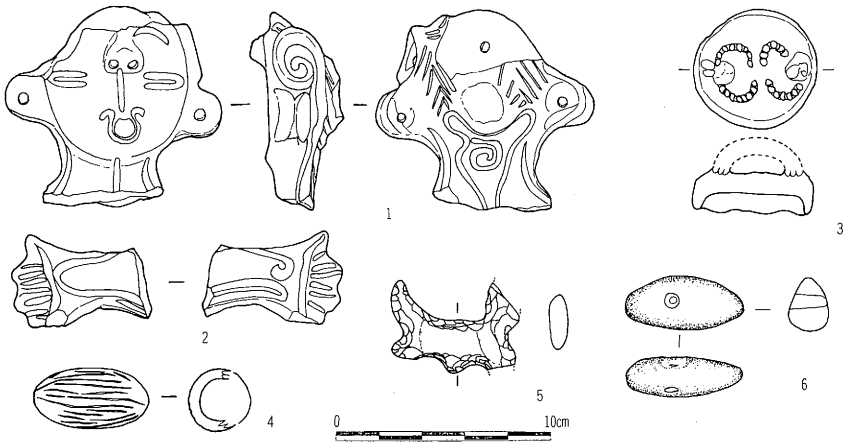


第58図　第21，22号住居址出土土器

11	〃	〃	〃	〃　〃	研　磨	〃	8と同一個体
12	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	
13	22号住居	〃	口　縁	隆帯・沈線	ナ　デ	〃	
14	〃	〃	胴	沈線・小突起	粗	〃	
15	〃	〃	口　縁	沈線	〃	〃	
16	〃	〃	胴	〃	研　磨	〃	
17	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線・縄文・刺突	ナ　デ	〃	
18	〃	〃	口　縁	沈線	粗	〃	
19	〃	〃	〃	〃	ナ　デ	砂　粒	



第59図　第23号住居址出土土器



第60図　土製品，石製品

文　様　構　成　要　素

番　号	遺構名	器　形	部　位	文様構成要素	内面調整	胎　土	備　　考
1	23号住居	深　鉢	口　縁	隆帯・縄文	ナ　デ	砂　粒	
2	〃	〃	胴	沈線　〃	粗	細　粒	
3	〃	〃	胴上半	隆帯・沈線・刺突	研　磨	〃	
4	〃	〃	口　縁	〃　〃	ナ　デ	〃	
5	〃	〃	胴上半	〃　〃　刺突	研　磨	〃	
6	〃	〃	胴	〃　〃	粗	〃	
7	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	〃　〃	ナ　デ	〃	
9	〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	

2） 石　器

本遺跡の遺構に附随して出土した石器は総数209点である。器種は、石鏃、打製石斧、石皿、磨石、磨製石斧、スクレイパー、石錐、砥石、石匙、異形石器があり、その内訳は第４表に示した。以下、各遺構ごとにその概要を記す。

(1)　第１号住居址（第61図）

総数６点の出土があり、内訳は石鏃２、スクレイパー２、打製石斧１、凹石１である。この時期の住居としては非常に僅少である。４のスクレイパーは、大きな縦長の黒曜石の剝片を二次加工もせず、その鋭利な縁辺を刃部としたもので、この時期、このような大きなスクレイパーは余り多くない。６の凹石は小さな打痕が中央部に集中して凹孔となったものである。

(2)　第２号住居址（第61図）

総数６点の出土があり、打製石斧４、凹石２がその内訳である。僅少ではあるが、打製石斧と凹石という中期的な石器がその中心となっている。打製石斧７、９はともに７cm前後の小形品である。凹石は11、12とも磨耗による凹孔を有するものである。

(3)　第３号住居址（第61～64図）

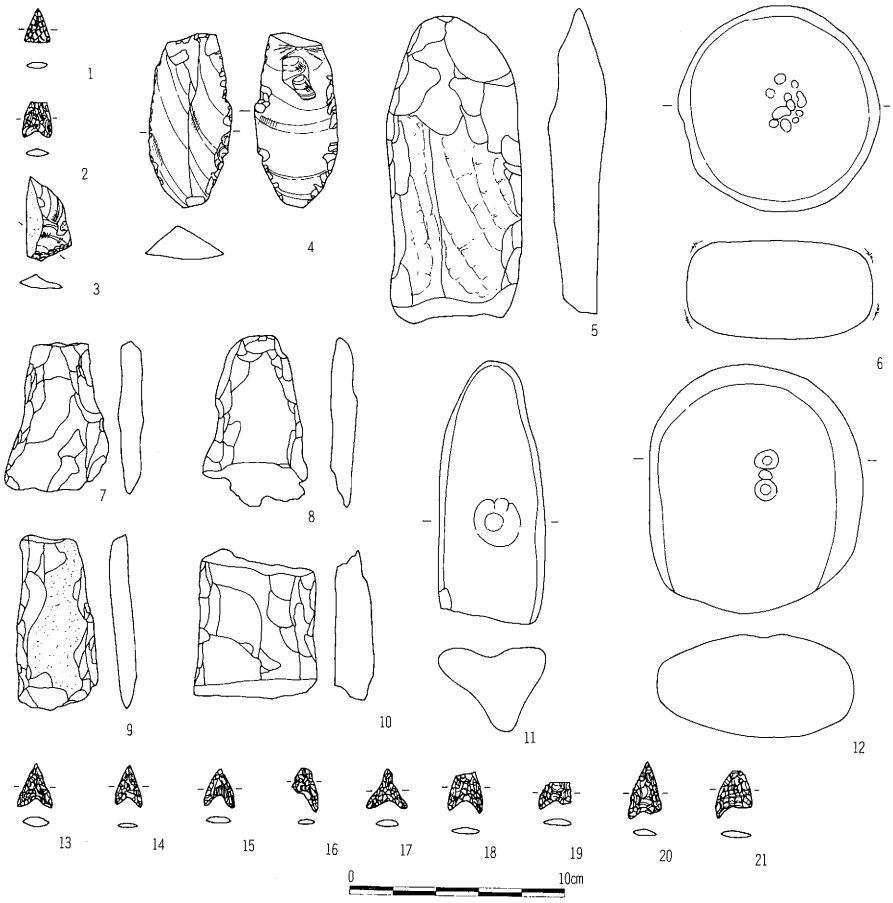
総数64点出土し、その内訳は石鏃18、打製石斧29、凹石４、大型粗製石匙１、磨製石斧３、石錐１、スクレイパー８である。今回調査された住居址の中で、最も多い出土であり、土器の項でものべたように、いわゆる吹上パターンの状態での出土であった。石鏃は、底辺への抉り込みの強いものが大半を占め(12～21、１、２)、柳葉形８も１点ある。また、15は中央部分に研磨がなされている。打製石斧は、刃部がやや幅広の短冊形が大半をしめる（第61図10～17)。撥形（18、14）を呈するものもわずかであるが認められる。原石面を残すもの（第61図13～18、第62図２、４、６、９、10、16～18）が多く、調整は概して雑である。側縁にしばしば残されている磨耗痕が観察できるものはほとんどなく、わずかに11の１点のみであった。刃部の磨耗痕も10、16の２点だけで、こうした特徴を有するものの比率は低い。

凹石は、第64図１～４の４点とも打痕の集中による凹孔をもつもので、１、２、４は複数孔、３は表裏とも単孔である。磨製石斧（第64図６～８）は、ともに小形の定角式で、３点とも頭部を欠損している。６、８は研磨が丁寧になされている。

本住居址は打製石斧を中心とした組成となっているが、石鏃、スクレイパーの量もこの時期としては決して少ないともいえない。中期後半になって打製石斧中心のいわゆる中期的石器組成の崩壊がはじまるといわれているが、本址の石器相もその傾向を示しているといえよう。

(4)　第４号住居址（第65図）

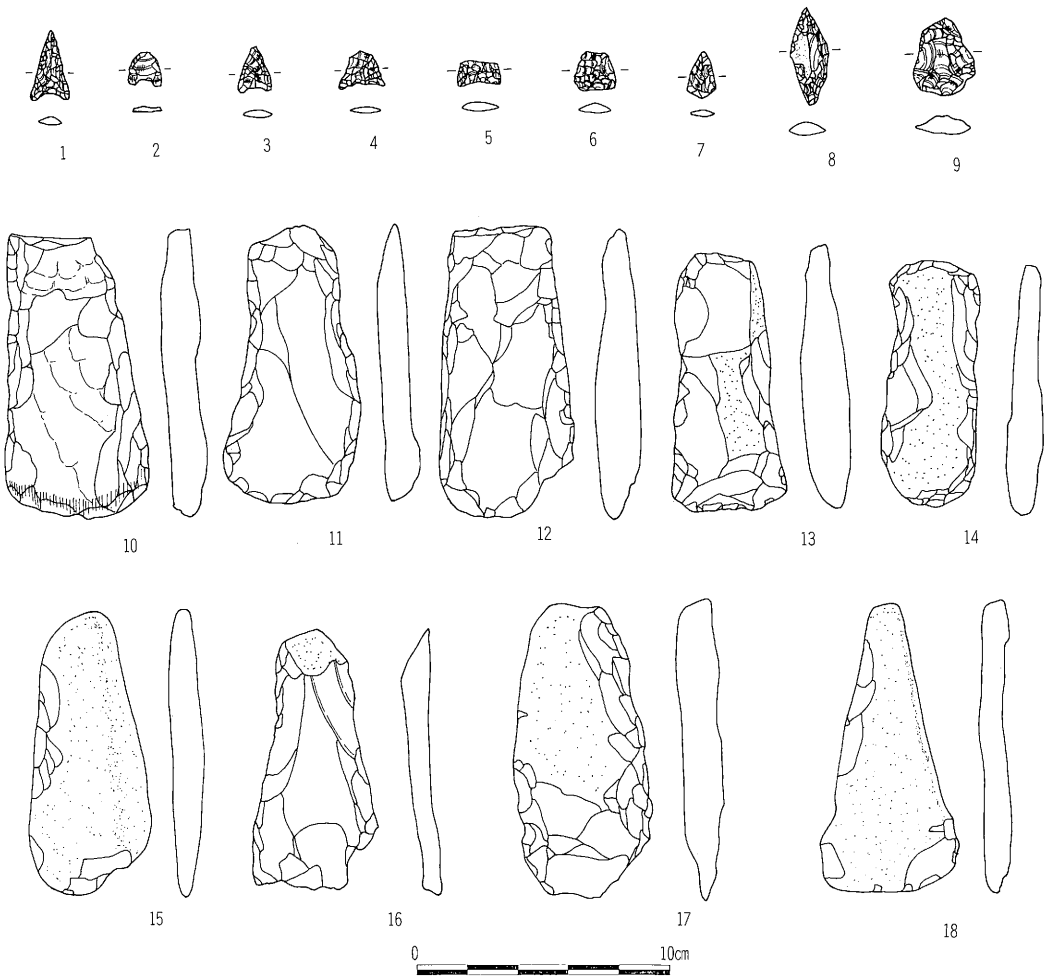
石鏃１、打製石斧１、磨製石斧２、スクレイパー１、凹石４、石皿２、砥石１の総数12点の石器が出土している。出土状態は第12図および遺構の項での説明にのべられているように、９の石皿が南東床面上に凹面を下にして伏せた状態で出土し、12の石皿は石囲炉の北側炉石として使用されていたものである。また11の砥石は、炉の西北の床面上に置かれ、８、10の凹石は敷石の一



第61図　第１号，２号，３号住居址出土石器

石 器 観 察 表

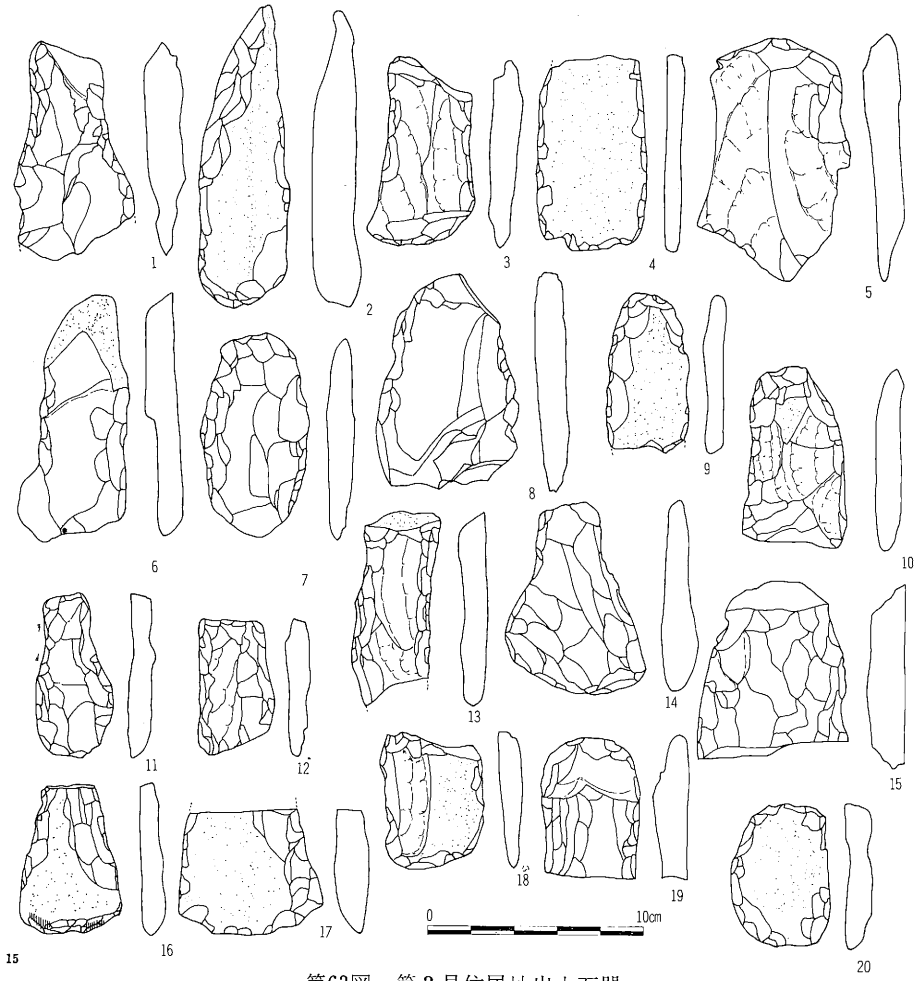
番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	１号住	石鏃	黒曜石	16	12	3	
2	〃	石鏃	チャート	17	14	4	
3	〃	スクレイパー	黒曜石	40	19	4	
4	〃	スクレイパー	黒曜石	82	38	16	
5	〃	打製石斧	頁岩	143	62	27	
6	〃	凹石	安出岩	97	86	46	
7	２号住	打製石斧	頁岩	70	47	12	
8	〃	打製石斧	頁岩	80	49	13	
9	〃	打製石斧	頁岩	81	37	9	
10	〃	〃	〃	60	58	17	
11	〃	凹石	安山岩	122	51	39	
12	〃	〃	〃	116	92	48	
13	３号住	石鏃	黒曜石	20	17	5	
14	〃	石鏃	黒曜石	20	13	2	
15	〃	石鏃	黒曜石	18	14	3	
16	〃	〃	〃	20	12	2	
17	〃	〃	〃	17	20	3	
18	〃	石鏃	黒曜石	20	16	3	
19	〃	〃	〃	13	15	3	
20	〃	〃	〃	26	15	3	
21	〃	石鏃	黒曜石	22	17	3	



第62図　第３号住居址出土石器

石 器 観 察 表

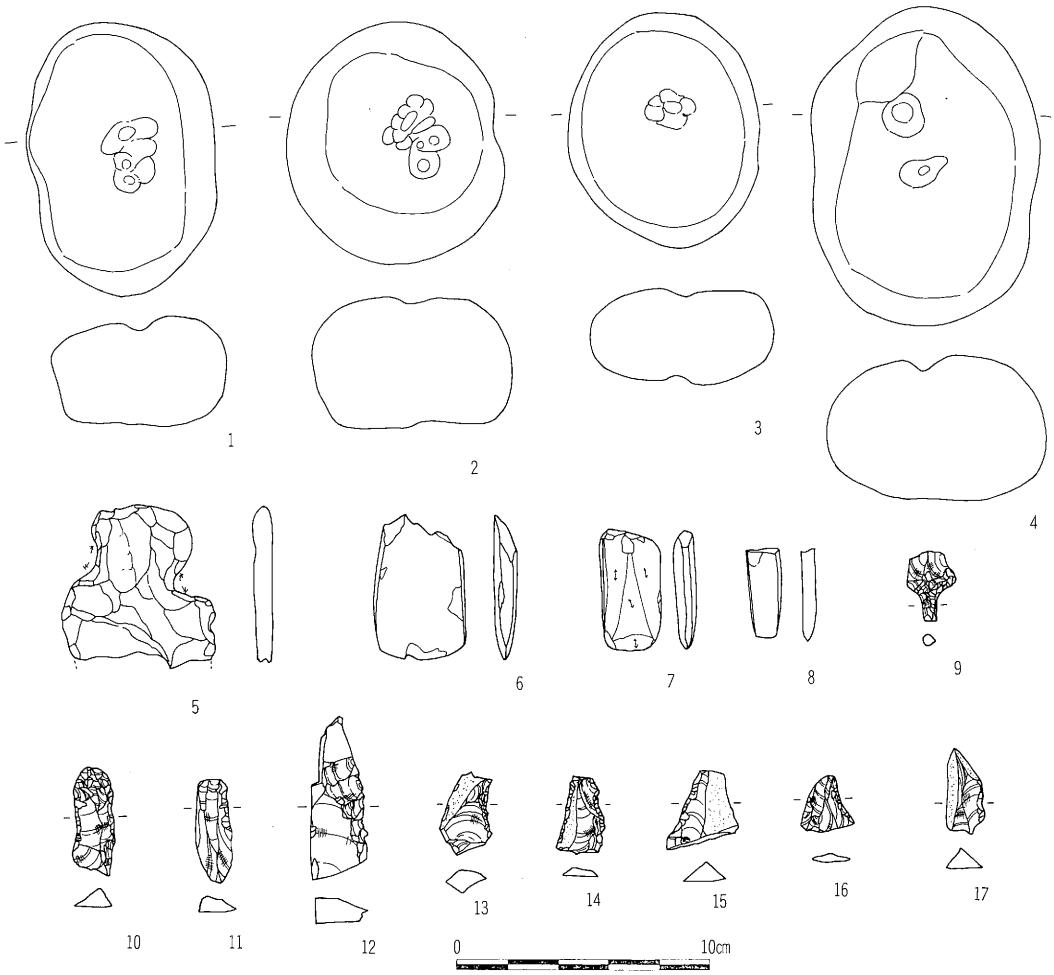
番号	遺構名	種　別	石　質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特　徴
1	３号住	石　鏃	黒　曜　石	39	15	6	
2	〃	〃	〃	14	13	2	
3	〃	〃	〃	18	12	3	
4	〃	〃	〃	15	19	2	
5	〃	〃	〃	11	17	4	
6	〃	〃	〃	16	17	4	
7	〃	〃	〃	18	19	3	
8	〃	〃	〃	40	16	5	
9	〃	〃	〃	31	25	8	
10	〃	打製石斧	頁　岩	114	57	16	
11	〃	〃	安　山　岩	110	52	14	
12	〃	〃	頁　岩	115	55	18	
13	〃	〃	細粒砂岩	102	46	19	
14	〃	〃	頁　岩	98	37	14	
15	〃	〃	安　山　岩	113	49	13	
16	〃	〃	頁　岩	103	50	11	
17	〃	〃	硬　砂　岩	117	53	17	
18	〃	〃	頁　岩	114	56	11	



第63図　第３号住居址出土石器

石器観察表

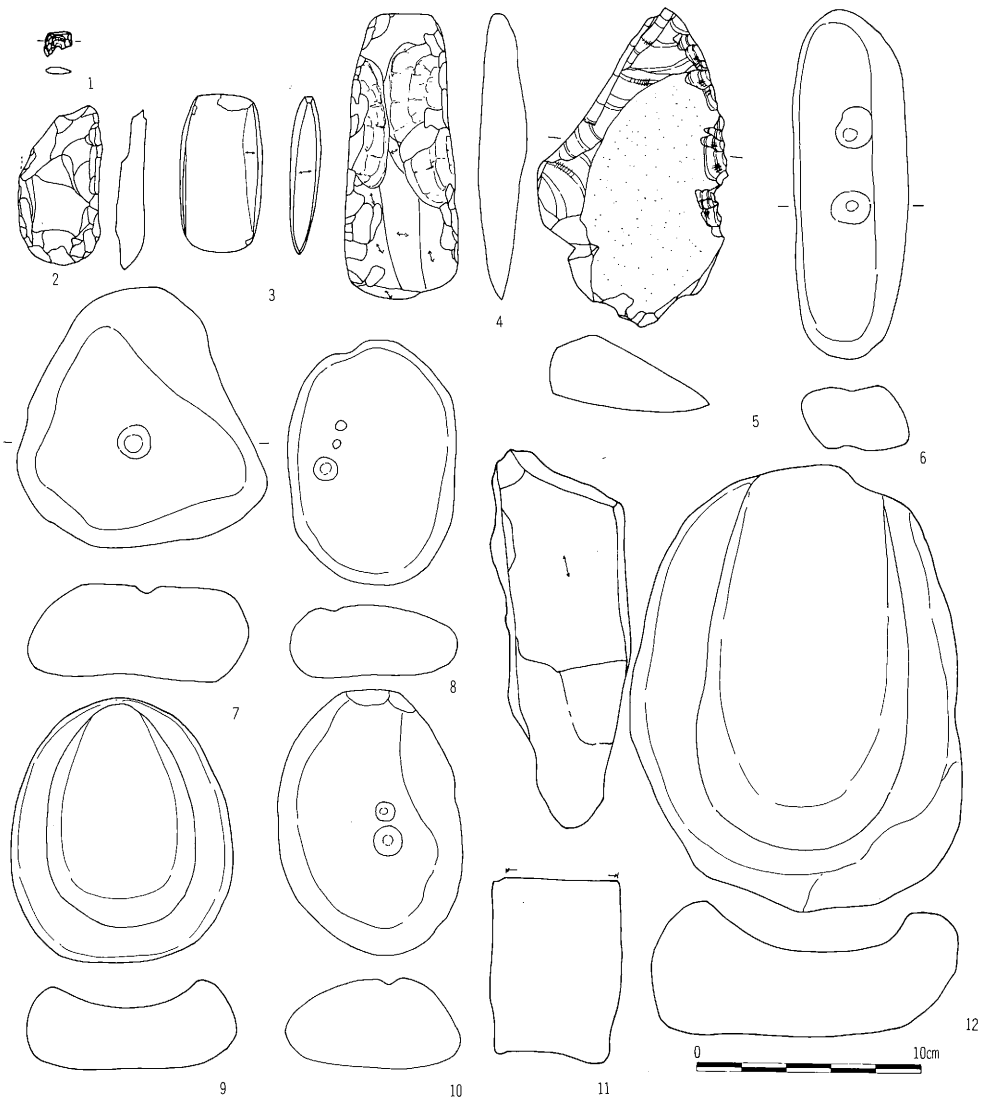
番号	遺構名	種別別	石質	長さ(cm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	3号住	打製石斧	硬砂岩	103	55	18	
2	〃	〃	石灰岩	141	42	23	
3	〃	〃	頁岩	88	49	13	
4	〃	〃	粗粒砂岩	92	51	9	
5	〃	〃	頁岩	114	73	16	
6	〃	〃	〃	114	50	15	
7	〃	〃	〃	95	50	13	
8	〃	〃	細粒砂岩	100	67	14	
9	〃	〃	頁岩	73	38	9	
10	〃	〃	細粒砂岩	83	49	12	
11	〃	〃	頁岩	72	36	11	
12	〃	〃	硬砂岩	63	36	11	
13	〃	〃	頁岩	90	36	13	
14	〃	〃	〃	90	65	17	
15	〃	〃	〃	83	70	18	
16	〃	〃	中粒砂岩	65	48	11	
17	〃	〃		58	68	17	
18	〃	〃		64	48	11	
19	〃	〃	〃	65	45	17	
20	〃	〃	頁岩	66	46	12	



第64図　第３号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	３号住	凹石	両輝石安山岩	109	69	44	
2	〃	〃	安山岩	98	79	52	
3	〃	〃	両輝石安山岩	95	73	39	
4	〃	〃	安山岩	127	87	57	
5	〃	縦型石匙	頁石	65	61	7	
6	〃	磨製石斧	蛇紋岩	58	36	9	
7	〃	〃	細粒砂岩	48	24	8	
8	〃	〃	珪質粘板岩	37	13	6	
9	〃	石鏃	黒曜石	27	20	5	
10	〃	スクレイパー	〃	44	15	8	
11	〃	〃	〃	41	12	5	
12	〃	〃	〃	64	22	10	
13	〃	〃	〃	32	20	9	
14	〃	〃	〃	21	18	4	
15	〃	〃	〃	32	19	7	
16	〃	〃	〃	22	21	3	
17	〃	〃	〃	33	16	9	



第65図　第４号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	４号住	石鏃	黒曜石	12	13	3	
2	〃	打製石斧	細粒砂岩	73	37	13	
3	〃	磨製石斧	蛇紋岩	72	37	13	
4	〃	〃	泥岩	48	51	21	局部磨製
5	〃	スクレイパー	黒曜石	143	85	32	４号検出面から出土
6	〃	凹石	安山岩	157	48	29	
7	〃	〃	〃	118	100	44	
8	〃	〃	〃	220	150	70	
9	〃	石皿	〃	240	200	74	
10	〃	凹石	〃	240	160	70	
11	〃	砥石		340	115	160	
12	〃	石皿	安山岩	400	275	70	

部として使用されていた。他の住居址ではその出土が多い石鏃、打製石斧が各１点出土したのみであるのに対し、磨製石斧、砥石、石皿など研磨することによって製作されたもの、あるいは機能するものがセットとなって１つの住居址内の床面上に配置されて出土したことは注目される。しかも、４の磨製石斧は、頭部、刃部の１部が研磨されており、他の部分には研磨が施されず未完成品となっている。明らかに製作途上にある石器ということが分かる。11の砥石の存在と考え合わせると本址において磨製石斧が製作されていたことが予想される。５は、14cmほどもある大きな黒曜石の原石の一辺に粗い加工を施し、刃部を作出したスクレイパーで、この時期の遺跡からこうした大形の石器が出土することは珍しい。

本遺跡唯一の敷石住居であった本址出土の石器相は、以上のべた如く、他の住居址出土の石器相とはかなり様相を異にした特異なものとなっている。

(5)　第５号住居址（第66図）

打製石斧１、凹石２の３点の石器が出土したのみで、量的には非常に少ない。２の凹石は、埋甕内から出土したもので、第81図の埋甕内のセクションでも分かるように、埋甕内の暗褐色土上面で、甕の中位から出土した。その出土状態からは人為的に故意に埋甕内に入れられたものか否かは判然としない。磨耗による凹孔が存する。

(6)　第６号住居址（第66～67図）

石鏃５、石錐１、打製石斧３、大型粗製石匙２、凹石５、磨石１、石棒１、異形石器１の計19点の石器が出土し、比較的多量であった。石鏃は、底辺への抉り込みのないもの（１）と、あるもの（３～５）があるが、抉り込みは概して浅い。打製石斧（７～９）は短冊形を呈し、９は肩部に軽い抉りを施し、この部分が磨耗している。大型粗製石匙は、10が横形、11が縦形で、ともに粗雑な仕上げである。12は、あたかも現代の鎌を連想させるような形態の石器で、左辺の内弯する部分が鋭利で、刃部となっている。他には余り類例をみない異形な石器である。

凹石は４点とも不整形な礫を使用し、凹孔は２、５が磨耗によるほかは、１、３、４とも打撃の集中によるものである。磨石６は、炉址内から出土したもので、小形の球形を呈する。７は、周囲をわずかに研磨した石棒ないし石剣で、床面上から出土している。

本址の石器相も、石鏃が比較的多い反面、打製石斧、凹石が少量で、中期的な石器群の変化の一端を示しているといえる。

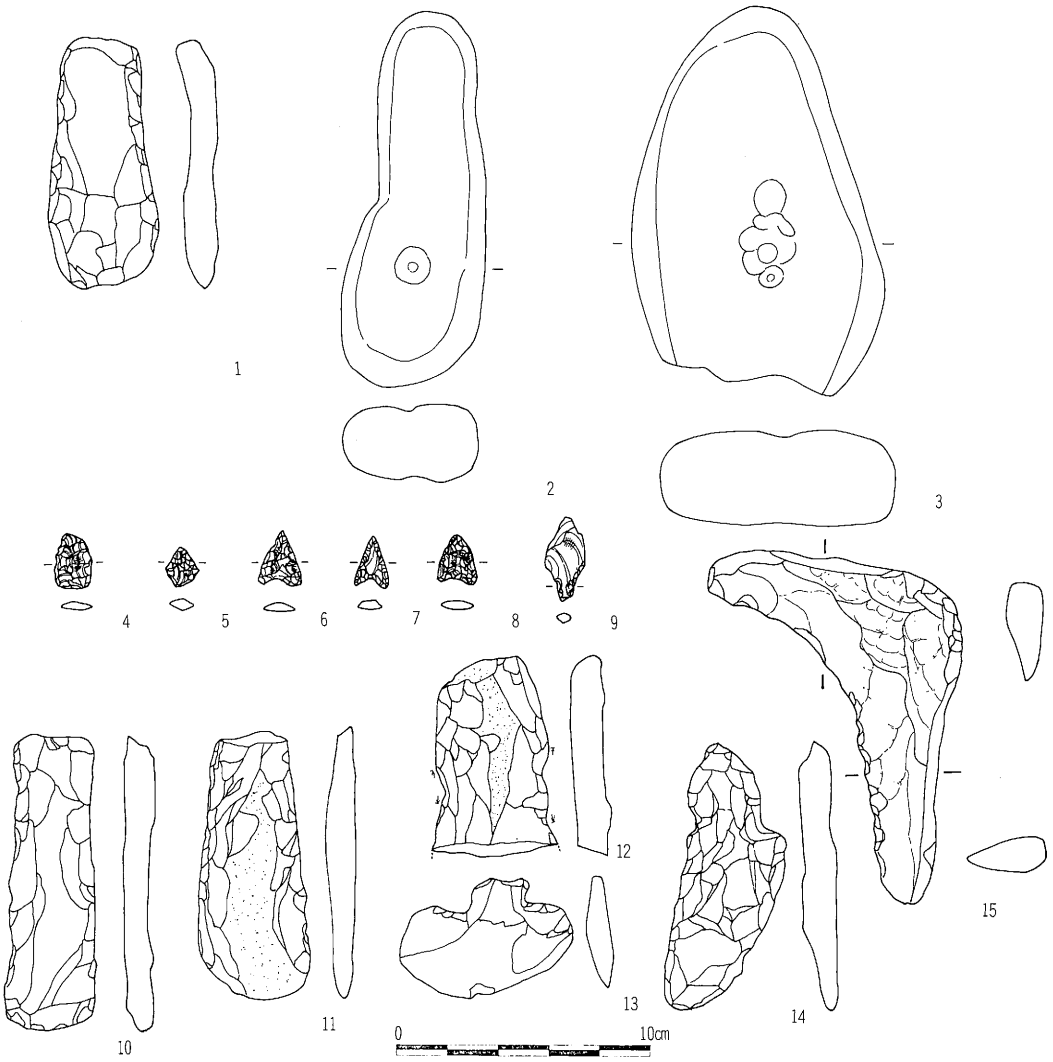
(7)　第７号住居址（第67図）

石鏃２、石錐１、磨製石斧１、打製石斧１の計５点が出土している。

石鏃は２点とも底辺への抉りが深く、製作は丁寧である。磨製石斧は小形定角式で、研磨は左上から右下へという傾斜をもってなされている。打製石斧は、大きな剝片を余り加工することもなく使用した粗雑なものである。

(8)　第８号住居址（第68図）

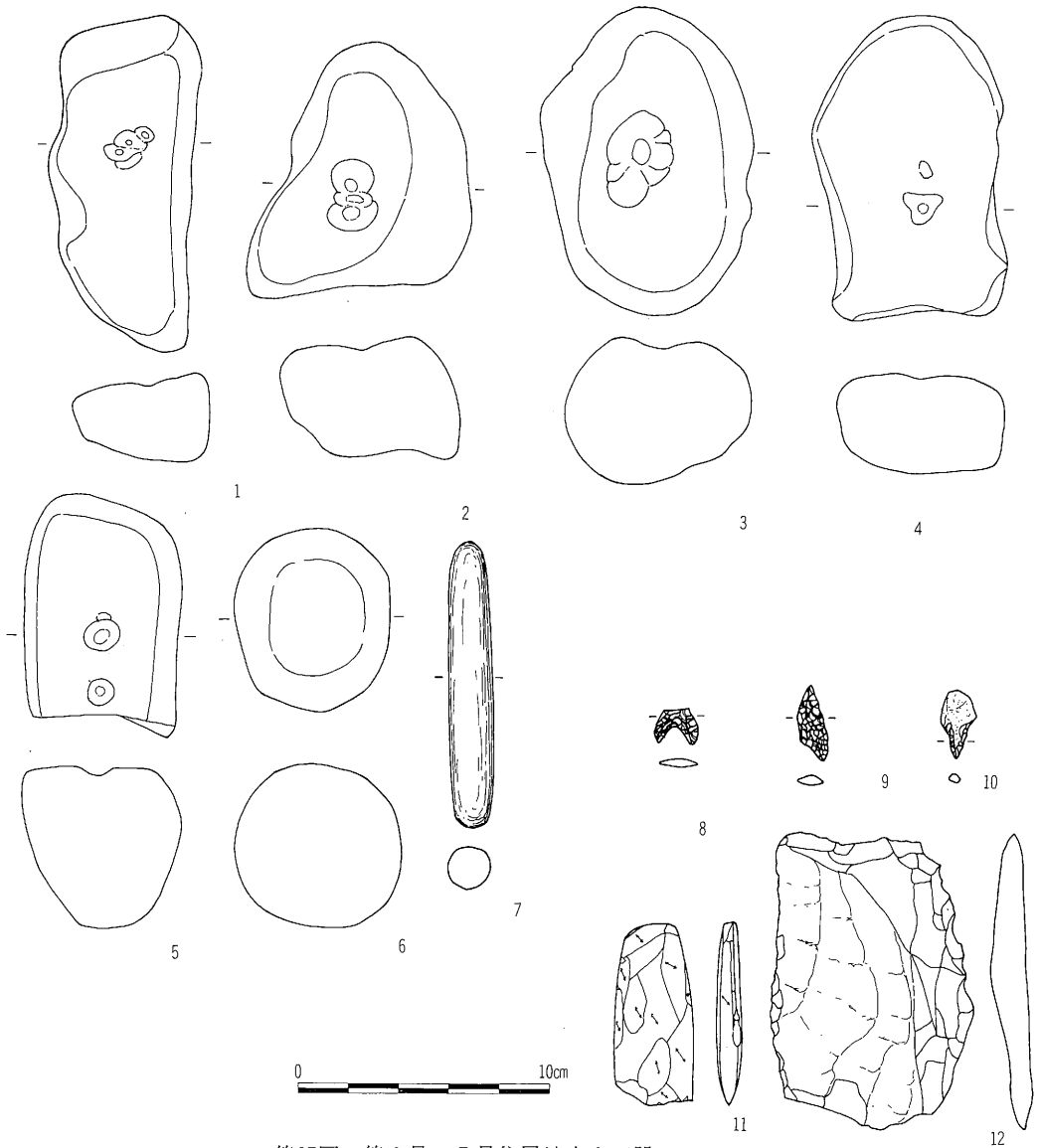
石鏃４、打製石斧５、大型粗製石匙２、磨製石斧２、凹石１の計14点が出土している。　石鏃



第66図　第５号，６号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	5号住	打製石斧	硬砂岩	100	45	13	
2	〃	凹石	細粒砂岩	148	54	31	
3	〃	〃	礫岩	153	93	38	
4	6号住	石鏃	黒曜石	21	16	4	
5	〃	〃	〃	16	14	5	
6	〃	〃	〃	22	17	4	
7	〃	〃	〃	21	14	4	
8	〃	〃	〃	20	16	4	
9	〃	〃	〃	34	16	4	
10	〃	打製石斧	頁岩	117	36	12	
11	〃	〃	〃	107	45	13	
12	〃	〃	〃	79	50	14	
13	〃	大型石匙	〃	48	69	10	
14	〃	〃	〃	107	40	14	
15	〃	異形石器	〃	131	103	15	



第67図　第6号，7号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	6号住	凹石	安山岩	134	55	36	
2	〃	〃	〃	103	73	49	
3	〃	〃	〃	123	75	53	
4	〃	〃	〃	123	67	40	
5	〃	〃	〃	95	69	64	
6	〃	磨石	火山礫凝灰岩	74	67	66	
7	〃	石棒	細粒砂岩	115	17	17	
8	7号住	石鏃	チャート	14	13	3	
9	〃	〃	黒曜石	30	11	4	
10	〃	石錐		28	14	4	
11	〃	磨製石斧	安山岩	73	33	10	
12	〃	打製石斧	頁岩	118	81	15	

は、わたくりの深いもの（２）、やや浅いもの（１、３）があり、２は中央部が研磨されている。打製石斧は、５が両側縁に磨耗痕をもち、やや内弯する短冊形、６は肩部がえぐられた石匙に近い形態を有するものである。

大型粗製石匙の10は横形、11は縦形で、ともにつまみ部に抉りを入れ、抉り部分が磨耗している。11は極めて偏平で鋭利である。磨製石斧は、12、13とも定角式で、12は小形品である。12は中央部が斜めに研磨され、左辺は、上下に、そして側面は横位の研磨によって製作されている。13は、中央部が横位に、両辺が上下に、そして刃部付近は斜めに研磨されている。凹石14は、表面側にのみ、打撃による小さな凹孔を有する。

(9)　第９号住居址（第68図）

本址からは磨製石斧１、石皿１、砥石１の計３点の石器が出土した。石鏃、打製石斧、凹石など他の住居址では普遍的に出土する石器が１点も出土せず、また出土量も極めて少ない。

磨製石斧15は、定角式の優品で、研磨痕が観察できないほど丁寧に研磨が施されている。16の石皿は、炉址に接するようにして床面上から出土した。長さ12cmの小さな石皿で、磨面は1.6cmほど凹んでいる。このような小形の石皿は珍しく、一般的な石皿と同様の用途を有するものか、またこれに伴う磨石はどのようなものか注目される。砥石17は、表面に大きな砥面が１面、裏面に幅7.4cmと４cmの２面の砥面がある。ともによく研磨されている。

(10)　第10号住居址（第69、70図）

石鏃４、打製石斧９、大型粗製石匙１、磨石１、凹石２、凹石兼磨石１、磨製石斧２、石棒１の計21点の出土がある。

石鏃は底部形態の分かる１～３の３点とも浅い抉り込みをもち、作りは精巧である。打製石斧は全て短冊形を呈し、６、９～11が原石面を残し、５は磨耗痕を残している。加工は粗雑である。大型粗製石匙14は、縦形で、扁平な剝片を使用している。磨石15は、全面極めて丹念に研磨され、光沢を帯びるほどである。凹石16～18は３点とも楕円形の礫を用い、16、17は２ケ所に、18は４孔一連に打痕の集中による凹みをもっている。磨製石斧は２点とも定角式で、１、２とも欠損部の少ない完好品である。石棒は、周囲をわずかに磨いたもので、欠損品。

(11)　第11号住居址（第71、72図）

石鏃１、打製石斧１、磨製石斧１、凹石６の計９点の出土があった。

石鏃４は、長さ2.9cm、底辺への抉りの少ない優品で、極めて鋭利である。打製石斧５は原石面を残した粗雑品。磨製石斧は長さ17cmの大形品で、今回の調査で出土した磨製石斧の中では最も大きなものである。研磨は左上から右下へという斜めになされ、中心線を境として、大きく左右２面に分けて研磨がなされている。凹石は、７、９、１、２が楕円形の、また８、10が細長い礫を使用している。６点とも打痕が集中して凹孔となったもので、７、９、１、２の楕円形を呈するものは凹孔がほゞその中心部にあるのに対し、８、10の細長いものは凹孔が中心部からずれており注意される。

第68図　第８号，９号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	８号住	石鏃	黒曜石	20	18	5	
2	〃	〃	〃	28	15	4	
3	〃	〃	〃	34	21	4	
4	〃	〃		21	21	6	
5	〃	打製石斧	硬砂岩	110	55	20	
6	〃	〃		120	57	16	
7	〃	〃	珪質頁岩	55	40	7	
8	〃	〃		71	45	9	
9	〃	〃	頁岩	51	34	7	
10	〃	縦型石匙	〃	48	67	7	
11	〃	横型石匙	硬砂岩	112	40	7	
12	〃	磨製石斧	蛇紋岩	47	29	10	
13	〃	〃	〃	94	49	21	
14	〃	凹石	安山岩	110	99	65	
15	９号住	磨製石斧	硬砂岩	114	47	27	
16	〃	石皿	安山岩	120	108	60	
17	〃	砥石	硬砂岩	220	196	60	

⑿　第12号住居址（第71、72図）

石鏃６、スクレイパー１、磨製石斧１、打製石斧６、大型粗製石匙１、凹石５、磨石１の計21点が出土している。

石鏃は、２～６は長さ1.0～15でやや小形品であるが、７、８は2.0～3.0cmの長身で、８は欠損部のないみごとな石鏃である。スクレイパー９は、部厚い剝片の縁辺に加工を施し、刃部としている。打製石斧は、全て短冊形で、11～15は原石面を残す。他の住居址の打製石斧と比較し、形態的に整っている。大型粗製石匙17は、肩にわずかな抉りを入れ、つまみ部を作出している。凹石は、１、５が楕円形、３、４が細長い礫を使用している。１、２は磨耗による凹孔であり、３～５は打痕による凹孔である。

⒀　第13号住居址（第72図）

石鏃１、打製石斧１、凹石３の計５点が出土している。

石鏃７は、抉りをわずかに入れ、部厚い剝片を使用した粗雑なものである。打製石斧８は、左辺の中央に小さな抉りを入れている。この部分のみが磨耗している。凹石９～11の３点とも楕円形を呈する。９、11は磨耗による凹孔を有し、ともに凹は大きい。10は打撃の集中により中央にやや大きな凹みが作り出され、他は不鮮明な凹みとなっている。

⒁　第16号住居址（第73図）

凹石８、磨石２、磨製石斧１、砥石１の計12点が出土した。

凹石は８点とも楕円形の礫を用い、７を除いてほゞ中央部にそれぞれ凹孔を有する。１～４、６、８は打撃による凹孔、５、７は磨耗による凹孔で、５は大きな凹孔となっている。これら凹石のうち１、４はその表面を研磨しており、磨石としても使用したことがうかがえる。

磨石９は、球形の礫の下面および右辺を研磨しており、いわば曲面的な磨面を残しているのに対し、10は左辺のみに幅2.4、長さ６cmにわたり、平坦な研磨面を残している。両者の磨面形態の相違は、その用途とも関連して注目される。

磨製石斧は、小形の定角式で、研磨は胴部は上下方向に行われているのに対し、刃部付近は斜めになされている。他の磨製石斧は、概して胴部は斜めに研磨がなされていたのとはその研磨の方法に相違が見い出せる。製作技術の違いを示しているものと考えたい。

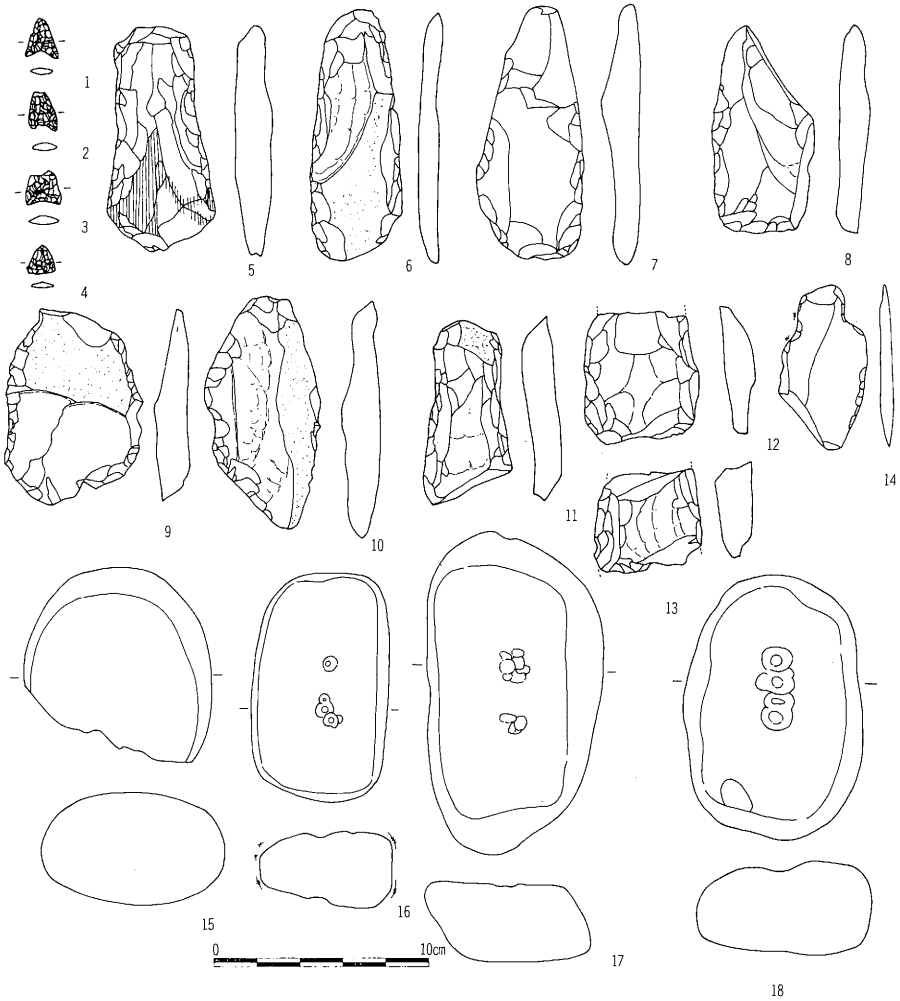
砥石は、幅0.5～1.0cmほどの溝状の砥面を有し、これが交叉するような形で幾本も残されている。

⒂　第17号住居址（第74図）

凹石が１点出土したのみである。１は、角ばった礫を使用し、中央部に磨耗による大きな凹孔が１孔あり、また右側辺には同様のものが２孔存する。

⒃　第18号住居址（第74図）

打製石斧が３点出土している。完形品は２のみで、３は頭部を、４は刃部を欠いている。２は短冊形、４は撥形で、２～４の３点とも原石面を残している。３は刃部に、４は両側縁にそれぞ



第69図　第10号住居址出土石器

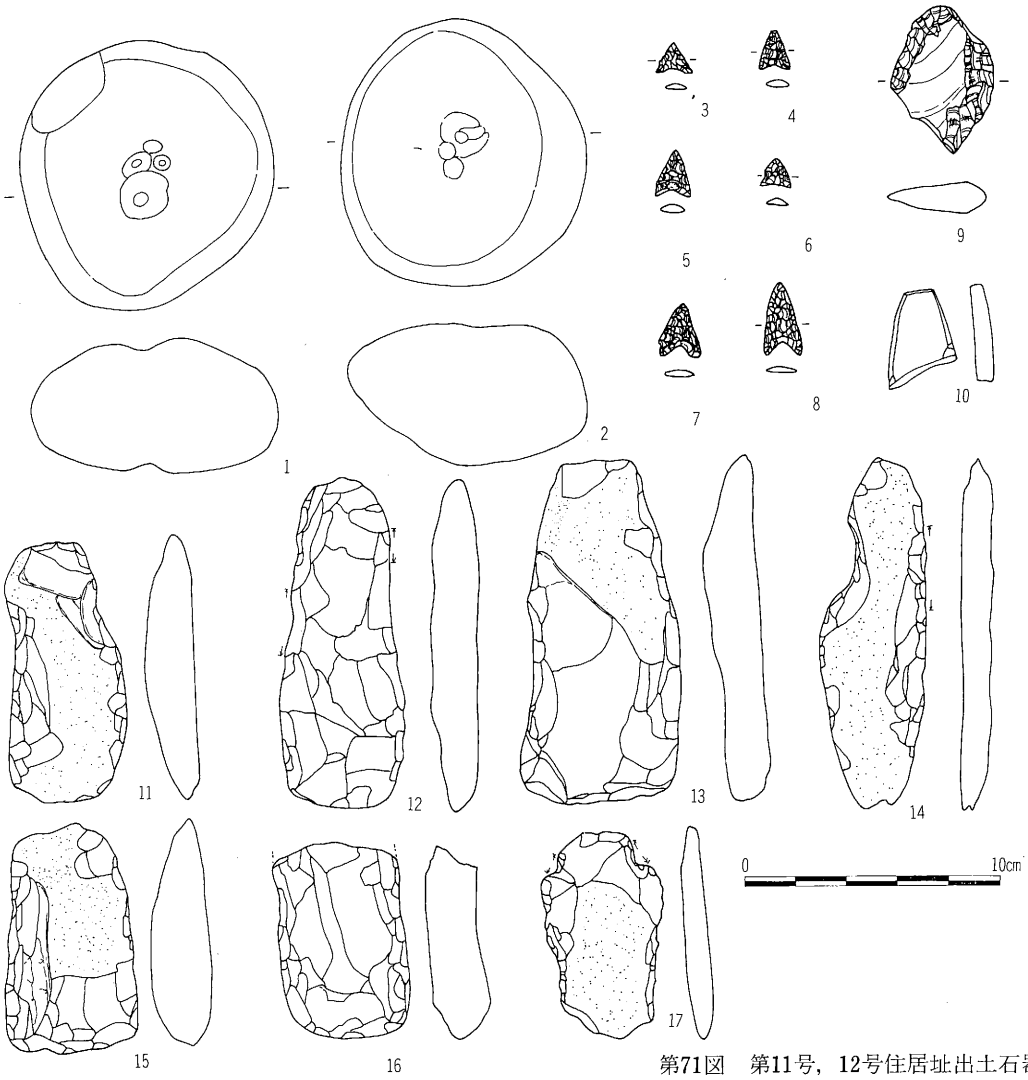
石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	10号柱	石鏃	黒曜石	19	15	3	
2	〃	〃	〃	18	14	3	
3	〃	〃	〃	16	17	4	
4	〃	〃	〃	14	13	2	
5	〃	打製石斧	頁岩	105	51	17	
6	〃	〃	〃	118	42	9	
7	〃	〃		118	51	17	
8	〃	〃		97	48	14	
9	〃	〃	頁岩	91	63	15	
10	〃	〃	細粒砂岩	108	55	18	
11	〃	〃	頁岩	85	41	15	
12	〃	〃		59	55	14	
13	〃	〃	頁岩	47	51	17	
14	〃	横型石匙	細粒凝灰岩	76	39	6	
15	〃	磨石	安山岩	92	86	53	
16	〃	凹石	火山礫凝灰岩	107	62	36	
17	〃	〃	安山岩	152	78	38	
18	〃	〃	〃	123	81	44	

第70図　第10号，11号住居址出土石器

石器観察表

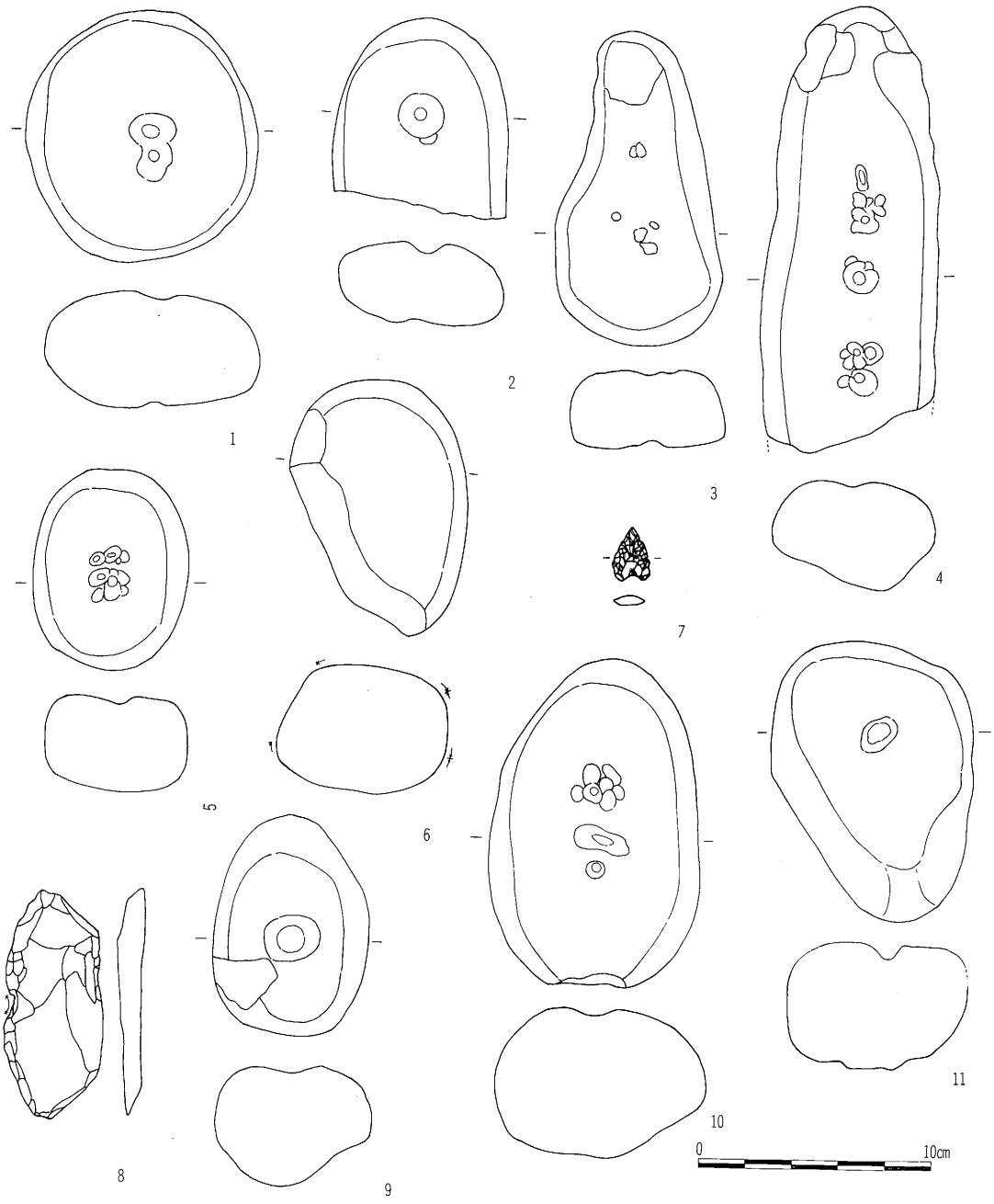
番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	10号住	磨石斧	石英閃緑岩	84	45	21	
2	〃	〃	硬砂岩	134	70	29	
3	〃	石棒	〃	98	29	29	
4	11号住	石鏃	黒曜石	29	16	3	
5	〃	打製石斧	頁岩	108	50	12	
6	〃	磨製石斧	緑泥片岩	170	64	26	
7	〃	凹石	安山岩	104	87	58	
8	〃	〃	火山礫凝灰岩	176	53	30	
9	〃	〃	安山岩	145	102	75	
10	〃	〃	粗粒砂岩	151	47	37	



第71図　第11号，12号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	11号住	凹石	安山岩	106	98	53	
2	〃	〃	安山岩	106	95	57	
3	12号住	石鏃	黒曜石	12	14	2	
4	〃	〃	チャート	15	12	3	
5	〃	〃	黒曜石	18	14	3	
6	〃	〃	〃	12	13	3	
7	〃	〃	〃	22	17	3	
8	〃	〃	〃	29	15	3	
9	〃	スクレイパー	チャート	58	40	13	
10	〃	磨製石斧	安山岩	38	27	7	
11	〃	打製石斧	硬砂岩	103	47	20	
12	〃	〃	頁岩	131	50	18	
13	〃	〃	〃	136	62	21	
14	〃	〃	〃	139	41	13	
15	〃	〃	〃	90	52	24	
16	〃	〃	〃	78	50	23	
17	〃	〃	〃	83	49	10	



第72図　第12号，13号住居址出土石器

れ磨耗痕を残している。

⑰　第19号住居址（第74図）

大型粗製石匙が１点出土したのみである。５は、長さ11.4cmの縦形の大きな石匙で、両肩にわずかな抉りを施し、つまみ部となしている。抉り部は磨耗している。加工は粗雑で、部厚い。

⑱　第21号住居址（第74図）

大型粗製石匙が１点出土している。６は、長さ9.1cmの縦形で、抉りを入れ、つまみを作り出している。薄い素材を使用し、剥片の周辺のみに加工を施している。

⑲　第22号住居址（第74図）

７、８の打製石斧２点が出土している。ともに刃部を欠いている。

⑳　第23号住居址（第74図）

凹石が１点出土している。９は、細長い礫を使用し、打撃痕による凹孔が表面２、裏面２がある。

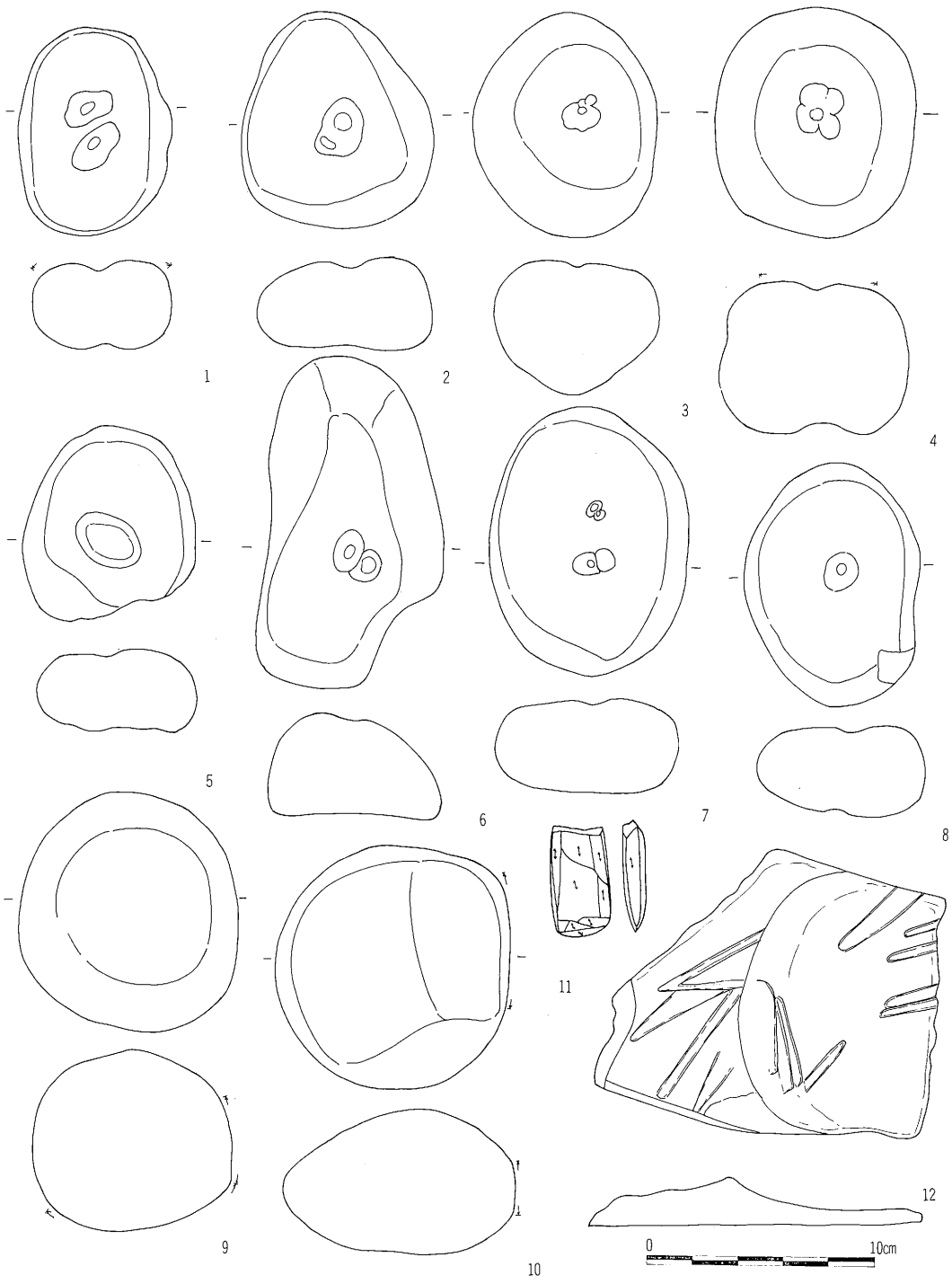
（小林康男）

石器観察表

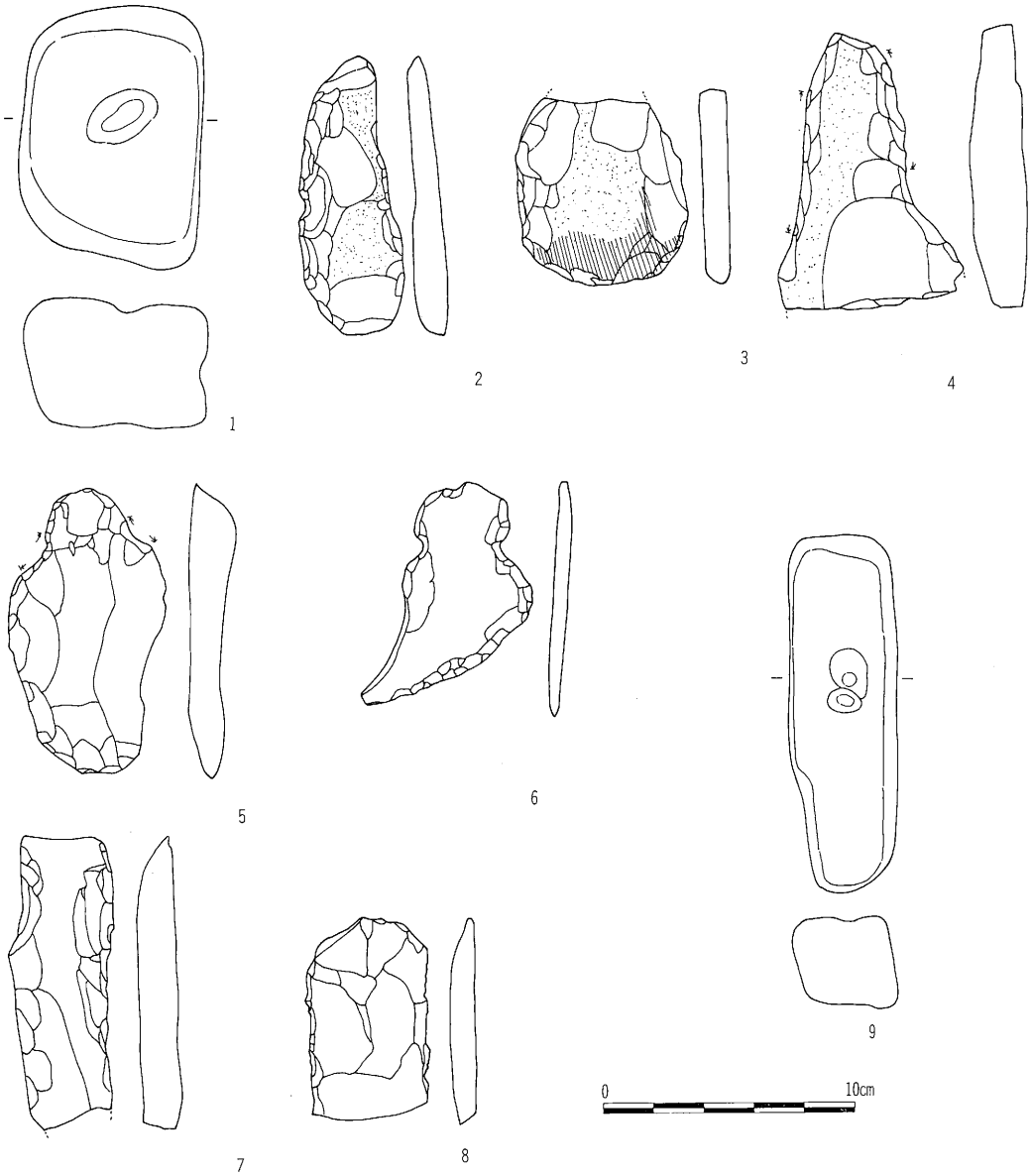
番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	12号住	凹石	礫岩	108	94	51	
2	〃	〃	礫岩	86	71	34	
3	〃	〃	安山岩	136	68	34	
4	〃	〃	安山岩	192	70	47	
5	〃	〃	〃	87	62	42	
6	〃	磨石	〃	110	75	55	
7	13号住	石鏃	黒曜石	24	17	5	
8	〃	打製石斧	頁岩	99	42	11	
9	〃	凹石	安山岩	95	69	52	
10	〃	〃	〃	141	93	64	
11	〃	〃	〃	120	79	55	

石器観察表

番号号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	16号住	凹石	安山岩	92	68	39	
2	〃	〃	火山礫凝灰岩	96	85	41	
3	〃	〃	安山岩	99	80	60	
4	〃	〃	〃	100	87	66	
5	〃	〃	〃	86	75	37	
6	〃	〃	〃	147	78	46	
7	〃	〃	〃	119	78	43	
8	〃	〃	〃	107	78	40	
9	〃	磨石	凝灰岩	106	97	79	
10	〃	〃	安山岩	107	104	65	
11	〃	磨製石斧	粘板岩	49	26	9	
12	〃	砥石	細粒砂岩	150	125	22	



第73図　第16号住居址出土石器



第74図　第17～19，21～23号住居址出土石器

石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	特徴
1	17号住	凹石	安山岩	105	73	51	
2	18号住	打製石斧	頁岩	111	40	13	
3	〃	磨製石斧	〃	75	69	11	局部磨製
4	〃	打製石斧	硬砂岩	111	74	21	
5	19号住	〃	細粒砂岩	114	64	18	
6	21号住	縦型石匙	頁岩	91	52	6	
7	22号住	打製石斧	〃	118	46	17	
8	〃	〃	〃	80	50	10	
9	23号住	凹石	安山岩	142	43	36	

3） 土製品・石製品（第60図）

(1) 土　偶

土偶の頭部と右腕12は21号住の炉の直上付近の覆土から出土した。黒褐色、胎土には、長石、雲母、石英を含み、焼成は良好である。頭部については、大きさは、縦8.6cm、横10cm上部の右側が少しかけているが、正面には、目尻の垂れた目、写実的な鼻、ほおには、左右に沈線が施され、口の回りにも沈線がある。鼻と口がかなり離れており、目が垂れ、人間の顔をデフォルメしており、ユーモラスな顔をしている。首には、左、中央、右に沈線が三本ある。側面は、耳の上に渦巻の文様があり、耳は、三段になっている。首には、渦巻文からの沈線が続いている。後部は、中央が突起しているが上部は欠けている。上半分は欠けているが、逆Ｖ字型に沈線があり、髪の毛を表現しているようである。突起部の下には、沈線がいりくんで表現されており、中心には、渦巻文がある。この頭には、上から下まで穴が貫通しており、棒を串刺しにして、製作したと考えられる。右腕は、大きさは、長さ7.2cm、手の平の高さ4.6cm、手部分が指一本欠けている。正面には、腕の部分には、縁に沿って沈線があり、手の平には、横に７本、縦に１本沈線がある。裏には、正面同様の沈線が施されている。

(2) 土　　鈴

10号住のピットの覆土内から、全体の二分の一程出土。表面は、明褐色で、一部にすすが付着、内部は全体にすすが付着している。横5.4cm、縦2.8cmの大きさである。胎土は長石、石英を少々含み、焼成良好。表面には、全体的に、横に沈線が施されている。鈴特有の穴のあいていた様子は、うかがえない。

(3) 蓋

３号住の北壁近く、床面付近の覆土から出土。大きさは、径5.4cmのほぼ円形で表面は、すすの付着が一部あるが、全体的に明褐色。裏面は、暗褐色である。表面には、左右対称に突起があり、その突起の上下から、刺突文が中心に向って半円を描いている。この遺物の用途は不明だが、二ケ所の突起は、把手のあとで、形状から察して何かのふたと考えられる。

(4) 異形石製品

第６号住居址の床面から10cm浮いた覆土中より出土したものである。上辺は大きな扶りを入れ、下辺には小さな扶り込みを２ケ所に入れ、特異な形態を作出している。縁辺には磨耗痕も観察されず、実用品であったか否か断定し難い。意識的にこうした特異な形態を作出したものとも受け取れる。

（三村　洋）

5） 調査の成果と課題

（1） 第4号住居址について（第75・76図）

本址が今回の調査で唯一の敷石住居址であるため、ここでは調査中に感じたこと、気のついたこと等を若干述べることによって本文内の本址報告文の追補としたい。

床　面　床面をローム直上とした点であるが、覆土は柔かい黒褐色土で、掘り進めていく途中に床面らしいものはなくローム上面に達してしまった。それに石がローム直上に敷かれているため、これを一応床面としたのである。しかし、周辺に散在する石の下面はほぼ敷石上面と同レベルであることから、ローム上面を掘り方と考え敷石上面を床面と考えた方が妥当かと思われる。

敷石は住居址中央部やや北寄りにあり、検出当初は住居廃絶後石の一部が抜かれて現在の形になったものではないかと推定された。しかし、全掘後、その形態を詳細に検討してみると、現在の姿が構築当初の形態をそのまま伝えているのではないかと思わざるを得ないのである。

なぜなら、第1に遺されている敷石の石の密度が高い点である。廃絶後に石が抜かれたと考えるならば、偶然にもこの一画だけが無傷で残ったことになり、あまりにも不自然なことである。大きな石の間を小さな石で埋める等、かなりていねいに構築されているだけに、結果的にここだけが残ったというよりも最初からここだけであったと考えた方が無難ではないだろうか。また、炉の脇つまり集石の北東隅にあたる所に蜂ノ巣状の凹石を置き北西隅には砥石（下面が集石上面と同レベル）、南西隅に埋設土器を配置していることは意図的なものを感じさせる。炉址を境として東側には敷石がみられないので、炉址を頂点として敷石全体を見た場合、欠落のない一つの遺構を思わせるのである。

そのような先入感を持って周辺に散在する石をみると、炉と埋設土器を結ぶ敷石主軸線の北東側延長線上を除いた形で、規則性を持って敷石を囲むように配置されているように見えてくる。では一体、敷石以外の床面はどうであったのであろうか。先にも記したように覆土を掘り進めていく段階では床面らしきものは検出することができず、ローム上面も踏み固められたというには程遠いものであった。住居址床面に植物のような有機質の物を敷いて居住したという説があるが、ここもそのようになんらかの有機質を敷いていたとも考えられる。しかし、居住者がもしこの住居址を普通にかつ長時間にわたり一日の居住空間として利用していたとしたならば、直接の土間であったりあるいはそれが薄い動物の毛皮のようなものであった場合よりも顕著ではないかも知れないけれども、人間の体重や置かれている物の重み、つまり上からの圧力によって敷かれている物を通して土は踏みかためられた状態のように多少なりともなってもよいと思う。竪穴住居址が廃絶され埋没するまでの間に、少なからず受けるであろう自然からの影響というものは推察すべくもないが、断定的なことを書くとしたなら、この住居は居住者にとって日常の生活の場ではなかったといえるのではなかろうか。

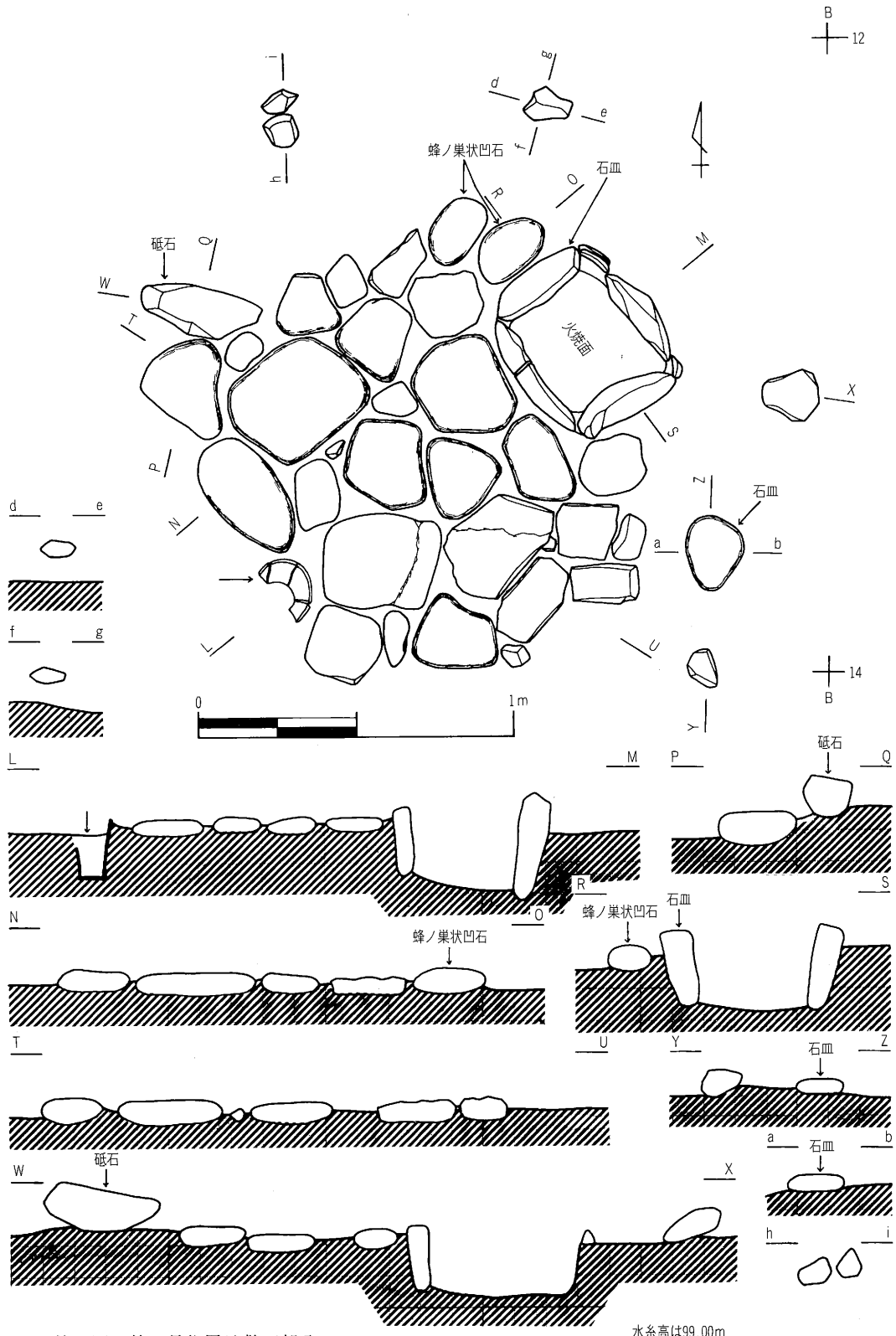
炉　炉は集石の北東辺中央部にあり、平板な石を縦にして組み合わせた深型のものである。北

面の石は石皿を転用したものであった。この炉址内覆土には焼土が厚く堆積しており、火焼面(炉址掘り方と一致)は、よく焼けてかつ硬く締った良好な面としてとらえることができた。長期間の使用もしくは強力な火力を想像させた理由である。しかし、四面にある炉石のうち一見して焼けているとわかるのは西面の石だけであった。この石はヒビ割れを生じており、二つに割れていた。これは何を意味するものであろうか。もっとも焼けている石が敷石の側の石であることははたして偶然であろうか。考えようによっては、敷石の中央部に人が坐り西側から炉に薪をいれたということが想定できないだろうか。覆土内の焼土分布からは当時の状況を推定できうる資料を得ることはできなかった。

敷石遺構　集石は何らかの目的を持って人為的に石が集められた状態（農耕が普遍的に行なわれる時代においては畑作等の障害となる石を畑の隅等に固めてすてることがあるが、これも含まれるであろう）を指して呼んでいる用語である。この集石の概念の中で、住居址という居住空間の中に明らかに平坦に敷くという目的を持って極力平板な石を選び、ときには立石等を伴い、例外もあろうが原則的には炉址を附属して形成された集石を敷石住居址と呼んでいる。敷石住居址の性格についてはいろいろな説が現在まで出されているが確定されうる説は現段階ではない状態である。まず、敷石上での日常の生活を考えて見る時、あくまでも現代人的な物の見方であるが、やはり床はデコボコしているより平坦の方が居住性はすぐれている。キャンプへ行った時、テントの中にたとえ物を敷いたとしても、土の上面がデコボコしていれば落ちつかないものである。ワラ状の植物を敷いた場合マット的役割を果たすかもしれないが、硬い石のデコボコの上でごく普通の居住者が日常的な生活をすることに満足するであろうか疑問である。板敷の床の場合は、精度の高い水平が要求されうることは言うまでもない。本址の場合においては、床面の項で記したように日常的な居住については一応否定的な見解にしておきたい。

次に、敷石遺構の全体像について見てみると、敷石主軸線を北東側に延長すると、小竪穴群が存在している。敷石内における炉の位置をあくまでも中心として考えかつ周辺に散在する石をこの敷石に附属するものとした場合、北東方向を意識しているように思えるのである。本址で検出された3個のピットのうち、P_1は石の一部が重なっているため本址に附属するものと考え、P_2はこのピットのために壁が張り出す結果になっている。また、P_3は壁との関係から本址のものと推定されたが、近接して小竪穴群があるため本文においては断定をさけた。これらのうちP_1の位置が住居址北東隅であるため、上屋構造を考えてみればおもしろいかもしれない。

前述の線をさらに延長して北東方向に目をやると、柿沢東遺跡のある台地の北辺を流れる川の対岸で、ちょうど同時期に埋文センターによる中央道長野線の埋蔵文化財発掘調査が行なわれており、そこの御堂垣外遺跡でも敷石住居址が検出されている。川をはさんでいると言っても直線にして500mと離れていない場所で、距離的には遠くはない場所である。時期的なものがはっきりしないので、なんとも言えないが、集落構成上では興味あることではなかろうか。さらに先は真近に迫る東山の山々である。



第75図　第４号住居址敷石部分

以上とりとめのないことを書きつらねてきたが、平面的な面をとらえて感じたことで、今のところ深く掘り下げた根拠を有していないことは言うまでもない。御教示を得られれば幸いと存ずる次第である。

次に松本平における過去の敷石住居址の報告例であるが、現在までに4遺跡から検出が報告されている。

第1は、平出遺跡第二・三次調査でのもので3.5×3mの配石址として報告されている。実測図を見ると柄鏡形であるが「周囲に並列した礫石の配置は、拳大か或は人頭大の河原石を、面を揃えずに並べてある。その点は諸国に往々存する敷石住居址とも相違しており、住居関係の設備を見ることは出来ない」としている。

第2は、葦原遺跡第一・二次調査での第1・3・4号の3軒で、第1号は石を立て並べた外縁部を有する円形住居で東側の炉石のみが割れている。第3号は実測図上では柄鏡形である。3号・4号とも埋甕を有する。この調査は松商学園高等学校地歴部の活動として実施された小規模発掘であるため、集落内における敷石住居の位置関係は不明である。

第3は、荒海渡遺跡の第1・2号敷石遺構と報告されている2軒である。第1号は柄鏡形と考えられ、石を立てて縁辺を構成している箇所も見られる。鉄平石が一部に使用されている。第2号は円形とみられ、近くを流れる梓川の石が多用されていると報告されている。両者ともに上部に集石が見られる。これら2軒は集落址のある台地の南端部にあり、位置的には集落のはずれといってもよい場所に存在している。ただ第1号の場合、もし柄鏡形の柄の部分を入口と仮定した場合は台地中央部つまり北西方向を向く形になろうか。

第4は、こや城遺跡の第1・2・3・4号住居址の4軒である。中世の山城の推定二の曲輪平坦部から中世の遺構とともに検出されたもので、第1・2・3号とも板状の石を敷き、その間に小石を詰めるていねいな構成であるが、住居址の輪郭はつかめていない。第4号は円形で四隅に立石を伴っている。各住居址とも石を縦に組み込んだ深形の炉を有している。この調査では縄文時代の遺構はこの敷石住居4軒のみで、特異な遺跡を連想させるが、調査目的の都合から平坦部の西側半分を調査したのみで東側は未調査で残されている。

以上のように現在まで4遺跡10軒の住居址が報告されているが、未報告のものがまだあるかもしれない。これらのうち、平出遺跡配石址、葦原遺跡4号址、こや城遺跡1号址の3軒でピットの存在が報告されているのみで、他の7軒ではピットは検出されていない。

〔引用文献〕

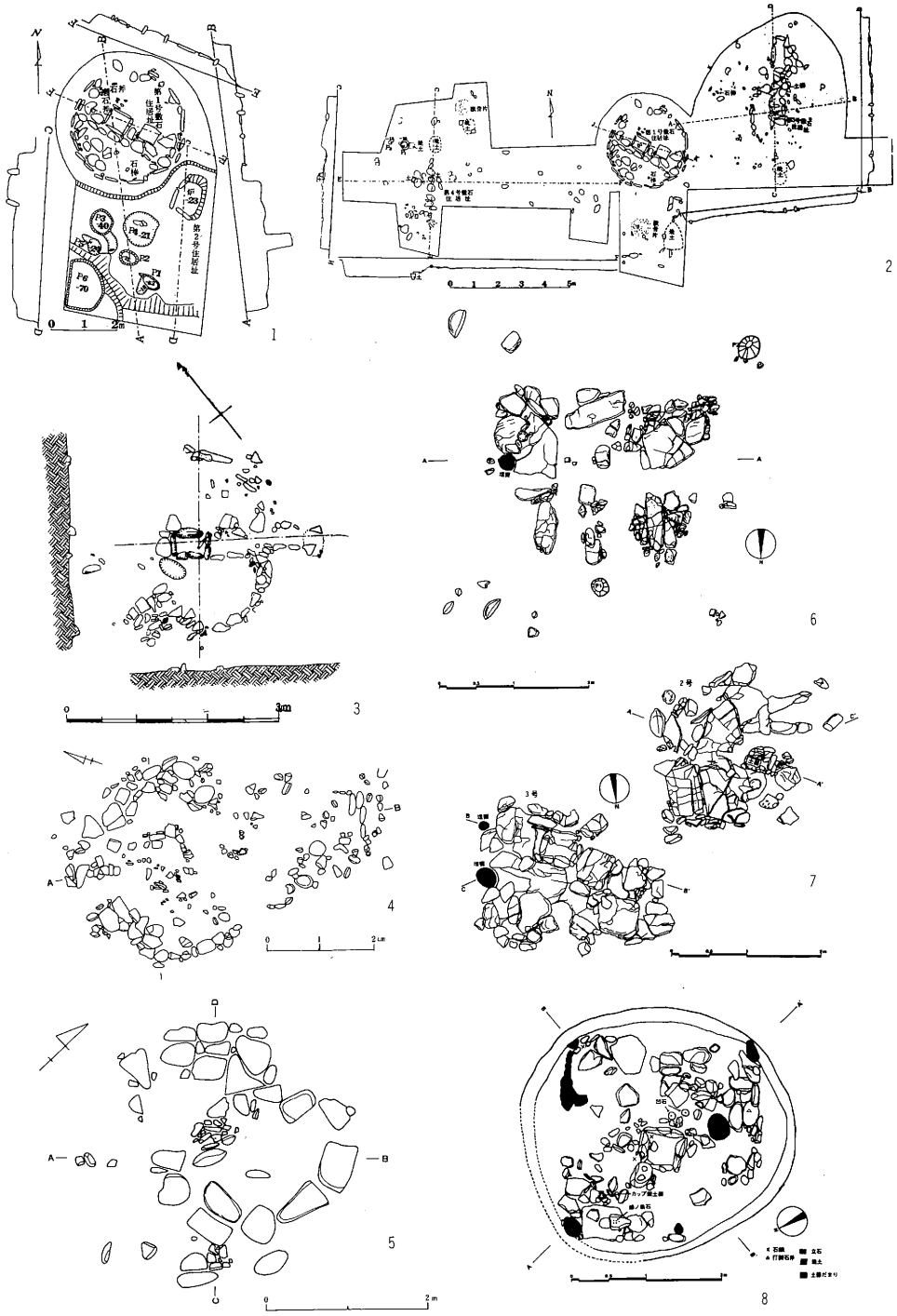
平出遺跡調査会「平出」　昭和30年

小松　虔「長野県東筑摩郡波田村葦原遺跡第一・第二次調査概報」信濃18—4　昭和41年

梓川村教委「荒海渡遺跡発掘調査報告書」　昭和53年

明科町教委「長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書」　昭和54年

（山本紀之）



第76図　松本平の報告の敷石住居址（各報告書より）
葦原（1－1号，2－1・3・4号），平出（3－配石址），
荒海渡（4－1号敷石，5－2号敷石），こや城（6－1号，7－2・3号，8－4号）

(2) 焼　土（第77・78図）

遺　構　先述したように、今回の調査では、3号・6号・10号住居址において、覆土内より多量の焼土が検出された。これら焼土は、ほとんどが覆土中層、上層からの出土であり、炭化材、炭粒の存在も稀薄であることから、単なる焼失住居に起因するものとは想定し難い。また、この3軒の住居址は、今回の調査において最も多量の遺物の出土をみており、土器廃棄と焼土との関連が想像される。以下、覆土内における焼土について、若干の考察を行ってゆきたい。

(1) 3号址覆土包含焼土

典型的な吹上パターンを示した3号址では、緩やかなレンズ状堆積を呈する第III層と、直下の第II層との間に、多量の完形、半完形土器の出土をみている。焼土はこの第III層内に形成され、住居址内南寄りに2.5×1.1mの規模で存在した。焼土の堆積は北側で厚く10cmを計るが、南側では極めて稀薄で、暗褐色土層内にわずかに焼土粒として存在する。また、焼土の存在する範囲は、竪穴内で最も多くの遺物を包含する場所であり、一括廃棄された土器で覆いかぶせる状態で焼土が検出された。

以上の事実から、3号址においては、竪穴埋没過程のある一時期に土器が一括投棄され、その後第III層の堆積する過程で、土器廃棄からさほど時を経過しない時期に焼土が形成されたと考えられる。焼土形成が何に起因するかは判然としないが、凹地を利用しての火を焚く行為、また土器廃棄に伴う行為、あるいは凹地への焼土の投げ込みなど、様々な原因が予想されよう。

(2)焼土Ⅰ～Ⅴ

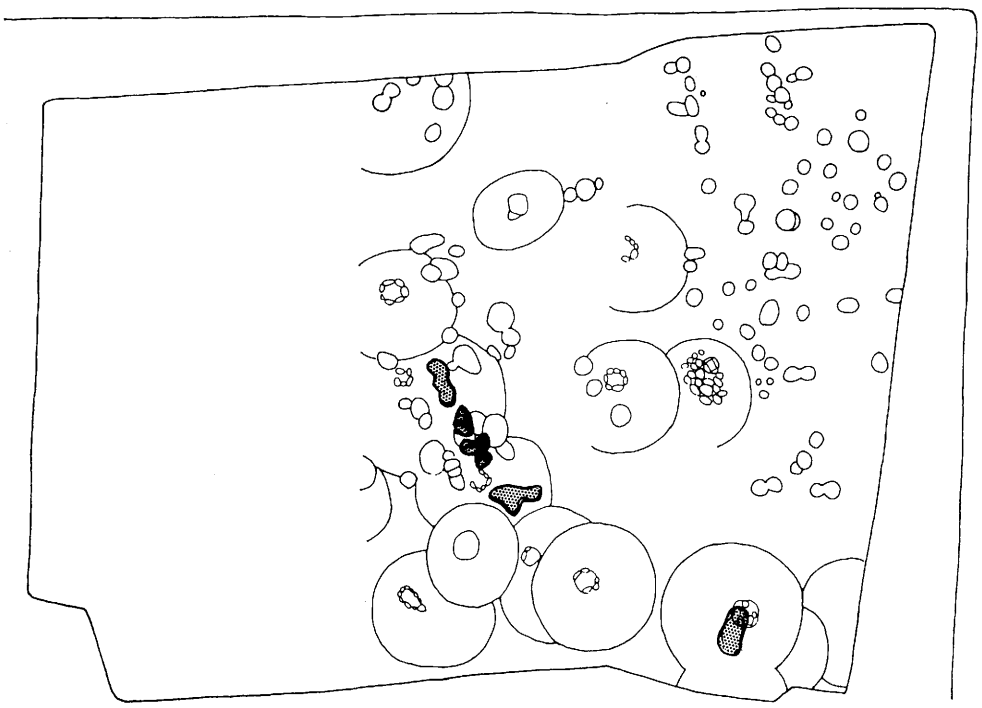
6号址から10号址にかけては、合計5ケ所にわたる焼土が検出され、発見順に焼土Ⅰ～Ⅴと仮称した。このうち、焼土Ⅰ、IIについては、すでに表土削平の段階で鮮明な焼土層が確認されたので、セクションを取り、変色の鮮度によってⅠ～III層に分けた。両住居址の重複状態から焼土Ⅰは6号址、焼土III、IV、Vは10号址覆土に付随するものと考えられるが、焼土IIについては両住居址の覆土にまたがるものと推察される。

焼土Ⅰ：平面形は250×100の不整形を呈し、厚さは20～30cmを計る。また、図示できなかったが、焼土Ⅰ下層にも処々に焼土塊が存在し、一部は床面上に堆積が観察され、床が、厚さ2～3cmにわたって焼成をうけていた。焼土の中心が床面上40cm程度の上層に存在し、途切れながらも床面に達することに注意されたい。床直上の焼土については、あるいは上層の焼土と別の性格も考えられよう。

焼土II：平面形は145×80の不整楕円形を呈し、厚さ20cmを計る。焼土Ⅰと同様に覆土上層に堆積しており、中心は鮮朱色を呈する。

焼土III：平面形は115×65の不整形を呈する。厚さ約15cmを計り、10号址覆土下層に存在する。焼土Ⅰ、II、IVと同様に強い焼成を受けており、中心は鮮朱色を呈する。

焼土IV：平面形は60×50の楕円形を呈し、厚さ20cmを計る。10号址床面直上に堆積しており、



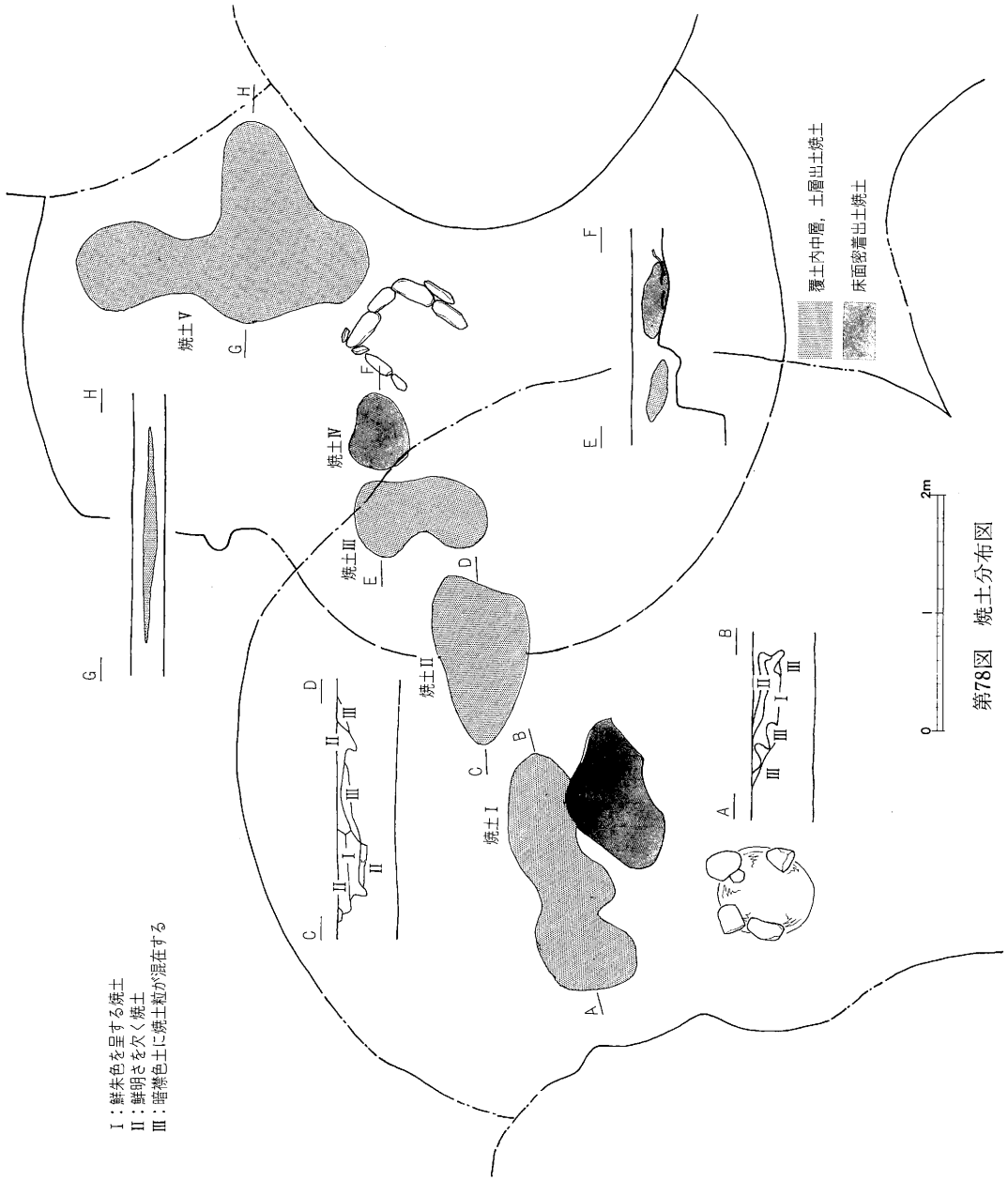
第77図　焼土分布状態

焼土内には２個体の半完形土器を包含する。

焼土Ⅴ：10号址南東寄りに、東西240西北170の不整形の範囲で存在し、焼土は覆土中層に形成される。厚さは最高15cmを計り、部分的に厚い堆積をみるが、所々稀薄な部分も存在する。焼土Ⅰ～Ⅳとは若干異なる様相を示すと言えよう。

このように、焼土ⅠとⅡ、焼土ⅢとⅣについては、多くの類似点が窺えた。焼土Ⅰ・Ⅱは、レベルの高さ、また切り合い関係より、新住居である10号址の埋没が、かなり進んだ段階において焼土が形成されたと考えられる。なお、この焼土Ⅰ・Ⅱの周辺からは、多数の完形、半完形土器の出土をみたが、焼土との関連は薄いと考えられる。焼土Ⅲ・Ⅳはともに隣接して10号址床面上に存在しており、覆土堆積過程の初期に形成されたと推察される。特に焼土Ⅳについては内部に半完形土器の存在を認めるが、この土器は焼成をうけ黄褐色に変色しており、焼土の形成が土器廃棄直後、もしくは同時であることを窺わせる。焼土Ⅰ～Ⅳは、いずれも厚く堆積し、鮮朱色を呈することから、単なる投げ捨てによるものとは考えられず、その場所において、強力な焚き火がなされたと推察されよう。焼土Ⅴは覆土中層に広範囲にわたって出土したが、遺物の出土は焼土層上面からの出土が多く、焼土は土器が一括投棄される以前に形成されていたと考えられる。

以上、今回の調査で住居址覆土内より検出された焼土について概観したが、このような例は、



第78図　焼土分布図

第3表　焼土検出住居一覧表

単位は(cm)

遺跡住居址名	所在地	焼土の規模	厚さ	焼土出土層位	土器出土状態	時期	備考
船霊社11号住	岡谷	80×？	30	覆土中層	吹上パターン	九兵衛尾根II期	土器廃棄後に焼土の形成
船霊社14号住	岡谷	100×80	30	覆土中層	多量・床面との間に間層を持つ	九兵衛尾根II期	報文には「作居廃絶後の投げ込み等」と記される。
小丸山6号住	塩尻	／	薄い	投棄土器直下面	吹上パターン	勝坂	土器投棄前に焼土の形成
居沢尾根1号住	諏訪郡原村	130×100	7～20	覆土中層	多量・検出面～埋土下層	曽利I	
平出ヲ号	塩尻	100×110 100×75	／	／	吹上パターン	中期後葉	大場磐雄は忌避廃屋と想定

他遺跡においても数例認められる。県内の縄文中期に限り、２、３の類例が確認できたので、第３表に集成してみた。

今迄、このような焼土についてはあまり関心が持たれず、報告書においても覆土の記述は極めて簡単なものが多い為、資料集収に困難が生じ、また、多くの遺跡にあたることも出来なかったので、わずかに４遺跡５例を確認できたのみだが、覆土内に焼土の存在する（焼失住居以外）住居について、簡単な傾向が窺えた。それは、ここに集成した５例の住居址は、いずれも多量の土器の出土をみていることである。そして、居沢尾根１住以外の４住居址では、すべて床面との間に10～20cmの間層を保って土器が廃棄されており、いわゆる吹上パターンを呈していた。今回の柿沢東遺跡における３、６、10号址も、いずれも多量の土器の出土が見られ、特に３号址は、典型的な吹上パターンの様相を呈している。

焼土の検出をみた各住居址の考察は、すでに平出遺跡７号住居址の報文において大場磐雄が、埋葬を行った忌避廃屋の可能性を示唆しているが、焼土については特別言及されていない。また、小丸山６号住の報文では、「六号址床面上に、中央がやや堅い状態で土壌の堆積が見られた時に焼土を残存させたある行為がなされ、その後に床面出土とさして型式のかわらぬ60余点の土器が極めて無作為に投棄されたこととなる」という調査者の所見がある。さらに船霊社14住の報文では、焼土は投げ込みによるものであるとの見解がなされている。これらの類例を概観すれば、焼土の形成は、土器廃棄とほぼ時を同じくして行われる例の多いことがわかる。しかし、わずかな類例で、一括廃棄土器と焼土を短絡的に結びつけるのは危険である。吹上パターンを呈しても焼土を検出しない住居址は数多く存在するし、また、住居廃絶後の凹地が、火を焚く場所に適していたとも考えられる。他にも、崩落した上屋の焼失、屋外炉また、船霊社14住で報告されている焼土の投げ込みなどを想定することも出来、焼土の形成については様々なケースが考えられよう。今回の調査では、この覆土内出土の焼土について不明な点が多く、その性格については十分に把握し得なかったが、今後、類似資料の増加に期待して再考してみたい。　　（前田清彦）

参考文献

高桑俊雄　青沼博之他　「長野県中央道報告書―岡谷市その４―昭和52、53年度」　1980

原嘉藤他　「長野県塩尻市小丸山遺跡緊急発掘調査報告」（長野県考古学会誌８）　1970

青沼博之他　「長野県中央道報告書―原村その４―昭和51、52年度」　1981

大場磐雄他　「平出」　1955

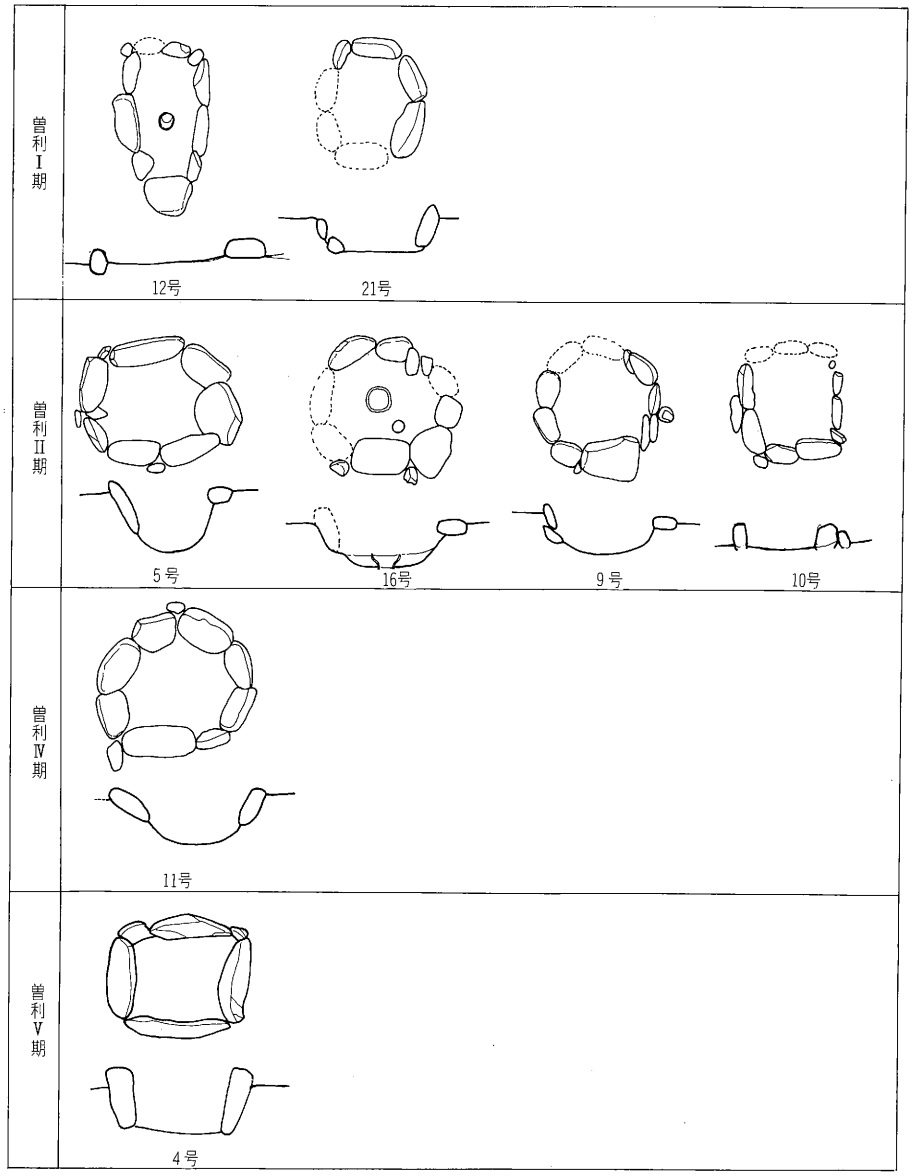
桐原健　「土器が投棄された廃屋の性格」　考古学ジャーナルNo.127　1976

(3) 住居と集落

(1) 炉について（第79図）

今回調査された23軒の住居址中、炉石が完全な形で残されていた、あるいは原形を推定し得る程度の破壊にとどまっているものは4・5・9・11・12・16・21号の7軒を数え、炉の変遷を考えるうえで良好な資料を提供した。以下、その推移を簡単に考えてみたい。

まず、各住居址の時期であるが、曽利Ⅰ期（12・21号）、Ⅱ期（5・9・10・16号）、Ⅳ期（11



第79図　炉の変遷

号)、V期(4号)となり、曽利III期の時期を欠いているが、中期後半をほぼ通史的に網羅することができる。

曽利I期　長方形石囲炉と楕円形石囲炉の2種があり、前者に12号、後者に21号が該当する。12号の長方形石囲炉は、炉内辺で、焚口と思われる平石を据えた所で30cm、奥辺で46cm、奥行97cmで、若干奥に行くに従いやや幅広となっている。炉石は垂直に立てて埋設し、掘り込みはほとんどない。焼土の厚さは4cmである。焚口の平石は38×32cmほどで、作業台としての機能ももっていたものと思われる。なお炉内中央部に土器の胴下半部(第49図3)が埋設されていた。21号の楕円形石囲炉は、炉内径で66×44cm、焚口はやはり平石を用いている。炉石は長さ40cm前後の大きなものを用い、掘り込みは摺鉢状に深い。I期は12号と21号にみられるとおり全く異った形態の炉が同時に存在している。

曽利II期　円形炉と方形炉がある。前者は5・9・16号、後者は10号が該当する。5号は、炉内径70×64cmで、使用している石は長さ62cmを最大に、小さなものでも30cmという大きな石を用いている。掘り込みも50cmと深く、焼土も12cmと厚い。焚口はやはり平石を2枚横に設置している。9号は、径70×70cmで、形態的には5号と酷似する。掘り込みは22cm、焼土は7cmと厚く、使用されている石は5号よりやや小さ目である。16号は、炉内径80×60cmで、5・9号と類似するが、中央部に深鉢形土器の胴上半が埋設され、内部は焼土が充満していた。以上の3住居に対し、10号は、炉内径66×60cmで、石材も小さく、掘り込みもほとんどみられない。強いていえば、10号は曽利I期の12号の、また、5・9・16号は21号の系譜をひいているとでもいえようか。

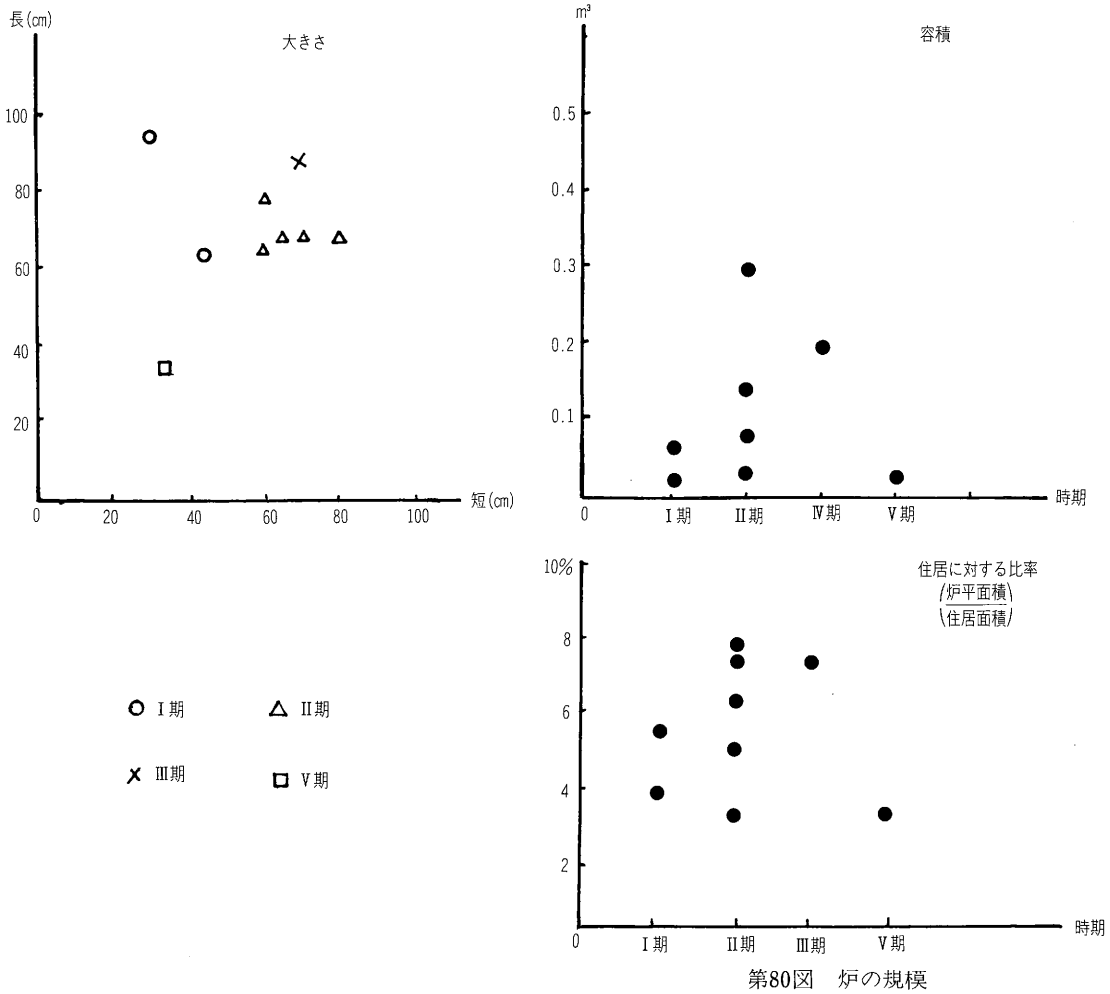
曽利IV期　11号が相当し、径80×70cmのほぼ円形を呈する。焚口は一枚の平石を横位に据え、炉石は40cm前後のものを用いている。掘り込みは29cmと深いが、焼土は2cmと薄い。IV期はIII期とほとんど変化がみられない。

曽利V期　4号の敷石住居址が相当し、方形石囲炉がある。ほぼ正方形を呈し、炉内径34×36cmで、前時期に比較し、著しく小形化する。掘り込みは25cm、焼土は4cmである。曽利I～IVまでの焚口は、平石を横たえて設置していたのに対し、V期では全ての炉石を縦位に埋設し、焚口部分は炉石上面をやや低目にしている。

以上、曽利I～V期の炉の形態変化をまとめてみると、長方形、楕円形→円形→方形という推移をたどることができる。

では、次に炉内の大きさ、深さ(容積)、そして住居址に占める炉の大きさの変化はどうかを第80図により検討してみたい。

大きさは、I期からII～IV期にかけて形態的に円形を呈することから全体的に一回り大きくなり、V期になり再び小形化する。こうした小→大→小という推移は、炉の平面的な大小のみでなく、炉の掘り込みについても言える。炉内の容積を出してみると、I期は12号(0.03m³)、21号(0.08m³)と小さいが、II期には5号(0.3m³)、9号(0.08m³)、10号(0.03m³)、16号(0.14m³)と



第80図　炉の規模

全般的に大形化し、5号などは12号の10倍という極大化したものとなる。この傾向は、次のIV期にも引き継がれ、11号（0.21m³）となる。しかし、V期になると、4号(0.03m³)と再び小形化する。I期からII期にかけて炉の実質的な規模が大形化するという背景には単に暖房の強化という原因のみでなく、当時すでにその技術が確立していたと推定されているトチ・ドングリ類のアク抜きに使用するための灰を多量に取得するという食料生産における必要性も大きな原因となったのではないかと考える。また、焚口となる場所が、V期を除き40cm前後の上面が平坦な平石を据えていることは、こうした堅果類の皮むきなどの作業台としての役割をもっていたのではないかと思われる。

また、住居空間に占める炉址空間の割合をみると、I期は3.6～5.6%を占め、II期になると3.0～7.6%と全体的に占有率が増加し、IV期には7.3%と横ばい状態である。V期は2%と小さくなる。このように住居空間もI期からII期にかけて変化が生じたといえる。

以上のように炉址を検討すると、柿沢東遺跡の中期後半に関する限り、曽利I期と曽利II—IV

期、そして曽利Ⅴ期の3段階区分が可能である。こうした炉の変化は、この時期にそれぞれ住生活、食生活に変化が生じたことを示しており、これらの活動に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。

(2) 埋　　甕（第81図）

今回の調査で発見された23軒の住居址中、埋甕が埋設されていたのは1・3・4・5の4軒であり、3号のみは重複のため2個体の埋甕が出土している第11図。時期的には、曽利II期が5号、II～III期が1号・III期の終末3号の1・IV期3号の2、V期4号であり、それぞれ若干の時期差をもちながら曽利II期～V期まで各1軒づつ継続して埋甕が存在する。この各時期1個という数量は住居址の発見数と関連するが、決して多い軒数ではない。むしろ少ないといえよう。埋甕の発見されなかった住居址は、意識的に埋甕に代るべきピットの存在があるかと精査したがこれといった成果は得られなかった。埋甕のない住居は、その住居継続中には埋甕を用いるような機会がなかったのか、あるいは埋甕をめぐる思考が柿沢東遺跡では決して一般的な行為ではなく、ある特定の住居にのみ埋設したのであろう。

さて埋設されていた土器は、II・III期にかけての1・5号がいわゆる唐草文系に属するもので、5号は天竜川流域の影響をもったものである。III～IV期の3号は2個とも加曽利E系に属するもので明らかに1、5号とは系譜を異にしている。この土器系統の違いは、甕の埋設場所にも現われており、唐草文系は南壁下であるのに対し、加曽利E系は西壁下に設置されている。佐々木藤雄氏のいう異系統土器の埋甕（『縄文時代の通婚圏』信濃33—9）の異系統とはどのような範囲までを含むかははっきりしないが、明らかに文様構成、形態の異なった土器が1つの遺跡で埋甕という目的のために使用されていることはここでも認めることができる。

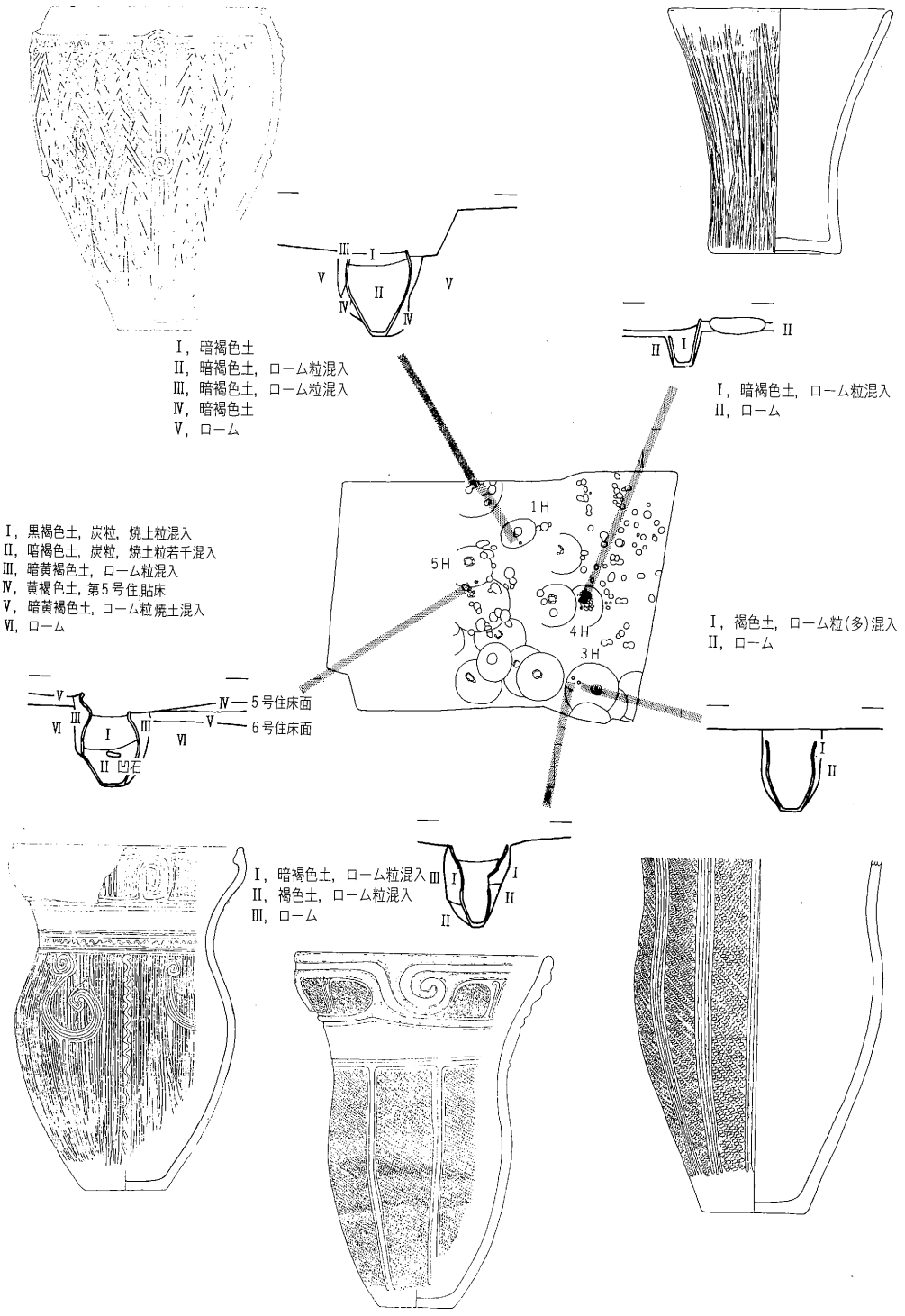
本遺跡の埋甕もこうした問題を考えるうえで貴重な役割りを果すものといえる。

(3) 住居の動き（第82図）

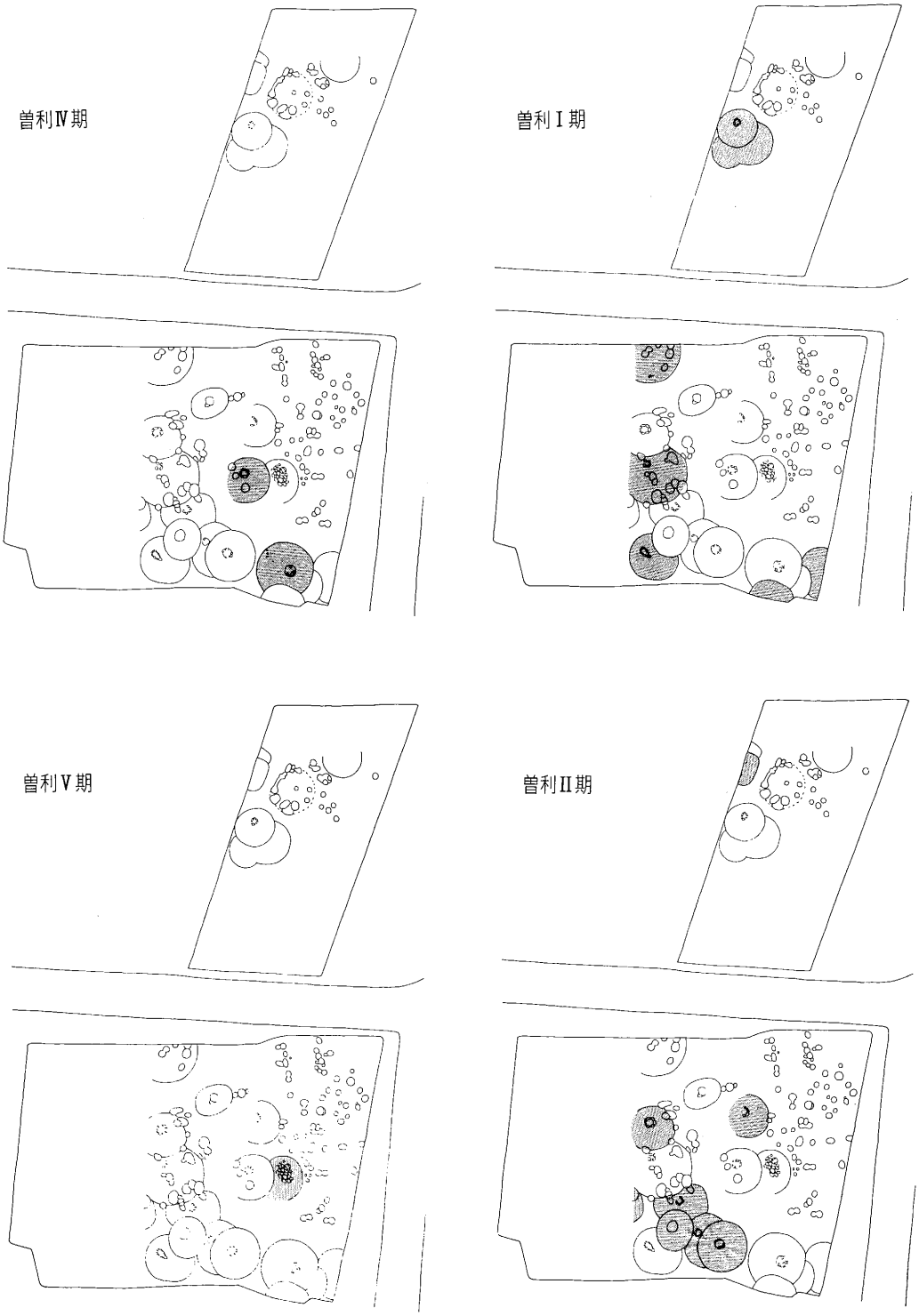
今回の調査は、およそ9,000㎡と推定される柿沢東遺跡の全面積の6分の1の1,500㎡を調査した。このような範囲での調査結果を基礎として集落全体の様相を把握することは不可能に近い。そこで調査地区内における集落の動きを簡単に検討してみたい。

遺構の配置、調査は東西に延びる小舌状台地を南北方向に幅40mにわたって実施され、ちょうど遺跡の一角を台地縁辺から縁辺にかけて横断する形で発掘が行なわれたことになった。これによって発見された遺構は、住居址、小竪穴があり、その配列は大雑把にいって小竪穴群を中心部に包み、その周囲を住居址群が取り囲むという典型的な縄文中期集落の一端を示している。小竪穴は、第3号小竪穴の硬玉製大珠の発見によっても推測されるが、墓地的性格の強いものであろう。したがって、いわゆる中央広場に墓地を設定し、それをめぐって居住区が展開していたことがうかがえる。

時期的推移　曽利Ⅰ期　2・6・12・13・17・19～21がこの時期に属し、本遺跡において最も住居址数の多い時期である。これ以前の時期の住居址は調査範囲内には1軒もなく、また遺物も



第81図　埋甕出土状態図



第82図　住居変遷図

認められなかったことから、この時期にこの遺跡は初めて居住地区とされたといえる。しかも、集落を営み始めたこの時期が最も繁栄した時期だったようである。19～20号を除き、重複することがなく、各々の住居は単独に孤立している。住居建築用地の占地が比較的自由であったために重複することがなかったのであろうか。この時期の住居は、これ以後の住居地域より外側に位置している。なお、炉石の遺存状態をみると、12・21号が良好に残されており、これらの住居がⅠ期の中では最も新しいものといえるかもしれない。

曽利Ⅱ期　5・7～10・15・16・22号が相当し、Ⅰ期に次いで住居址数の多い8軒を数える。Ⅰ期には各住居址が重複することがなく比較的散在していたが、この時期に至り重複することが顕著となり、一定地区内に占地することが多くなる。住居建築場所の特定地区への規制(社会的あるいは立木等の自然的なもの)の強化がなされた結果と考えられようか。また、Ⅰ期が外縁部に占地することが多いのに対し、このⅡ期にはやや内側に移行する傾向が見い出せ、9号は中央広場間際にまで進出している。さて、住居の配置をみると、16号および5・9号を両端に、これより外縁には同時期の住居が途切れている。したがって、5・7～10・15・16の7軒は1ブロックを形成しており、このうち炉石が完存ないし、良く遺存していた(畑地の畦畔であったためおそらく後世その一部が破壊されたものと推定される) 5・9・16号の3軒が同時に存在していた可能性も考えられる。

曽利Ⅲ期　曽利Ⅲ期に属する住居址は、ほとんどなく、3号の外側の埋甕を有する住居がⅢの終わりからⅣにかけての時期であり、また1号がⅡの終わりからⅢにかけてという過渡期に属するものである。したがって、Ⅲ期にいたり、この地区に関する限り衰退する。

曽利Ⅳ期　3号の内側の埋甕を有する住居、11号の2軒が相当し、Ⅲ期以来の衰退化は継承される。住居の配置は、Ⅱ、Ⅲ期の住居より更に内側に進出し、中央広場縁辺に位置する。この2軒のうち11号は炉が完存し、3号は炉石が抜去されており、Ⅳ期の中では3号が古、11号が新という関係が成立する可能性もある。

曽利Ⅴ期　敷石住居である4号の1軒のみとなる。住居はそれまでのどの時期よりも内側に占地し、小竪穴群の縁辺に位置する。炉址は完存しており、この住居をもって以後の時期の住居がないことから、本遺跡最後の住居ということになる。

なお、130基発見された小竪穴は、その所属時期がはっきりしないため、どの住居に付随するかはっきりしない。しかし、これら小竪穴の所在する中央部を中心として意識的に住居建設地が決定されたことが分かる。

本遺跡の、住居群は、時期が経過するに従い内側に移行したことが指摘される。

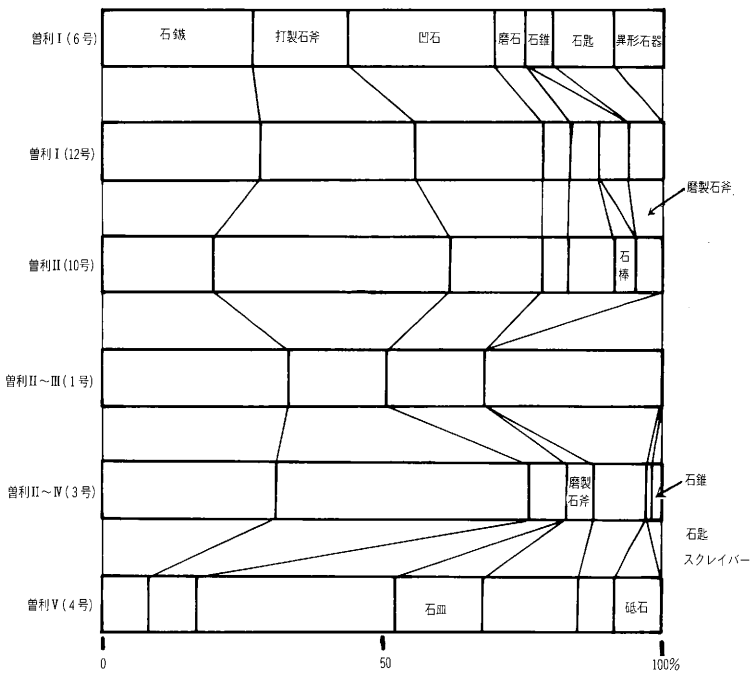
（小林康男）

(4) 石　　器（第83図）

今回の調査によって遺構に付随して出土した石器の総数は209点である。そのほとんどは住居址から出土したものであるが、住居址ごとの石器組成とその出土数は第3表に示してある。以下、この表にもとづいてまとめを簡単にしておきたい。

出土量　各住居址からの出土量をみると、大きく4分類できる。すなわち、50点以上の3号住居、20点前後の6・10・12号、住居10点前後の4・8・11・16号住居、そして10点以下の1・2・5・7・9・13～15・17～23号住居である。このうち、2・15号は未完掘であり、また7・13・14・17～23号は重複が著しく正確な石器量を示していない。こうした調査の不完全さ、あるいは後世の撹乱を考慮に入れても各住居址から出土する石器量が僅少であることは指摘できよう。中期後半における石器相の特徴の一つである石器の減少化を本遺跡でも指摘できる。

ところで、各住居址での出土量の多寡は何に基因するのであろうか。一つには、石器の出土状態を観察すると住居址の床面に密接して出土するものは皆無に等しく、このような出土状態は、従来からいわれているようにその住居址が廃絶した後に、これらの石器が投棄されたものであると推定される。ところが各住居址の覆土からの遺物の出土をみると必ずしも全ての廃絶住居の凹地に等しく生活用品を投棄したのではなく、ある特定の決まった場所への集中的な廃棄がなされたことがうかがえる。本遺跡でいえば、その集中的な投棄場所が、3号・6号・10号・12号の各住居址の凹地であったと考えられる。これらの住居址では、石器の出土ばかりでなく、土器の出土も他を圧して多量であった。石器と土器の出土状態は同一傾向が存することが指摘できる。



第83図　住居址石器組成

このことから、これら多量の遺物を投棄した人間が生活していた住居（投棄された住居より新しい時期）と投棄された住居（凹地）が同一遺跡内に同時に存在していたのであ

り、今後こうした生活空間からの遺物の出土状態の追求も必要となってこよう。

組成　本遺跡での石器組成は、石鏃21.4%、打製石斧32.0、凹石22、石皿1.4、磨石2.3、磨製石斧6.6、スクレイパー5.7、石錐1.4、砥石1.4、石棒0.9、大型粗製石匙4.3、異形石器0.4となり、植物採集に関る打製石斧、凹石、石皿、磨石の比率の高さが際立っている。出土量の減少化は顕著ではあるが、組成面においては中期前半期をさして変化がない。本遺跡においては中期的石器群の解体は明確でない。

第83図によって、時期的な変遷が見い出せるか考えてみたい。石鏃はⅠ～Ⅳまで全石器に占める割合が30%前後と安定した状態を示している。これに対し、中期の石器を代表する打製石斧は増減が著しく、かなりの変動を示している。しかし、打製石斧と密接な関係にある凹石は比較的変化が少く、直接生産用具と処理具との相違を示している。全般的にみて、Ⅰ～Ⅳまでは組成を質的に変化させるほどの移動は見い出すことができない。Ⅴ期の4号住居は敷石住居という特異性があり、一般の住居その石器組成を比較検討することには若干問題があろう。いずれにしても、本遺跡での各時期の石器組成を見る限りでは、これといった他遺跡では認められないような特異性はなく、この時期の極く一般的な在り方を良く示しているといえよう。　　（小林康男）

(6)　まとめ

調査の結果、柿沢東遺跡は縄文時代中期後葉に集中してこの地に居住した遺跡であることが判明し、またその生活様式や交易形態は極めて意義深いものであった。

集落は、舌状台地の中央部に小竪穴群をもち、その縁辺部に住居址を配している。住居址は狭い居住地域に何回も構築されており重複が著しい。しかしその順序には規則性が認められ、次第に台地中央部へ寄る傾向が見られた。住居址から伴出する土器により、時期は曽利Ⅰ期～Ⅴ期と確認された。この短期間に、これだけの範囲内で23軒の検出は密度が高いものであり、時間的・空間的な変遷を捉えていくうえで極めて好材料となるものである。第4号住居址は扁平な礫を敷き詰めた所謂敷石住居址であり、これは松本平でも過去2・3例の報告しかない。しかも砥石・石皿・蜂ノ巣石などの石器を敷石に用いている点、小竪穴群と住居址群の中間に位置する点、本集落の最終である曽利Ⅴ期のものである点など本址が提起する問題には極めて大きなものがある。

小竪穴は計130基が検出された。これも極めて高い数字であるがおよそ3タイプに大別することが可能である。1つは集落の中央に設定された墓壙群である。特に3号小竪穴から出土したヒスイ製の小珠は精巧な穿孔技術を有しており副葬品としての価値は高い。2番目に住居址の柱穴として捉えられるものがある。第4号住居址の東側、および第22号住居址東側に存在する小竪穴群は楕円形の配列をもち住居址の可能がある。壁が確認されなかったため住居址の確定はできないが、過去の構造改善によるローム上層部の削平も十分に考慮すべきである。最後に住居に付随する屋外の貯蔵穴である。特にその位置が前2者に適合しない第5・6号住居址の小竪穴はこの

性格に該当すると思われる。

遺物としては、縄文中期後葉曽利期の短い期間に限定された多量の土器資料に恵まれた。このことは当地方における該期土器文化の様相と変遷に、大きな資料提供になるものと思われる。

土器と共に出土した石器類には、石鏃、石斧、石錐、石匙、スクレイパー、石棒、石皿、砥石、凹石などがある。ここで特に注意を引くことはこの時期比較的減少傾向にある石鏃が、出土石器の比率において多産したことである。やはり広大な山腹、台地を背景にした立地環境から生じる狩猟主体の生活が展開していたと推察される。また出土石器の供給をはるかに越えると思われる黒曜石の原石出土も興味深い。黒曜石貯蔵例はここから2.5kmほど台地を下った「中島遺跡」からも産出しているが、該期の出土例は塩尻市内で今回が2番目である。黒曜石の貯蔵例が、単に自己消費にとどまらず、他集落への交易・流通を意味しているものとすれば、和田峠で産した黒曜石が諏訪・岡谷を経て松本平へ持ち込まれた経路として、この2遺跡はその取継集落として極めて意義のあるものであろう。（鳥羽嘉彦）

第4表　石器出土一覧表

	石鏃	打斧	凹石	石皿	磨石	磨斧	スクレパー	石錐	砥石	石匙	石棒	異形	合計
1号	2	1	1				2						6
2		4	2										6
3	18	29	4			3	8	1		1			64
4	1	1	4	2		2	1		1				12
5		1	2										3
6	5	3	5		1			1		2	1	1	19
7	2	1				1		1					5
8	4	5	1			2				2			14
9				1		1			1				3
10	4	9	3		1	2				1	1		21
11	1	1	6			1							9
12	6	6	5		1	1	1			1			21
13	1	1	3										5
14													0
15													0
16			8		2	1			1				12
17			1										1
18		3											3
19										1			1
20													0
21										1			1
22		2											2
23			1										1
合計	44	67	46	3	5	14	12	3	3	9	2	1	209

第4節　大原遺跡

1）位　　置

遺跡は、塩尻市大字柿沢字牛原地籍にある。柿沢の部落の中央を通る永井坂は、東山山麓に沿って曲りくねる国道20号線を最短距離で結ぶ急勾配の坂道である。この永井坂を登り、道沿いに立ち並ぶ家並がとぎれるとやがて柿沢区の配水池が見えてくるが、ここから道の両側に展開する広大な緩傾斜地に大原遺跡は立地する。

付近の地形を概観すると、ちょうど坂道を中心軸にした広大な台地状地形を有し、北側は四沢川の開析谷へ、南側は田川の開析谷をそれぞれ眼下に臨むことができる。そのため斜面の傾斜方向は北側で北西方向、南側で南西方向を示している。付近は畑地と牧草地に利用され、また斜面上方には松本営林署塩尻苗畑が広がっている。

大原遺跡は以前より縄文土器を産することでよく知られており、この付近の標準遺跡にもされている。「塩尻町誌」1937には第五類第四型として曽利期の土器が紹介されている（第85図）。

大原地籍は中央道長野線のサービスエリア用地に予定されているため、遺跡の大半は中央道用地にかかっている。従って今回の圃場整備の対象となる地域は大原遺跡の北端をわずかにかすめる程度となった。調査地域は圃場整備に関連する柿沢区グランド予定地の一角で、中央道用地のすぐ脇に位置する牧草地である。標高は827m前後である（第84図）。

調査に先行して行われた表採では遺物皆無であったため、調査では先ず重機による表土全面削除から始められた。本遺跡の層序は、耕作土、黒褐色土、ローム層となり、ローム層までは南側地区で30cmを測るが、北へ向って緩傾斜面をなすため、北側地区の最も深部ではさらに70cmを測る。また東側地区中央ではローム層直上に存在する砂礫層の分布が特に著しい。

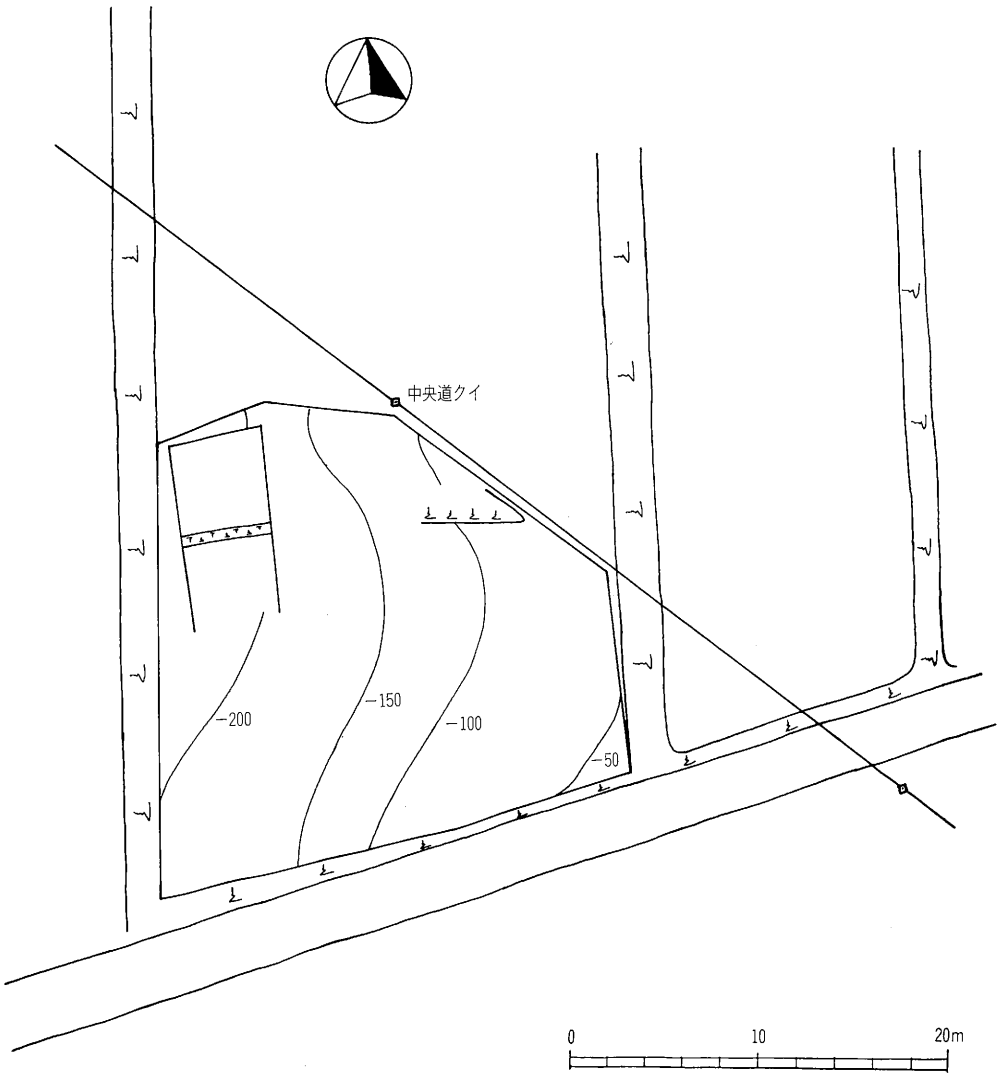
掘り下げは全面ローム層上面まで行なわれていったが、遺構・遺物の出土が乏しく、また北側へ進むにつれ覆土が著しく厚くなったため、一部トレンチ掘りにかえて行なわれた。

2）遺構と遺物

調査の結果、調査地区北側に東西方向に走る溝状遺構が検出され、またその北側に主として巨礫から構成される礫群の分布が見られた（第85図～87図）。

溝址は東区と西区の2ケ所で、ほぼ同一線上に確認されたが、両者は断面、および方向が若干異なるため同一のものとは言い難い。西区のものはトレンチを直角に横切るもので、幅1m、深さ20cmを測り、U字形の断面を有している。西へ向って緩らかに傾斜しており、傾斜角度はローム上面とほぼ一致している。遺物等の出土はなかった。また東区のものは調査区の端に存在していたため残念ながら北壁まで掘り込めず、完掘はできなかった。しかし前者の溝址よりはるかに自然的な形態を示し、また礫の分布が著しいことから、沢跡の可能性が十分考えられる。

第84図　大原遺跡調査地区図



第85図　大原遺跡全体図

集石址は溝址のすぐ北側に確認され、トレンチによって区画された範囲一面に礫が認められた。図ではやや空白域が認められるが、表土除去の際、かなりの礫が抜き取られており実際には倍近くの密度であったと思われる。礫の円磨度はそれほど高くなく、また位置関係も不規則ではあるが、径20～40cm前後と淘汰は良く、自然流入よりむしろ人為的な搬入の可能性が考えられる。また北東隅には礫を伴なう炉状の浅い窪みがあるが、焼土・炭化物がみられず確認は難しい。

出土遺物としては4片の土器片と陶器片がある。しかしこれらはいずれも小片で、しかも表面の磨滅が著しいため時代判定は不可能であった。

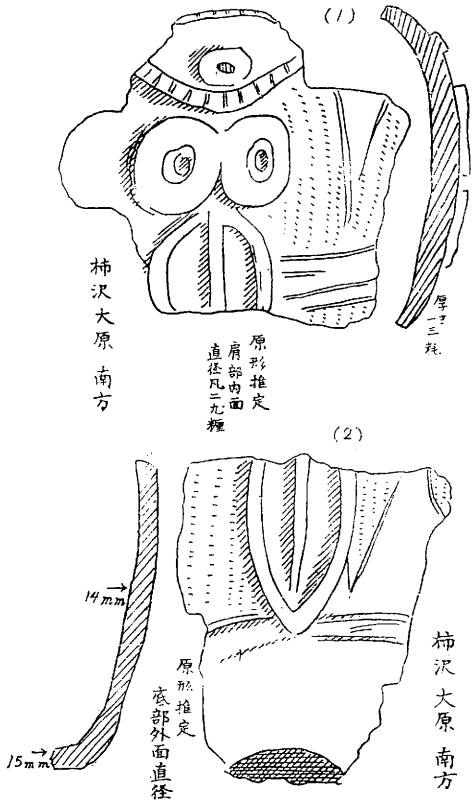
(3) ま と め

本遺跡は、その中心が大原地籍寄り、すなわち永井坂より南側台地上にあるといわれており、調査地域の位置する永井坂の北側台地、すなわち牛原地籍は事前の表採においてもほとんど遺物を拾うことはできなかった。

今回の調査地域は遺跡の北端はずれにあたり、また表採においても遺物が皆無であったが、日当りのよい緩斜面という立地条件から一応の期待をもって調査に臨んだ。しかし結果は性格不明の溝址と集石址を検出し、また他地域からの流入と推察される数点の土器片が出土したのみであり、明確に生活跡を残すものは確認されなかった。

大原遺跡は縄文中期のかなり広範囲に分布する遺跡として以前より知られており、「塩尻町誌」(1937)にも塩尻東地区の代表的遺跡として報告がある。文中その出土地点については明らかではないが、「柿沢大原南方」と記述があり、また現在も南側台地上に遺物が多く散布していることから考慮しても、やはり遺跡の中心地は永井坂から南側の台地、すなわち南向きの斜面のほうにあるものと想定されるのである。

（鳥羽嘉彦）



第86図　大原遺跡出土土器(塩尻町誌)

第87図　溝址・集石址

第5節　中島遺跡

1）位　　置

中島遺跡は柿沢地区の入口に位置し、今回の調査対象となった4遺跡のなかでは最も低所に立地する。標高は777mである（第88図）。

ここは田川および四沢川によって形成された扇状地のほぼ中央に位置し、塩尻東地区仲町交差点で伊那路へ向う国道153号線と分岐した国道20号線を、塩尻峠へ向って約600mほど進んだ地点である。付近は東方から延びる小規模な舌状台地上にあり、中央を国道により横切られているために、道路東側に小丘陵状の微高地を残している。遺跡はこの微高地上の畑を中心として広がっている。

遺跡の北側は急峻な崖を形成し、約4m下方には四沢川の小河川が流れており、遺跡立地に多分に関与している。

以前、この畑の地主である上条善昭氏が耕作の際、礎石様の巨礫を掘り起こしている。現在、それを確認することはできないが、付近の字名が「古屋敷」と称せられることから勘案しても、やはりこの微高地を中心として館跡の存在が可能性として残っているといえる。

今回の圃場整備では、この微高地状の畑は対象外となったが、国道からの取り付け農道が南側の土手付近を通過することになったため、農道用地内だけの調査となったものである。

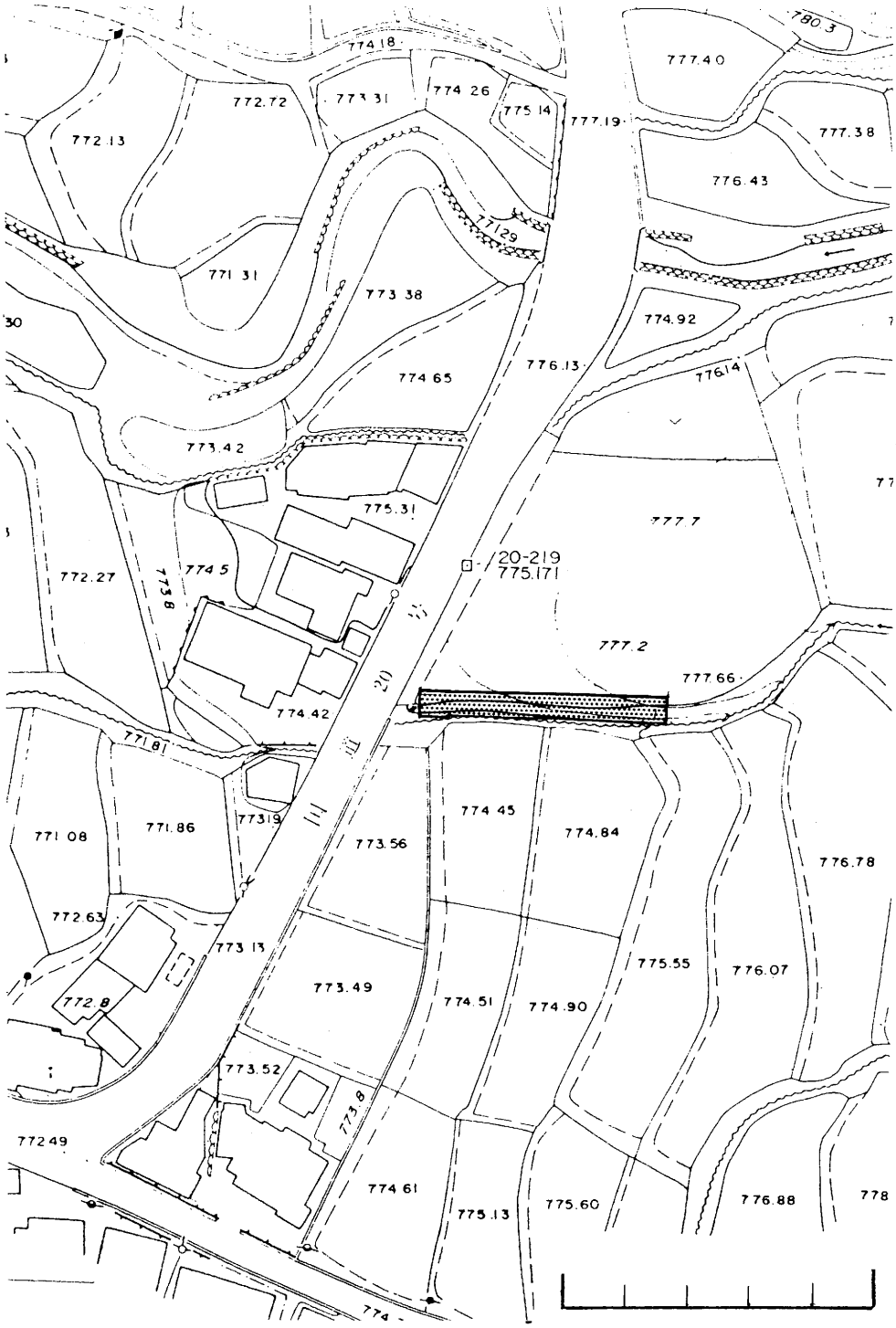
調査はこの農道にかかる4×40mの土手部分にトレンチを設定した。まず重機による表土除去を行なったのち、遺構の検出を行ない、遺構部分の掘り下げを実施した。本遺跡の層序は黒褐色埴壌土（耕作土）の下に黒褐色砂土があり、すぐに褐色砂礫層（ローム質）が続く。かなり長期にわたって河川敷環境にあったと推察される。

柿沢の「中島遺跡」については他に2ケ所該当箇所があり誤りやすい。1ケ所は四沢川を隔てた北側の台地を「中島遺跡」と称し、今回の箇所を「古屋敷」と称し、区別するものがある。また場所は少し離れるが、柿沢東遺跡のすぐ上に続く台地上の遺物散布地を、その字名をとって「中島遺跡」とするものがある。本来、遺跡名は字名に則り命名することが通例であり、その意味から考えると最後の中島遺跡が優先するが、たまたまその箇所が中央道用地内に入っており、ほぼ時を同じくして発掘調査が行われることになったため、中央道発掘調査団と市教委との間に協議が行われた。その結果、中央道用地内の遺跡は「北山遺跡」に、そして今回の調査遺跡を「中島遺跡」として取り扱っていくこととなった。　　（鳥羽嘉彦）

2）遺　　構

(1)土壙　今回の調査で検出されて、遺構には土壙、溝状遺構がある（第89・90図）。

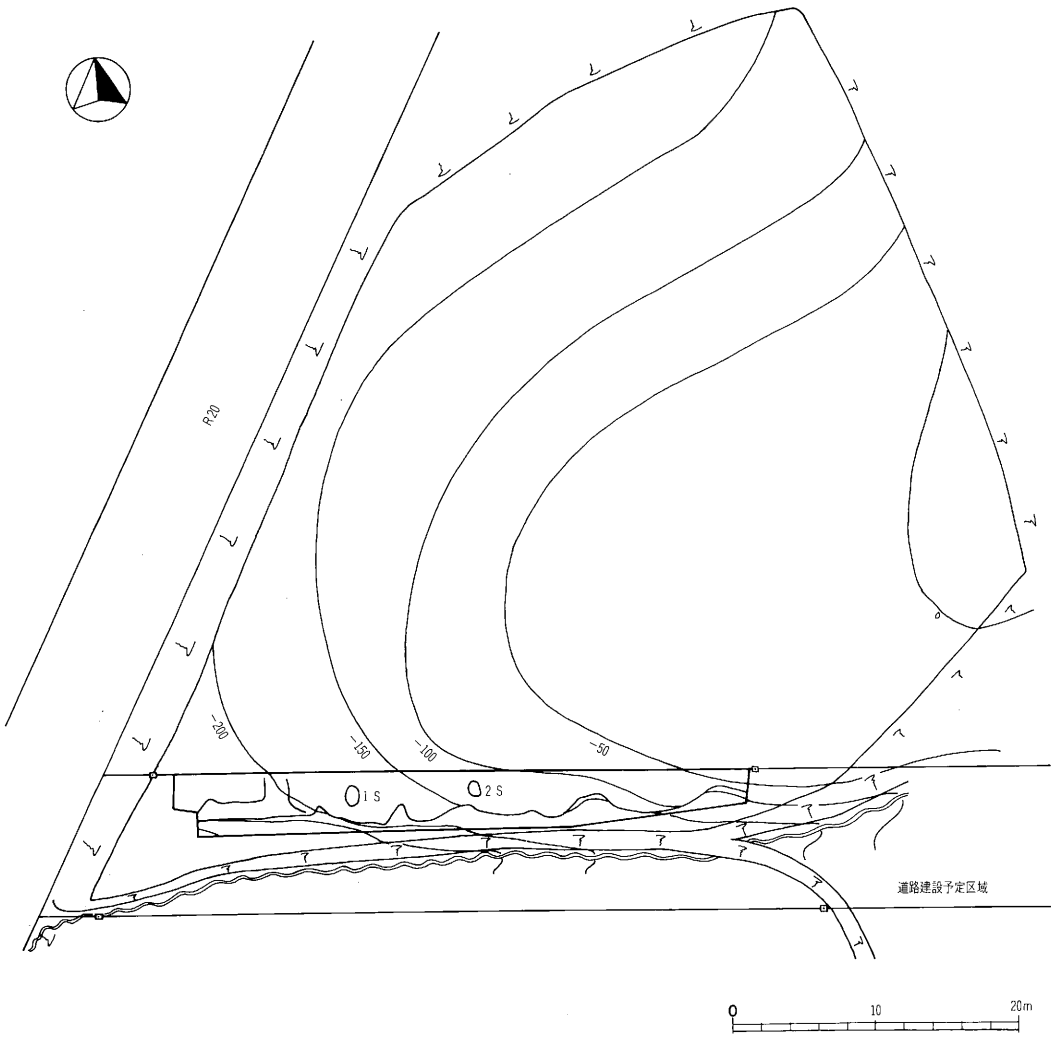
第1号土壙　調査区域のやや西寄り、グリッドに発見され、溝状遺構の掘り込み部分からは100



第88図　中島遺跡発掘調査地区図

cmほど内奥に位置している。プランは長径140cm、短径90cmの楕円形を呈する。掘り込みは砂利混りの褐色土になされ、地形が南に向かって緩傾斜しているため北側の掘り込みは明瞭であるが、南になるに従い掘り込みは漸減する。覆土は、第90図に示すように、黒色土、黒褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を示している。深さは、最も深い北壁下で22cmを測る。北側の壁面には、地山に含まれていると考えられる小礫がみられる。底面は平坦である。内部からの出土遺物はない。

第２号土壙　調査区域のほぼ中央部に位置し、第１号土壙の8.5m東方にある。溝状遺構の掘り込みからは60cm内奥にある。プランは、長径120cm、短径80cmの楕円形を呈する。掘り込みは、砂利混りローム層になされ、覆土は黒褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積していた。深さは、最



第89図　中島遺跡全体図

も深い北壁下でも15cmと浅く、南にゆくに従い浅くなっている。壁は傾斜をもって立ち上がり、底面には起伏がみられた。関連する出土遺物はない。形態・規模とも第1号土壙に類似する。

⑵溝状遺構　溝状遺構は、厳密には完全な溝状を呈さず、斜面の片側を掘り下げ微高地の末端を切断した形となっているもので、この名称は不適当とも思われるが、他に適切な呼称もないため一応溝状遺構と呼んでおきたい。

溝状遺構は調査区域全体にわたり、東西方向にかけて検出された。大部分は破壊が著しく、当時の姿を推測することは困難であるが、Aグリッド付近だけは比較的良好な遺存状態を示している(第90図)。この区域の状況をみると、東西に延びる低い舌状台地の南端を意識的に掘り下げて切り落とし、舌状台地部分とその下位、すなわち現在の水田地帯とを切り離し、区画したものと見受けられる。掘り込みは褐色砂礫層をかなり鋭角に切り落とし、壁高は71cmを測る。当初は東西方向にかけて直線的に掘られていたものと考えられるが、グリットを除き、内外弯が著しい。また、掘り込まれた壁も、現在では崩壊し、緩傾斜面となっている。この溝の掘り込み内には、大小の礫が散在し、特に壁および底面に接するような状態で検出されるものが多かった。この礫群は、ある程度の集中性があり、Hグリッドの東辺・G～Fグリッドの境付近、E～Dグリッド、C・Aグリッドなど壁の内外弯の激しい地区に多く存在する。しかし、その在り方には規則性は認められない。礫は40cm前後の大きなものから、拳大の小さなものまであり、20cmほどの人頭大程度のものが主体を占めていてる。これらの礫群が何らかの目的で人為的に搬入され、何らかの構築物の一端を担ったものであるか否かは、調査区域が余りにも極部的にすぎるため、今は断言することができない。ただ、溝上の平坦面には、これらの礫と同じものが余り見当らないことから単なる自然物とは見なし難い。

以上の遺構のほかに、A・Bグリッドにかけて、第90図にみられるように南北にはしる浅い溝と地山の切り落としによって、矩形とも思われる基壇状の平坦面を造り出したと考えられる遺構がある。この小さな基壇状の遺構は、20～30cmほどの高まりとなっており、その上面は多少の起伏はあるが、ほぼ平坦となっている。この平坦面には溝状遺構にみられたよな礫群はない。しかし、発掘調査が道路幅と限られているため、その規模、形態等は不明確である。

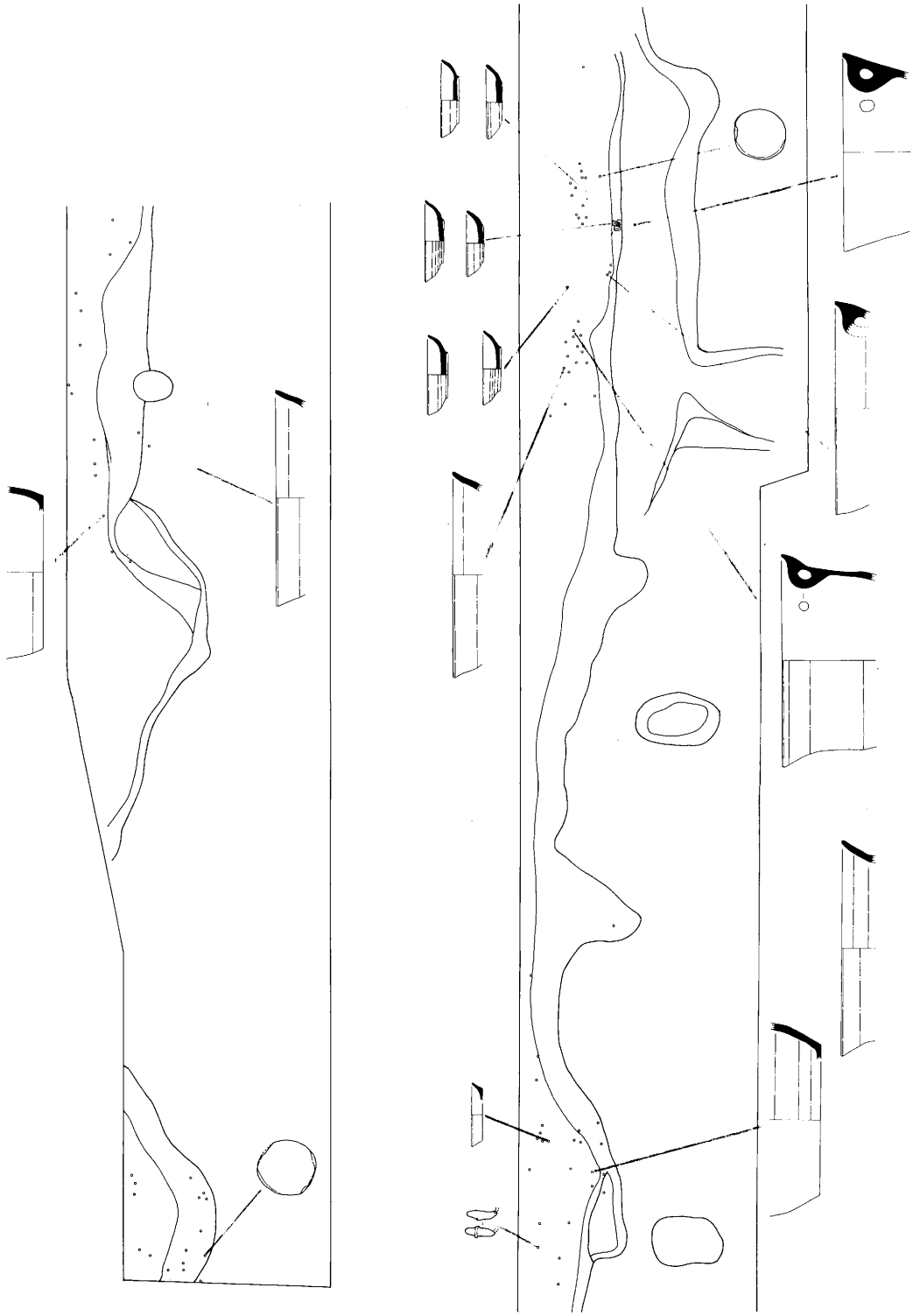
以上、土壙、溝状遺構についてその概要を記したが、これらの遺構の年代は、後述する出土遺物によって、中世末期（16世紀前半）を中心とするものではないかと推定される。

3）遺　物

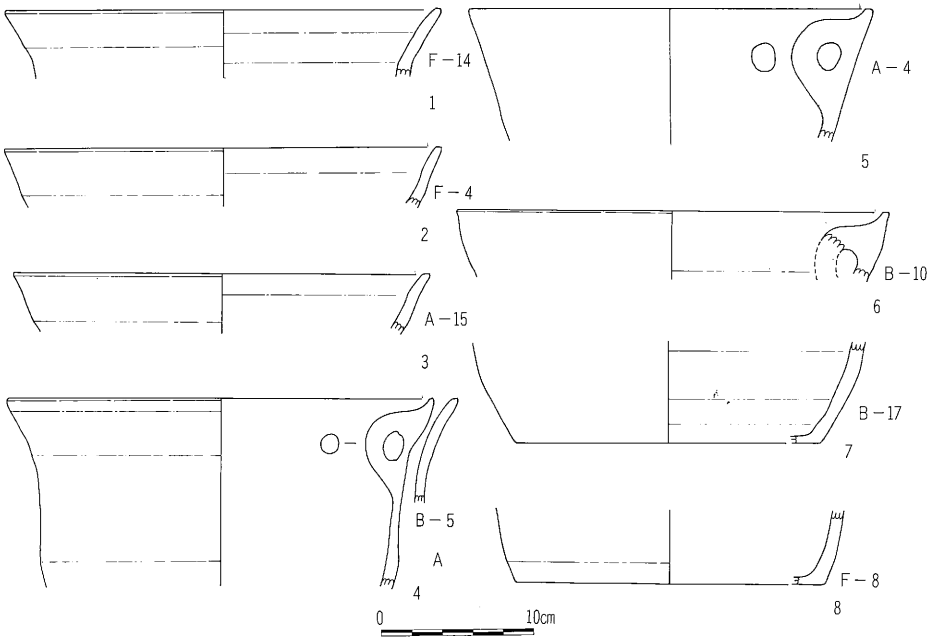
今回の調査によって出土した遺物には、土師器内耳土器、皿、陶器、土製円板、異形土製品、打製石斧、古銭がある。

遺物の出土状態は、第91図に示したように、溝状の落ち込み部分に集中しており、溝上の平坦面からはほとんど出土がない。また、礫が集中した地区に遺物も集中する傾向が認められる。遺物が出土する層位は、ほぼ黒色土に限られており、より下層の黒褐色土からの出土は少ない。そ

第90図　中島遺物遺構全体図



第91図　遺物出土状態図



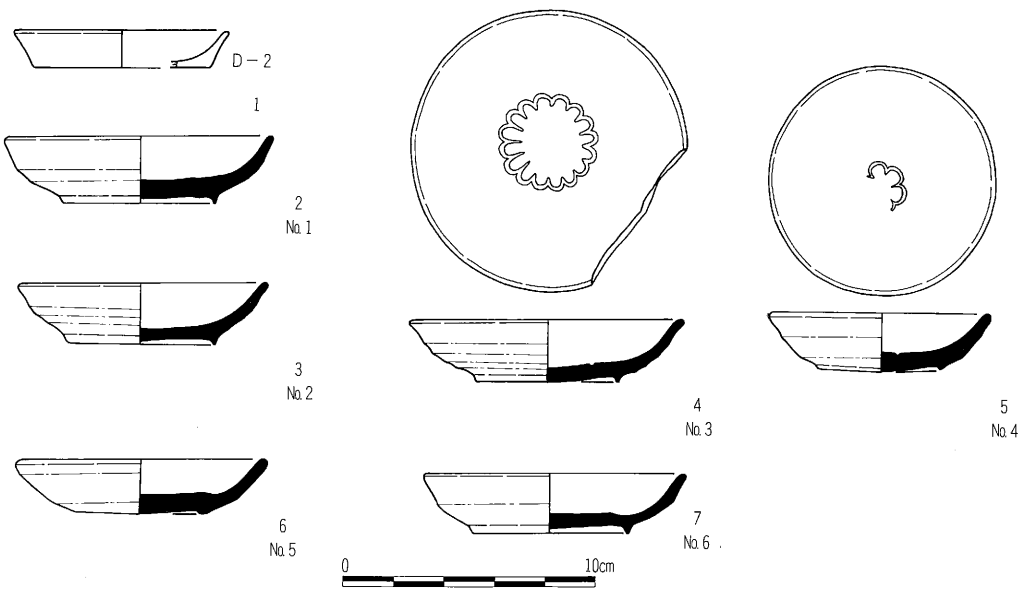
第92図　内耳土器

の大半は、小破片であり、しかも出土層位が上層であることなどから考えると、後述する陶器など一部の遺物を除いて、上位からの流れ込みの可能性が強い出土状態を示している。

(1)　内耳土器（第92図）

内耳土器は、出土遺物の大半を占めるが、大部分が小破片で、図示しうるものは第92図に示した８個体にすぎない。１は、口径28.6cm、現存高4.5cmの口縁部破片である。器形はくの字状に屈曲しながら外反する口縁部で、口縁部内側に稜をもっている。口唇部は平滑に面取りが施されている。内外面とも全面にわたってナデによる整形がなされている。内面褐色、外面暗褐色を呈し、焼成はよい。耳部の存在の有無はこの破片のみからははっきりしない。２は、口径28.7cm、現存高４cmの口縁部破片である。器形は１と異なり、くの字状に屈曲することもなく、外反する。口唇部は平滑に整形されている。ナデ整形で、内面は褐色、外面は暗褐色を呈し、焼成はよい。３は、口径27.5cm、現存高４cmで、形態は２に類似する。内面褐色、外面黒褐色である。２・３とも耳の有無ははっきりしない。

４は、口径28.2cm、現存高12.5cmを測り、今回出土した内耳土器の中では最もその器形をよく把えられたものである。器形は、１～３に比較し、口縁部の外反が弱い。耳部は縦位に付けられ、口縁端部から７㎜下からつけられている。ナデにより調整され、耳部の付されている外面は起伏がみられる。おそらく耳を付ける時に外側から加圧したため指による凹凸が残されたものと思われる。器厚は0.5～0.8㎜と薄い。色調は、内面暗褐色、外面黒褐色で、外面には煤の付着が認められる。



第93図　出土土器

5は、口径26.4cm、現存高8.5cm、器厚0.9cm。器形は、屈曲もなく、直線状に外に向かって開き、口縁端部下、6㎜の位置に縦位の耳部が付されている。口唇部は平滑に面取りがなされ、外面は4と異なり起伏がみられない。耳部に付したのち、器面にできた凹凸をケズり取り、平滑に仕上げたもののようである。内面褐色、外面暗褐色で、焼成はよい。6は、耳部の破片で、口径28.4cmをはかる。耳部は、口縁端部下6㎜の部分に縦位に付けられている。内外面とも暗灰褐色を呈する。

7は、底部破片で、底径20.2cm、現存高6.7cm、器厚は0.8～1.0cm、底部は0.5㎜とうすい。全面にわたりナデ整形され、底部はザラザラと砂粒が浮きだしている。内面褐色、外面赤褐色を呈する。焼成はよい。8は、底径20.4cmの底部破片で、器厚は0.8、底部器厚は0.5㎜と薄手につくられている。胴部は縦位のナデ、底部下端部に横位のナデが施されている。外面に煤が付着している。

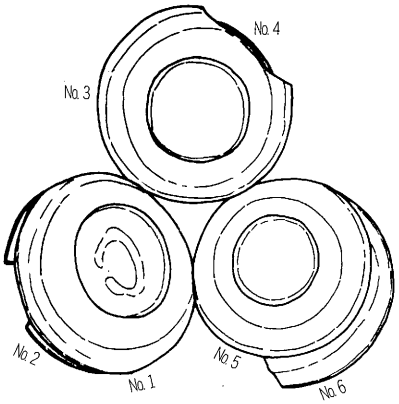
(2)　土師器皿（第93図）

9の1点が出土したのみである。口径8.5、底径7.1、器高1.5cmの浅い皿で、ロクロ成形で、回転糸切り手法で成形されている。内外面とも明褐色を呈し、焼成はよい。

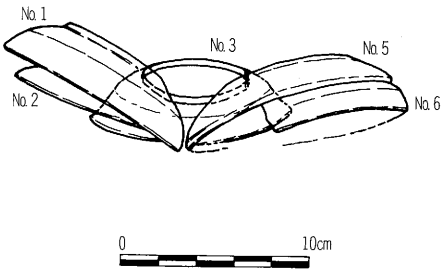
(3)　陶器皿（第93図）

2～7の皿が6枚出土している。この6枚の皿は、特異な出土状態を示していた(第94図)。出土地点は調査区内の西側、グリッドで、溝状遺構の覆土上面にあたり、また矩形に整形された基壇状遺構から80cmほど前面にあたる位置から出土した。その出土状態は、2枚づつを逆に裏返して重ね、この2枚重ねの皿を三角形の形に皿の口縁をお互に接するように配列し、中央部分をやや凹めるように配置されていた。それぞれの皿は、No.2とNo.3、No.4とNo.5、No.6とNo.7がセッ

トにされ、各々１枚は完形品、他の１枚は口縁の一部を欠損するものが組み合わされている。これら２枚重ねられた上の皿と下の皿との間には５㎜ほどのやわらかい黒色土が堆積していた。黒色土上に意図的にこのような特異な形に配列して置かれた状態での出土は、単なる日常生活上以上の目的によったものではないかと思われた。なお、溝状遺構、基壇状遺構との関連性は、溝状遺構の覆土上面で出土したことなどを考えると、この皿はやや時期的に新しくなるとも考えられ、直接、前述の遺構と結びつけられるかは判然としない。



２は、３の上に置かれていたもので、口径10.7、底径6.0、器高2.7cmをはかる。成形は、内外面ともロクロナデ、見込は回転ヘラケズリ、高台は削り出し高台である。重ね焼の痕跡が残る。釉は見込以外の全面にかかり、淡黄緑色を呈する。焼成は良い。３は、２の下に置かれていたもので、口縁の一部を欠いている。口径10.0、底径5.8、器高2.4cmで、２よりもやや小ぶりである。ロクロ成形痕が顕著に残り、高台は削り出し高台である。底部には窯道具の跡が残されている。釉薬は全面にかけられ、淡緑色を呈する。焼成は良い。



第94図　陶器出土状態

４は、５の上に置かれていたもので、口縁の一部を欠いている。口径10.9、底径5.7、器高2.5cm。ロクロ成形、削り出し高台で、底部には窯道具の痕が残る。見込には、厚い釉薬のためやや不鮮明ではあるが、16の花弁をもつと思われる花の印刻が施されている。釉は全面にかけられているが、底部は薄く、他は厚目にかけられている。色調は淡緑色を呈する。胎土には小礫を含む。また、内側には、食べかすのような粘着性のある付着物が非常に薄くではあるがこびりついている。５は、３の下に置かれていた皿である。口径8.9、底径5.0、器高2.4cmで、４より小ぶりである。ロクロ成形、削り出し高台であるが、底部の中央は高台よりむしろ突出していて、安定が悪い。見込には梅と思われる花弁の印刻が施されている。釉薬は底部を除いた全面にかけられ、淡緑色を呈している。６枚の陶器皿のなかで見込に印刻のあるものは、４と５のみである。この２枚が重ね合わされて配置されていた。

６は、７の上に置かれていたもので、口径10.1、底径5.3、器高2.1cmである。内外面はロクロナデ、見込は回転ヘラケズリ、底部はごけ底をなしている。底部の中央は高台よりわずかに突出

しているため安定感に乏しい。底部には窯道具の痕が残されている。釉は、底部および見込以外の全面にかけられ、淡黄緑色を呈する。焼成は良好。6は、5の下に置かれていたもので、口縁の一部を欠いている。口径10.5、底径6.2、器高2.4cmで、ロクロ成形され、見込には回転ヘラケズリが、また底部は削り出し高台で、底部には窯道具の痕が残されている。釉は、見込を除いて全面にかけられ、淡黄緑色を呈する。

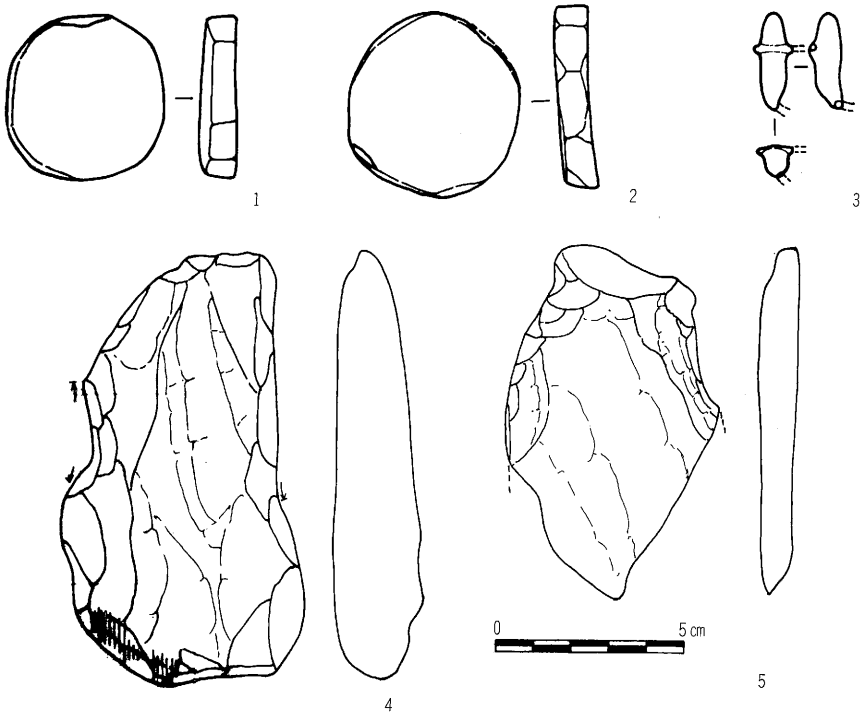
これら6枚の皿は、愛知県陶芸資料館の赤羽一郎氏の御教示によれば、美濃焼で、大窯によって焼成されているとのことである。年代的には、16世紀前半に比定されるものとの教示を得た。

(4) 土製品（第95図）

土製品には、土製円板と異形土製品とがある。

土製円板は2点出土し、1はHグリッドから、また2はDグリッドから出土し、ともに溝状遺構の覆土中からの出土である。1は、径4.2cmの円形で、厚さ0.8～1.0cmをはかる。内耳土器の胴部破片を使用し、周囲を9つの面を研磨することによって仕上げている。2は、径4.5×5.0cmのやや楕円形状を呈し、厚さは0.9cmをはかる。やはり内耳土器の胴部破片を使用し、周囲は9つの面を研磨することによって全周囲研磨仕上げしている。

異形土製品はEグリッドの溝状遺構の覆土から出土した。長さ2.6cmで、0.7cm前後の円筒状を呈し、孔が穿れている。何らかの土製品の一部であるとも考えられるが、他の類例を知らず、そ



第95図　土製斧，石製斧

の性格ははっきりしない。

(5) 銭　　貨

2枚の銭貨が溝状遺構の覆土から出土した。このうち1枚は腐食が著しく銭種は判別不可能であった。他のHグリッドから出土したものは、かろうじて銭名を判読することができた。聖宋元宝（北宋、1101年）であった。

(6) 石　　器

打製石斧が2点出土した(第95図)。1は、胴部中央部に扶りをもち、この部分が磨耗している。加工は粗雑である。刃部の一部に使用痕が認められる。頭部を欠失する。2は、刃部を欠く。剝片の縁片に簡単な調整を施しただけの粗雑なものである。（小林康男）

(4) ま と め

中島遺跡は、付近の字名「古屋敷」から推測されるように、以前から屋敷跡として注目され、その存在が期待されていた。しかし文献史料等に該当すると思われる記録が見当らず、また実際に確認する機会もないまま今日に至ったのである。

調査は遺跡の中心と思われる微高地をはずれ、その縁辺部をかすめるように行なわれたにもかかわらず、期待以上の成果がもたらされた。検出された溝状遺構は、調査区が道路幅という限定があったため、その規模や形状は捉えることができなかったが、掘り込みの壁の保存状態が極めて良好であったこと、また伴出した拳大の礫の石積み状態が良好でしかも集中性があったこと、などから勘案すると自然状態で形成された落ち込みとは考え難い。また調査区西側の遺構検出面付近から出土した陶器皿も明らかに何らかの意図をもって配置したものと考えられる。これらの状況からこの付近も何らかの生活跡が存在しているとみなしてよいだろう。ただしその中心地は地形的にみても、あるいは以前礎石が出土した事実から考えても、やはり微高地の中央として捉えていくことが適当と考える。

次に、この遺構が館として存在していた時期を考えてみる。年代を決定するものとして3種の出土遺物があった。すなわち陶器皿、内耳土器、古銭である。このうち陶器皿については製作年代が16世紀前半とみなされ、保存状態が極めて良好であった状況からほぼこの付近の使用と考えるのが妥当であろう。内耳土器については13世紀と若干遡るが、これは出土状態が相対的に悪く、他地域からの流入、あるいは他層位からの出土も十分考えられるため決定的な資料とはみなせない。また古銭（1101年）についても同様で、たとえ遺構に付随するものであったとしても、その使用有効期間は現在のものとは比較できないほど長いものであろうからやはり決定資料とは成り得ない。従って遺構の年代としては陶器皿の16世紀前半を捉えることが、現段階では最も適切であろう。（鳥羽嘉彦）

第Ⅳ章　結　　語

昭和58年度の県営圃場整備事業塩尻東地区に伴なう発掘調査は、すでに報告がなされたように東山所在の糠塚、柿沢所在の柿沢東、大原、中島の4遺跡において実施された。以下遺跡ごとにその成果について述べてみたい。

糠塚　糠塚は、その所在する地域の中では最も低地に位置し、以前から古墳としての性格が疑問視されていた。今回の調査結果は、古墳としての性格付けを否定するものであった。しかし、トレンチ内の土層堆積状態の観察によれば、自然の営力にのみよったものではなく、明らかに人為的な堆積がなされていた。出土遺物は全くなく、その目的、築造年代等全く不明である。今後文献史料面からの調査が必要となろう。

柿沢東　今回の4遺跡の発掘調査中、検出遺構、出土遺物が多く、最も成果のあがった遺跡である。発見された遺構は、住居址23、小竪穴130、出土した遺物は縄文中期後半の土器群、石器群で、縄文中期後半の集落の一角を露呈することとなった。本遺跡の調査では、いくつかの成果が得られた。まず、塩尻で初めての敷石住居の発見がある。指近距離の御堂垣外でも今年数基発見され、その性格究明に貴重な資料を提供した。特に、敷石住居から出土する石器類の特異性は注目されてよい。このほか注目される遺構には、住居址上面の焼土があり、従来、住居址と直接結びつかない焼土、土器群とセットとなって検出される焼土など注意されてはいたが、集落址的な観点から追求されることが少なかった。こうした点からの究明に役立つものとなろう。また、バラエティーに富んだ炉は、中期後半の炉変遷を考えるうえで極めて良好な資料であった。異系統の土器を埋設した埋甕の問題、豊富に出土した土器群、石器群、そして小竪穴から出土した硬玉製大珠、黒曜石の原石の集積など、今回の調査によって提起された諸問題を究明することは今後に残された大きな課題となろう。と同時に、これらの資料は塩尻峠中腹のこの地域の縄文中期文化を考えるうえでこの上もなく貴重な資料となるものといえる。

大原　大原の調査は、遺跡の北端地域をその対象としたため遺構の分布は希薄であり、また遺物の出土も僅少であった。検出された遺構は、溝状と集石であったが、集石には規則性は認められず、また溝状遺構も不明瞭であった。遺物は時期が判然としない土器の小片が数片出土したのみで、遺構の時期を決定できるものではなかった。いずれにしても、遺構の分布から大原遺跡の北端を明からにできた点は成果といえる。

中島　道路幅のみの調査であったため、遺跡の全体像を把握するには無理な面があった。しかし、中世遺跡の調査は市内では上西条剣の宮についで2遺跡めであり、しかも遺構、遺物面である程度の成果を納めることができた。特に2枚重ねで三角形に配置されていた陶器皿の出土は、当地域には余り類例をみない貴重な資料であった。このほか、中世の館址の一部とも推定される

溝状遺構、土壙、基壇状遺構などは、以前遺跡中心部で礎石とも考えられる平石が多数出土したこと、あるいは古屋敷という字名とも関連して、中世の館が存在していたことを証明するものであると推定される。近時、中世への考古学的調査の重要性が強調されているが、本遺跡の調査もこうした新しい時代への考古学的調査であり、発見された遺構・遺物の面のみでなく、調査対象の拡大をもたらしたものである点においても重要な意義を有するものであったといえる。

今回、4遺跡の調査が多大の成果をあげ、無事終了できたことは、市教育委員会、地元の方々、土地改良区の役員の皆様等多くの方々の深い御理解と御援助の賜であります。これら暖い御援助に対し衷心より厚く感謝申し上げます。　（花村　格）

図　　版

糖塚古墳全景

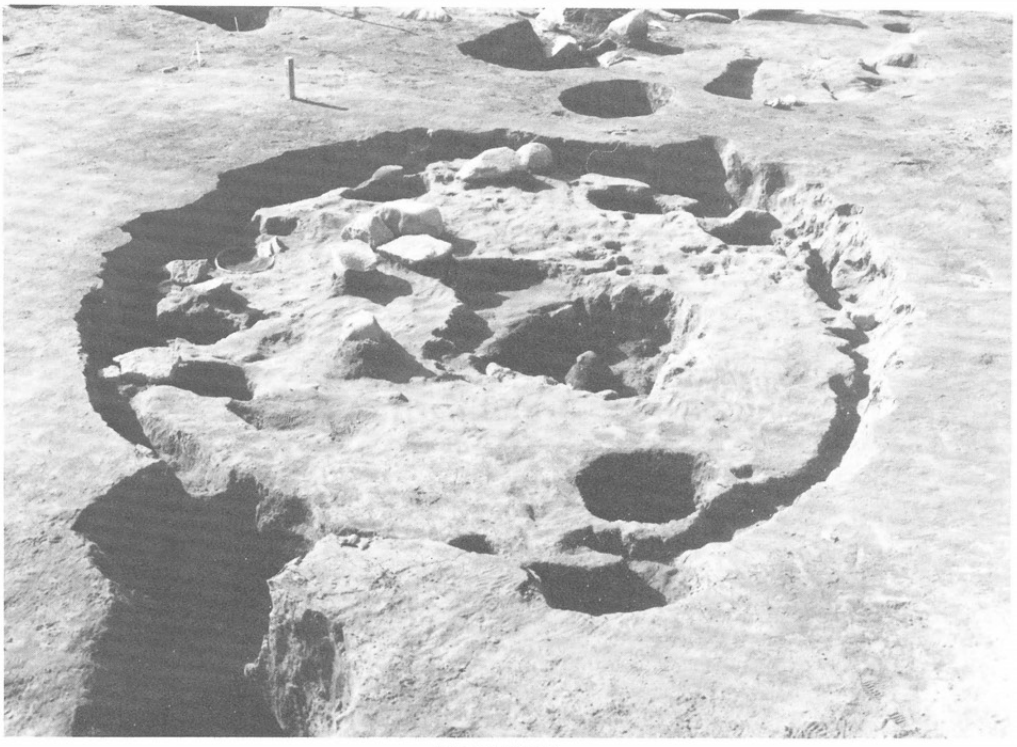
発掘調査状況

図版2

柿沢東遺跡遠景

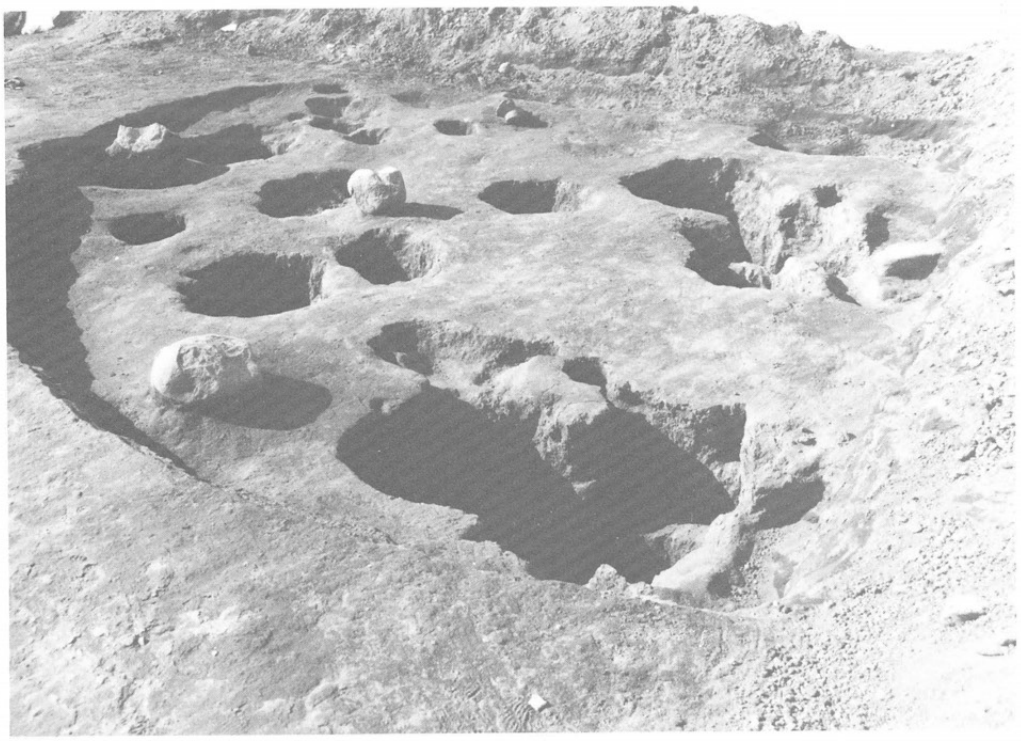
調査地区全景

発掘状況



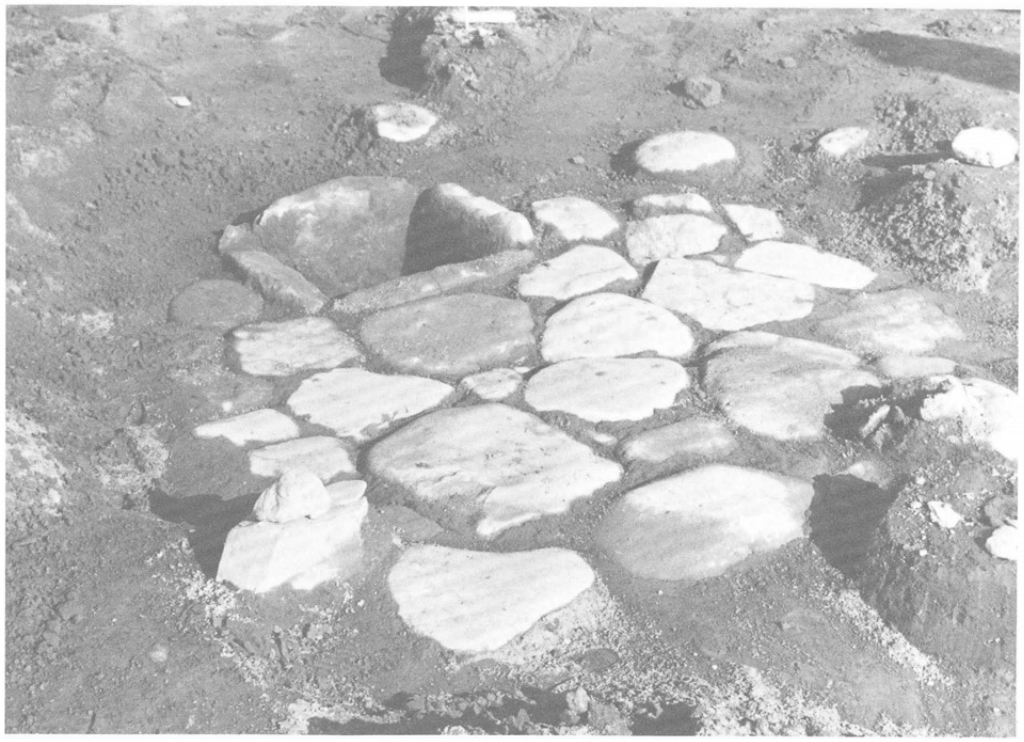
第1号住居址

図版4



第2号住居址

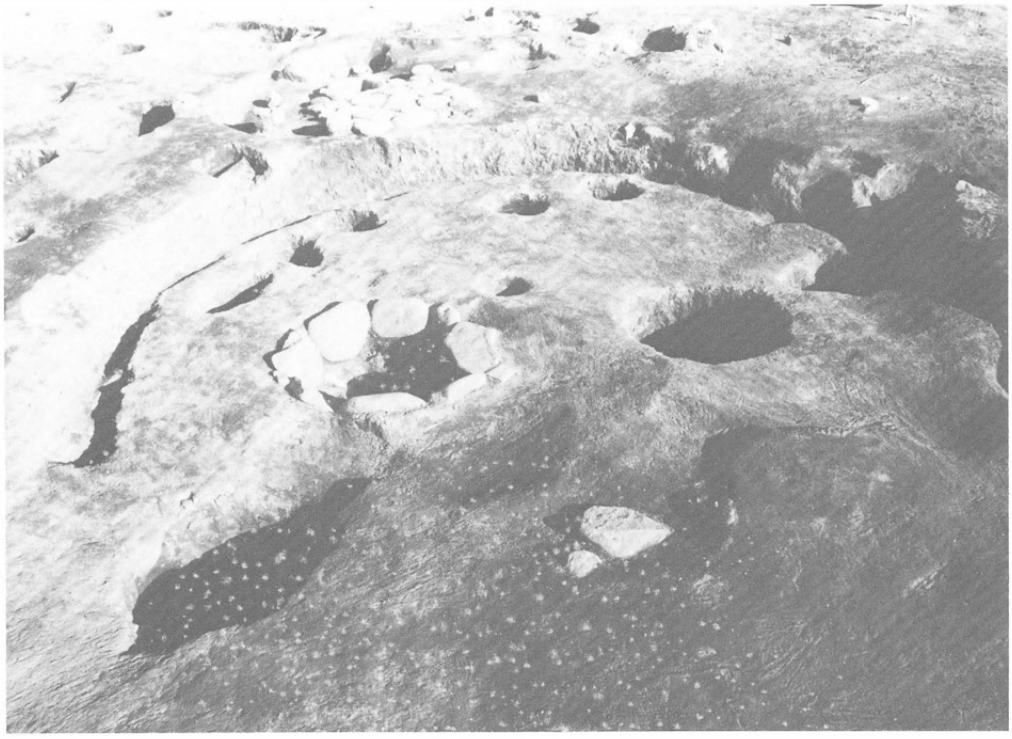
第3．13．17．18号住居址



第4号住居址（敷石住居址）

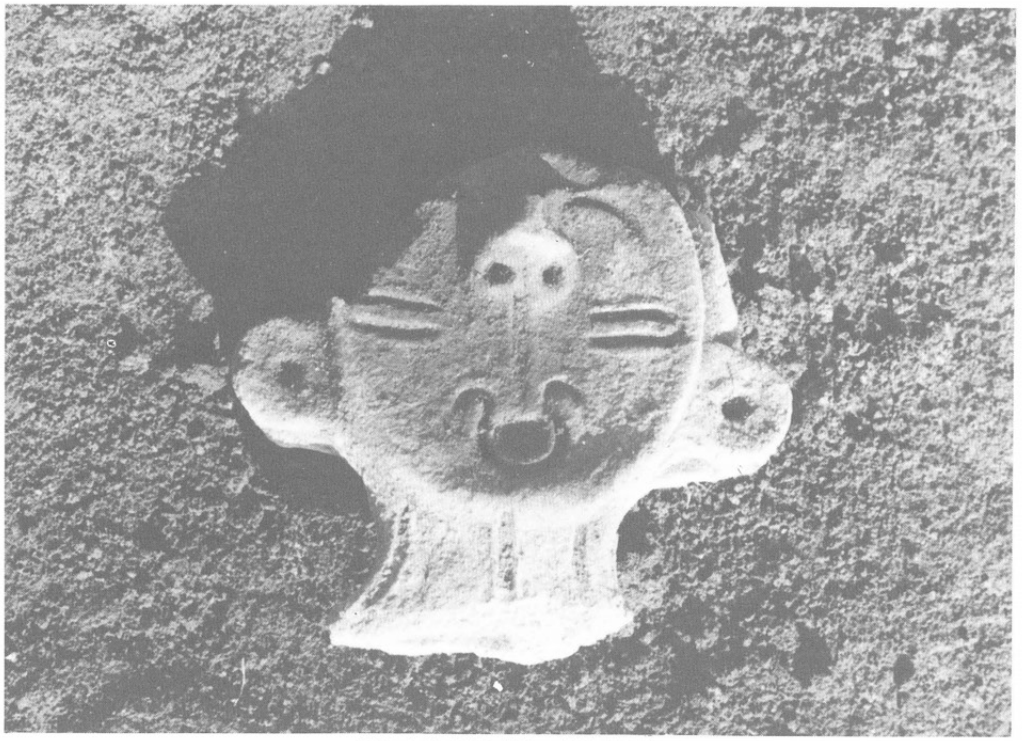
第5号住居址

第6・8・10・11号住居址



第11号住居址

第7・8・10・11・12・16号住居址



土隅出土状態（第21号住居址）

図版8

大原遺跡全景（発掘前）

集　石　址

中島遺跡全景

溝状遺構

図版10

陶器皿出土状態

土製円盤出土状態

塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書

——昭和58年度——

昭和59年３月18日　印刷
昭和59年３月20日　発行

発行　塩尻市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社